

山小屋を生んだ風土と、完成までの軌跡



立命館大学ワンダーフォーゲル・OB会 2007年7月3日発行

#### 発刊にあたって



鎌田 克則

山小屋が完成して約半世紀、45年が経とうとしています。そのころの主力は昭和38年から昭和41年 の卒業生の人達です。当時は血気盛んな若者たちでしたが、すでに65歳前後になっています。

中国の古い諺に「井戸の水を飲む時は、それを掘った人の事を思え」というのがあるそうです。日本でも茶碗に米粒を残すと、お百姓さんに申し訳ないと諭されたものです。今は物流が複雑で、飲料水も食料も外国産が多くて感謝する相手も不明です。

しかし、雲取山二の谷にあるRUWVの山小屋の場合は明白です。建ててくれた人たち、その汗の結晶である山小屋が厳然とそこにあります。想像を絶する難事業をわずか1年足らずの月日でやってのけたのです。

投入人員延べ1200人、ブロック417個、セメント44袋、砂・砂利トラック6台分、鉄骨500キロ、材木 2トン……すべて彼らの手によって運ばれ完成したのです。

あの二の谷の小屋を訪ねるとき、まるで昔から知っているような懐かしさと、木の間隠れに見える 赤い屋根が忽然と目に飛び込んできたときの感動は、何ものにも代えられるものではありません。

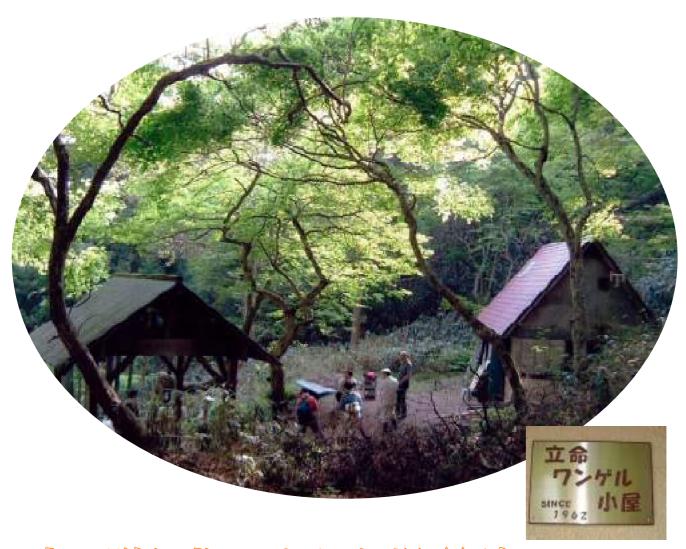
さらに申しますと、私は60年間山野を駆け巡ってきましたが、あのワンゲル小屋の立地、環境は秀逸の一語に尽きます。二の谷を登り詰めていくと、左手上方に赤い屋根が見えてきます。でもまだ小屋には到着しません。今しばらく登ります。すると、かまどの屋根とテーブルが視野に入ります、と同時に小屋が姿を現します。自然が用意した小僧らしいばかりの演出が、ますます小屋に愛着を掻き立てます。先般、平成の大改修が施されて瀟洒なヒュッテにリニューアルされました。

ここで私はやはりこの小屋を造ってくれた人達、補修を続けてくれた人達の事を思わざるを得ません。

私たちはすでに高齢です。「RUWV山小屋」と言う人生のモニュメントの形成、維持の過程を形あるものに遺しておきたいと言う欲求に強くかられて、今般、「漂雲」山小屋特集号の発刊を推進させていただきました。

ここにめでたく発刊の運びとなったことを、関係者共々喜びたいと思います。

2007年7月3日



# 時の贈り物のような場所がある

――不死鳥のように蘇える!一瞬の時空を越えて、それは

時の贈り物のような場所ではないです。 がおりなく迎えてくれるがはもっているだろうか? 大はもっているだろうか? が遠につづく





CONTENTS

JULY 2007 SPECIAL EDITION

## 漂雲

発刊にあたって 鎌田克則	表Ⅱ	山小屋随想 二の谷の伝説 松久昌司	<i>72</i>
OB会長あいさつ 小野拓男	6	山小屋の額の変遷 鈴木、北野、松久	41
山水是海外作用左钓人应数人		~青山額から、盗難、二代目額の誕生まで	<u> </u>
山小屋建設45周年記念座談会	00	<b>現役のみなさんからの投稿・</b> 佐々木、米田	<i>38</i>
山小屋完成までの軌跡	<i>26</i>	山小屋改修雑感・柴弘一	<i>48</i>
吉原 芳文 湯浅修太郎		悲鳴を上げる山小屋・山本達郎	<i>52</i>
出		古い写真が出てきた・宮村俊弘	<i>53</i>
イン		私と北山(石仏峠)・長田和子	<i>55</i>
特集●山小屋はこうして完成した●		私にとっての山小屋・木原純一郎	<i>57</i>
山小屋は人を結び付ける・鎌田克則	10	中国を漂う、その原点は・松本茂孝	<i>58</i>
北山荘が「最初の一撃」・永辻啓祐	11	初めて山小屋へ入った日・北野仁志	<i>59</i>
山小屋に憩う・福村雅宏	12	取って置き山小屋への道・鈴木正博	<i>61</i>
維持運営を考える時に・大野照夫	13	登山家になった日・泰山正博	<i>62</i>
アルプス、ヒマラヤ		山小屋を介したOBの絆・鈴木正博	<i>66</i>
に無い魅力・打越啓祐	14	僕のワンゲル回想記・瀬端武男	<i>68</i>
姉に頼んだ設計図・木村恒夫	<i>15</i>	山小屋に野田君を偲ぶ・増田佳久	46
小屋建設へ三つの壁・鈴木正博	<i>16</i>	若き日の野田君を想う・鈴木正博	<i>64</i>
幻の周山への道・奥村尚久	<i>19</i>		49
食当で思い出すこと・薩摩節夫	21	デ・レイケの治 <b>水事業</b> 鈴木正博	
命がけのペンキ塗り・福井邦彦	<i>22</i>		76
ブロック4枚全荷重が腰に・河原祥晁	<i>24</i>	山小屋日記 半世紀の記録	
山小屋案内図·森村征男	5	晩秋の山小屋・森村征男	47
フォトライブラリー	8	木馬道(きんまみち)	40 50
わが青春の譜		昭和38年の追いコン写真	<i>56</i>
		山小屋見取図	<i>89</i>

## 山小屋雲內歐



山小見へ行くには一般的には●花書、別所より寺山峠を敷之 雲取峠、雪取山まり、 ニノぶへ、又は寺山峠より、のおから ●車ならば、楽さに 芳生峠か 芳生の部落が 見えたら橋で表りある、一のおへ入る、三のぶの男台まで重は入る。



#### 「漂雲、山小屋特集号」の発行を心よりお喜び申しあげます

## RUWV OB会長 小野 拓男 昭和41年卒

### 山小屋存続への必然性と必要性

昨2006年10月21日、われわれ立命館大学ワンダーフオーゲル会の「創立五十周年記念の集い」がOB、現役、合わせて二百余名の参加により、「からすま京都ホテル」にて盛大に催されました。

その時、強く感じたことですが、最近よく「企業、組織の寿命は三十年」、と言われているなかで、時代が移り人が変わっても、なお五十年もの歴史を重ねることができたのは、会が存続するそれなりの必然性と、これからも継続させて行く必要性があると言うことです。

そして、われわれの「RUWV」という会が、長きに亘り存続できた大きな必然性の一つに「山小屋」の存在があることは、誰しも認めるところです。

45年前、何もない所から土地を手配し、建物を完成させた〇B達のご苦労、この「山小屋」を維持、管理して今に引き継いで来た歴代の現役会員達の努力、これらをまとめて記録として残しておくためにも、この「山小屋特集号」の刊行は大きな意義があると思っております。

私自身も昭和37年の入学でしたので、まさに45年前、「山小屋」建設の真っ只中に居た一人です。

ただ、残念ながら一回生だったため、建設に到る苦労話は先輩に教わっただけで、記憶に残っているのは、5月の連休の新人合宿で岩だらけの斜面を削り取った建設予定地を始めて見たこと、7月の夏合宿の事前トレーニングと言うことで芹生の資材置き場からザックにスコップで何杯も砂利を詰め込まれて建設現場まで何回も運んだこと、秋に花春から寺山峠を越えて材木を担ぎあげたことなど、どうも肉体労働のことばかりです。

当然ながら「山小屋」ができ上がってから何度も利用しました。

冬場、仲間達と「山小屋」に泊まって、「花脊スキー場」(今は潅木の生い茂ったただの山の 斜面になっているが当時はリフトも在った)で滑降を楽しんだこと。

### 薪の燃える匂いで、学生時代に戻った!!



取近の 小野会長

関西学生WV連盟の加盟各大学の役員の合ワンを行って他大学から「山小屋」をうらやましがられたことなどを思いだします。

卒業後、会社員として仕事に追われ、加えて転勤の連続で「山小屋」からは長く遠ざかっていましたが、過日同期の仲間に誘われて雲取山を越えて「山小屋」に行きました。

そんなに大きく変わった印象はありませんでしたが、薪を燃やす煙の匂いを嗅いだ時ふと学生時代に戻った様な懐かしさを覚えました。

ご存じない方も多いかと思いますが、昭和40年ごろ「RUWV」会歌が作られました。何年か歌い継がれていた様ですが、現在どうなっているのかよく知りません。その一番の歌詞を思い出すままに記しておきます。

時雨に濡れた杉木立 梢のかげの紅い屋根 わが故郷の山小屋で ともに過ごした俺たちは こころ通いしワンダラー

何時の日か当時の仲間と大声で歌ってみたいと思っております。

最後になりますが「立命館大学ワンダーフォーゲル会」そして「OB会」の皆様のご健勝を祈念するとともに、今後ともわれらの「山小屋」を大切に維持、管理して頂くことをお願いし、そしてこの「漂雲 山小屋特集号」の発行に当たり貴重な時間と情熱を傾注していただいた鈴木様、松久様を始めとする編集担当者の方々に篤く感謝と御礼を申し上げて、私の挨拶とさせていただきます。



山小屋予定地の最初の踏査。雪の残る早春、設計図の 四隅に実際に人を配して、イメージを膨らませた



らの「靑春譜」だ。

ボッカのあとの楽しみは、ただただ食べること。そのあと は、時として哲学的な議論へと進んだりして―

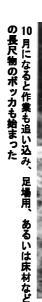




コンクリートの流し込み、このあたりの作業になると 理工学部の独壇場



溝掘り、捨てコン、鉄筋の組み立てそしてタコ糸で位置決め。決して暴用な人ばかりではありませんが、熱意が問題!





末川総長揮毫の「青山迎人新」の額の前で

昭和37年の新人合宿が花背スキー場で行われ、そのまま山 小屋建設作業に投入された

ブロック9段完了、問題の臥梁設営を待つばかりに



八甲田山でスキーを楽しむ

## 山小屋は人を結び付ける

### - 小屋の環境も秀逸

最長老の鎌田さん。でもこういう言い方は好まれないと思うが、さすが に、錚々(そうそう)たるメンバーの名前が淀みなく出てくる。つねに前へ、 つねに若く、人を大切にする姿勢、これが、文中に横溢している。

> 克則 鎌田 昭和35年卒

わたしはこの2月初旬、白馬乗鞍スキー場に誘われ ました。誘ってくれた人達は、私の高校山岳部の先輩 後輩でした。というのもこのスキー場は、かつては蕨平 と称し、旧三高山岳部の人達が開拓したスキー場でし た。私達は高校での3年間、ここで冬山合宿をやり、 みっちり山スキーを叩き込まれたのです。その時の コーチは若き探険家、梅棹忠夫、川喜田二郎、その他 バリバリの面々でありました。加えて夜炬燵を囲んでの 探検物語り、とくに先輩達の極地やヒマラヤに対する 熱き思いを毎夜聞いたのです。これが私の生涯の夢 を決定付けることになりました。

そんなこんなで50ウン年ぶりに訪ねたのです。もちろ ん当時の面影はまったくと言っていいほどありません。

ところで、その参加メンバーの中に、私より数年後輩 の、団結力というか仲睦まじいグループが目につきまし

夜、歓談してみると、なんと彼等が当時、部で管理し ていた北山荘の完全補修をした主力メンバーだったの です。

ちょっとここで北山荘の沿革を申しますと、建設は昭 和2年頃、あの西堀栄三郎、今西錦司等によって建て られ、以後多くの登山家、探検家を輩出するそのベー スになった小屋であり、ダークダックスが歌った「雪山 讃歌」のオリジナルは、まさしく三高山岳部の部歌で す。その中で「煙い小屋でも黄金の御殿、早く行きた い谷間の小屋へ」の小屋は、まさしく北山荘を指してい るのです。(雲ヶ畑、中津川上流、直谷、魚谷山東方 直下)

その上、この小屋の特徴は、戦後一貫して一般利用 者に開放していること、構造が完全木造であること、現 在も囲炉裏を保持していること(当然煙いが、今は煙 抜きが施されている)、当然ながら建て屋の痛みが激 しいのです。

彼等の苦労話を聞いているうちに、なかの一人が、 「山小屋でコンパしよう」と呼び掛けてもあまり人が来な いのに、「山小屋が痛んでいる。補修しよう!!」と呼び掛 けたら、信じられないほどの財力、人力が集まった、と 言うのです。

長らくビジネス界に席を置く私にとって、つい "人は 利益で動く。と思い勝ちになりますが、まったく身につ まされるとともに、熱く語る彼等を見て、"山小屋は人 を結び付ける。とつくづく思った次第です。

ひるがえって、二の谷のWV小屋についてもまったく 同じことが言えます。先だっての50周年の集いでも、山 小屋建設に携った人達の出席率の高さは断突です。

しかも40年以 上経った今も、 その人達の交 流の密度はう らやましい限り です。

正直我々も それにあやか りたい。そのた めには機会あ るごとに「小屋 を訪ねましょ う、そして語り ましょう」と、言 いたい。

これから第一 線を退く人が 増えるでしょ う。その時に、

小屋建設前の地形。奥から登 る。右手、人影が見えるあたりが小 小屋の存在は 屋のある場所、そして左手に水場が 大きい。また ある。この地形が今の環境を生んだ これを中心に輪の広がることを期待して止みません。

小屋を建ててくれた人達、補修を続けてくれている 人達、本当に有難う。

それと、あの小屋の場所の選定について、訪ねるた びに感服しています。最近その経緯について少々聞 きましたが、あの環境が変わらず保全されているのを 見るにつけ、その選定、地主との交渉、その他諸手続 きされた方々の先見の明に驚くばかりです。北山の数 ある小屋の中で、あの小屋は秀逸であるといつも誇り に思っています。

さて、山小屋で互いに会うようなことがあったら、若き RUWV時代や青春時代の感傷に浸るのも宜しいが、 是非これからの夢、希望、計画を語るようにしようでは ありませんか。

いまさらとは思いますが、あのサムエル・ウルマンの YOUTH(青春とは)の二つの訳詩の抜粋を掲げて終 りとします。続きは小屋で語りましょう。

〈オリジナル版/新井満訳〉 青春とは 直の青春とは 若き肉体のなかにあるのではなく 若き精神のなかにこそある(中略) 歳を重ねただけで 人は老いない… 夢を失ったとき はじめて老いる…

〈マッカーサー愛誦版/岡田義夫訳〉 青春とは人生の或る期間を云うのではなく、 心の様相を言うのだ… 人は信念と共に若く 疑惑と共に老ゆる 人は自信と共に若く 恐怖と共に老ゆる 希望ある限り若く 失望と共に老い朽ちる…

(鎌田氏はRUWV3創設者の一人である)

## 北山荘が「最初の一撃」



平安神宮の前で、筆者(写真中 央)はボランティアで京都のガ イドをしている

山小屋が欲しい、その一念が、「北山荘」を見てから募ってきた。いつ行っても、我が家のように迎えてくれる山小屋への思いは、こうして、連綿と受け継がれてきた。そして、創部5年目にして、待望の小屋が完成した。筆者は今にして思う、「良くぞ建てつるものかな」と。NHKの「プロジェクトX」風に言えば、「最初の一撃」があって、あとからつづく者によって、それが完成する。これが伝統というものであろうか?

永辻 啓介 昭和37年卒

近年、NHKの人気シリーズ番組で「プロジェクトX」というドキュメンタリー番組があった。恐らく多くの皆さんもご覧になられたことと思う。私もほとんど欠かさず見ていたが、見終わった後いつも私が感じたのは、私共の「山小屋建設」もミニ、ミニ版ではあるが、正に「プロジェクトX」であったなあ、という感慨である。

最初は1人か2人の少数者が何かを為さんという夢と希望を持つ。そして、その夢と希望(願望といっても良い)が、徐々に周囲の人々に伝播し、次第に熱が上り、情熱ともいうべきものに転化する。そしてその辺から実現を目指して具体的手順に関心が深まり、多くの人々の創意や工夫が加わって、炎が一層大きくなり、実現の可能性が大きくなればなるほど、情熱もますます熾(し)烈となり、この段階まで来ればもはや多少の困難

や障害は問題とならず、目的達成を目指して全員が一丸となる。そして、その結果が1962年12月、 我らが山小屋の完成という果実となって報いられたのである。

振り返ってこの"最初の一撃"ともいうべき、 「私達の山小屋を所有したい」という願望はどこ からきたのか。これはいまさら言うまでもなく 「北山荘」(注=囲み記事参照)の存在である。

私が「北山荘」へ初めて行ったのは、昭和31年の秋であったと記憶するが、その時のリーダーはRUWV創設者の鎌田克則君であった。同君は、元々京都府立鴨沂高校山岳部のOBで、「北山荘」は彼にとって別荘のような存在であった。高校生のころから足繁く通ったところであるから、私達を一度案内してやろうということになったのは当然のことであった。さて、その当時の「北山

※=北山荘 木造平屋建、面積6坪程度。芦生峠と魚谷山(816.2メートル)の中間よりやや西南に位置し、芦生峠より徒歩約1時間、元々は第一次南極越冬隊長で、「雪山讃歌」の作詞者でもあるマルチ人間・故西堀栄三郎氏の所有であったものを、京大学士山岳会に寄付しようとしたが、何かの事情で果たせず、結局、旧京都府立一中山岳部に1934年頃寄付し、戦後の学制改革により現在、京都府立洛北高校、同鴨沂高校の両校山岳部により管理、運営されている。

なお、近年、故今西錦司氏のレリーフが小屋近くに設置されたと聞く。

**荘」**(現在の姿は知らないが)は、面積でいえば 当会の山小屋とあまり変わらない2間×3間位 で、窓はいわゆる、蔀戸で、開ける時は外へハネ 上げ、つっかい棒で支えにするという極めてシン プルなものであった。床は板敷きで中央に炉が 切ってあり、煮炊きはその炉でするので、よほど 上手に火を燃やさないと文字通り「煙い小屋でも 黄金の御殿……」となって、中にいる者は皆、煙 で燻された狸のような状態となり、外へ飛び出さ ざるを得ないことも再々であった。ともあれ、私



2005年の正月、神戸の山岳会のみなさんと山小屋で 合ワン。前列中央が筆者、同左が森村さん

達はこの小屋「北山荘」が大いに気に入り、その 後何回通ったことか、とくにこの小屋は開放が原 則であり、無施錠、無届使用が可能であったこと から、一層のめりこむ要因となった。とは言うも のの、再々訪問するに及んで、洛北高校や鴨沂高 校の山岳部員、府立一中のOBで斯界に名を知ら れた人々と接し、交流する喜びはあったものの、

私達はしょせん客人であり、心理的に遠慮の気持 ちがあったことは否めない。そして、そういった ことが将来自分達の山小屋を持ちたいという願望 に結びついたこともまた事実である。

以上が「最初の一撃」の経緯である。山小屋建 設のその後の経過については、諸氏が記述されて いるので割愛させていただく。

さて、山小屋完成後は、あれだけ熱望した「山 小屋 | であったにもかかわらず、そう再々は通わ なかったようである。一つには私自身の生活環境 の変化もあったし、仲間の諸君も卒業後は各地へ 散っていったこともあった。たまに再会して山小 屋のことが話題になると「山小屋は我々の青春の モニュメントであり、利用云々よりも建設のプロ セスにこそ意義があった」などと嘯(うそぶ)い ていたのは正に青年の客気というほかない。

後年、後輩の高野悦子君の遺稿「二十歳の原 点」を読むに及んで、彼女の山小屋に対する思い 入れを知り、何故もっと山小屋へ通わなかったか と悔いたりもしたが、後の祭り。

ともあれ、齢古希に達した現在、春夏秋冬大い に利用させてもらって「良くぞ建てつるものか な」と言うのが私の今の感慨である。



イラスト

### RUWV山小屋に憩う

#### 福村 雅宏 昭和33年卒

小屋の前の斜面を少し降りると、小さな流れのかた わらにかまど場が作られている。がっしりとした小屋組 みの屋根と丸太の腰掛がある。中央の炉には太い薪 がチロチロと小さな炎を上げている。

ある早春の午後、焚火を囲んで初老の男たちが 座っていた。やわらかな日差しと少しばかりの渓音、 穏やかな時間が流れる。

「この小屋も、もう五十年になるなあ……」 「今も現役やし、よう保っているなあ……」

だれともなく声があが る、うなずきの顔々。

使われ続けて五 十年、多くの人達の が詰まったこの小 ます、と語る筆者



小生、山小屋の企画段階から 参画しておりますが、完成後 エネルギーが集めら の現役や0日が立派に運営さ れ、それぞれの想い れていることに感謝しており

屋、これからも折を見ては訪れて、豊かな時間を友と 過ごそうと思う。

### 今後の課題

## 維持運営を考える時に

重い腰をやおら立ち上げ、「やっとこさぁーで喉にささった魚の骨が取れた思いです」と大野さん。難産の末の脱稿。現役時代の氏のワンゲル生活は、ロマンとパッションを追い求めてきた。それゆえ、山小屋建設へ懸ける情熱は誰にも負けなかった。ハンチングベレーにゴムの長靴姿で、現場をリードしていた。ここまで頑健な小屋だから、これからさらに50年と維持しなければならない。どうやって運営していくか、大いに議論しようではないかと呼びかけている。

第1次山小屋建設委員長 大野 照夫 昭和35年法卒 同38年理工卒

#### はじめに

編集者の鈴木さんから再々再度に亘ってRUW V漂雲の山小屋特集号に掲載する原稿の督促の電話が入った。特集号発行に際しての原稿依頼は半年前から受けていて、気軽に承諾したのではあったが、さて、その中味が、当時山小屋建設に携わった者の生の声とあっては難しく、なかなか筆が進まなかった次第である。何にろ、半世紀も過ぎ去った昔の物語だから、人間の浄化作用で良い思い出は残せるが、悪い思い出は忘れることになっている。筆を起こすとなると、どうしてもピース、ピースの話題しか出てこないことになる。その結果、他人が読むと、面白くもない話を提供する破目になる。

#### 山小屋建設の機運

山小屋建設の夢が膨らみはじめたのは、昭和35年頃で、それは理工学部の衣笠校舎での総会だったと思う。例によって大声で山小屋建設の提案説明、アジ演説をしたところ、理工学部4回生のある会員から反論があった。「山小屋建設なんてとても無理、阿呆なこと言うな。建ったら河原町通りを逆立ちして歩いてやる」とほざかれたことを今でも印象的に記憶している。

まあ、第三者的には、常識的な反論なのでしょう。しかしながら、当時の私のワンゲル生活は、ロマンとパッションを追う世界に没入していて、いささかも周りの反論を省みることなく、自己の夢を実現せんものと、山小屋建設に邁進(まいしん)したものである。今振り返ってみて、やはり正しかったと思うことは、当時のRUWVの強力な組織力を十分認識していたということです。この組織力を十分理解し(愚者にはこれがなかなか難しい)、活用できたことの結果だと思っている。

企業が事業を進めるうえで必要な要素である物、金、人のバランスを、当時のワンゲル会員は 一人ひとりが兼ね備えていたことである。お陰 で、昭和37年暮れに完成し、まさに良かった、良かったと皆で喜び合ったものです。でも、実際に私が山小屋を利用させて頂くようになったのは、40年後の定年を迎えてからとなっています。

#### 基礎工事の開始

アルバムから山小屋建設当時の古い写真を引っ 張り出してシゲシゲと見ています。まずその1枚 は、施工状況を見守っている私、図面を持ってい る勇姿、素人とはいえ、そのスタイルは40年間土 建屋で飯を喰ってきた現場監督の姿とまったく同 じです。違っているのは本業でのヘルメットが、 当時は粋なハンチングベレーに変わっているだ け。写真は後姿なので作業を見守っている鋭い目 は写っていませんが、正面の鉄筋を右手で支えて いる向来さん(理工土木)との視線をたどると、



の長靴、それがトレードマークだった 図面片手に作業の進捗状況を見守る筆者。 ハンチングベレーとゴム 作業員(失礼)の木村君と河原君 が横筋と縦筋を番線で結んでいる 手元を凝視しています。重要な 建物の基礎部分となる地中梁の 施工については、土木科の会員 がイニシアチブを取って進めた ようでした。

そして、もう1枚の写真は、基 礎部分の全景ですが、現場(製 造過程)の良し悪しはその道の プロが見れば一目瞭然、手落ち のない堅牢な構造物であること がこの写真から見えます。建設

会社の新入社員は、まず建物の測量、地墨、丁張 りから、順次仕事を覚えていきます。山小屋建設 時はまだ学生で、土木科生といっても教科書以外

基礎部分の全景。手落ちのない堅牢な構 造物であることがうかがえる



の実地は未経験でした。芹生

にはご丁寧にもフックがついています。鉄筋の太 さは直径13ミリが使われており、少々の地震が来 てもびくともしない頑健な構造物となっていま

## アルプス、ピマラマに無い山小屋の魅力

#### 打越 啓祐 昭和37年卒

山小屋について何か書くようにと言われても、 余りにも書くことが多くあってまとまらない。計 画の段階からメンテナンスまで深くかかわり、小 屋のことを思うと、小屋に対する愛着が多すぎて 感情的になり、冷静さを失うためだろう。

小屋の建設計画が具体的に動き出したのが4回生の時で、建設時期には社会人一年生であったため、あまり具体的な建設作業には参加できていない。計画時点で印象的なことは、建設に積極的なグループとそうでないグループがあったように思う。また、建設作業に参加したことといえば、二の谷の道造りと地盤の整地作業であり、クラブ活動最後の合宿として参加したことを覚えている。もう一つ忘れがたいことは、ブロック壁の上部をつなぐ鉄筋コンクリートの梁のコンクリート打設時に、大量の労働力が必要と言うことで動員がかかり、会社を休んで参加したことを覚えている。

メンテナンスについては、屋根の葺き替えや内装の改善、窓枠や外装の改造等で、これはOBとして金集めに協力し、現役諸君に集金力の大きさを示して、驚かせたのも良い思い出だ。最近は、山小屋を利用してアウトドアを楽しむことや、小屋のこまごましたメンテナンスを楽しんでいる。

山小屋を100パーセント楽しんでいるのは、同期では森村氏と私ぐらいのものだろう。周りの連中は「また山小屋へ行くの? 同じ所へばかり行って、よう飽きへんなあー!」と呆れ顔であ



建設にかかる頃、「近代工事は道造りから」とば かり率先して整備に当たる筆者(左側)

る。私にとっては季節を変え、仲間を変え、あるいは、同じ顔ぶれでも、二の谷RUWVの山小屋は居心地の良いところなのだ。先輩ヤンレー氏によれば、二の谷の山小屋は、貴船の奥の鬼の住むところだそうで、そんなところで気持ち良く過ごせる者は鬼族の片割れらしい。今でも小屋へ行くたびに、半世紀も前に共に苦労をして小屋を造った仲間達に大いに感謝している。この山小屋には私の青春期から現在に続く全ての記憶が動態保存されているような気がしてならない。アルプスへスキーに行き、ヒマラヤをトレッキングしても味わえないサムシングが小屋にはある。その正体は記憶の動態保存なのだろうと思っている。

この先も、芹生から小屋までの山道を自力で歩ける限り、私の小屋通いは続くだろう。

す。通常コンクリート造りは永久構造物といわれていて、山小屋もブロック壁とはいえ、半永久的と言えそうです。百年、二百年後も居住性を我慢すれば十分使用に耐えてくれそうです。

それにしてもこの山小屋の内外の造作は、性格 上単純そのもので、急勾配の赤屋根といい、無駄 のない構造になっています。何時来でも飽きるこ とのない格好をしていて、北山に溶け込んでくれ ています、と自画自賛。ところで、この山小屋の 設計をして頂いたのは、木村君(39年理工学部化 学科卒)のお姉さん(大阪市大の建築科)でし た。ワンゲル活動のすべてが今様で言うならボラ ンティア活動であって、報酬等の概念がなく、感 謝の気持ちすらなかったように思われますので、 半世紀を過ぎた今改めて厚く御礼申し上げる次第 です。

#### おわりに

急ぐことではないのですが、この立派な山小屋をこれからどのように運営していくのかの課題について、皆さんと意見交換したいと思います。目下のところは森村さん(37年理工卒)にお願いして万事OKなのですが、今後学生の意識動向、OBの高齢化、世の中の諸変化等を考慮すると、この際小屋の財産権(所有)を大学に寄贈して、実際の管理運営は今までどおりにすることでどうかと思います。大学に移管するメリット、デメリットについては、おいおい議論することにして、ご検討の程よろしくお願い致します。

(大野氏はRUWV創設者の一人である)

## 姉に頼んだ設計図 教科書通り の頑丈さ

今では伝説的でさえある山小屋の設計図。山小屋建設の黎明期、議論かまびすしく、計画がどちらに転ぶか微妙だった頃、いち早く設計図が完成。それを契機に、背中を押されるように計画が動き出した。今日、山小屋があるのは、木村氏のお姉さんによる設計図に負うところが大きい。先の座談会でも、当時は学生で、感謝の気持ち一つ表すことができなかった、と言う話が出ていた。山小屋完成の一つの原動力であったことは間違いない。

第2次山小屋建設委員長

木村 恒夫 昭和39年卒

編集担当者から何か書くようにとの要請でほとんど忘れてしまった当時のことを思い出してパソコンのキーを叩いて見ることにする。

私の手元には探し出した創立20周年時の赤茶けた記念論集と当時の小屋の青図の一部が残っているのみですが、現地には数度改装はされたものの、頑丈この上ない山小屋が健在している。これが論より証拠で、いまさら何を書こうかと思ってしまいます……。

20周年記念論集には鈴木正博殿がよくもあれだけ詳しく書けたなと思うほど正確に書かれています。50周年記念特集号を出すならそれを再録して欲しいし、関心のある方は是非読んで頂きたいものです。

私もこれを読んであんな事もあった、こんな事もあったと過ぎ去った青春の1ページを感慨深く 思い出した次第です。

在学中ではありましたが、会の中で何度も山小 屋所持の有効性と、将来のことをも含めた論議を しました。場所の選定、地主の了解、保安林の中 の建設許可の取得や規模の策定、資金のめどもよ くもつけたものと思う。

法律的なことについては個人的に大学の教授の助言を頂いたと思うが20歳前後の学生が当時としては理想的なかたちで小屋建設を実現した、そのバイタリティーは今にして思えば凄い。

資金においても学校からも業者からも援助して もらうのでなく、学生の努力と(卒業後数年しか 経っていない)先輩のカンパで達成したのです。

立命館大学には知名度の高い理工学部十木科は



央)。両サイドは森村氏と打越氏キーを楽しんできた筆者(中今年の早春、ツェルマットでス

あったが建築科が無かったので、某大学の建築科 の院生であった私の姉(構造設計は専門外であっ た)に頼んで計画案から、大きさ、要望事項等を 十分反映した図面まで描いてもらいました。

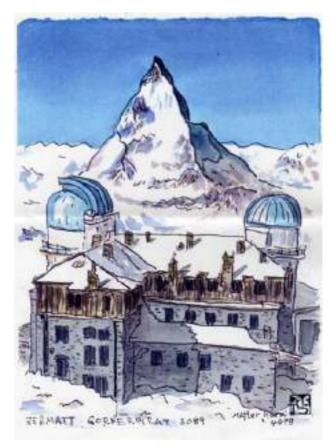
確か京都北山の雪はかなり湿めった雪で、WV 土木科の諸氏から、真冬は試験やら帰省やらで除 雪が出来ないので、一立方メートル当たり500キ ロの積雪に耐えるものを造って欲しいとの要望が あったように覚えています。地耐力も不明(山土 の埋立地)としたのでしょう。

今にして思えばそんなこともあって未熟な学生が、教科書通りの設計を行い、頑丈すぎるほどの小屋の図面が出来上がった。鉄筋は太い物が十分に入っているし、ブロックは防水の幅20センチを使用し、梁は凄いし……。

この素人の図面に基づいて、正確にWV土木科 諸氏が先頭に立って、建てることが出来たのでした。

数年前に当初の建具やトタン屋根がカラーベストに更新され、立派な小屋となって生まれ変わり、現役、OB、何時でも来て下さいとばかりに小屋は待っています。

ともかく、私の前後の先輩、後輩は良きにつけ悪 しきにつけ、自分達の思いを具体化して完成させ たのですが、その小屋を今もしっかり維持管理し ている後輩の皆様には深く感謝しています。



森村氏がツェルマットでスケッチしたマッターホルン

### 小屋建設へ三つの壁



エジプト旅行中の最近の筆者

山小屋建設において実際の建設場面で活躍した、第3次山小屋 建設委員長・鈴木正博氏。建設中は様々な壁にぶつかり、一つひ とつクリアして、昭和37年12月9日、完成にこぎつけた。その前日、 末川総長の額を山小屋へ運び上げる最後のボッカは印象的だ。

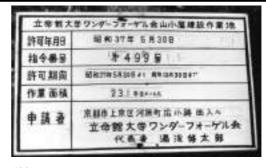
#### 第3次山小屋建設委員長

鈴木 正博 昭和39年卒

#### 保安林内での

#### 山小屋建設作業の強行

1回生の旧人合宿で大峰山縦走の際のラスト、深仙小屋および2回生の新人合宿、比良山望武小屋の追加宿泊で、同期生と喰っちゃ寝、喰っちゃ寝のダベリングを楽しむ機会があった。合宿後の同期生だけが自由にシケモクを吸い、上級生がいなくなった気軽さから、ダベリングを楽しんでいた時、誰からか「こんな小屋が自分達にあったらいいな!」と言う声があがった。しかし私はその



保安林内で、ようや

仲間内では、ダブルスクールならぬダブルクラブ に加入して土曜日など法律相談部で勉強していた ことから、同期生の中ではWV主流派ではなかっ た。でも努めて総会や集会、PWには出かけていたし、現にあるときの総会で理工学部の先輩、同期生から「我々も山小屋を建設しようではないか!」との議題が提議されたときに居合わせた。当時、京大WVが比良山へク谷にブロック建ての山小屋を造ったというニュースが入り、ピンボケの白黒写真1枚を見せられた。それから、後に第二次山小屋建設委員長に就任した同期の木村恒夫君が、確か、姉さんの協力を得て設計図、青写真を作成したと言って皆に見せ、この資材費総額が14万円であると言う試算を提示した。それを聞いて、これなら我々でも手の届くところだとの意識が醸成された。

このように青写真が先行し、建設地の決定が後からというチグハグさであった。当然青写真は3、4回描き直されている。建設予定地は、夏合宿やスキー合宿などで北アルプスに行っているので、アルプスと言う意見もあったが、手近かに入れると言うことから北山周辺に絞られた。さらに六つの候補地から現在地が決定された。

ところが後日その土地が森林法の保安林の指定 を受けており、その目的は「水源涵養」と言うこ とが判明した。そこでは土石の採取、工事すべて が届出により許可を必要としており、仮小屋なら ともかく山の斜面を削り、鉄筋ブロック造りの堅 牢な山小屋建設の場合は、地目変更や指定取消が 必要ではないかと言う議論になり、土地所有者物 部新三郎さんとの土地の賃貸借契約締結を含めて 私が引っ張り出されることになった。さらに、そ のまま継続して第三次山小屋建設委員長につかさ れた。この時点では設計図も決まり、建設地も決 まっていて、すでに建設のGOサインが出されて いた。とはいうものの、土地の賃貸借契約書を取 りかわしたのは後のことだし、総会の意向は「保 安林の件は事後処理」の方向で了承されていた。 私としては、同好会とは言え構成員はすべて立命 館大学の学生であることから、法学部の乾昭三助 教授に相談し、一部の先輩の勧めなどもあって、 京都府庁に出かけて私たちの構想を展開して、相 談に乗ってもらった。この結果、許可権限は京北 町の地方事務所長にあることから、同級生の奥村 君に同行してもらって、遅ればせながら届けを提 出して、「保安林内山小屋建設作業」の許可が昭 和37年5月30日付でおりた。指令番号第499号で あった。

#### クラブの要、

#### どこまでも自主性を貫く

RUWVは学術系、体育会系の二大集団に分かれた大学公認のクラブには加入せず、あくまでも自主性を貫き、同好会を維持してきた。関西学生WV連盟の中でも、歴史は古いが体育会系の主流派とは距離を置いており、少数派を自認してきた。この根底には、ワンダーフォーゲル運動はド

イり動自生神人重をたろツ、を然活の間す求運で野通のし自性るめ動場が始外じ中、由をこてでドカインで

にるットにて心をて突省 場、青収生た化体と がある。でラ吸学し団裁進の がイッ団れ中者せに反 のイッ団れ中者せに反 のイッ団れ中者せに反 のイッ団れ中者せに反 のイッ団れ中者せに反



建設予定地に巨大な岩盤が出現



整地と併行して、ボッカも

WVでは、野山を自由に慫慂する時に、束縛や規制されることがあっては「ワンダーフォーゲル」というクラブ自体の存亡が問われる由々しき問題であるとの考えに立ち、個人の自主性を尊び、すべての行動規範を構成員の自主性に任せたのである。従って、新人、夏、スキー、旧人合宿などは

あったが、当会で ンデリング)が活 ンバーが提出する 会が承認すること 活動の太宗として

他大学の活動を 化大学の活動 V に属する大学W V に属するった。 で、喘ぎ喘ぎ登ち で、端を持ち、 力養成と信じて行

RUWでにメも設ムた必ああし、UW宿か体ははン化大一こ自のなたで背しなた。要っったははかない。ははいいでにう強大一こ自のない。はいものはないない。ではいいはないがある。というでは、としているがある。

30 は、PW (パートワ 動の主体をなし、メ PW計画をリーダー によって、我々の会 いた。

見てみると、主流派では練成と称してシスリングに石を詰め下級生の尻や頭を上追い上げることが体われていた。

しかしながら、山小屋建設委員長として小屋建設を推進しなければならない立場の私や、私の周りの人たちは、完成スケジュールの設定ができず、悩むことも一再ではなかった。

Ħ

スタート時点の昭和37年3月末から4月中旬まで の旧人合宿を山小屋建設作業へ振り替える問題は スムーズに移行できたが、GWの新人合宿では、 期間中の全てを山小屋作業に振り替えることに異 を唱える者もいた。遅々として進まない山の斜面 削り、資材ボッカ、捨てコン、基礎コン、ブロッ ク積みなど、作業は山積していた。とは言うもの の、クラブ行事として動員要請をかけられないこ とのもどかしさもあったのだ。しかし、当時の 2、3回生の一部の人達の自覚、「一旦始めた限 り、何とか前進させたい、完成させたい」との意 欲から、電車、バス代を払い、メシの手当も自分 で行なって入山し、再々にわたって重労働を買っ て出てくれた。資材のボッカは、芹生の資材置き 場から、建設予定地までの山道1時間の道のり だった。回数は1日に2、3回だったのが、朝飯 を食べる前に1回往復して1日4回になった。そ の量も、当初キスリングにスコップ7、8杯の砂 またはバラスが標準だったのが、順次増量して いって10杯となり、最高はスーパーの14杯まで増 やしたものだ。1回の運搬重量を増量することは しんどいことではあったが、少しでも早く資材を 運び上げたいとの気持ちから率先して増量する と、下級生が対抗心、競争心を奮い立たせてその 上を行こうとチャレンジしてきてくれた。引っ張 る者はしんどいことだが上手い具合にかみ合い、 レベルが向上することは、得がたい喜びになっ た。

当時の在籍クラブ員数は200人弱、最後までクラブの自主性を尊重して推進しなければならない私達にとっては、言い方を代えれば、「自主性を尊重させられた」結果でもあった。5、6回の参加から散発的な参加者がいないわけではなかったが、30~40人の中心的な活動メンバーの強い意欲に導かれたと言いたいところだが、そこまではないだろうである。が、音地で完成させたと言えるのではないだろうか。だから、昭和37年12月9日の完成式当日の集合メンバーは、他の都合とバッティングした人も居るだろうが、共に喜びを分かち合ったものとしては少なめな50名弱になったのだと想う。

#### 終盤の臥梁設営

#### 立ち塞がる技術的問題

当時私は、一種人材派遣業、人集め屋のような 役割だった。「来週どんな作業があるから、何人 入ってくれ」などと声をかけ、ボックスに掲示し て、人数確保に努めた。

二の谷出合いの少し上にあった炭焼小屋跡地のテント場は、ツルハシ、スコップでの斜面削り・岩盤割り、また行きはヨイヨイ帰りはヒイヒイの芹生の資材置き場からのブロック、セメント、砂・バラス等を担ぎ上げる、その拠点であった。学士様の卵、理工学部生は主として現場で、捨てコン、鉄骨立ち上げ、コンクリートを流し込むための糸を張ってのレベル調整等の指導をした。し

かし、彼等もブロック積みは経験がなく、基礎コ ンの上に一列17個のブロック積みでは、目地のモ ルタル量が多過ぎて、基礎コンの立ち上がり延長 をオーバーしてしまった。そこでモルタルが固ま る前だから、一度すべてつぶして(下に落とし て) 積み直すことを繰り返した。何しろブロック の上下左右には1センチ幅のモルタルを接着剤よ ろしく塗りこめるのだが、目地コテが上手く使え ず、人差し指と素手で積み上げていった。9段目 のブロック積等は、足場が不安定で軽業師のよう な想いで積み上げたが、その先が素人集団ではど うして良いのか判らず、しばし停滞した。まさに その時期が夏合宿とかち合い、デッドロックに乗 り上げた懸案を放置して楽しむ気持ちになれず、 3回生の夏合宿・東北飯豊朝日連峰は参加しな かった。

この頃中学時代の同級生で日大の建築学科に在 学している友人が、関西旅行に来たので、一日彼 等を建築中の小屋に案内して意見を聞いた。それ は、9段積み上げたブロックの上に臥梁を設営す るのだが、当時は流し込むコンクリートの重力を 受ける板もないのにブロックに接してコンクリートの重量物をどのように支えるのかが判らず、 工学部の人も解決策を出せないでいた。加えて、 四隅は下部に重力を支えるブロックもない空間な のに、大量のコンクリートを流し込んで固まらせ なければならないなど、当時の私の頭では想像も できないことだった。ここが人文科学、社会科学 系学生の限界であり、「ブロック9段を積み上げ たままここで工事中断か?」と思い悩んだ。

しかしこの問題は「はめ殺し」あるいは「埋め 殺し」、まさにコンクリート建築物を街で見る時 ボルトや針金が出ているのがある。これは埋め込 まれたままで木枠の左右を引っ張り合い、流し込 んだコンクリートが枠外に流れ出ないように支え る役目を果たしている。また、なかには内側に倒 れこまない状態にする。あるいは、鉄筋が中心部 に埋め込まれるように番線で結束する等の手当を することにより、型枠を取り外して埋め殺しされ たボルトや針金が外部に出ている部分を始末する なり、放置しているのを見かける。結局、この臥 梁設定と屋根の作業は私たち学生の手には負えな いと言うことで、島田工務店に工事を頼み、作業 員等の下働きを私たちで行い、経費を最小限に食 い止める方法を採用して、完成までこぎつけるこ とが出来た。

以上の通り、各ステップで悩み苦しみ、模索して、ようやく完成まで見届けた私は、延べ投入人員数や総経費を算出報告すべきではあろうが、すべてを掌握していたわけではなく、情報が1箇所に集中していたとも言えず、作業員の足代、メシ代等を除外して、純粋の資材費及び島田工務店への支払い額総計は、約50万円掛かったと記憶しているだけである。

#### 心躍る最終章

#### 「青山迎人新」の額、最後のボッカ

私にとっては苦労の連続だったと言えるが、喜びがないわけではない。

完成日を目前に、とんとん拍子で末川 博総長に「青山迎人新」の揮毫をいただき、総長の自宅へ受け取りに行って、風呂敷に包んだ板をキスリングの上に載せ、12月8日の広河原行き最終バスに乗り遅れたので、鞍馬駅から花背街道(バス道)、花背スキー場横、寺山峠、二の谷出合い経由で運び上げる最後の単独ボッカは、印象深いものがあった。

雪の降る3月に始めて、6月のある土曜日に

は、4時に土曜法律相談を終えて、芹生峠を越えて杉の大木で月明かりも塞がれた暗い地道を一人で歩いていると、ススキや笹が風でゆれる音で、「ヒヤー!」と鳥肌が立ったし、芹生の里に入ると放し飼いされた犬が集団で吠え、里はずれまで追尾されて怖い想いをしたこともある。その後、寝静まったテント場に夜中に到着して皆を起こすのも悪いと、寺子屋跡といわれている大イチョウの木の先、杉皮で片屋根をこしらえた休憩場所の小枝を燃やして夜明けを待った。あの時の杉林の神秘的な光景は忘れ難い。これら様々な来し方の神秘的な光景は忘れ難い。これら様々な来し方のさるが走馬灯のように浮かんできて、仲間の待ってくれる山小屋へ近づいていったその時の想いは、味わい深く、心楽しく、一人で悦にいったものである。

書き付けた言葉 書き付けた言葉

## 幻の周山への道

「周山への道」。本当に行ったのだろうか? それともどこかの道と混同していないか。45年も前のことである。両側に北山杉が並び、小鳥がちちっと鳴いている。そんな道を、あの時、実は、本当に、歩いたのである。それを証明したのは、押入れの中の一個のダンボール箱だった。

奥村 尚久 昭和39年卒

合宿所での朝食が終わり、その日のパーワンの準備でざわめきの残る花背スキー場脇の小屋を抜け出た私は、一人で歩き出した。肩にかけたナップザックには山小屋建設に関する法的手続きの書類が入っている。多分土地建物の登記に関する申請の類であったろう。この日はもう一人鈴木正博君が、地主である物部氏宅を訪問の予定である。

山小屋建設に関する法的諸手続きは我々 法学部生が担当し、山小屋建設の現場作業 の主役は理工学部土木の諸君という風に、 なんとなく役割分担がなされていたように 思う。我々文系の学生にとっての現場作業 は文字通り素人であり、もっぱらセメン ト、砂利、ブロックの担ぎ屋に徹していた ように思う。

花背からいったん南へ下がり、やがて北東への道を一人ぽくぽくと歩き始めた。山中とは言え4、5メートル幅の道は歩き易く、道の両側は鬱蒼とした杉並木が続いた。しばらく歩くと杉木立が開け、少しずつ空の青さと明るさが道を照らした。時々、さわさわと吹く風は頬に心地よ





左は山小屋を前に奥村さん (前列左)。上は写真の裏に 書き付けた四人の寸評

く、ちちっと小鳥の鳴く声以外はしんと静まりか えり、私が歩く山靴の音だけがぽくぽくとひそや かに響いた。

私にとって周山という京都北部の町は珍しい地名ではなかった。京都の大学の医学部で口腔外科

の論文を書いた私より一回り年上の長兄が、教室を出てその後父の歯科医院を継ぐまでの数年間を、世話になった教授の推薦で宮仕えとして2、3の病院勤務をこなしたが、最初の勤務先が周山の町の病院であった。兄は、毎日自宅から軽自動車で病院に通っていたので、家族にとって周山は



秋深し、その日の作業が終わって。夕暮れの花背ス キー場にて(前列右が筆者)

むしろなじみの町であった。

さて、この日私は確かに一人で周山の役場へ向かって花背の合宿所を出た記憶がある。いや、記憶があると言うよりもそう思い込んでいると言った方が正しいだろう。しかし、困ったことに往路の山道の情景のみが記憶に残っており、その余のことが一切忘却の彼方なのである。役所の入り口にあった数段の円形の石段を登ったように思うが、持参した書類提出のヤリトリや、その後の復路の記憶が一切ないのである。同じ道をまた歩いて帰ったのか、車にでも便乗して戻ったのかがまったく記憶にない。

じつは、この日のことを書こうと思ってから、 私はある恐れを感じていた。ひょっとしてこの日 の単独行は本当にあったのだろうか。ひょっとす ると、いつか行った廃村八丁から日本海の小浜に 抜けるパーワンと混同していないだろうか。あの 時は終点の広河原で京都バスを降り、廃村八丁に 入って一泊した翌日、私達は北山杉に囲まれて日 本海へ向かって真直ぐ延びる道をぞろぞろと行進しながら、昨日廃村八丁で釣って食ったアマゴの塩焼きの味を思い出していた。大分歩いた頃、後ろから一台の軽トラックが来た。私達は厚かまだしくこれに便乗し、一気に小浜の海の花が咲いていた。砂浜には転々と浜木綿の花が咲いていた。他の諸君には申し訳ないが、この時のメンバーは鈴木、四方、津熊君の4人であったが、鮮明な記憶にあるのは四方君の顔のみである。あの時の北山杉に囲まれた道と周山への道が私の中で混在し、実際には訪れることのなかった役場への単独行を、現実にあったかのように長い間思い込んできたのではなかろうか。そんな思いに本気で悩み始めた2月の初旬、私は次の決定的とも言える確証めいたものを掴むことができた。

大学を出て就職し、39年間勤めて退職し、神奈 川県の二宮に終の住まいを構えるまでに七度の転 居を繰り返したが、その間終始私とともに各地を 転々とし、つねに居宅の押入れの奥深くに仕舞い 込まれてきた段ボール箱が一個ある。この中に小 学生から大学生までの折々の節目の記念の品々が 納めてあるが、これらの中にワンゲル関連の書類 やら5万分の一の地図やらがぎっしり詰まってい ることは昔から判っていた。ふと思いついて、数 年ぶりに引っ張り出し、ついでにこの際思い切っ て別れの処分ですっきりするかと考えた。大判の 封筒の中には幾冊かのガリ版刷りの山行計画書や 他大学の山行レポート等、これまで気付かなかっ たものも出てきたが、その中の山行計画書の中に 「新人合宿(1962.5/3~5)花背スキー場」とガリ 版印刷されたボロボロの書類が出てきた。中を見 ると1班から9班までの編成メンバーとPLの名 前が明記されている。この中の1班のPLが当初 鈴木正博君で、これが修正されて柴弘一君にな り、さらにもう一度鈴木正博君に修正されてい る。そして隣の班、2班のPLは当初の奥村尚久 が修正されて柴弘一君となっている。これは推測 すると合宿計画当初は1班PL鈴木正博君、2班 PL奥村尚久であったものが、その後あい前後し て都合でPLを降りたため柴弘一君がその任に就

## 廃村八丁の旅

私の一年先輩が、前年に廃村八丁へ行ったとき、 佐々里峠で熊の子供と正面衝突して、双方が来た道 を逃げたという話を聞かされていて、身の丈以上の熊 笹の薮こぎをしているときは、後ろの人間が大声を出 し、熊に対して人間が近づいているので先方に避け てもらうように、金、太鼓ではやし立てた。ところがこの 行程のテント泊の時、鉛筆ほどの大きさのだいだい色 のへビが侵入してきて驚いたが、高校で生物部に所 属していた四方君は、平気な顔をして手でへビを掴 み上げた。そして茶筒の中に入れて彼女への土産物 にすると言った。あろうことかその彼女は近眼だから 茶筒を開けて、目を近づけて始めてビックリするだろ うと彼は言う。しかし、私達は1、2泊テントの中で一緒 に寝ることになって、こわごわ寝入ったことを憶えてい る。しかし魚釣りはしたことがないと思うのだが、これ は定かでない。その他、北の方角に薮こぎをして坂を 下っていったとき、踏み跡を見失い、やむなく私が木 に登って、下の方の道らしいルートを捜したことがあ る。さらに覚えていることと言えば、京都府と福井県の 境は山の中だのに、京都のほうは地道、しかし、福井 県側では山奥の細い道まで舗装工事がなされてい た。地方自治体の首長による政策、予算の重点配備 の違いがあったものと思った。

......

いたが、最終的にこの日の鈴木正博君の物部氏訪問が流れてPLに復帰し、その日は結局小生が単独周山の役場訪問の任に就いたと思われる。ここらあたり、今となっては鈴木正博君の記憶に頼る以外ない。私のこの断片的な記憶の中に花背スキー場の小屋を抜け出したことを考えると、私の周山への単独行は紛れもない事実であり、そして役場に届けた書類は適切に発効し、山小屋は無事建設に至ったものと考える。

さて、このたびの寄稿については鈴木正博君よ り「老骨に鞭打って~山小屋建設の苦労話」と言 うことであったが、当時の私は肩に食い込むザッ クの中身の砂利やブロックに悪態をついたことは 度々あったが、ただの一度も苦労と思ったことな どなかったように思う。ワンゲル生活の2回生以 降の後半は、ほとんど山小屋建設に明け暮れた が、これも不満に思った記憶はない。今となって はすべて楽しい懐かしい思い出ばかりである。と 同時に折々の細かな記憶は遥か忘却の彼方に消え 去ったものも多く、もはや雲と霞の間にぽつんぽ つんと頭を覗かせる幾つもの山の頂きのようなも のであることを痛感した。そこでこの度の寄稿 は、数々の記憶の断片で常に最初に顔を出す、皆 さんには多分まったくご記憶がないであろう私の 合宿中の周山へのささやかな、しかし忘れること

のできない単独行を披瀝することにした。

最後に、先の大型封筒の中から出てきた関係書類をご参考に、以下に記しておきます。なお、他大学ワンゲル部の文献は、私が山田正氏の後を受け、全日本WV連盟の委員の任にあったため手元に集まったものと思われます。

#### 「RUW V資料]

漂雲 2、3、4号、「1960年夏合宿7/14~25 雲ノ平」「1962年新人合宿5/3~5 花背スキー場」「夏合宿要領1962年7/19~27 飯豊朝日連峰」「昭和37年スキー合宿2/15~21 南小谷」「1963年新人合宿京都北山」「1963年スキー合宿要領2/18~24 白馬山麓蕨平スキー場」「1963年夏合宿7/13~18 妙高笹ヶ峰」「第4回PRスキー昭和38年2/15~19南小谷 立屋」「第3回PRワンデリング?/11~15 妙高笹ヶ峰」

#### [連盟関連資料]

全日本ワンダーフォーゲル連盟規約;大阪府立大「たおり」;光華女子短大1963年夏季合宿(妙高);東京農大「知床半島動物調査計画書」;京大学1962年夏季合宿計画「日本縦断」;京大会報「水行末雲行末風来末」;東京農大昭和37年夏季合宿計画「北ア全山縦走」;兵庫農大昭和38年春合宿「四国」;神戸商大全日本WV連盟関西支部昭和37年度合同W要領;同志社大1962年訪華ワンでリング計画書;大阪樟蔭女子大昭和38年春合宿



## 食当で思い出すこと

昭和40年代になってはじめて、カップ麺やレトルト食品が出てきたが、当時はニンジンやジャガイモが煮えなくて苦労もしたが、自然と山仲間に囲まれて、腹さえ膨れれば感謝されたものです。

#### 伝説の食事担当

薩摩 節雄 昭和38年卒

山小屋建設が本格的にスタートした昭和37年は 4回生となり、10月以降平日はバイト、土日は北 山へ入ることが多く、学生時代最後の楽しい半年 間でした。

砂利、ブロックなどのボッカがピークを迎え、 後輩達は積極的に参加し活気ある活動を展開していました。いつから恒例となったのか、朝食前に 1回ボッカするのですが、この時だけは重いザックを背負い戻ってくるまでに朝食を準備しておく 担当をしていました。米をとぐ水は冷たいのですが、二の谷のせせらぎや薪のはぜる音を聞きながら一人での作業でした。腹ペこでのボッカはさぞ厳しかったことでしょう。バテバテの状態で戻ってくる新人たちを見て、自主性を重んじ、強制は



飯場、テント場での食事風景

されないRUWVでしたが、この時ばかりは高校 時代に教わった新人哀歌を思い出すのでした。

> 家に帰ればお坊ちゃま 山に入れば新部員 何の因果かこの俺が 入ったところがワンゲル会

1番鳥ではあるまいに 朝も早よから起こされて ボッカ稼業のそのつらさ 景色なんぞは夢のうち

食後のボッカは参加しましたが、芹生で私の ザックに砂を入れる後輩達は気を使い、スコップ 1杯分ぐらい手加減してくれました。

私は食事の担当を長くやっていました。インス タントは粉末ジュースぐらいでしたが、昭和40年 代にカップ麺やレトルト食品が販売されはじめ、 「あの時代に、そんなのがあったらな~」と思っ たものです。そして、もっと楽しい食事ができた ことでしょう。湯さえ沸かせば3~5分で食べられ る「何々の具」や、うまい飯が食える「何々の 素」など多種多様なものが販売されており驚きで す。



山では 調理する 時間をい かに短縮 するかが ポイント ですが、 当時はせ いぜいと スろ汁ぐ

作れませ

斜面の削り始め。真ん中、スコップに寄 らいしか りかかっているのが、筆者

んでした。重い野菜を担ぎ、ニンジンやジャガイ モが煮えなくて苦労することも度々ありました が、自然や山仲間に囲まれて、その上に腹ぺこも 加わり、腹さえ膨れれば満足していたものです。

土曜日は集まった後輩達と自然の中で酒を飲 み、翌日の好天を祈りながら誰かれとなく歌いだ

读仲 間と作った炭焼窯。 学生時代と変わらない の



## 命がけ!? のペンキ塗り

山小屋建設の思い出

総会は大荒れ、ボッカは辛い、勾配50度の屋根のペンキ塗 **―ワンゲル生活のなかの強烈な思い出だ。現在はリタイ** アして、里山保全のボランティアをしている。緑の自然との 付き合いは、やはり絶えることがない。この4月には炭焼の体 験もした。充実した生活だ。

> 福井 邦彦 昭和40年卒

「山小屋建設」と言えば、三つの場面が思い浮かびま す。

まず、一つ目は「山小屋を造ろう」と総会で提案され た時の喧々諤々、丁々発止の意見の応酬場面、二つ 目は、山へ行くといえば「京都北山二の谷」で、朝から 晩まで資材運びをしたこと、そして三つ目は山小屋が 完成して1年ほど過ぎてから屋根に上ってペンキ塗り などを手伝った時のことなどです。

一つ目の話ですが、会合の場所は衣笠の理工学部 の木造校舎の教室だったと覚えております。「山小屋 建設推進」の意見と、「同好会として会員が自発的に 建設に参加しているようでは、絶対に無理だ」と言う意 見とが、ぶつかり合って午後1時頃から夕方近くまで 延々と会議が続いていたように記憶しております。当 時1回生で入会してすぐのことで、状況がよく分からな かった私は、ただ理解しようと懸命に聞いていたように 思います。

二つ目の思い出は、建設することが決まり「新潟県 妙高々原・笹ケ峰牧場」でのPR夏合宿、そして、「長 野県北安曇郡・南小谷スキー場」でのPRスキー合宿 を経て資金が集まり、本格的に建設に取り掛かった時 の思い出です。毎年、春休みの3月下旬頃には「旧人 合宿」が行われるのですが、この年(昭和37年)の春 はその代わりとして「山小屋建設」のための合宿となり ました。現在山小屋がある二の谷の入口から5分ほど 登ったところに「飯場」と称してテントを3つ4つ張りまし た。資材の運搬具がありませんので、シュラフや飯ごう などの個人の荷物を全部テントの中に放り出し、空に す雰囲気は最高でした。山と歌、そこには共通する人間的な感情がありました。ヤンレー節に始まり、秦、奥村君のコーラスでダニーボーイやタンクローの倉橋君が歌うヨーデルは今でも印象に残っています。

山で飲む酒、これがまた旨い。ある時、二の谷 出合い近くの炭焼小屋に数人で泊った時のことで す。酒を飲み賑やかに話が盛り上がっていまし た。しかし、夜7時頃に酒が無くなりました。

「芹生で買ってきます」と瀬端君。夜道は危ないので、制止しましたが、聞き入れず、エレキ片手に出かけていきました。酒屋をたたき起こし、日本酒を担いで無事帰ってきた時は、それは嬉しくて皆で夜遅くまで飲み直し、楽しい夜を過ごしました。 (注=末尾参照)

雨が降り、ボッカして帰ってくるまでに飯が炊けず迷惑をかけた記憶はないのですが、季節は前後しますがある夏のことでした。出町柳の最終電車に乗り、貴船口より夜中歩いて二の谷に入る時でした。芹生峠付近から雨が降り出し、集落を過ぎる頃には、さらに激しくなり夜も明けてきまし

なったキスリングを持って渓流沿いの木馬道を芹生の村まで駆け下ります。道端に砂利、砂、セメント、コンクリートブロック、鉄骨などの建設資材がトラックで運ばれてきて降ろされています。そして、鬼より怖い先輩が待ち構えていまして、キスリングの口を開けると、砂や砂



勾配50度の屋根のペンキ塗り。梯子と命綱だけが頼り

利などを大きなスコップですくって、どんどんと入れてくれます。今でも覚えているのは、1年上のM先輩は、にやりと笑って「福井には、スペシャルサービスをしてやる」と言いながら、いつも多めに砂利や砂を入れられました。重さは腰にこたえますし、それを担いだとき、しばらくすると腕の血流が止まって痺れ、手の指がむくんでいました。また、砂はキスリングのミシン目に入り込むので、黒くしみが残り、家で洗ってもとれませんでした。でも汚いままに4年間使い続けました。また、コンクリートブロックを担ぐと角が当たります。背中の皮膚がむけそうになって痛いので背負子が欲しいのですが、少ししかないので、やむなくキスリングに入れました。普通は

た。山道に入る手前まで来ると、広場でキャンプをしていた中学生らしい男の子数人が、通り過ぎる私達を見て、驚いた顔をして立っていました。 声をかけ、事情を聞くと雨で飯が焚けず困っているとのことでした。

早朝に二の谷のテントサイトに着く予定でしたが、通り過ぎる訳にもいかず二人で火を熾(おこ)すのですが、なかなか燃えてくれず大変苦労した記憶があります。私と大原君だったか、野田君だったかはっきり思い出せません。子供達にご飯を食べさせ、テントサイトに着いた時は予定の時間をかなり過ぎていました。

私は山靴を履いて歩くのが好きです。豊かな自然が満喫できる山道を求め、これからも歩き続けたいと思っています。

最後になりましたが、RUWVの今後のご活躍 を祈ります。

(編集部注) = 当時の芹生は7、8軒の家しかなく、したがって、酒屋はなかった。トラックを出して京都の町へ買出しに行き、日用品などを共同購入して倉庫に入れていた。したがって、それを分けてもらわないと入手できなかった。

2個、頑張っても3個しか運べませんが、同期の河原君は細い体でしたが、背負子で4個運んでいました。建設現場までの木馬道でその重みで横木が折れ、立ち姿のまま「股裂き」に遭った事もありました。さぞ痛かったであろうと思います。

三つ目は屋根のペンキ塗りです。傾斜が50度位ありますので、表側の屋根を塗る時には、ロープを腰に結んで裏側から引っぱってもらわないと立つことができず、ずり落ちてしまいます。裏側を塗るときも同様です。もう一人に屋根のてっぺんでペンキの入ったバケツを持ってもらい、ズボンを赤い色で汚しながら塗りました。足の裏も真っ赤に染まり、洗ってもなかなか取れませんでした。今となっては良い思い出です。山小屋に行って屋根やブロックの壁を見ると40年以上前の光景が、昨日のように浮かんできます。

今は、定年で職を離れましたので、地元の大阪府島本町で「森林ボランティア」に入って「里山保全」を手伝っております。もう丸4年になります。最初は「せっかく植えた木を何で間伐するのか」分かりませんでしたが、杉や桧の人工林を元気にしてやる為の作業だという事が分かりました。人間が植えた木は「間伐、枝打ち、下草刈りなど」人間が手入れをしないとうまく育たないのです。戦後の昭和20年代に植えられた木は、今は立派に育っていますが安価な外材が輸入されるために、日本には豊富な森林があるのにあまり利用されていません。山の持ち主も高齢化のため手入れが出来ない山がたくさんあります。

ボランティアで出来る事は微々たるものですが、これからも里山保全を手伝ってゆこうと思います。ちょっと大げさですが「森林を保全する事により、地球の温

ないと福井さん(左)。右は山内さん 梯子を這わせて、屋根のペンキを塗った思い出は忘れられ

暖化を防ぎ、水、空気の汚れが少しでもなくなるよう頑張りたい」と思います。

また、昨年の秋からボランティアの仲間と一緒に「炭焼窯つくり」に取り掛かっていましたが、3月に完成いたしました。山小屋建設のような運搬作業はしませんでしたが、建設に使う資材は同じような物です。煉瓦を何段も積上げて並べておいて、粘土を隙間なく詰め込んで、空気が漏れないように壁を固めねばなりません。天井は丸く、そして落ちないように鉄骨で骨組みを作っておいてから、粘土で覆っていきます。それに、炭材を500キロも山から切り出してきて窯に詰める作業は大変でした。4月の第1週目には、炭が取り出せる予定です。

山小屋が完成した時も感激しましたが、炭焼窯から 炭を取り出す時も感激すると思います。ボランティアで も炭窯ができるかどうか心配される方もおられました が、私は山小屋建設の経験で分かっていましたので、 全く心配していませんでした。

学生時代の良い経験が60歳を過ぎた今、大いに役立っています。山小屋は、私達の心の故郷です。時間をつくって何度でも行きたいと思います。有難うござい



ました。

手作りハウス・自分の城の中の筆



## ブロック全荷重が腰に!!

何十年ぶりかで見る写真。昔のわが雄姿を見て感動した。自分の青春を雄弁に語る1枚の写真。50キロの身体に60キロを軽々と担いでいる。山登りもボッカも辛い。だが、そこに人生の縮図がある。じっと見ていると、ただ1枚の写真が、哲学的でさえある。

川原 祥晁 昭和40年卒

ボッカ (歩荷) とは、機械的に運べない場所 で、人が荷を運搬する手段である。花春の奥山に 山小屋を建てると聞き、建設資材の搬送が最重要 課題であることは間違いない。

建設の初め頃は、興味もあり多数の人が入り、 順調に進行したが日数が経過していくに従って ボッカ隊員がいなくなり、工事に遅れが出だし た。

ある時期では、ボッカを強制する議論もあった が、本同好会の特色でもある自主性を尊重してい たため、強制はしなかった。

京大が比良山に山小屋を建設した時も同様の課題があったが、ボッカの強制をし、山小屋を完成させたと聞いた。そのことからもわが山小屋の価値は違っていて、それは燦然と輝いている。

当時2回生、この頃から山小屋建設が始まった。芹生の寺子屋横の広い空き地があり、そこが建設資材置き場となっていた。建設初期の頃の資材は、セメント、砂、バラスがほとんどだった。その後ブロックになり、木材などとなった。

教科の履修時間が許せば山小屋に入り、一日はボッカで始まりボッカで終わった。多いときには1日5、6回往復していたものだ。当年満65歳、なんと時間が経過したことか。

当時を思い起こすには、頭の中の奥の方にある 古いハンガーを探し、引っ張り出さねばならない 思いである。

先般、2005年9月4日、何十年振りかに山小屋に 行った時に、先輩の鈴木さんから当時の小屋建設 の冊子を見せて頂き、昔のわが姿を思い出し感動 した。

その中のコピー写真1枚に、ブロック4枚、60 キログラムを背負子で担いでいる自分の写真が目 に飛び込んできた。



ず、ただ、ひたすら歩を進めるのみとしびれがきて、感覚が麻痺してくる。何も考肩と胸が2本の紐で締め付けられる。しばらくす

当時の体重50キログラム程で、60キログラムを 担いでいた。皆からは、そんなに無理しないでい いのにと心配していただいたが、その日は体調も よかったのか60キログラムを背負って2往復した ことを覚えている。

確かに全荷重が腰にずっしりとのし掛かり、肩 と胸が2本の紐で締め付けられた。はじめのうち は、両腕の血管が圧迫されて止血された状態でし びれ、感覚が麻痺してきた。しばらくすると慣れ てくるようになった。

ボッカの道中では何を考え歩いていたのだろう

か、重ければ重い程、鎌首が真下に向き、転倒しないようにひたすら足下を見ているため、石ころだけが目に入ってくる。

首を上げて周囲の景色を楽しむ余裕もゆとりもなかった。ただ二の谷へたどり着くことだ。

途中一度、石につまずいて転んだことがあった、単独で起き上がろうとしたが、ブロックがずれて無理だった。山小屋でブロックを下ろすと一服し、また芹生に向かう。この時は空荷のため腰が宙に浮いたごとく往路の半分位の時間で行くことができた。

山登りもボッカも、どちらも辛い、これは人生の縮図でもある。重荷を背負い山道をゆっくり、一歩一歩と歩くさまは正に人生そのものだと思う。重荷を担いでいる時は辛いが、その後に必ず喜びや楽しみがある。ましてや重いのを担げば担ぐほど、自分との戦いであり、その苦しみの克服や達成で満足感と同時に自信がついてくる。

私自身にとって山小屋建設は、今考えると、青春時代を謳歌し一番輝いていた時期ではなかったか? そして貴重な思い出と自信を与えてくれた時期であった。そのころに感謝したい。その後も勤務を続けながら、52歳から約9年間一人で自宅の空地に2.5階建て(3×5メートル)、軽量鉄骨の別小屋を建てた。まさに山小屋建設の経験・自信の成果だと思っている。



河原さんの手作りハウス





河原さんが平成4年4月から同13年11月までの9年半に造り上げた手作りハウス。独力で、しかも土日だけの労力で造り上げた。「一度造ってみようと思っていた」と、河原さん。山小屋へ傾けたあの情熱がここでも生きている。ちなみにパソコンも自作。なんでも造っちゃおうの精神が、65歳の今もあふれ出ている。(編集部)



座談会出席者。写真は左から松久、柴、吉原、小野、鈴木、湯浅、瀬端の各氏

### RUWV

## 山小屋完成までの軌跡

山小屋が完成して、45年になる。ここに参集したのは実質建設に携わったメンバーたちである。そこで、45周年を期に建設に至る経緯、その過程、かくれた苦労話など存分に語ってもらった。約半世紀前のエネルギーに満ち溢れた青年たちの息吹きが感じられれば成功である。世相はこのころから、右肩上がりの成長を続けそれを支えたのが、この年代でもある。山小屋が誕生した「時代のバイタリティ」を感じていただきたいと思う。 (編集)

#### 座談会出席者

昭和38年本 吉原 芳文

昭和39年本 湯浅修太郎

柴 弘一

鈴木 正博

昭和40年率 瀬端 武男

昭和41年卒 小野 拓男

松久 昌司 (司会)

司会 本日はお忙しいところ、ご参集いただきありがとうございます。山小屋が完成してすでに45年がたちます。それを一つの区切りとして、45周年の「漂雲」特別号を電子出版で出そうという話が進んでいます。そこで、本日お集まりいただき、山小屋建設の端緒となったこと、さらには苦労話など、心おきなくお話ししていただきたいと思います。それではまず、山小屋を作ろうという話はどこから出てきたのでしょうか。

鈴木 僕らが一回生の時の旧人合宿が大峰縦走でした。その最後の深仙小屋で、一回生10人ほどが一泊余分に沈殿して、残った食料を全部もらって、「食っちゃ寝、食っちゃ寝」していたんです。その時に、こんな山小屋があったらいいな、

という話が出た。

柴 先輩に気を遣うことなく、気の合ったものが 自由に使えて、駄弁れるような、何をしようと勝 手というような小屋があったらいいなあ、と僕が言いま

した。そして、皆がそんな感じをもって話をしたと思う。

**鈴木** 様にの基でがそ食た二人分 型二て小泊3合たき余びがり泊 に上屋を日宿。もっ、10余し



人ばかり余 自由な空間が欲しかったと語る柴さん

てダベリングを楽しんだ。やはり、こんな山小屋 があったらなあ、という話になった。

司会 その後、京大ワンゲルの山小屋が比良にできたんですね。

鈴木 比良のへク谷にブロック建ての小屋を作ったというような話が、理工の方から入ってきて、ピンボケの写真を一枚見せられた。こうして、クラブの中からも小屋待望論が出てきた。折も折、理工の木村君のお姉さんが大阪市大の建築科の学生で、設計図を書いてくれた。

柴 場所が決まってから書いてもらったのかな?湯浅 後で場所探しにあちこち行ったこともあるが、この時点では、土地の選定はまだなかった。

鈴木 話としては、京大WVの山小屋ができたと言う話しか知らなくて、湯浅君の話のように、京大の小屋を実地に見に行ったりもした。その中に木村君が入っていた。そして、木村君が姉さんに頼んで、設計図が先にできてしまった。

司会 その設計図はどんなものだったんでしょう。

鈴木 鉄筋ブロック建てで板の間と土間だけの簡単なものだ。そのとき、資材費の総額を見積もってもらったところ、14万円でできると言う。ある時の総会で、この金額なら僕らの手の届く数字ではないかと言うことになり、ポンと背中を押されたようなかっこうになった。

司会 すると、ここからいよいよ場所探しという ことになるんですね。

鈴木 順序が逆なのだが、大野さんを委員長とする第1次山小屋建設委員会が出来て、主として山小屋の適地を探し始めた。当初、スキーが出来ることを前提としていたため、スキー合宿をしていた南小谷、夏山登山のできるアルプスというのも

候補だったが、手軽に行けるということが必要な 条件となった。

柴 あのころは、アルプス派と手軽に行ける北山 周辺派と二派があった。しかし、アルプスとなる と再々行けるわけではなく、半年は空き家にな る。すると、やっぱり近い方がいいということに なった。

小野 山小屋などまったくいらないという主張は なかったのですか?

湯浅 それは、あったな。そのときのクラブの現状をみると、装備が十分でない。会費なども知れたもので、山小屋よりも、もっと充実した装備がほしいというのである。ワンダーフォーゲルというのは、漂泊するのが本意なのに、一か所に定着するのはおかしいというのである。

柴 それは主に先輩連中だった(笑)。ワンダーフォーゲルというのは、あてどもなく漂泊するのが本当の目指すところであって、一地点にとどまるのはおかしいのではないか、と言うのである。

司会 しかし、山小屋を造りたいという意思は、 先輩から流れてきていたものではないのですか? 鈴木 それは少し僭越かもしれないが、僕らの回 生が中心になって進めてきたように思う。これに 大野さんはじめ一部の先輩が乗っかってきてくれ た。

柴 そしたら、次に資金はどうするのだ、ということになった。当時は本校と理工に分かれていたから、設計や建設などハードの面については理工がやってほしい、その代り資金繰り、金儲けは本校がやる(笑)、ということになった。その結

### まず設計図ができた

果、PRスキーなどを本校の者が推進することになった。

鈴木 当時の山小屋会計を見ると、理工山小屋代17700円、本校山小屋代57500円となっている。その時の会員数は175人くらいだったから、部員からは一人500円だけもらう。外部からの協賛金などは受け取らない。その代わり自分たちで稼ぐ。昭和37年2月14日から18日にかけて第3回PRスキーを行っている。一般学生を160人連れて行って、そのときの上りが一回約10万円である。

柴 僕も山日記に書いている。一人当たり2600円 集めている。そして、スキー場の宿泊代は、一泊 420円。

鈴木 当時の白馬山麓のスキー民宿の相場が3食付きで400円だったのを350円に値引きしてもらって収益を膨らませた。

柴 おれが値切ったんや。 (笑)

鈴木 2600円のうちの600円は、デザート代、それから怪我をしたときの医者代や薬代など、面倒は全部見ることにした。その600円というのが原資の柱になった。池の田にしろ蕨にしろ民宿からゲレンデまで行くのに、20分ばかり歩いて登らな

ければならない。その結果、体が温まり、足腰の 運動ができて怪我をしない。デザート代、怪我、 薬代などが、大きく浮くことになった。

柴 そのうえ、コーチ代500円も取ってる。

**鈴木** ーシーズン大体10万円ぐらいの収入があった。14万円あった年もある。そんなわけで、山小屋の資材費として14万円ぐらいなら、自分達でできるじゃないかという考えが底辺にあった。

吉原 そのころの社会情勢を見ても、旅行業者も 少ない、団体ツアーもない。一方、我々は十分ス キーをして、民宿とも懇意だった。だから、宿泊 費も低く抑えられた。それから、当時は学割が あった。

**湯浅** それも裏話があって、参加者から学割を集めて、みな破棄した。時効だから話すけれど (笑)、そして学生のみの団体割引が適用になって、さらに格安になった。

吉原 すごい手、使ったんやな。

湯浅 それに元国鉄の副総裁を使った?

鈴木 天坊という全国区の参議院議員が茨木にいて、そこへ行って「私ら、200人分の票がありま

す」と言っ て(笑)、 大阪駅の駅 長に口を利 いてもらい 車両を貸切 にしてくだ さい、と交 渉した。そ うしたら、 新潟行の鈍 行は、一両 だけは貸切 にできると いう。あと の一両は、 「お前ら、



先に乗って **すごい手使ったんやなと吉原さん** 占領して座

席を確保すれば、いいではないか」ということ で、二両を貸しきり状態にするという要望が実現 できた。

湯浅 誰だったかな、天坊参議院議員の親戚だと 言っていたな。

**鈴木** 岩本 (旧姓=内藤) だったかな? これは オフレコかもしれないな。

柴 40年もたてば時効だよ(笑)。

吉原 当時僕らが立命に通うために国鉄の大阪一京都間の運賃が100円だった。学割の定期が540円ほどだったかな。3、4日使えば元が取れた。それから市電、学校までの往復運賃が25円だった。だから、その時の10万円というのは非常に大きい。 鈴木 河原町のルーチェというクラッシックの音楽を流している純喫茶のコーヒーがあのころ少し 高くて60円だった。それから寺町通りのすし屋の すしが一皿20円。学校を卒業して、初任給が1万 何千円かだった。

湯浅 学食の一番安いのが40円だったかな。

吉原 先程、PRスキーでの10万円という話が あったが、それは大きな数字だったんだね。

司会 当時の立命は、本校(広小路)と理工(衣 笠)に分かれていた。月一回の総会だけではなか

### PRスキーで10万円

なか山小屋建設への意思統一が取れないのでは? 湯浅 理工と本校、距離がある。あのころは、60 年安保改定の時代で、丸山公園へ行った帰りに本 校へ寄ったりした。そんなことが、図らずも意思 の疎通を促進した。理工は、森村さん、打越さん あたりが、山小屋の話にものすごく乗ってきてく れた。そんな時、京都の「趣味登」に山小屋の適 地はないかといって、よく訪ねたものだ。木村君 も夜遅く会長のところへ行こうと言うので一緒し たことがあります。その時に二の谷とか三の谷と かの候補地はどうかと挙げてもらった。京大のW V小屋へは河合さんなんかと行きました。なんか 一見した感じでは、「チャチやなあ(笑)」と 思った。ずいぶん小さいという印象を持ちまし た。私としては比良の望武小屋をイメージしてい たので、小さく感じ、もっと大きい方がいいなと 思ったものです。

鈴木 先に設計図ができて、場所の選定のために 「趣味登」に聞きに行ったりして、候補地が北山 で六か所出てきた。裏銀座の話とか、二の谷、三 の谷とかが出てきた。二の谷になったのは、どう も、花背でスキーができることが大きかったよう です。それと、木村君なんかの考え方は、「所要 時間が1、2時間で、交通費も200円くらいまでで 行ける所」であった。手軽に行けるということが 北山に固まった最大のポイントだと思う。そし て、実際に建設へ動き出した時、CL、リーダー 会が交代した。つまり、吉原さんから、湯浅君へ とバトンが渡された。吉原さんがなぜ姿を消して いたか? それは、スキーで足を折って(笑)、 加われなかった。僕が1回生、2回生のころは、も のすごいバイタリティの持ち主で、密かに「熊」 と命名していた。

吉原 スキー合宿がすんで、居残っていて足を骨折した。その前の年に、今の山小屋建設の話が出てきた。先輩方はみんな反対だった。だけど、先輩の人数が少なくて、下の回生の数がだんだん増えてきて、ワンゲルの最盛期を迎えていた。だから、小屋について調べたり、それからPRスキーとかの実施など、人数に頼っても推進できた。

瀬端 本当にうまいタイミングだった。

**湯浅** それに適材適所というか、それぞれが能力 の発揮する場所があった。

司会 設計図を描いてもらったときに、資材費と

して約14万円という数字が出ましたね。そして、その14万円というのは、PRスキーをしていた経験から、「これなら手が届きそうだ」という実感があって、山小屋という夢が膨らんでいった。そして、プロジェクトが具体的に動き出した。

鈴木 昭和37年3月13日のリーダー会で、場所が 決定した。私はこのときリーダー会からの要請 で、山小屋の賃貸借契約締結に参加することと なった。ところが、山小屋の候補地、現在の場所 だが、森林法の中の保安林の水源涵養林の指定が

あることが 判った。そ んな経緯で 僕は物部さ んとの賃貸 借契約に参 加すること になった が、それは 手続き上大 変だという ことだった からだ。さ らには、第 三次山小屋 建設委員長 にされてし まった。早 速翌日の3 月14日に湯 浅、木 村、



許可より作業が先行した? と小野さん

秦、奥村、高木、私の六人で物部宅訪問と予定地 を見に行った。

司会 その時はすでに契約はできていたんですか?

鈴木 まだ、口頭での了承だった。文書にしたく ないという意識が地主側にあった。しかし、僕等 は学校に契約書を提出しなければならないといっ て、何とか書類の上での締結をお願いした。する と先方は、すでに植林期に入っていて忙しいの で、後日書類を交わそうということになり、二の 谷ならばどこでもかまわないと言う了承を得てい た。そこで僕達六人はその足で現地に行った。と ころがその場所はまだ積雪10センチばかりが残っ ていた。斜面は北西方向に上り坂になっていて、 私が木に登り、四人に平面図に従って四隅に立っ てもらい、完成をイメージした。その頃は斜面の 下に岩盤があることなど想像すらしなかった。そ の時は二の谷の上からおりてくる通路には木馬道 があったくらいだ。実際の工事でも削り取った土 を小屋建設地の前に出し、その結果ベランダ部分 が広く取れた。建築強度の関係では、盛り土手前 の削ったところをさらに掘って基礎コンを立ち上 げたので、強度確保は万全だった。盛り土部分は 全てベランダに利用した。ところが、スロープの

かかりに20年生くらいの雑木が2、3本あった。これは切り倒さんといかんなという話になったが、工事が始まると「かわいそう」という気分になって、盛り土したベランダの最先端部に移植しようということになった。現在最後の登り口にある曲がった雑木などはそんなわけで移植したものだ。柴削り取った斜面の底辺からの高さはどのくらいだったんだろう。

鈴木 身の丈の2倍から3倍ぐらいあったと思う。 工事の最初はまず、熊笹を刈っていった。それから根っ子を掘り起こし、ツルハシとスコップで掘り進んだ。だから、道具はツルハシ、スコップ、鎌、それだけしかない。最初は、竹で編んだモッコで土を運んでいたが、面倒臭くなって、人数が居る時はバケツの手渡しで土を運んだ。そうして土をといた。だけど進めなければしようがない。ツルハシで、コンコン、コンコンと割り出して作業を進めた。だから、今の山小屋のドアのある法面から先は全部埋め立てたところだ。そうしてできた広場だが、あそこにスペースがあるとないでは大きな違いだ。

**小野** 岩盤に手をつけた時、地主は何も言わなかったのか。

鈴木 地主は、二の谷ならばどこでもいいという 考えだった。しかし水源涵養林ということで、大 規模な工事はできないわけですよ。土砂を崩すと 水質汚染や洪水の原因になる問題があって、雑木 ばかりだった。

湯浅 水源涵養林でヤバいと始めて判ったのは、 周山へ行って土地の所有者を調べた時、水源涵養 林と記載されていたのが始まりです。

小野 そうすると、保安林の許可は、というより も、作業が先行していたわけですね。

**柴** まあ、後追いやね。事後処理かな。

**鈴木** 総会ではね、そんなの後からせい、事後報告でいいから、ということになって、すべてお前に任す、一任! ということになった。それではということで、まず、京都府庁の林務課へ行った

### 巨大な岩盤が出現

が、この許認可権限は京北町の地方事務所長にあるということを聞いた。それで4月の29日、天皇誕生日(当時)か何かに奥村と一緒に出かけた。そして、5月1日メーデーの日に国鉄バスに乗って昼前に京都市内に戻って来た。そして午後からの総会で、その結果報告をした。後日談だが、僕がミスして、許可が下りる時期が少し遅れた。既許可の標題を丸写ししてきたため、自分達の山小屋建設工事申請のタイトルが、放牧場の申請になって過程ではんでおられる物部新三郎さんから「土地使用承諾書」を新たに書いてもらい、新人合宿中の奥村さんに単独で、8時35分のバスに乗って周山

の地方事務所へ届け出てもらった。そして5月の末に許可が下りたというわけだが、それは山の斜面を削ったり平らにする、その上の鉄筋ブロック建ての山小屋を建設する、ということの許可であって、建物の登記などはしていない。また一般の建物のように登記はできないかもしれない。

**司会** あそこも含めて、全部物部さんのものなんですか。

**鈴木** 二の谷はすべて物部さん所有だった。だから、二の谷のどこにでも小屋を造って良いという話だった。それに、物部さんの奥さんが、小屋から少し下の方に山椒の木があって、シーズンにはそれを取りに来ていたことがある。また、家の前

### キャンプの初日は雪

にはチマキ用の笹を干していることもあった。二 の谷は、そんな風な使われ方だったね。

吉原 だけど、われわれの小屋以外に、あんなに いい場所はないね。

**鈴木** そうです。谷がちょっとカーブしているから、深い谷のように見える。それと、ベランダをよく造ったな、と思うね。

吉原 そうだね、あのスペースはいいよね。

司会 そんなことで、スタートした山小屋建設だが、どんなふうに進めていったのですか?

鈴木 クラブでは例年 3 月末から4月はじめにかけて旧人合宿をやっていた。この年は3月25日から、ちょっと延長して4月14日までとし、5班に分けて山小屋に入った。先ほど話に出た炭焼小屋跡地にテントを張ってベースキャンプとし、初日は打越先輩言うところの「近代工事は道造りから」とばかりに、沢にかける橋を整備することになった。テントサイトの北側には一抱えもある杉丸太があって、それを持ってくるのにワイヤーを使って10人ほどで引っ張ったことがある。それが今でも残っている。

湯浅 残ってる、残ってる。

鈴木 大分削げてきたけれども節だけが角のように残っている。その初日テント泊の翌朝は雪が降った。その後斜面けずりと併行してボッカをやり始めたわけです。そしていよいよ新学期、1年生が入ってくる。新人合宿が5月のゴールデンウィークに行われた。花背スキー場にテント10張りぐらい張って集結した。その時に、私は誰かともめたことがある。「新人合宿全部を山小屋建設に投入するのはだめだ」という意見が出た。しかし、君たち1年生はそんなこととは知らずにボッカに駆り出された。

吉原 小野君、松久君らは肉体的にしんどいところから入ったんやな。整地がほぼ終わりかけて、 これから本格的にボッカという時に入ってきた (笑)。

小野 だから、われわれが最初に見た時は、岩盤が露出した斜面をL字型に整地し終わっていた。

平らになっていて、ここに立つんだぞという話から、われわれ一年生のWV人生が始まった(笑)。

吉原 手をつけたのが3月の末だろう。そして出来たのが、12月初旬だろう。約8か月かけて出来上がったのだが、実は私は神主が本職であって、今日も地鎮祭の話があった。「いつ完成ですか」と聞いたら、5月ですという。それを考えたら、山小屋の方がどれだけ、気合が入っているか。

**鈴木** それは僕らは学生だから、休みの時しか参加できないという問題があった。

湯浅 8か月でよくできたと思う。はじめ測量でも大野さんが、お前3メートル、お前4メートル、などと紐を持たせ、5メートルを割り出す。初めはみんな分からない。直角三角形やね。そして、敷地を決めていった。みんなああや、こうやと言っていたけれど、大野さんは土木だったから、みんなを引っ張った。

吉原 まあそうやな。みんな専門家の卵やから ね。土木もおれば、法学もいる、経済もいるとい うわけで、すごいよな。

柴 山小屋をブロック積みにしたのもよかった ね。普通山小屋というのは、ログハウスのように 丸太を組んだイメージがあるんだけれど、ブロッ クにしたために、堅牢で長持ちした、その結果、 今に残っている、それが大きな要因だと思う。

湯浅 しかも、防水ブロックだった。大変重た

い。一つ四 貫、4 つで 60キロあっ た。

**司建ものとあるかられた。** るでりゅ簡のんでかった?

湯も君んもう設くそれえ人るいし。



37年3月に場所が決定したと鈴木さん

骨は米田さんの工場へ行って調達した。自分達で 曲げたり、切断した。

鈴木 それから、あそこの基礎コンもすごい。捨てコンの上に逆T字型の基礎コンが立ち上がり60センチ、幅もブロックが余裕でおけ、しかも防水ブロックで広幅。ところが素人の悲しさ、立ち上がりの鉄筋が、順番においていくとブロックの穴と上手く設置できず、ぶつかる。最初から計算し

て設定してないからね。だから、ぶつかると、ブロックをこまめに割って、失敗作も大分作った。 吉原 だけど少なくとも、昨年、一昨年と問題になったイーホームズとか姉歯設計のように、手を抜いてるのではなく、十分すぎることをしている。

柴 原理原則で、 ようなものにさら している。だから ね。

湯浅 鉄骨を見 ですな、これは、 工事をした業者が 柴 それが故に、 やね。

吉原 ブロックだ ごい頑丈なブロッ ら、これは初めか のか。

**鈴木** 向こうも勉 たかも。

司焼鈴らのあたたいな行会を木 使谷っ時 降でてて 不屋的 れにこ難続酒松それのたに降でてて、こ小くを井こにで焼いもは屋と飲君のししいなう雨と何もが女

過剰設計に近い に強固なことを 頑丈すぎるんだ

て、教科書通り と臥梁、屋根の 感心していた。 今も保ってるん

けにしても、す クにしてあるか ら意図していた

していない。設 た。

今度の50周年記 も、例えなにが り、記念品でも 若い時はそんな くて、と言って

強のつもりだっ

ていたのは、炭 たね。

屋い一にしもう花のかと屋跡は一次りででするいまったりでではいますがあったこの質があったこのではいまからである。このではいないにに見いますがある。

い目で見られたような事を当時「漂雲」に書いていた。そのころは、大きな食器でガブガブ飲んでいた。だから、酒やビールの空き瓶がゴロゴロしていた。それを集めて、また酒を買った(笑)。山小屋建設以前は比良の望武小屋をよく使っていた。そこのルート上に缶詰の空き缶やいろんなゴミが落ちていた。そこで、清掃ワンデリングをよう、空き缶や空き瓶を拾い集めて、缶はプレスしてくず鉄屋に売ればいい。清掃と金儲けの一石二鳥になる、と言うことになり、江若鉄道へ申し入れて、リフトでプレスした缶を下ろす交渉をしたが、それは駄目で、当初の金儲けの案は実現できず、八雲ケ原に穴を掘って埋めただけだった。吉原 今の比良の清掃の話で、秦の名前が一度新聞に載らなかったか?

**柴** 事前に多くの新聞社に宣伝したが、毎日新聞 1社しか取り上げてくれなかった。

吉原 なんか読んだ記憶がある。

司会 ところで、山小屋の作業は夏休みも終わる と、いよいよ追い込みに入っていたのか。あるい は技術的には行き詰っていたのですか?

鈴木 土目しか人数を投入できないので、スケジュールが遅れてくる。その上ブロック積みでは、3段以上一目で積み上げると、過剰重量でモルタルが沈むと言われていて、9段積み上げるのに日数がかかった。特に8、9段目は足場が不安定で綱渡り的なことでやってきた。ここまでくると、次は、ブロックの上に鉄骨を組んで木枠を造り、コンクリートを流し込むのだが、高い位置で

り重の臥た込るロもはれはそ科にすれしに、量で梁いま方ッ、こな「のの連るた」板がおれて、はかりと問っれ、人て、「上立り、流がになれ分がらで。終学関っろと、上立りは破支量ばか7らで。終学関っろめの、「かするコらな20が夏のりのに意ろ殺ブワ

すると、いろいろ れた。「埋め殺 し」、上部のブ に板を立てて、ワ て、あるいは最近 を入れて、そのま 流し込んで埋めて 隅の臥梁の所は、 ないといけない。 結局「これは大工 うがない」という 橋君が島田工務店 を作ってもらい、 くことになってい 君が大工を知って きて、島田工務店 とストップだとい

だけど、あんまりい。多分見積もり不調だったんだと 度島田工務店に交 ボッカしたり、手

と、下ブタがない る。特に、四隅の ものがないのに、 ンクリートを流し ない。これを支え かった。だからブ 日にできたけれど 出来なかった。僕 合宿に行く気にな 時の正直な気持ち かな」と思った。 同級生で日大建築 来たので、山小屋 見を聞いてみた。 解決策を言ってく し」「はめ殺 ロックの両サイド イヤーで引っ張っ だったら、ボルト まコンクリートを しまう。また、四 支える土台を作ら それが分からず、 を入れるしかしよ ことになって、倉 に交渉して見積書 九分通りそれで行 た。そこへ、湯浅 るという話が出て との契約はちょっ うことになった。 具体案が出てこな とか、諸々の点で 思う。そこで、再 渉して、僕らが

伝ったりするとい

うことで、最終、10月30日に出てきた見積額は、一般会計を投入しても、私たちの手持ち資金では不足する。そこで、10万円は申し訳ないが3月末の支払いにしてほしいということにして、臥梁設営、屋根の工事を再開した。

湯浅 そして、基礎コンや臥梁のコンクリート打ちでは棒かなんかで上から突かんといかんのやね。一部、木枠を外すとコンクリート面が豆板みたいになってるでしょう。あれ、誰がやったんか、突くのが少なかったから、コンクリートが十分に充填されてないんです(笑)。また、後でコテで修復したところもある。

吉原 みんな大変な思いをしてやったんだな。だけど50周年の集いに200人以上来てくれて、果たしてどの程度のOBが関心を持ってくれたろうか。かつて先輩方が頑張って、造ってくれたんだ、という程度かも知れないね。

**鈴木** 永辻さんも来たけれども、一番よく来てくれたのは福村さんではないかと思います。

吉原 福村さんは、永辻さんやブーマンさんより も一つ上やろ。一番上で、しかも今でもよく顔を 見せてくれている。

湯浅 ボラ ンティア活 動している のかな。

鈴木 京都 の観光ガイ ドのボラン ティア活動 をしている そうだ。実 は本日永辻 先輩にも声 をかけてい たが、同じ ボランティ ア団体の打 ち上げが本 日午後京都 で開催さ れ、永辻さ んはその打 ち上げが前 から決まっ ているの

KYSONPILOS

座談会では、資料などは鈴木さんによってふんだんに用意された

で、残念だが今日は来られないということだった。福村さんも同じ仲間で、自分もそっちへ行 く、と言っておられた。

吉原 今まで話してきたことを少し膨らませて、 柴とか湯浅なんか、直接タッチしたものが原稿を 書いてやるといいな。我々の同期では、薩摩君が 書いてくれたらしいから。僕は書こうと思って も、スキーの怪我で、山小屋に関しては薄いから ね。

**鈴木** それから米田さん。彼はすごいんだ。オート三輪で資材のほとんどを運んでくれた。ある時、貴船から芹生峠の手前のところでがけが崩れていて、オート三輪はそれ以上先へは進めない。 仕方なく砂とバラスをそこへ置いて、オート三輪 は帰ってもらった。そしたら、そこの崖崩れの工 事現場で僕たちの資材の一部が使われてしまっ た。それで、後日掛け合いをして弁償してもらっ た。5000円受け取ったのかな。米田さんにはそれ 以外にも、ペンキ塗りとかしてもらったし。

**柴** 屋根のペンキもそうやろ。ベンガラというか、立命カラーやろ。

鈴木 塗るに当たっては、屋根の勾配が50度やろ、普通に立ってられない。だから命綱を体に縛って、30センチ下ろせとか、50センチ下ろせと反対側で支えている人に指示しながら塗っていった。軽業師みたいな恰好で塗ってたな。

小野 屋根は、何度も塗り替えてるんですか。 柴 10年ぐらい前に、屋根は葺き替えている。鉄 板葺きからカラー屋根に葺き替えている。

**司会** 小屋は合宿で何人ぐらいとまれたかな、50 人ぐらいかなあ。

> |鈴木 そ | う、50人ぐ | らいは泊ま | れる。

司ののこはめうなね。2 とるなじたじまのにないただいがある。

吉やと夕つラるイよのなきッいフ。レうなとってにからいったりのからいるにものいるのができます。

ら、帰ってき たら場所がな

い。あのころの山小屋はどこでも同じだった。今、この年になるともうあかんなあ。

鈴木 出来上がりをみると、2階の床がちょっとヤワイ感じがするね。そういう意味で、2階の床はやり直している。そして、11月の23日から25日は、準合宿ということで、最後の作業をやった。屋根のこと、はしごや床板を運んだりしている。このときは、花背から運んでいる。松久が、長い板を担いでいる写真があったやろ。

小野 今おっしゃったように、11月23日からですか、準合宿として材木を担ぎあげたんですね。

湯浅 足場の板とか、そういうものですね。吉原 そうすると、その年1年生として入って、新人合宿、準合宿から、すべて小屋に――。

小野 何かあれば担げ(笑)、ということで。 **柴** えらい時に入ってきたな(笑)。

小野 おかげで、2年、3年、4年と小屋を十分に 使うことができた。しかも、自分が建てたという 自負のもとに使うことができた。それは大きい な。

司会 結局、建設に従事した者と後から入ってき た者の間には、意識のギャップがあったやろね。 建てた者と、出来上がってから恩恵に浴している 者とのね。

小野 スキー場の近く、あるいはスキーができる こと、というコンセプトもあって、我々もよくス キーに行った。

司会 小屋の前の斜面で滑っている連中もいたな あ(笑)。それはそうと、話は完成寸前まで来た けれども、意見の対立とか、そういうものはな かったのですか?

鈴木 ゴールデンウイークまでは何とかなってい た山小屋建設も、いろいろと異論が出てきた。 「やっぱり、山小屋ばかりではない」という問題 があって、他所へ行くようになったりして、思う ように動員できないようになってきた。だから、 リーダー会なんかにも、もっと動員してくれよ、 とか、何人必要だから、などと言ったこともあ る。臥梁の問題でデッドロックに乗り上げた時、 まったくやる気が起こらなくなった。と言って、 役目上、放っておくこともできない。夏合宿もや めることにした。そのころちょうどブロックも9 段積めたけれどその先へ行くことができない。

### 臥梁の問題で暗礁

「もうこれは、やめるしかないな」という気持ち にもなっていた。

司会 そこまで深刻になっていたのか。

鈴木 そう、ほっておくと鉄骨も錆びてくる。作 業は進めないといけない、物も運ばないといけな い、でもみんなの熱意が冷めてきたのなら、「僕 も投げ出してしまおうかな」というような気に なっていた。

湯浅 冷めてきたというよりも、合宿が飯豊朝日 だったでしょう。東北の方は初めてだし、みんな の意識がそっちの方へわっと行ってしまった。で も九月になったらまた始まったな、ということに なる。東北まで行ったのだからつづきでさらに北 ヘパーワンにも出る、でも九月になったらまた山 小屋へ戻ってくる。

瀬端 僕らは2回生だったけど、ただ運ぶだけ、 夜になると飲んで、気楽だった。だから、鈴木さ んのそういう苦労がわからなかった。

小野 瀬端さんとか我々のころは、山小屋を建て るための「頭脳」ではなかった。

**柴** やはり役割分担というか、法律関係などは法 学に任す、金儲けは経済に、理工は物理的なこと

を考えても らう、と。 小野 1、2 年生は担 げ、と。

瀬端 それ に、1、2年 生が参加し ようにも、 これまでの 経緯とか で、何をす るでもな かった。や はり担げと いうこと だった。あ の時、年間 220 日も山

る、皆に自



に入ってい ボッカして、夜になると飲んで、1、2 回生は気楽だったと瀬端さん

慢していた。とにかく、山小屋へは私、よく行っ た方だと思う。

鈴木 しかも、バス代、食糧代などみんな自弁 で。柴なんか、食当やっていたな。

**柴** 誰か書いとったで。柴が作った飯は食べられ へん(笑)、って。

鈴木 僕らは、会を創設の時から「自主性、自主 性」と言って、よその大学は体育会系で、錬成と 称して下級生に砂を運ばせ、上級生は尻を叩いて 追い上げた。奥村と奥村の彼女の3人で比良山望 武小屋へ行ったとき、後ろからユニフォーム姿の 甲南のワンゲルが10人ぐらい来た。今言ったよう に、上級生がヘルメットかぶって、棒持って、尻 や頭叩いて練成をやっている。いやな感じがし て、脇にそれて先にやらした。大分経って登って 行ったのだが、すぐに追いついてしまう。しか し、そういうことをするから、彼らは体力もつい て大分ハードなこともやっているのは事実。僕ら は北アルプスなどへ行こうと思うと、何もしない わけにはいかない。御所の周りをランニングをし たり、山小屋のボッカなどでも、ブロック4個で 60キロ、セメント一袋で50キロ、これを担ぎあげ たからね、一時間かけて。それはあくまで自分の 意志で持っていかんとあかん、担ぎあげないと小 屋ができないという意識があった。ついでに言う と、最初はキスリングの中に砂とバラスを7杯が スタートだった。みんな、ヒイヒイハーハーいっ てたけど、慣れてくるとだんだん量が多くなっ て、9杯にし10杯にし、最終的には14杯。これを スーパーと言った。

司会 さていよいよ最後の作業となる。

鈴木 9月19日に、倉橋から大工さんの臥梁を除 いた完成までの見積書を受け取った、23万5480 円。現在の山小屋特別会計の手持ちが17万円。一

般会計を管理している福井にどれくらいあるか聞 いてみると、5、6万円はあるという。とても足り ない、驚いた、と日記に書いている。まあ、こん な感じでやっていた。最初の見積りがこれで、い ろいろ交渉の結果、16万8848円になった。

小野 総会で、金がない、PRスキーで入ってく るんだけれど、その間のつなぎがない、というよ うな議論をしていた記憶がある。だから、債券で も発行したらどうですか、と私は思っていた (笑)。

鈴木 それで、苦肉の策として、3月末に残りの 10万円を払うこととして、その場をしのいだ。

司会 それでは、時間も迫ってきました。最後 に、山小屋を生んだ、RUWVの風土というのは 何だったとお思いでしょうか。

柴 自由活発なところかなあ。クラブ自体が体育 会に入ってしまうと、トレーニングはこうしま す、クラブの運営はこうします、とかいろんな規 制がかかるんだろうけど。同好会のままでいたの で、自分たちのしたいことができるというのが大 きいと思う。

湯浅 そう いう自由な 空気はあり ましたね。 合宿至上主 義というこ とだけでな く、パーワ ンもどんど んやれとい う空気が あった。む しろパーワ ンが主体で あって、合 宿は最低限 にする。と ころが、体 育会に入る と合宿を強 制してく る。だから



あえて同好会を維持したと湯浅さん

敢えて同好会を継続してきた。

司会 そうすると、クラブとしての自由さが大き かったといえますね。

鈴木 50人ぐらいまでならそうした意思の疎通が できる。だから自主性というのも、阿吽の呼吸で 分かっている。それが170何人にもなると、幽霊 会員もいて、つまり出てこない人も存在する。そ れらの把握はさらに困難になる。結果、リーダー 会のコントロール、責任が負いきれない状況に なってきた。そうすると自主性が機能しなくなっ てくる。

司会 僕は、一年生に入って初めての総会で、紛

糾するんですよね(笑)。それを見て、「なん だ、このクラブは」と思ったことがある。でも、 その自由闊達さ、自由奔放さが、山小屋を生んだ 原動力になっているのかなと思った。

小野 それとね、軸になった人たちが大人だった んだね。議論はするものの、冷静な判断ができる 人が、歴代中心に座っていたんだね。

湯浅 幽霊会員でもね、山小屋を建てるまではド ル箱だ(笑)と言っていた。月に一度か二度出て 来る人でも、部費さえ払ってくれたら結構という 考えだ。

瀬端 でも会則では、部費の滞納が三か月で退部 となっていた。

鈴木 伝家の宝刀を発動するかどうかは、最初の

間はしなかった。後になってしたけどね。

湯浅 だから幽霊会員は歓迎した時期もあったの だ。

**柴** 僕は漂雲の編集をしていたのだけれど、その 前の第3号の編集責任者大原さんの時の会員数 と、僕がやりだしてからの会員数は大幅に増えた ので、何部印刷したらよいのかよくわからなかっ た。

司会 それは先に印刷しておいて、つまり見込み 印刷していた。

**柴** そう、それで、あと何部残っている、などと 気をもんでいた。売れ口が少なくて、経費が回収 できるのか悩んでいたんやろな。

司会 それと、湯浅さん、鈴木さんに伺いたいの ですが、プロジェクトが走り出したものの、これ が完成するという目算はありましたか。

湯浅 12月初めには間に合わんだろうと思ってい たが、完成するとは思っていた。夏合宿はやはり しないといけない。だからそれが終わってからが 勝負かなと思っていた。それに、今日初めて鈴木 君が合宿に行ってなかったということを聞いた。 胃に穴が開きそうになってたんやなあ、と思っ た。だけど、みんなパートパートで口には出さな いけれど、頑張っていたんやな。そやから、目標 を持って、自分で管理しながら、やっていた。た だ、総会はいつも荒れていた。逆にいえば、思い の丈を総会で言えたから、あと、すっきりしたん かなあとも思う。だから、陰口は全然入ってこな かった。

**鈴木** 彼はチーフリーダーやから、合宿や、会の 行事をこなしていかないといけない。でも、僕は 山小屋建設委員長だからね、建設を推進しなけれ ばならない。とにかく、動員をかけても集まらな い、技術的にも臥梁のところでどうしていいか判 からなくなった。もうこれで、終わりかなという 感じになった。開き直って、やめようかなという ように考えたこともあった。それである人に話し たら、「そんなことをしたら、20人から30人のお 前と一緒にやってきた人たちを裏切ることになるよ」と言われた。そうか、それではやめられないという気持ちも起こってきた。だから、自主性の結果できたというよりも、どちらかというと意地でできたと思う。当初は、自分たちで、という考えでスタートしたが、ブロック9段が積み終り、臥梁の手前でストップしてしまった。その後、丸太で足場を組んで臥梁設営、屋根葺きが実行できたことを考えると、やはり大工さんの手も必要だったし、すべてを自分たちで造るということは無理だった。

**湯浅** だから最終的にはそれでいこう、つまり大 工さんに入ってもらおうということになって、そ こから先は加速度的に進行したね。

鈴木 さきほど小野君が言ったように、11月23日から25日を準合宿とした、この辺で最後の仕上げへとつながっていった。12月2日に瀬端たち2回生の最強軍団が梯子などを運び上げて、最後の作業

をた条分で一使れ来で上とと完あし。件達山番わとた最げなに成そてれ、回屋初てっその可たく前でれ、回屋をはてったの可たく前ではなりを自生をにくてれ仕能。、にコ



当日は、談論風発、山小屋建設から、PRスキー、OB会のこと、あらゆる話題が 飛び出した。山小屋完成から45年、記念の座談会として有意義な時間が過ぎた

たのは、彼ら2回生の集団だった(笑)。

小野 あまりにもあそこで酒を飲みすぎたな (笑)。

柴 暑いころに中だるみの雰囲気があった。で、このままではほっとかれへんぞ、誰もかれもがあきらめてしまったわけではない、あきらめたらそのままになってしまう。それで、また走り出した。

鈴木 一頓挫しかけたのはなぜかということだが、僕らも考えが及ばなかった。捨てコンから基礎をやって、そして立ち上がりの60センチがあって、その上にブロック9段がある。それを通常丸太等を組み立てて行う作業を、足場なしでやってたわけや。島田工務店は丸太を運んで足場を組んでやった。われわれはサーカスみたいにやってたわけやね。だからできなかった。そこが僕らには考えが及ばなかったんやね。それは無理もない、素人の集まりだったんだから。

**湯浅** それでね、誰かが「素人でもできるブロック建築」という本を買ってきた(笑)。「皆、まわし読みやで、しっかりこれ読めよ」ゆうて読ん

だね。

柴 あのころはね、ブロック積みの建築というのは、一種のはやりだった。日本の在来建築の工法からみると、ブロックという部材を使うということはなかった。そのころが走りだった。

鈴木 そこへ防水ブロックを使った。さらに液体の防水剤も入れた。大鵬、山岡君は僕等の同級生で、土木科の学生、大相撲の横綱大鵬と生年月日が同じで、柔道もやっていて、大学の柔道部が対外試合する時に、助っ人として引っ張り出されたこともある力持ちだ。その彼が、それこそ50キレー対ニ対三の割合で入れる、僕らはきっちり計って入れないといけないと思っていたが、彼ら土木の人間は適当にこれて(笑)、まざり加減を見ながら追加のセメントをほりこんでいた。ついてにその大鵬の話をすると、僕が二回生の夏合宿で黒部乗越しへ行ったときに、大学の山岳部から移籍

しシ森ん行る一もばダン知一股道てヤ本をっと人同かッこ子緒・コきコ福連た女もじりコとさに藤スたこ子れ、性二だにチ若んに藤スドとさてすの人と、ヤ山も湯新の

我々で面倒

見ようということになった。しかし、彼女は比叡 山にも登ったことのない京都の女の子だ。それを 連れて行くので色々面倒を見た。その一つが、中 央本線夜行準急ちくまで早朝松本駅に着き、乗り 換える時に、大鵬は二人の女性のキスリングを両 脇に抱えて三人分の荷物を持ってホーム、階段を 移動した。

**湯浅** 一説には50キロのセメント袋を両脇に抱え て運んでいたという。

司会 思い出は尽きませんが、最後に、山小屋が 現在45年経っている。これからも存続していくと なると、何か強固な組織が必要ではないか。今で こそ、建設当時のメンバーがたくさんいますか ら、床が腐った、屋根がどうした、というと勧進 帳を回せるし、すぐにお金も集まる。しかし、時間がたって建設に携わった人間が少なくなると、 山小屋への愛着の度合いも違ってくる。そうする と、現役が10人ばかりしかいない現状では、廃屋 になる可能性だって考えておかなければならな い。そこで、OBの組織を強化するなり、基金と していつでも小屋の改修ができるくらいの金を



鈴木 立命ワンゲル 創設者の一人、鎌田 さんが、今、二つの

山小屋の管理をして居られます。だから、現役がどうしてもできなければ、OBがしないと仕方がないなと思っています。鎌田さんは、「小屋が壊れてきたり何かが発生すれば、現状を説明して寄付集めをしたら集まるだろう」と考えている。今回の50周年の集いでも、名簿上は740人(現役15人、OG52人、死去された方21人を含む)だけど、622人に案内した。その結果217人から出席の返事(内当日欠席7人)欠席の返事は194人、住所の判らない人73人と言うのが現況。だから、ある程度、ここ10年20年は声さえかければできると思う。とりあえずは現役に頼んでおいて、その代り、現在現役がしているような、冬の薪集めとかはできなくなるかもしれないね。ある程度、朽ちていくのはやむ

柴 愛着がだんだん薄れるというのは、山小屋 へ行かないからだね。だから、サイクル表のよ うなものを作って、どうするかということを決 めておく必要がある。使わないのに、開けてお けないからね。

を得ないことかもしれない。

吉原 だから今の二つの意見のうち、あとの方、現役の人数確保というのは難しいと思う。山へ行っても、おじさん、おばさんばかりだ。こんなしんどい、汚い、キツイ趣味は敬遠される傾向にある。となると我々も、もう10年ぐらいは何とかなるやろ。だから、その間に山小屋としての、ちゃんとした組織を作っておかんことには、下へ下へ回したからできるというものではない。とりあえず10年ぐらい考えて、今のうちにこの話と同時進行で、小屋の方の世話をする組織を作る、これしかないのと違うか。

**柴** だから、動ける回生で、年に一度か二度、運営委員会を作って、集まることを固定化していくことしかしようがないような気がする。

吉原 外国の山小屋に行ったけど立派だね。水洗のトイレがあったり、アクセスが整備されていたり、日本の山小屋と違いすぎる。だから、今の若

い子たちに、山小屋が立派と言っても理解されない。 われわれは、判るけどね。

**小野** 瀬端さんなどは現役と接点を持っておられるようだけど。

瀬端 接点はあまりない。しかし、わたしも山小屋の将来を危惧して、森村さんがよく行かれているんで、お願いしますということで、勝手に山小

屋管理委員長として指名させていただきます、 といった。森村さんも、一年に何度か山小屋に 集まって、「考える会」とか、集まるだけで も、意義があるんじゃないかと言ってられま す。

湯浅 2か月に一回か3か月に一回か、年間に日を決めて、「山小屋の日」に小屋へ入る。行ける日に行きませんかと呼びかける。それから、山小屋の施錠のことですが、あの方法はいいなと思います。施錠して誰も使わないようになると、窓のガラスを割られたりします。だから、こうしたら開きますよということでね。それからトイレにカンパのお願いもありますよね。あれも若干入っている。ボランティアや山歩き愛好家などにも開放する工夫もしないといけない、とも思う。

**柴** 何か考えて、何かせんといかん。成り行き に任せたらあかん。

小野 現役の人たちは、何か山小屋について テーマを設けて活動しているのかな。

柴 ヒアリングをせないかんね。ちょっと集まってもらって、どういう風に考えて、どんな活動をしているのか。そして、僕らの気持ちも話さないと、伝わっていかない。

鈴木 関大のワンゲルも創部50周年記念とかで、「千里」と言う会誌を発行した。それを見ると現役は6人だと書いてある。

吉原 それについてはうちもあんまり変わらない。実際に活動しているのは10人ほどやろ。

柴 増改築の時、結構来てくれたよ。今セメントは25キロだけど、女の子が「はーい、私行きます」といって、ワーッと行くからね。

吉原 あなたの年を考えんと、栄養状態も違う しね(笑)。

**小野** 現役が意識を持っている限り、我々が勝手に動いたら、まずいと思うんです。

司会 それではこの辺で。最後のことはこれからの課題ということで、機会あるごとに話し合っていきたいと思います。せっかく作り上げた山小屋ですから、ふさわしい形で存続していけるように、OB、現役が力を合わせていきたいですね。本日はお忙しいところを、ありがとうございました。

(なお、会場として吉原さん宅を利用させていた だいた。この場を借りてお礼申しあげます)

36

### 立命館大学ワンダーフォーゲル会

#### 昭和37年度前期会計報告

昭和36年10月1日~37年3月31日

収入の部		支出の部		
前年度繰越金	75,765	事務関係費		2,986
37年度前期入会金	1,000	団体装備費		2,465
37年度前期会費	51,600	行動援助費		4,115
雑収入	2,325	学連関経費		13,816
		山小屋建設資金		44,227
		漂雲		20,000
		コンパ会負担分		590
		雑支出		9,570
合計	130,690	合計		97,769

次期繰越金 32,921

昭和37年度前期会計係 高木博允印

### 立命館大学ワンダーフォーゲル会

#### 山小屋会計報告

昭和37年度(昭和38年3月31日現在)

収入の部		支出の部	
理工一般会費	75,000	書籍、事務関係費	2,480
理工山小屋代	17,700	運送、交通関係費	29,190
本校山小屋代	57,500	連絡、通信関係費	1,009
OB寄付	11,000	材料関係費	278,650
銀行利息	2,043	写真関係費	6,880
一般会費補助金	3,000	雑支出	12,637
山小屋資金	164,439	大工支払い(3月31日付)	100,000
雑収入	2,260		
第4回PRスキー収入	100,000		
合計	432,942	合計	430,846

次期繰越金 2,096

昭和37年度RUWV山小屋会計 富田良三印

# 現役の指さんからの投稿

(山小舎は、すべて山小屋と 表記いたしました)

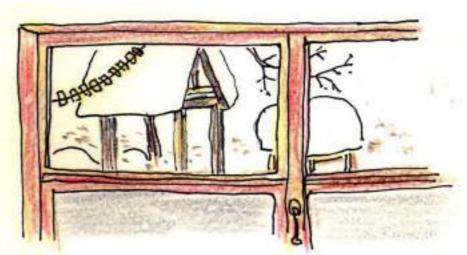


イラスト 森村征男 (昭和37年卒)

# 山小屋は貴重な財産

佐々木 大造 第51代CL·4回生

京都北山、雲取山。その頂上から二の谷を下ったところに我らが立命ワンゲルの小屋がある。

2004年春、私は立命館

大学に入学した。大学でも山をやろうと決めていたが、ワンゲルの他にも山岳部など登山を行うクラブやサークルはたくさんあった。しかし、ワンゲルは北山に山小屋を所有しているという! それを聞いた瞬間、心は大きくワンゲルへ傾いた。

そして、先輩に連れて行ってもらって初めて見 た山小屋。予想以上に立派だった。小屋の周りの ブナ林、生まれて初めて入ったドラム缶でできた 風呂、鹿、蛍……。そして仲間との夜通しつづく語り合い。山小屋の素晴らしさを実感した。 さらに、山小屋の良さ



雪渓の上で、しばしくつろぐ佐々木君

その山小屋を今後どう維持管理していくかが問われ始めている。昨年、現役も山小屋周辺のルート整備を行ったが、今後はさらに現役が主導して維持管理していくことが望ましいと思う。

私は来春卒業するが、卒業後はOB・OGと現 役との橋渡しなどを積極的にやっていけたらと思 う。

あったことでしょう。この場を借りて深くお礼申 し上げます。

最後になりましたが、あのような素晴らしい山 小屋ができるまでには並々ならぬ先輩方の努力が

# 連綿と伝えていきたい

### 米田 丰吾 **第52代CL-3回生**

私が最初に立命ワンゲルの山小屋を訪れたのは、一回生の6月後半の暑い日でした。まだ新人合宿に参加していなかった私は、初めて重たいザックを担いで汗を流しながら、寺山峠を目指していました。峠を越え、沢沿いを歩き、やっとのことで小屋についたかと思うとそこには――、小屋らしきものの残骸が……。横には慌てふためく先輩の姿が……。

**――それから、3年経ち私もチーフリーダーと** 

して皆をまとめる立場と なりました。ワンゲルへ の思い入れもいっそう深 いものになっていきまし た。思えば、山小屋ブ ロックの私は、現段階で 7回山小屋を訪れている ことになります。それに は、10数人という比較的 大人数での参加の時が あったり、5人だけのと きもあり、雪の降り積も る中や、二泊三日で滞在 した時もありました。ま 旬に小屋を訪れた時に は、たまたまOB・OG

の方とご一緒になり、話をさせていただく機会がありました。その時に以前のワンゲルの話や、現代の社会情勢についての話をして下さったり、現役を応援して下さり、普段とは一味違ったとても有益な山小屋ワークになった時もありました。山の中でみんなと時間を気にせずトランプをしたり、鍋を囲んでとりとめのない話や、真剣な話を

するのは、この山小屋でしか味わえないものです。ワンゲル会員にだけ許された憩いの場ではないかと思います。まだワンゲル現役としての学生生活は結構残されているので、これからも山小屋参加皆勤賞を目指していろいろ語り合い、現役を卒業してOBになっても今の仲間たちと遊びに行けたらと考えています。私にとってサークル活動が大きな位置を占める大学生活に出会ったワンゲル小屋は今や大切な場所になっています。

「米田さんっ! ぼくらの 山小屋がつぶれてます!」 「まじでかっ! この前の 大雨でつぶれちゃったんか な!

「から二人目が米田君。 リンケル会員だちに、いました木も2本 まで多くのワンゲル会員に よって使われてきたこの立命ワンゲル小屋を伝えていきたいと思います。最後になりましたが、このようなワンゲルの憩いの場となる素敵な山小屋を建ててくださり、管理維持をして下さっているOB・OGの方、ありがとうございます。今後また山小屋でお会いしたらよろしくお願いします。



た、私が2回生の4月下 山小屋にて、仲間とパチリ! 右から二人目が米田君。 旬に小屋を訪れた時に 4人を挟むように移植した木も2本



# 許可申請書の提出

鈴木 正博

昭和37年4月29日、広河原行きのバスに乗って花背別所まで行き、スキー小屋で16人が一泊したところ、白熊小屋の物部哲次郎会長から宿泊料の「心付け」を要求された。さらに、私達が山小屋を建設するということから、自分達の営業小屋と競合することを懸念され、合宿する場合はまとめて支払うという条件で、名刺を預かっておくと言うことになった。この方は常々山刀を腰にぶら下げて歩いており、大柄な人であること、しゃべり方が押さえつける風であることから、若干話をする時もびびるところがあった。そのため、今後の土日の作業はすべて芹生から入り、二の谷を少し登った炭焼小屋跡地を今後もテント場として利用することになった。

この日、建設予定地に先輩の永辻啓介さんと安田 英樹さんが来られ、建設予定地を見学された。安田 先輩は浜の気風が、永辻先輩は不動産屋の風体が 匂い、いずれも的確な職場、職業を選択されたものだ と感心したことがある。

翌4月30日、法律相談部の同級生稲波君が周山の 出身で、昼休みに京北地方事務所に行きたいので、 国鉄バスの時刻などを聞くと、自分の自宅に一泊し て、朝一番に地方事務所行けば良いと言われた。 翌日、5月1日8時40分、周山の地方事務所内林務課 に出向いたところ、所長がまだ来ていないので課長と 技官の二人に話をした。

山小屋建設について、「ブロックなら半永久的なものだなー」と言われ、また、山の斜面の採掘の点も聞かれた。これについては既に一部手をつけていて、ある線まで削り取ったこと、そしてこれらの土石を前面へ

押し出してしまったと話した。この話の中で吉田技官に、色々と丁寧に受け答えしていただいた。最後に、保安林内山小屋建設作業許可申請書と土地の使用承諾書および略図を持参すれば良いと教えていただいた。この後バスで京都に取って返し、12時10分頃丸太町堀川で第33回メーデーのデモ行進に進路を阻まれ、少し遅れて総会に出席、顛末を説明し、申請書ほかを提出する方向であることを報告した。

5月2日には新人合宿を山小屋建設作業に投入することについて、一部の同級生がけちをつけてきたが、それも収まり、5月3日臨時のバス2台を仕立てて、花背中町まで70人強が乗り込んだ。昼前のパラパラ雨は夜には本降りとなり、5日昼前まで降り続いた。この結果5日の晩までボッカを続けると言う人間は減少した。

一方、申請書の届出の件では、4日朝に物部新三郎さんの自宅で土地使用承諾書をもらい、8時35分発のバスで周山の地方事務所へ奥村君単独で行ってもらった。多分、北の大布施まで広河原行きのバスに乗り、その後西の方角、周山へ向かったものと思う。この結果作業許可書は5月15日頃になる、技官からは作業にかかってもよいとの内諾を得て花背に帰ってきた

往復のルート、行程について、当時は聞いただろうと 想像するところだが、何分にも記録しておらず、この点 は彼と神様しか知らないことである。これにて土地の 問題は万事解決した。5日の朝の人数を調べると37 人の部員が5日の晩も泊まることになった。これまでの ボッカは普通の者で1日2回、数人のみが3回のボッカ であったが、昼の休憩時間帯に土木科の3回生の大 鵬こと、山岡昭二君が指揮して基礎を掘ったところに グリ石を放り込んだ。そして6日はその上に捨てコンを 打つと言うのでそのピッチの早さに驚いたことである。





### ・木馬道(きんまみち)

現在ではほとんど見られなくなった木馬道だが、山小屋建設のころはいたるところで見られた。福井氏が文中で「空になったキスリングを持って渓流沿いの木馬道を芹生の村まで駆け下り

ます」というふうに書いておられる(P23参照)。写真で見るように梯子を寝かせたような構造である。木材を木馬に乗せて、集積場まで運ぶのである。言わば北山のインフラである。ハイカーは身軽に梯子の桟の部分をひょいひょいと歩いたものだが、中に足を踏み外したり、桟が折れたりして、痛い目に遇うこともあった。

# 悩んだ末の決断

「青山迎人新」、誕生の顛末

# 「イオー、やったそうだね」 末川総長

鈴木 正博 昭和39年卒

頼んでみるか、どうするか? 悩んだ揚げ句、書いていただいた「青山――」の額。山小屋で見上げては、先生の学生に対する親のような心を想った。その額の盗難から、木彫り額の再生までの顛末。



人)が小屋へ搬入。後列左端の菊内君もすでに故人である行われた。その時の写真、手前のストーブは野田君(前列左端=故12月6日から8日の3日間、ワンゲルの活動をPRする写真展が広小路学舎正門左手の藤棚の下で(後列右端が筆者)。昭和37年

昭和37年の晩秋、山小屋完成の目途が立つようになってきたころ、総会で「末川博総長に揮毫を頼もう」との意見が出た。しかし、総長の老齢を慮ると、一握りの者の願いを申し出るのは控えたほうがいいのでは……と言う意見もあった。では、山小屋の名前はどうするのか、表札や看板はどうするのかについては、私に一任ということになった。

その後、法律相談部の現役先輩から、個人宛の 色紙を末川先生に書いてもらっているという話を 聞くに及んで、我々178人の学生集団の汗と涙の 結晶に対して、お願いしてみてもいいのでは…… との想いも募ってきた。

それと併行して、薄手のブリキ製ストーブ、灯油ランプの購入等室内品の手当をしているうちに、末川総長の言葉や揮毫を掲げたいとの願いが

ますます強くなってきた。そこで「当って砕けろ」の気持ちで、11月30日中川会館に居る総長秘書の渡辺さんに話したところ、彼女はハイキングが趣味で、花背、芹生方面のことをよく知っていた。ワンゲルにも興味があって私の話にも乗ってきてくれた。そこで揮毫の件を出してみると、快く総長に話してみると言ってくれた。

その後、総長自身から、12月7日の金曜日12時 15分頃、昼食を食べながら、苦労話を聞きたいと の連絡を受けた。

クラブ行事としてはその頃、山小屋完成式を前に12月6日から8日までの3日間、昼休み時間に、広小路学舎正門左手藤棚の下でRUWVの写真展を開催、合宿、PW、PRスキーなどのほか、山小屋建設経過報告の写真などをグランドシートに貼って、一般学生や教員に展示、理解を深めても



らった。

私は、7日の昼、同級生の秦君と一緒に建設経過写真帳を持って総長室を訪ねた。入室するなり、「イオー、やったそうだね」と総長から声をかけられ、20分ほど建設経過を報告し、土地問題では私有地を借り、特に保安林だったので乾先生を煩わせたこと、この後は山小屋建設作業終了報告書を京北町の地方事務所に送るだけであることを先生にお話した。

揮毫にあたっては、筆、墨等の問題で、自宅で書いていただくことになった。素材は法律相談部の先輩に寄贈してもらった松の一枚板、内容は漢詩、「1962年12月9日末川博」と署名していただくことを希望した。

翌12月8日は不戦の集いで学内はスト決行中、 昼前には先発隊にストーブを小屋へ運び上げても らい、私は仲間2人と一緒に総長宅に伺い、奥さ んから揮毫を受け取った。 松の板に墨痕鮮やかに書かれたのは「青山迎人新」の五文字であった。これを如何様に読むか、議論の分かれるところである。「青山、人を迎え新し」と読む者、「新人を迎え山青し」と読む者など様々であった。前者は「RUWV現役・OBが賑々しく北山杉の緑滴る青い山に出かけ、新しい溜まり場(山小屋)で楽しい集いを始めた」と新しい門出を祝う、主観的な見方と言え、後者は178名の新人を迎えた青い山、北山、雲取山等を讃える言葉であるように想う。

末川先生の揮毫を持って、藤棚に戻り、再度仲間の見送りを受けて翌日完成式が行われる仲間の待っている山小屋へ向かった。京福電鉄鞍馬駅に17時到着、始めヒッチを考えたが、お月さんが13日目くらいで道は明るい、いただいた揮毫と落成式で配る写真を担いで山小屋最後のボッカの味をかみしめた。花背峠を越える手前あたりから点在していた雪は、以後増すばかり。小屋の手前で森本さんに出会い、木村君が気炎を上げているのが聞こえた。小屋に入り、風呂敷を開き松の板を高々と持ち上げると、一人ひとりが文字を読んだ。右から読む者、左から読む者、それぞれが自分で解釈してくれたらよいと想っている。

今は亡き末川総長に頂いた揮毫板誕生の顛末で ある。

# 額の紛失とOB会

学而館屋上ボックスは騒然

# OB会が木彫り額再生に動く

北野 仁志

「青山―」の額が無くなった年に入学して、ワンゲルに入部した筆者。その額がどんなものかもよく認識しないで、上級生の狼狽振りを見てきたわけだ。そして、鮒鶴での木彫り額の披露と贈呈。それを機にOB会活動は活発化することになる。

### 昭和58年卒

私は、末川博総長揮毫の「青山迎人新」額を直接目にした記憶がない。というのも、私が入会早々盗難にあったからである。

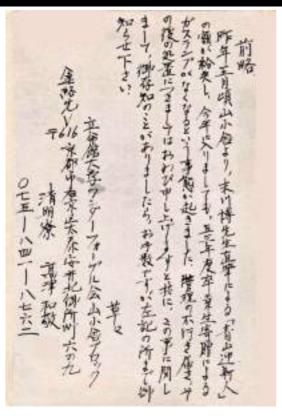
5月初旬の新歓コンパで山小屋に入った際に、おそらく拝見していたのであろうが、そのときは、末川総長直筆のものと知る由もなく伝統の香りのする山小屋の調度品程度の認識であったのかもしれない。

私が入学する前に末川先生は、すでにお亡くなりになっており直接お目にかかったことはないのであるが、末川イズムが色濃く残る学内において、先生はカリスマ的存在であり、その直筆の額

がなくなったことで、学而館屋上のボックスはしばらく「山小屋の額がなくなった!」「被害届を出したがお金に替えられるものでない!」「関係者の仕業か!」とその話題でもちきりであった。

良心に従い、戻ってくるに違いないという根拠のない希望的観測のもとで1年以上が経過したある日、当時の山小屋ブロックのブロックリーダーであった高津さんが、OBにお詫びと情報提供を求めるハガキを出されたところから急展開を迎えることとなる。

当時から近い年代毎にはOB会が組織されていたようであるが、この手紙を契機に、OB会が総



てた額紛失の一報当時、現役の高津君からOBの鈴木正

博

留

和

39

年卒)

力を挙げて総長ゆかりの木彫り額の再生に動いて くださることとなり、新しい額の贈呈の場として OB会が企画されたのである。

その記念すべき「木額の贈呈式及びOB懇親 会」は、昭和56年4月19日夕刻から木屋町の料亭 「鮒鶴」において開催された。

現役も大勢ご招待いただいたが、料亭などに足を踏み入れる機会のなかった我々は、水打ちされて涼しげな玄関を恐る恐るくぐり、鴨川に面した木造3階建ての京都の社交史に名を残す重厚な建物に上がらせていただいたのであるが、大広間を埋め尽くす多士済々のOBを前に思わず緊張した

OB会が額の再生に動き出し、カンパ要請のお知らせが、発送された

ことを今でもはっきりと覚えている。

このOB会において新たな木額の寄贈を受け、 現役で山小屋に据え付けることとなったのである が、その担当となった山小屋ブロックのブロック リーダーの心労は大変だったようである。

#### 「漂雲Na.20」「ヤンレーNa.68」昭和56年度 山小屋ブロックリーダー宮口さんの手記から

一昨年春に、紛失した額のかわりに、今回OBから新しい額が会へ贈られた。

新しい額は大変立派で、末川総長の直筆の写し である。念仏を唱えながら、心を込めて彫られた という大変立派な品である。

また、昭和55年卒のOBから贈られた「漂雲」 という新しい額も山小屋に入った。

山小屋ブロックは、この前の二の舞にならない よう管理していきたい。

# 「漂雲Ma20」昭和55年度山小屋ブロックリーダー高津さんの手記から

昭和56年6月3日、OBより贈られた「道不遠人量力而動」の額を川崎氏の愛車カローラに乗せて運んでくる。運転は野崎氏、それに西村氏+オマケのユッコちゃん、そして私。

宮口君は自分でやるというのだが、何分4回生は暇、4回生にやらせろと彼を説き伏せ3人+オマケ1人でやってきた。OB会があったのが4月19日、それから一月以上も経ってしまった。何分額がでかいため(縦40センチ、横200センチ、厚さ6センチ)どこに、どうやって取り付けるか喧々諤々の議論をしたが出るのは溜息ばかり。それではと千本今出川の金物屋さんにいろいろ教えてもらい今日の運びとなった。OBの皆さん遅くなって申し訳ございません。

山小屋の側壁にぴったり、しっかり据え付けられた「道不遠人量力而動」額は、その後25年の時を超えて、山小屋を訪れる人々を見守ることとなる。

しかしながら、もし「青山迎人新」額の 盗難事件がなければ、現在のOB会の盛況 があるかどうかと、ふと、考えるときがあ る。

盗難事件を契機に、吉原前会長はじめ有志の皆様のご尽力があってOB会がますます強固なものになっていったのである。それにも増してピンチをチャンスにかえてしまうワンゲル草創期のOBの心意気と団結力には只々敬意を表する次第である。

\_\_\_\_\_ 願わくば、消えた「青山迎人新」額が無事山小屋に戻り、またワンダラーを見守ってくれる日のくることを!

# 二代目末川額誕生の背景

## 灰塚慶三氏 手持の色紙から木彫り額の製作へ

1980 (昭和55) 年12月のことである。現役の高津和敬君 (昭和56年卒) から一通のはがきが来る。それは、山小屋から末川先生が揮毫された「青山迎人新」の額が消えたと言うはがきである。このはがきがどういう人選で何通出されたものかはわからない。昭和39年卒の鈴木正博氏のもとに届いたのは、その年も暮れようとしている12月21日のことである。

ここで、その文面を紹介してみよう。

「前略 昨年五月頃山小舎より、末川先生直筆による『青山迎新人(ママ)』の額が紛失し、今年に入りましても、五三年度卒業生寄贈によるガスランプがなくなるという事態が起きました。管理の不行き届き、その後の処置につきましてはおわび申し上げますと共に、この事に関しまして、御存知のことがありましたら、お手数ですが左記の所まで御知らせください。草々」

というもので、末尾には高津君の当時の住所と 電話番号が記してあった。

この文面によると、末川先生の額は、紛失してから約二十か月間さしたる処置も成されないまま、結果的に放置されたということになる。現役諸君の周章狼狽ぶりが伝わってくる。といって二十か月は長すぎる。間髪をいれず連絡があれば、何か方法があったかもしれない。

いずれにしても、結果論で、ここでそれをとや かく言うことはできない。また、誰が持ち去った のか、と言うことも今となっては詮無いことであ る。

ストーブに燃やしてしまったとか、先生に傾倒した何者かが持ち去ったとか、どちらにしても考えられないことであった。燃やしてしまうほど、寒くて薪もなかったと言うのか。(なくなったのは5月だよ) 先生に傾倒した者の仕業と言うことも考えにくい。自室に飾ると言うのか。計画的に車で三の谷まで乗り付けて持ち帰ったのだろうか。まさか、額を持って貴船口から京福電車に乗るわけでもなかろう。京都バスもしかりだ。持ち去ったとしても後の処分と言うか、扱いをどのようにしたのだろうか?

それを考えると、どこかの愉快犯の仕業かもしれないと思うのである。なくなった額のために、 現役諸君が右往左往するのを眺めて、一人ほくそ 笑むサイコ野郎がいたのだろうか。そうすると先 生の青山の額は、山小屋周辺の深いブッシュの中 に打ち遣られているのかも知れない。長年月の間 に墨は流れ落ち、額は雨、風に曝され、雪に降り 込められ、ひっそりとブッシュの中にあるのだろ うか?

しかし考えて見ると、われらの山小屋と、末川総長の揮毫は、すでに密接不可分のモノになっている。山小屋の存在と青山の額は、ワンゲルOBにとって、精神的支柱の何者でもない。それが消えたのだ、一体誰が?——

そして年があけた1981年の立春過ぎ、つまり二月に入ってからのことだ。OB宛に「お知らせ」と題する印刷物が届く。これには、日付けはない。例によって内容を紹介しておこう。

「立春も過ぎ、日一日と春めく今日この頃、諸先 **輩にはご健勝の事と存じます。 さて過日、『立** 命館大学ワンダーフォーゲル会諸先輩より受け継 いだ、大事な山小屋に不祥事が起こり、貴重な、 故末川博先生より頂いた直筆の額が、何者か心な き者により持ち去られました』との悲報を現役よ り受け尚、未だにその額も犯人も不明のまま、と の事態が続いていることを憂慮した我々OBの数 人が、元の文面の直筆が見つからないかと探しま したが、その甲斐なく、やむなく先生直筆の別の 書をお借りして、以前の文面とは残念ながら異な りますが、この書を元に木彫の額をさる専門家に 頼み、このほど出来上がりました。 つきまして は、この出来事を機に、今回の親睦会の席上で出 来るだけ多くのご賛同頂ける方々と共に、額裏に サインをお願いして、改めて山小屋に贈りたいと 願う次第です。また、残念にも御出席できない皆 様には、誠に恐縮ですが、金弐千円程度の御送金 をお待ちしております。御送金のあり次第、額裏 にサインの代行をさせて頂きます。

となっており、発起人として「吉原芳文 倉橋昭一 瀬端武男 村上昌弘 福井啓夫 野村忠明清水正裕 安立洋夫 木原純一郎 西田猛 脇野喜武 内藤暁吾 丸井裕充 灰塚慶三 現役代表川原亮聡」の名前が列記されている。

「漂雲」45周年特別号を編集するにあたって、青山額の誕生については鈴木正博氏が、さらに現役の立場から北野仁志氏がそれぞれ寄稿されている。さて、二代目の額の誕生について書かねばならないが、どなたが中心に動いていただいたのか、執筆を依頼しようにも分からない。そこで個別に当たってみた。

瀬端氏=いや、分からないなあ。

木原氏=名義貸しだなあ、なぜそこに名前が上 がったのか分からない。

野村氏=オレにもよく分からんなあ、灰塚に聞いてみて。

内藤氏=僕、会計をしました。詳しくは、倉橋 さんか灰塚さんに聞いてみては――。

倉橋氏は目下病気療養中なので、ご面倒をかけるわけにもいかないので、灰塚氏に連絡をとって、原稿の執筆の依頼をしたが、ほとんど憶えていないとのことであった。

末川先生の二代目の額はそのようなわけで、実はご本人も記憶にないのが真実で、闇の中である。そこで、やや突っこんで、彼の記憶の断片が

が、詳細は既に泡の如くに消えています。――

思えば二代目の額は、灰塚慶三氏のほとんど一人の力で、誕生したものだ。額の文章は、すでに彼が所持していた色紙があったのだ。というのは、青山の額が紛失したときには、末川先生はすでに故人であった。したがって、紛失したからといって再依頼することは出来ない。彼の返事から、盗難にあって後、どうやって末川先生の色紙を得たのかといぶかったが、すでにそれは彼の手もとにあったのだ。その辺の事情がわからないので、どうやって得たのかとしつこく質問してみた。そこで判明した事実は今回の編集意図とは直接関係がないので割愛することにした。また、額の製作についても、顔の広い彼が、大津の作家に



いくらかでも取り出せるかと思い、とりとめのな い質問をして、その真実に迫ろうとしてみた。

#### 執筆依頼の返事の一部

――思い出せるのは、あの文字(二代目の額の 文章)は、末川総長から頂いた文面です。RUW Vの何人かで、お会いしていただいたものです。 残念ながら、幾たびかの転居により、その存在は 確かでありません。

作った時の記憶を(中略)探れば、滋賀県の大津の作家にお願いして、作った記憶がありますが、その作家はもう、この世にはおられないと思います。

形の良い、「漂雲」のイメージから、乾燥された(した)流木風の板を見つけて、作った事を思い出します。その時に、賛同してくれた十数名の方々の名前を額の裏に書いた記憶だけはあります

頼んだとの事で、その事情ももう一つ判然としない。

多分、色紙を持ち込んで、大津の作家に台となる木と、木彫を合わせ依頼したもののようだ。

かくて、1981(昭和56)年4月19日、新しい末 川先生の額の披露とOB親睦会が京都木屋町の鮒 鶴で開催された。OBは百人弱が参集した。その 人数が、末川先生の「道不遠人量力而動 末川 博」の額を囲んで記念撮影している(**=写真参** 照)。新しい額が出来て、全員が晴れやかな表情 でカメラに収まっている。

こうして、山小屋の二代目の額が誕生したのである。そして、その場で現役諸君に引き渡されて、現在は山小屋にある。

この額が、いつまでも小屋と共にあって、OB の心の中にあり続けることを願うと共に、その功 労者・灰塚慶三君のご苦労を密かに思うものであ る。

(文責・松久=昭和41年卒)

# 我らが山小屋に……

のヨットスクール年続けているボランティア増田さんが琵琶湖でもう28



# 今は亡き野田明夫君を想う

一緒に行った山小屋最後の調査、そして仙台での再会、 人生における野田氏との邂逅は、筆者の心の中に重いもの を遺している。彼は、いまは「千の風」になって、山小屋 やわたしたちの問りを「吹き渡っている」ことであろう。 もう、彼を制約するものは、何もないのだから……。

1961 (昭和36) 年の晩秋。見事に晴れ上がった青空の下、頭痛と吐き気に苛まれつつ雲取山の二の谷を遡行する二人の男がいた。「ボン」こと野田君と「コンチャン」こと増田の二人である。二人は山小屋の建設が雲取山の二の谷にはぼ決定する直前に、最後の現地調査に赴いたのである。前日は出町柳始発のバスに備えて西陣の彼の家に泊まることになった。

彼とは時々かなり突っ込んだ人生論を戦わす 仲であり、その夜もご多分に漏れず議論が弾 み、明日に差し支えるとの配慮で布団に入った のは明け方であった。しかも、最悪なことに一 升瓶に入った赤玉ポートワインが一本と半分 すっかり空になっていた。

そんな訳で、始発のバスでは完全な二目酔い(甘い酒は実に恐ろしい!)、日差しや傾斜、雨水の流路などを調べている内、彼が突然「雲取山の三角点をハンティングしよう!」と言い出し、聞いてみると、当時は誰も三角点を踏んでいないとのこと。早速、地図を頼りにクずるとで遣い回ること一時間あまり。ピークから外れたまさかと思う場所に三角点を発見! その頃には流石の二日酔いも影を潜め、二の谷の出ぐにご家族にご用意いただいた握り飯を頬ばり意気揚々と帰路につく。その後の経緯は建設に携わった方々がすでにご存知の通りであるが、12月9日に目出度く山小屋は完成を迎えた。

彼は卒業し、大阪のチルホールと言うチェーンブロックを売る勝山機械に就職。私は一年遅れの卒業で乃村工藝社に就職。その後彼は仙台営業所に転勤となり、私は電通に引き抜かれて移籍。そんなある日、出張で仙台に赴くことになり、早速連絡して彼と出会う段取りを整えた。久しぶりに会う挨拶も早々に、二月の重い雪が深々と降る中を寿司屋に飛び込む!

彼は交通事故で落ち込んでいたが、杯を酌み 交わすうち、当然のごとく山小屋談義が始まり 「山小屋の体積と同じ量の酒は呑んだな~!」 と盛り上がり、ついには山小屋の資材重量の話

### 增田 佳久 昭和39年卒

に至る。双方うろ覚えながらまとめた数値は、 鉄筋が約2トン、バラスと砂が約2.5トン、セメ ントが約2トン、ブロックが約6.3トン、木材・ トタン・扉・塗料等を「合計すると約13.8トン やで!」となり。「人間って素晴らしい!」 「やれば出来るんや~!」であった。

現況報告の話が進む内に議論が自熱し、加えて双方は酩酊状態。日頃の彼らしからぬ論調に思わず双方が殺気立って「表に出ろ!」「よし! こい!」で表に出たが、舞い落ちる雪に頭を冷やされたのか、気心が知れた山仲間のせいか、どちらから言うでもなく「呑み直そう…」で一件落着となった。

その後、彼に会ったのは入院中の病院のベットであった。向学の志に燃え、人生を熱く語る 彼にジンときたのを覚えている。

最後に彼の名前に触れたのは、1990(平成 2)年山陰の由良海岸で事件に巻き込まれて亡 くなったとの記事であった。同じ釜の飯を食 い、山小屋のボッカを一緒にした仲間のため か、野田君をいまだに身近に感じるし、前向き に、誠実に生きた彼が五十を前にして逝ったこ とが心底悔やまれてならない。

さて、紙幅が尽きるのでこの辺で筆を置きたいが、私の仕事仲間の新井満氏の日本語詩・作曲による「千の風になって」が話題を呼んでいるが、単独行が好きだった野田君はきっと今も千の風になって自由に大空をワンデリングしていることと思う。いな、野田君一人だけではない! 私の知る限り、菊内君、古沢君、高野嬢など、立命館大学ワンダーフォーゲル同好会に所属した彼らや彼女たちも同様に大空を吹き渡っているものと思う。是非、名簿に名前を残してやっていただきたい。いずれ私たちも「散る桜、残る桜も散る桜」として鬼籍に入るのだから……。

では、読者諸兄のますますのご健勝を祈念申 し上げ、ヤンレーと参ります。





# 人们多种形式

柴 弘一 昭和39年卒

たまたま、建築業界にいた筆者、山小屋の痛みの激しいことの報告に接し、調査と見積りを了承。ついには施工まで、協力していただいた。写真で見ると、まるで生まれ変わったような風情だ。採算を度外視して、一肌脱いでくれたものと思う。森村氏との着工前の打合せにも、気持ちよく対応していただいたことが伝わってくる。

昔の人は言いました「瓦は万年、手入れは年々」と。通常、瓦は40~50年位、台風とか他の災害に遭わなければ手入れは要らない。しかし、家の造作や設備については1年なら1日、2年目なら2日、……15年目なら10~15日は大工さんや設備のメンテナンスを受けることでいつまでも新築の状態を維持できると言う意味なのです。防蟻処理してあっても15年前後も経つと薬効もなくなります。日本家屋は非常に優れた軸組木造住宅です。高温多湿の我が国は木、畳、土壁や襖、障子により湿度調整しています。梅雨時期には湿気を吸収し、乾燥した時期にはその湿気を放出することで一定の湿度を保つようになっています。ヨーロッパは湿度が低いので石造りの家屋が多いのです。

第2次世界大戦中、日本は米国のB29爆撃機の 空襲による焼夷弾で多くの住宅が焼失したため、 木造家屋に対する劣等感があります。鉄筋コンク リート造りが優れていると思っている人が多く、 半永久的な耐久性能があるように思われています が、おおよその耐用年数は100~150年位です。北 九州の海に「軍艦島」があります。明治時代の半 ばに石炭を採掘するために造られた鉄筋コンク リート造りの建物で、一時は約2,000所帯が生活 し、その島の中には市場や映画館もあったそうで す。15年位前、ある大学の研究室が建物を調査し たところ、セメントは当初のアルカリ性が時間経 過して酸性化し、中の鉄筋が腐食してしまい、ボ ロボロになっていたそうです。また、最近の話で は、新幹線の橋脚のコンクリートが崩れ、鉄筋が 剥き出したと報道されました。原因は、川砂を使 わず、海砂を使用したためコンクリートの酸化が 促進され、中の鉄筋が錆び、膨張してコンクリー トを押し破った形になりました。それに比べ木造 は、法隆寺や唐招提寺などに見られるように、 1000年以上経過しても現存しています、落雷や放 火がない限り……。



山小屋の入口の前で、左端が筆者。中央は松井氏 (昭和40年卒)。そして現役の2人が飛び入り

最近の建売住宅や低コスト住宅は、クレームが多いと聞いています。まず、材木に問題があります。山から切り出された木材は、直ぐ製材工場で加工され建物の部材として建築されます。早くコストが回収できるからです。昔は山から切り出されて6か月から1年を自然乾燥、刻みを入れてさらに半年程度自然乾燥し、建物の棟上後、屋根を葺いてまた乾燥、含水率16%以下にすることにより強度がでるし、材木の反りもなくなるのです。良心的な住宅メーカーでは自然乾燥後、人工乾燥することにより含水率をキープしています。

立命館大学ワンダーフォーゲル会の山小屋の完成は1962(昭和37)年12月9日です。山小屋の建設経緯については、詳しくは鈴木正博氏、湯浅修太郎氏、木村恒夫氏、堤靖和氏、松井和雄氏、河原祥晁氏や瀬端武男氏らが機関誌「漂雲」第4号に述べられています。建設に至るまでの総会において、「ワンダーフォーゲルと言うのは一つの所にとどまるのではなく、渡り鳥のように山河を旅するものだ」とか、「自分達の山小屋を持って好きなときに好きな時間使いたい」といった意見が出て、会を二分した感がありました。そうして「建設しよう」と決定してから大まかにいっての役割分担が決まり、建設するに当たっての法的な

手続きや土地に対する契約等は法学部、山小屋に関する設計や施工方法については理工学部、資金については経済学部、文学部や手の空いているワンゲル会員は山小屋の候補地探しと言うムードでした。私自身は経済学部ということでPRワンデリングやPRスキーを担当させて頂きました。当時は日本交通公社(JTB)、日本交通観光社や日本旅行などが有り、主に団体旅行や新婚旅行がメーンで、我々が思っているようなハイキングやスキー講習を目的としたツアーがなかったせいもあって、学内でポスター募集したら沢山の参加者が集まったことを思い出します。この資金が山小屋建設の原動力になりました。もちろん、RUWV会員やOB会員の資金提供もありました。

山小屋本体以外に炊事場や便所の増設も行なわれました。山小屋本体の改修は大きくは二回ありました。第1回は1995~1996(平成7~8)年当時の山小屋改修工事総責任者、第40代チーフリーダー・浅間耕一氏、同会計責任者澤井敬太氏らにより行われました。1995(平成7)年9月に一階床の改修工事……総費用535,835円、1996(平成8)年12月屋根の葺き替え工事(鉄板葺き→カラーベスト葺きに)ならびにかまどの柱部分の補強工事等……総費用1,361,924円と合わせた合計1,897,759円とのことでした。OB・OGからの寄付金は346人から2,200,888円になっております。

## 平成の大改修、大まかな経緯と費用

#### 2002 (平成14) 年10月6日

RUWV会員、故野田明夫氏のお墓がある京都大谷御廟に毎年同期を中心に先輩や後輩20数名でお参りさせて頂いております。その夜は恒例になっている祇園「きんなべ」での懇親会の席上で、OB会の会長・吉原芳文氏ならびに昭和40年卒福井邦彦氏より、RUWVの現役から「現在の山小屋は、窓ガラスの一部が割れ、木製の窓枠の老朽化、玄関扉の傷み、二階の床の張替えなど改修せねばならない状況である。ついてはOB会の方でも検

討と資金協力してほしい」との依頼がきている旨の発表がありました。私は「建築業に携わっているので、参考になるのなら現地調査 して見積もりしてみよう」と提案。

同時に、福井邦彦氏、瀬端武男氏らが中心にRUWV・OB/OG名簿作成に注力した結果、2006年10月21日「からすま京都ホテル」において「RUWV創立50周年記念の集い」開催のDM発送により、220余名のOB/OG会員が集合するという大成功に繋がったのであります。

## 特別寄稿

# 「水源酒養林に寄せて」

### 鈴木 正博 昭和39年卒

今年2月中旬エジプト旅行をした。そのとき、図らずもかの地で降雨に会った。ナイル川流域を除いてほぼ砂漠地帯のエジプトは、雨がほとんど降らない。そのためだろうが、首都カイロでさえも道路に排水溝がないところが多く、2、3日は道路の水溜りを飛沫を上げて車が走行し、人々は水溜りを避けて歩いていた。

帰国の時、ルクソール空港からの機内の座席はAB席、左側の窓からリビヤ砂漠、続いてナイル東岸の砂漠、さらにはサウディアラビヤの砂漠を見ることができた。世界地図でお分かりの通りイラク、イランそれにつづくアフガン、ゴビ砂漠が乾燥地帯となっている。これらの地域は人がすみにくい状況である。それからするとわが国は緑化率7割、世界では3番目に緑化が進んでいる。

このことはRUWVOBで昭和53年卒の畑中健君のホームページ・漂雲のRUWVOB用に設置してくれた掲示板[222]に2006年7月6日付でOBの54年卒の市川悦久君が「梅雨に思う」の標題でアジアモンスーンの影響で降水量が多いことを説明してくれている。さらに、その後「里山、川に想う、その1~5 (7/16~7/21)」を書いてくれた。

この畑中君のホームページ・漂雲の掲示板はRUWV創部50周年記念の集いを成功させた陰の力があったことを記録として残しておきたいと想う。

そこで私は次の文章を7月20日付で掲示板に投稿した。標題は「集中豪雨の中、我が国の治水事業を想う」だ。森林法のなかの保安林、中でも水源涵養目的は規制が厳しいといわれてきた。山小屋の東側を流れている二の谷は、芹生川となり、下流で灰屋川、さらに、大堰川となり、嵐山で桂川と名前を変え、最後は京都と大阪府境の山崎で木津川、宇治川と三川合流して淀川となり、京都・大阪府民の多くが飲料水としてきた。私も学生時代から10年程前までは大阪市、枚方市、八幡市に住み、淀川の水を飲料水としてきた。

このように緑化の維持発展は、命の水の確保ということに通じており、そのため治水事業に無関心ではいられず、自然を愛するワンダラーは、常に関心を示しておいていただきたいと願わずにはいられない。

そこで、2006年7月20日に掲示板に投稿した文章を再び掲載して、水源涵養林の大切さを、改めて認識したいと思う。

#### 2002 (平成14) 年11月28日

私と建設部次長・平野秀志を工事責任者と し、その部下2名の計4名でRUWVの山小屋 の現地調査を行いました。彼等に山小屋建設 の経緯を説明しましたら「ヒエー、信じられ ない!!」と驚愕していました。当日は生憎の 小雪と霙(あられ)交じりの天候であり、余 計にそう思ったのでしょう。建設から40年を 経過するも建物の躯体はまったく異常が見ら れず、改めて彼等は驚いておりました。当時 は学生ということもあって、基本に忠実に、 教科書どおり施工したからだと思います。私 には、山の斜面や基礎コン用の土石をツルハ シとスコップで掘り出す「××」(作業)を したことよりも、セメントやブロックを運ん で肩に食い込んだ思い出が懐かしく感じられ ました。また、今日まで維持管理されてこら れた森村征男氏、永辻啓介氏や打越敬祐氏を はじめ、多くの先輩、後輩や現役の方々に敬 意を表する次第です。

#### 2002 (平成14) 年12月8日

現地で「山小屋40周年記念イベント」が開催されました。50数名が集まり、何十年もお会いしていなかったRUWVの面々を拝見し、全然変わっていない方もおられ、「先輩やったかなー?」と思ったら後輩だった方もおられました。当日は、昭和35年卒の永辻啓介氏のあいさつと司会で進められ、後半の方

で山小屋改修理由の発表の後、私、柴から改修方法と費用の説明をさせて頂きました。結果、当社の方で改修工事をさせていただくことをご承認頂きました。改修内容は、主として、①玄関ドアの交換②窓枠とガラス戸の入れ替え③二階床の張替え費用670,000円と致しました。(注=末尾資料3参照=P90)

現場合わせの特注品を使わずにできる限り 市販品でコストを下げるようにしました。

#### 工事着工までの打ち合わせ

ほとんど森村征男氏と私の間で打ち合わせ をいたしました。一番困ったのは森村氏から 「玄関ドアを内開きにできないか?」と言う ことでした。「何故なら冬に降雪があったと き、ドアを押して開けようとした時、雪が積 もっていて開かなくなる」と言うものでし た。玄関ドアは必ず内側から見て「押し開 き」なのです。と言うのは、外から雨や風が 入り込まないようにする理由だからです。最 終的には「庇」を設置することになりまし た。建設業界に入って判ったことなのです が、年間30センチ以上の積雪地帯において、 玄関は桁側でなく妻側に配置することになっ ています。屋根からの積雪の滑り落ちで入口 を塞いだり、人に当たることのないようにす るためです。

二番目は、窓枠をアルミサッシに交換する ことにより、空気の循環が無くなり、酸欠を

# □デ・レイケの治水事業□

7月5日未明、北朝鮮によるテポドン、ノドンなどミサイル7発の発射とその後のニュースなどによって、同国の地方都市や野山の風景を見る機会があった。ほとんどが茶色一色で、驚かされる。なぜならば、山々には木がないに等しいからである。

エネルギー不足で人々が山に入り木を燃料に使うため、手近かなところに木がない。少し資金がある人は、リヤカーや木炭車を使って1日がかりで野山から丸太を切り出して薪を販売している。このため、大雨が降ったら野山に保水力がなく、一気に低地に流れ出し、洪水となり、田畑を荒らし、農作物に被害をもたらす。さらに、食料不足から、木や草や、それらの根までが空腹を紛らわすものとして採取されていると言うひどい話もきかれる。同国の洪水被害は天災ではなく、むしろ人災ではないか?

こういった観点からすると、今春図書館で見つけた「日本の川を甦らせた技師デ・レイケ」(草思社1999年12月)は、治水と言う意味からする

と、日本の恩人といえる。そこで、皆さんに紹介 したいと思うものである。

明治の初め、多くの西欧人のお雇い技師が日本にやってきて、わが国の近代化に貢献した。オランダ人のデ・レイケは、河川・港湾の近代化・改修に努め、大阪港や淀川、木曾、長良、揖斐の三川等の決壊・氾濫を調査して、流水をコントロールする等の予防工事を施すとともに、源流域にまで実地踏査して、①若い木を山の斜面や崖に植える植林事業、②丘の斜面にわらを押さえ込んで覆う土や石止め工事、③木石砂で谷の狭くなっているところに砂防ダムを建設する事業等、禿山防止工法を実践した。これらの方法が直後から全国に広まった。その結果、7割が山林としての緑化の成果をあげ、今日の緑豊かな国土として結実しているのである。

最近、陸中やその近隣で新鮮なうまい魚介類を 獲るために、漁協の人が山に入って植林している ことが報じられている。人間にとって、命の水を



コンプレッサー、発電機も運び上げて---



窓枠のサッシも施工されました

防ぐようにして欲しい、ということです。 「サッシ換気ルーバー」と「室内換気ガラ リ」を各壁面に一箇所ずつ設置するようにな りました。

三番目は、湿気防止のため、壁を吹きつけ 塗装するようにしました。それはそれで良い のですが、吹き付け塗装するにはコンプレッ サーと発電機を必要とします。「誰が運んで くれるんやろか?」と思ったものです。年が 明けて彼から「破風、母屋や軒裏にペンキ塗 りをするように、また、煙突の取り合い部分 の補修も。山側のサッシには山から雪が雪崩 れ込んでも大丈夫なように、雪止め格子を設 置して欲しい」との指示がありました。

この結果、追加費用は520,000円になり、 総費用は1,190,000円(直接工事のみ)と なった次第です。当時の現役山小屋改修工事 責任者・大野悠子氏に聞いたところ「OB/ OGの寄付金は150万円程度頂いているので 大丈夫……」とのことで安心したものでし た。

最終的な収支は、

OB/OGからの寄付金合計(176名)

1,525,012円

直接工事費・事務費の合計

1,242,917円 282,589円

差し引き繰越金

#### 山小屋の改修工事日程

1) 資材の搬入……2003 (平成15) 年5月17~ 18日

京都・出町柳にRUWV現役10数名が応援

豊かにはぐくむ努力は、われわれ一般人にあって も実践したいものである。

わがRUWVの山小屋も、その建設当初、西側の山すそを、最深部では7メートル余の岩石を、つるはしとスコップのみを使い、人海戦術で掘り出し、これらの土石を東側のすそ下へ出して、広いベランダを確保・整備したが、その時、2本の10年生ほどの雑木をベランダの東端に移植した。1本はロープをたらしてブランコ様に現在も利用されている。

さらに、二の谷の急坂を登りきったところ、山小屋の全景、かまど小屋、食卓テーブル等が見えるところに、一種の通路・ゲート的な状態になっている杉の木数本がある。あれは山小屋建設後では、名本を植えて、将来大きくなってきた杉の古れたときもらって手種だって手をときには、枝葉を燃料にしようと願って手地だったまには、枝葉を燃料にしようと願って手地だったことから、40年近く生育しているはずなのに、育ちがあまりよくない。やはり、素人の植林は、長い年月がたつとぼろが出てくるのだろうかなよいを目がたつとぼろが出てくるので、間引かなければならないかもしれない。後輩の皆さんは、毎年薪をこしらえてくれて助かっている。でも、

私たちは、小屋へ上っていく途中で、倒木や枯れ枝を拾い集めて燃料の足しにしている。山を愛するRUWVワンダラーは、自然の中で生を受けているものとして、命あるものに感謝して、共生の意識を向上させたいものです。

なお、上記の本の著者は、1934年生まれの早稲田大学第1理学部土木工学科卒で、建設省に入省し、淀川や木曾三川などの改修を担当する過程でオランダ人お雇技師、エッシャーやデ・レイケの業績に出会い、その研究を生涯のテーマに1985年同省中部地方建設河川部長を最後に退官した上林好之氏であり、1990年オランダにエッシャー家を訪ね、デ・レイケと交わした手紙など多数の資料を発見し、それからオランダ語を独習しながら、読み解き1994年より5年の歳月をかけてこの本が出版された。

技師のエッシャーは早く帰国したが、職人であったデ・レイケはその後30年余日本に滞在して、技師以上の能力を発揮、わが国の治水事業の近代化に貢献した。離日にあたって、時の政府は5万円もの高額な退職金を支払ったといわれている。

近代日本を築いた、その一翼を担った人の事業と人となりを知るのに良い本だと想う。(了)

に来てくれたので、車に分乗して三の谷から 資材の搬入を開始。私も運ばなくちゃと思 い、セメント袋をもたもたと持ち上げていた ら、2回生の女性が難なくザックに入れて サッサと担いでいってしまったではありませんか。「なんと頼もしい女の子やな~」と感 心するやら自分が情けないやら……。仕方な しに比較的軽そうなアルミサッシの1間物 (1.82メートル)を運んだが、山の中へ入る と引っ掛かること、引っ掛かること、とても 難儀しました。今度はまとまったヤツという ことで、吹き付け用の1斗缶を背負ったら、 重いの何の、なんと重いなーと思いながら運びました。現場では塗装屋、左官屋、板金屋や大工は機嫌よく作業してくれ「こんなに空気の良い山奥で仕事するのは始めて」と喜んでいました。

2) 完成……2003 (平成15) 年5月28日

無事に工事を終えることができました。とくに、森村征男氏におかれましては、工事全般を通じて多大なご援助を賜りましたことを、この紙面をお借りして、厚く御礼を申し上げる次第であります。



# 小舎手前の廃屋が語る教訓 築30年、悲鳴を上げる山小舎

山小舎の手前に、ワンゲル伝統のジョークに使われる廃屋がある。よくできたジョークだ。青くなる新人、でも一瞬の後には、立派で堅牢な小舎を見て安堵感に変わる――。この話、他人事ではない。当時の小舎は築30年の悲鳴を上げていた。山小舎ワークに精力的に取り組んだ筆者が、小舎の将来と、維持管理の難しさを語る。

### 山本 達郎 平成3年卒

「おい! 山小舎がつぶれているぞ!! |

「何てことだ! 確かに昨年は大雪だったが、屋 根が持たなかったのか?」

「しゃぁーない。このまま二の谷を進み雲取山経 由で引き返すか……」

目の前には朽ち果てた木材とトタンの切れ端など無残につぶれた山小屋らしき残骸が……。

冒頭からショッキングな書き出しになってしまったが、これは忘れもしない、小生が新入1回生、山小舎ワークで初めて小舎を訪れた際、道中での一場面である。昭文社のエアリアマップ「京都北山 1」に載っている、大先輩方が自力で建設した等々……会自慢の立命ワンゲル山小舎が、こうも簡単に崩れるものなのか? 以前BOXで見た山小舎の写真と比較しても、目の前の廃材は物量的に少なく、いくら何でも小さすぎる気がしたのだが……。

それでも上回生の激怒とも落胆ともいえる紅潮した顔つきに嘘をついている素振りはなく、また心情を察すると疑惑の弁をご注進できるはずもない。駆け出しの新米ワンダラーは途方に暮れ、先輩の後ろをついて行くしかなかった。

それから先を進むこと数丁、緩い小丘を乗り越えると、木々の合間から真っ赤なとんがり屋根と

ブロック外壁の小舎が姿を現した。先頭が振り返 りダウンの号令。

「ようこそ立命ワンゲル山小舎へ!」他の誰かが 来訪を告げる鐘を鳴らす。

「??? 一体何が起きているのか!? そうだ、やはり自分は騙されていたのだ!」上回生や新歓行事ですでに山小舎に来たことがある同回生は、小生の落胆した姿を前後で観察しながら、さぞ笑いをこらえるのに苦しんだことだろう。



トイレはいつ底が抜け、犠牲者が出てもおかしくない状況だったが、現役の人数が少ない中、トイレも 新しくなった

本文を読まれてニヤリとされた方は、身に覚えがあると思う。これは山小舎のおよそ数百メートル手前、左側土手の斜面にある正体不明の残骸のことである。流布されている風説によれば、これは山小舎建設時の飯場跡、誰かが不法投棄したダスター、はたまた新トイレ建設を断念した名残りなど、面白おかしく逸話は語り継がれているのだが真実は一切謎である。これが一体何なのか正体を知る会員は誰一人いない。いつの頃からこの手の「ちと」悪趣味なイタズラを思いついた上回生がいたのだろう。山小舎を初めて訪れる人への洗礼となり、小生は上回生の迫真の演技とアドリブにまんまと一杯食わされたのである。

それ以来、小生自身もこの伝統をしっかりと継 承し、山小舎に初めてやって来た下回生、会社の 同僚、極めつけは細君まで、次々とこの意地悪 ジョークの生贄になっていただいた。林道終点か ら酒、食材を両手に一生懸命歩き通し、ニセ山小 舎の残骸を目の当たりした時の皆の動揺、ショッ クを受けた表情は想像に難くない。「エッ、 エッ、本当??」「前に先輩(山本)が来たときは何 とも無かったんですか?」「どうするんやぁ。こ こまで来て(泣き)」同行者は一様に首をうなだ れ、消沈して二の谷を上流へと上って行く。そし て図らずも数分後に本当のワンゲル山小舎を目の 当たりにし、安堵とも怒りとも何とも言えない表 情を見せる。中には動転し小舎の中に入っても、 他所の公共施設なのでないかと騙された自分を認 めず半信半疑の者もいる始末である。

実はこの「脇役」をテーマにしたことには理由がある。それは、自分が現役だった昭和の黄昏時、近い将来この冗談が現実のものとなり、我らの山小舎が本当につぶれてしまう日が来るのでないかと心配された時代があったということだ。当

時、築30年を迎えようとしている山小舎は明らかに声なき悲鳴を上げていた。すでに玄関と薪置き場の屋根は潰れていたが、その他に小舎1階奥の床は窪み、豪雪の影響で屋根の損傷もひどく、さらにトイレについては、いつ底が抜けて奈落の底に落ちる犠牲者が出てもおかしくない状態だった。小手先だけでなく大掛かりな補修が必要に作いたが、当時、会員数の減少に伴い存続の危機的状況にあった会としては、山小舎の最小限の維持管理(屋根のペンキ塗り、かまどの最小限の維持管理(屋根のペンキ塗り、かまどの屋根の防腐剤塗布くらい)だけで精一杯だった。実に不謹慎な話となるが、山小舎の未来をこの名もなきバラックと重ねてしまうのであった。

が、それは程なく杞憂に終わる。時代は平成に 移り後輩達が見事に、自分の想像を遥かに超える 山小舎の補修を実現してくれた。具体的には、3 代下のCL浅井君、世古君らが中心となり、まず トイレを移設新築してくれたのをはじめ、続いて 平成7年に高見、片桐、澤井君らの代が1階床と屋 根を改修、さらに平成12年の会消滅危機を乗り越 え平成15年にはCL大槻君、大野さん達が2階床 と外壁、窓枠、ドアを改修。2度の大掛かりな改 修を経て山小舎は見事に生まれ変わった。この影 には山小舎のリハビリに惜しみなく投資していた だいたOB諸氏の経済的援助があったことは言う までもない。さらに昨年のワンゲル50周年記念行 事で、山小舎の永続的な維持管理に向けた委員会 も設立された。

山小舎は今後も安泰に違いない。来訪者にあの 「脇役」もきっと語りかけてくれるに違いない、 「RUWV山小舎は未来永劫大丈夫だよ!」と。

(筆者の希望により「山小屋」は「山小舎」と 表記しています)



パソコンを前に寛ぐ筆者

現在、東北は仙台市に在住の筆者。八甲田、早池峰、焼石、栗駒、蔵王、月山、鳥海、吾妻など、行きたい山はいくらでもあると言う。「このワンゲル根性、一生直らないなぁ」と、言う筆者の述懐を聞くと、妙に納得してしまう。

ワンゲル根性、直らないなぁ!

宫村 俊弘 昭和42年卒

山小屋45周年? ムム……、山小屋が出来たのが 昭和37年。その1年後に入学して、ワンゲルに入った から、もうそんなに経ったんだ。小屋も……、自分自身

₹.....

当時は末川総長も健在だったし学園紛争もなく受験 後の自由な学生生活を過ごしていた。部員も200名く らい登録されていて、ワンゲルの溜まり場であった文 学部の清心館の屋上で合宿やパーワンの打ち合わ せ、雑談などで時間を過ごした。当時の懐かしい写真



清心館の屋上で、同期の連中と。右から4人目が筆者、左から2人目は2年先輩の四方さん。下駄履きがいるのはやはり時代だ

がある。そのうちに小屋へ行こうか、なんていうことになって、授業の後のバイトが終わると、出町柳から最終電車で貴船口へ。そこから月明かりのなかを歩き、二の谷を目指す。小屋では先発組に迎え入れられ、遅くまでよくしゃべり、議論を交わした。出来たばかりの小屋で快適だった。我々の回生が手伝ったのは便所とか水場、そしてその横のテーブルくらいのことしかないが、特に自分には山小屋ワークとして働いた記憶があまりない。楽しかったから忘れたのかそれともサボってばかりいたのか……。高校時代も山岳部の小屋が北山の芦火谷にあったが、ふるいし汚いし煙いし狭かった。それと比べればワンゲルの小屋はほんとうに快適な小屋で、雲泥の差であった——、そんなことまで懐かしく思い出した。

卒業後に小屋へ行ったのは20年後。大阪に転勤で 戻った年のお盆の頃、内藤らと家族で出かけた。東寺 の前で待ち合わせをしたが、大阪からの高速道の渋 滞で2時間も遅れたこと、仙台から引っ越してきたから 車にクーラーもなく、汗だくでひどい目にあった。

それでも小学生の子供たちが川遊びをしたりスイカを食べたりして喜んでくれた。山小屋は有難い。ここに来ると学生時代に気持ちが戻れるように思える。が実際には小屋へはなかなか行けない、ただ願望のみ強くなるだけだ。

若い頃、山はいつもテントを担いで登っていた。テントの生活が大好きだった。その頃は指定地もなく何処



でも好きなところに幕営出来たし、 飯盒で火も使えた。大人数の時は キャップファイヤーで、また少人数の 時は静かに火を囲み歌ったり話をし たりすることもできた。テントに戻れ ばローソクのやさしい灯かりがあり、 寝ながら星が見られて、誰にも邪魔 されずに居られる、下界から離れた 別世界だった。テントのおかげでほ んとうに自由に行動できた。だから 山小屋や非難小屋というのは山で 風雨に遭いテントから逃げる時の避難所とか、他の人に気を遣う居心地の悪い場所という思いがあって山にはテントが定番だった。

しかし、中年になった近年はテントを担ぐ元気もなくなったし、小屋泊まりの環境がすこぶる良くなったこともあり営業小屋を利用している。荷は軽くなり飯も作ってもらえて楽だし、ビールもあり便利ですごく助かる。若い時とは違い同年輩の登山者との会話も楽しみのひとつになった。燕山荘や五竜小屋、立山の雷鳥荘、どこも快適だった。それに下山後は温泉のある旅館へ泊まったり、観光したりして余裕のあるスケジュールで十分楽しんでいる。今ののんびり登山も、若い頃のがむしゃら登山同様、充実して楽しい。

1回生の10月、穂高へパーワン計画を出したことがあった。ちょっと危険ということで議論になった。ワンゲルと山岳部の活動範囲の違いとか、雪山はどうかとか、活発な論戦が展開された。でも、最後には先輩に無理するなよ、と見送ってもらえた、有難かった。入山中はずっと天候に恵まれ、快晴だった。ナナカマドが最高の時期に涸沢で幕営し穂高へ登った。予備日を横尾で1日過ごし辺見らとスケッチしたりして学生ならではののんびりした、何にもしない時間を過ごせた。そういえば上高地への道で山靴が、かぱっと口を開け針金でくくりつけて歩いた。今思い出してもすごく楽しいパーワンだった。



一回生のときの合宿。中央が筆者、左端が3年先輩の 野田さん。飯盒でかまどのもりを指導中

自由で楽しく4年間をワンゲルで過ごしたからこそ、 今もそのまま山や旅を楽しんでいる。しゃにむに登るだけの山から、身近にある山で花や野鳥を見つけたり温泉に寄ったりして気軽でのんびりした山登りになった。 大阪在住の時は六甲山や金剛山などよく出かけた。 今は仙台に居るので、手と足の指を使っても足りないほど、行きたい山がある。八甲田、早池峰、焼石、栗駒、蔵王、月山、鳥海、吾妻、たまに北アルプスや八ヶ岳へも行きたい。花なら大雪山、礼文や佐渡、尾瀬へもと思いは募る。

朝起きて天気なら「さあ出かけるぞ」、桜が咲いたら 咲いたで「さあさあ……」と心が騒ぐ。ン? このワンダ ラー根性、一生直らない。

# 私と北山(石仏峠)

「山小屋があるから、北山を知らない」――。 強烈な山小屋に対するアンチテーゼ。 ひたすら北山への自然回帰を図る。 これもまた、一つのワンゲル魂の発露である。

### 長田 和子 昭和44年卒

鳥取県の郷土紙・日本海新聞に勤めて、38年になる。この間、10回ほどの引越しをした。1度の倒産・再建も経験している。

倒産・再建の記憶が鮮烈すぎて、ワンゲル山小屋特集号の原稿をと要請されて困った。要請があるまで、ワンゲルと山小屋についての記憶がものの見事に欠落していたのだ。ワンゲルについては、平成15年に関

家」 木の枝で屋根を葺いた「我が



西の同期生が大山ロイヤルホテルに集合してくれて、 思い出していた。

しかし、山小屋となると、特記すべきことが思い浮かばなかった。『漂雲9号』に、「…取り上げなければならないのが、山小屋と北山研究会の役割です。北山を歩かない理由の一つが、山小屋に行って、みんなが北山を知った気分になってしまうことでしょう。それをうまく利用したのが、42年度11月ごろの北山研究会の小屋を基点にしたワンデリングであり、それが山小屋委員を中心に進められていることは頼もしい限りといえます」と、記しているらしいのだ。

そう指摘されてみれば、何やら長い原稿を書き、パーワンも出したことを思い出した。『漂雲』の発刊後、「わたしたちはもっと高い山に登りたい」との批判を受けたことなども思い出した。ありがたいことに度重なる引越しにもめげず、ワンゲル時代の2冊のアルバムが残っていた。人しぶりにアルバムを開いた。

昭和42年10月22日から24日、「石仏峠パーワン」「医 王沢泊」の文字と6枚の写真。3回生の時の写真だか ら、これが『漂雲』に書いた山行のようだということはわ かる。どうも自分たちで家を作って泊まろうとしたらし い。現実にテント代わりにしたらしい。写真の裏に「我 が家の前にて」と書いている。ところが、このパーワン の記憶も欠落している。石仏が峠の上ではなく、少し 斜面の下にあったぐらいしか覚えていない。写真を見 ると、立ち木の幹に、小さめの木を斜めがけにし、木の 枝で屋根を作っている。周りにはポンチョを垂らしてい る。一応、グランドシート(テントの床敷き)も持って行っ たらしく、入り口で写真に納まっている北村君(だったと 思う)が、「RUWV」と書かれたテントの備品袋を示し ている。別の1人は平野君だったろうか、もうひとりの名 前はわからない。木の枝の屋根を透かして見えたであ ろう月の光も全く記憶にない。また、サブリーダーがだ れだったのか、コースはどうだったかも思い出せない。 たぶん、めんどうがりの私のことだから、ピークハントも せず、山小屋-芹生-医王沢-石仏峠を往復したの ではないかと想像する。木馬道を下った記憶もある が、それは別の機会だったかも知れない。

北山をなんとか工夫して楽しみたいと、話し合った記憶がある。その工夫のひとつが今でいうツリーハウス、ハックルベリー・フィンの昔から、樹上の家も作られた。 石仏峠のパーワンの来たるゆえんである。

「野へ山へ、ワンダーフォーゲル」 - 広小路キャンパスで、こんなのどかな響きの立て看板に引かれて、同郷の友人といっしょに入会した。いざなぎ景気元年の昭和40年春のことだ。ワンゲル時代最初の写真は、「清掃day」。二の谷の出合い付近と山小屋、雲取山頂の集合写真もある。会員は総勢200人を超えたと思う。

私の行きたい山は、アルプスなどの有名な山ではなかった。1回生の夏合宿では尾瀬に行った。夕食後の散歩で、ニッコウキスゲの黄色い花咲く草原を歩いた。尾瀬の合宿では燧ガ岳にも登ったが、土砂降りの雨のなか、足元ばかり見て登り降りする山はつらかった。翌日の至仏山には登らなかったような気がする。



「我が家」の前で撮影した若き日の筆者(右端)

私の山は、郷里の幼少期を過ごした山のように、今でいう里山。冬前の柴刈りや、切り落とした雑木を大八車に乗せて帰る山。冬になれば、その木でひと冬の風呂や台所仕事をする。大八車に添っていると木の上でサルが鳴く身近な山であった。

60歳の今、私の楽しみは毎月、関西のワンゲル同期 生から届く遊心山荘報告と、クラシック音楽(声楽)のリ サイタルに行くことだろうか。遊心山荘とは、ワンゲル 同期生の持つ京都の奥にある別荘、そこに集まって、露天風呂やかまど、あずま屋をつくり、畑を作り、おじさんたちが遊んでいる。腰が痛くて力仕事が不向きな1人が広報委員長と称して、ユーモラスな報告と写真をメールで送ってくれる。それを読み、スポーツジムの温泉に行く。ささやかな楽しみが私にとってはうれしい。そして今年は、ワンゲル同期生会で新穂高温泉に行くという。地元の同期生を世話役に、集まる。私も、有名な穂高のある場所に行こうとしている。ロープウエーで行けるらしい。兄と私、兄の大学院入学で貧乏な学生生活を送ったが、スキー合宿にも行けない貧乏な学生生活があったからこそ、北山のほんのわずかな楽しみが一層楽しく、今も貧しさを楽しむ工夫をする。

人間とは遊ぶ存在であり、楽しむ存在であると書いたのは五木寛之だが、遊びに工夫を加えれば、なお、楽しいだろう。最高齢83歳の人たちの低山会に入ったり、社会人山岳会に混じって大山の冬山パトロールにも行った。楽しみはどこにでもあるのだ。

# 立命館大学ワンダーフォーゲル会卒業歓送会



いわゆる追い出しコンパの写真である。この年、昭和38年の卒業生は、吉原、薩摩、米田さんや学士入学して理工学部土木科を、つまり、立命館大学を2回卒業した大野さんらの卒業追い出しコンパであった。しかし、この写真は、それだけに留まらない。RUWV山小屋建設に従事した当時の4回生から1回生までのオンパレード、全員が集合した記念の写真だといえる。自力で山小屋を建設した自信が顔に満ちあふれている。まさしく、何かのエネルギーがオーラのように輝いている。

マイナス15度の軽井沢の冬の朝を博物館まで出勤する筆者

# 私にとっての山小屋

学校を卒業して、それぞれみんな違う道を歩んできた。人生一つひとつ違うのだ。ところが、青春を同じくしたものは何時まで経っても同じ所へ帰っていく。ワンダラーの帰巣本能は、まさに「山小屋」である。どこで、何をしていてもそれは変わらない。

## 木原純一郎 昭和41年卒

「青風童心」・・・・・・爽やかな風のような姿で、物事に動じず、童の心をもって森羅万象を観る。

出典は定かではないが、胸に沁みた。

齢六十三にして、なんと、素晴らしい言葉との出会 いであったのだろう。

軽井沢生活を始めて、三年目を迎えた時、この言葉 との出会いがあり、また、ご縁とは不思議なもので、 一軒の別荘住宅(築三十年位の古民家)の提供を受け る事になった。

いかにも、「軽井沢」といった環境の中に、その平 屋の建物がある。

私は、この住まいを「童心庵」と命名。

自然と親しみ、教えられたことの数々を思い出しながら、さらに、「**青風童心**」の気持をもって生活をしようと心に決めた次第。

昭和37年4月。熊本・天草から上洛して、立命館大学に入学。すぐに、ワンダーフォーゲル部(会)に籍をおくことにした。「部」といっても部室が在る訳でもなく、文学部の建物の最上階と階段踊り場が部室? "たまり場"だった。入学をして、早速の5月、花背スキー場にて、新人合宿があり、初めて「山小屋」の建設現場にも足を運んだ。

二の谷を沢づたいに歩き、木馬路を抜け、丸太の橋 を通り、現場へ。

「ここに、我々の山小屋が建つのか」 「先輩達も凄い ことを考えるものだ!」 が正直な感想ではあった。

貧乏学生であったゆえ、「山小屋・建設現場」にた どり着きさえすれば、"何か食い物にありつけ る……!"の思いもあり、鉄骨やセメント運びのボッ カに精を出したものである。

春から夏へ。夏から秋へ。そして、12月。

待望の「山小屋完成式」を迎えた。諸先輩のご苦労を考えれば、私のボッカなど、何の足しにもならないが、「完成式」の夜に末席にいる幸せは最高の気分であった。

「これで、終りではなく、今からが立命ワンゲル・山 小屋のスタートだ……!」と、多少、ろれつの回らな くなった先輩の"檄"が飛んだ事を、今でも鮮烈に覚えている。祝宴のザワザワした中であったが、確かに 耳に残っている。

この言葉こそが、営々と引き継がれ、そして、その 時々に一人ひとりの胸に刻まれて、今日まで「山小 屋」が見守ってくれた証なのであろう。

社会人となり、結婚をして子供が出来て、それでも「山小屋」は生活の一部であった。

三人の子供たちは、満一歳になるのを待って「山小屋」へ通ったものだ。

沢沿いにあるテーブルは、時には、子供の昼寝のベッドにもなったものだが、幼いながらも、自然と親しみ、泣き、笑い、遊びを覚えた原点は、他ならぬ「山小屋」だった。

学生時代。そして、社会人となって、"親父"になって……。

いつも、自然とともに遊べる喜びを感じたものである。今でいう「アウトドア・ライフ」の生活を目指したのも、すべては「北山の山小屋」からの出発にほかならない。

京都・高槻・滋賀・東京と生活の拠点を変えながらも40数年が経った。

零下15度にもなる軽井沢の冬は厳しい。

熊本・天草出身の私には「零下15度のDNA」は持ち合わせてはいないが、そこはそれ、立命ワンゲル魂とでもいうのか、意外な順応性で乗り越えている。

冬には冬の素晴らしさがあり、春には華やいだ空気が漂う。夏、木漏れ陽を抜ける風は"みどり色"。秋は静かさが覆いつくす。

四季を肌で、身体で感じることが出来るのは、やは り、「北山の山小屋」のお陰だとつくづく感じてい ス

良き仲間と出会い、良き先輩たちに教えてもらい、 後輩と語らった「時」を思い出しつつ、我が「**童心 庵**」での一杯も良いものである。

# 中国を漂う

#### 新疆ウイグル自治区の 葡萄園での筆者

# その原点こそ、北山と山小屋

遠暦を過ぎたものの、筆者はまだまだ現役のワンダ ラーである。チベット、雲南、四川と中国の自然を漂っ ているのだ。それは、北山や山小屋で放浪のDNAが 組み込まれたせいだと、筆者は述懐している。

松本 茂孝 昭和44年卒

「時雨に濡れた杉木立、梢の陰の赤い屋根、我が故郷の山小屋で…」と言う山小屋の歌を唄わされたのはもう40年以上も前の話です。昭和40年の秋、RUWV創立10周年の記念式典で山小屋の歌を披露するとかで1回生が狩り出されたのです。確か当時4回生の小野先輩が作られた歌だと記憶しています。音痴の私はみんなの迷惑にならないよう小声で唄っていました。当時は入学したての1回生、紅顔の美少年も今は還暦を過ぎた夕ダのオッサンになってしまいました。

京都北山、山小屋をベースによく歩きました。「北山 育ちの岳人」と言う言葉がありますが、私が山歩きを 覚えたのもこの北山でした。

地図の読み方、雨の中の火付け、ポンチョを利用してのビバーク、みんな北山で覚えました。山小屋は友との語らいの場であると同時に私にとってはトレーニングの基地でもありました。山の費用捻出、山の装備を揃えるため、当時は衣笠の学生食堂でアルバイトをしていました。9時に仕事が終われば叡電に飛び乗り貴船まで、芹生から灰屋川の源流、そして二の谷へと夜の山道を毎週のように歩いていました。当時のヘッドランプはコード付、これがよく断線したのです。月明かりをたよりに歩きましたが、沢では何度転んだことか。

その後、社会人山岳会でカモシカ山行の訓練もしま したが、夜の山道が得意となったのもこのお陰です。 今は中国に住んでいます。5年ほど前、日本に戻って いた時のことです。深川山友会という会で中高年の指 導をしていました。

谷川岳の縦走、中間地点でメンバーの一人が足をく じき予定は大幅に遅れます。日は暮れ、雨に風、当然 に月明かりはありません。深い熊笹に覆われた尾根 道、サブリーダーは道が判らず、泣き出しそうな表情で す。「笹を見るな、根元を照らせ、必ず踏み跡が見つ かるから」と大声でサブリーダーに指示、夜の10時過 ぎ、無事に山小屋にたどり着くことが出来ました。北山 での経験が役立っています。

多い年には年間200日くらいの山行、単位を落とし そうになりましたが、昭和44年、無事に4年で卒業で す。入社した会社では人事総務を20年ほど、ひょんな ことから中国事業の担当となりました。仕事は合弁企業の経営、瀋陽、広州、北京に住み、今は浙江省の金華(杭州から南に160キロメートル)というところに住んでいます。

中国に住んで11年と6か月、仕事もせずに旅と山と釣りに明け暮れているのは北山、山小屋で放浪のDNAが組み込まれたせいですかねえ。

先輩が言っています。「マルクス、ワンゲルで培われた精神、河原町デモの消化不良、これがお前の原点だ」と。

チベット、新疆ウイ グル自治区、内蒙 古、雲南、四川、青



雪化粧した、冬の長城



長城の見張り台でのテント泊

海と中国にはさすらいにもってこいの場所がたくさんあります。ザックを担いでの一人旅、尊い道などある訳ないのですが、山と自然があればそれで充分です。

北京に住んでいた頃はよく万里の長城を歩きまし



稜線に沿ってどこまでもつづく長城、 手前は筆者が所属する燕京山の会のメンバー

た。北京の北辺には2,000メートル級の山並みが連なっています。この稜線に630キロメートルにもおよぶ長城が残っています。

観光地化されていない自然のままに残っている長城、草木が生い茂り、風化してゆく長城、凛とした静寂があります。急峻な稜線に築かれた長城、両手を使わなければ登れないほどの険しさです。よくこんな所にこれだけのものを作ったな、という驚きを感じます。

自然に溶け込み、悠久の時を伝える長城、稜線に沿ってどこまでも続く長城、その雄大さに浸りながら崩壊した城壁で見つけた一輪のアザミの花、「山をやっ

ていて良かったな」と思うひと時です。

長城には一定の距離で城楼というのがあります。2階建てになっていて下層は兵士の宿舎、上層は見張り台と戦闘台を兼ねています。日本の城で言えば櫓みたいなものです

ある時、この見張り台にテントを張って 泊ったのです。幾人かは城楼の中で寝 ました。ちょうど10数人が寝泊りできる広 さです。長城守備の兵士は10数人が一 組となり、この城楼で寝泊りしながら敵の 襲撃に備えていたという話です。

長城の守備兵になれば給料は普通の 兵士の倍、2年とか3年の任期なのです が、攻めて来なければ儲けもの、ひたす ら任期中に襲来がないことを祈っていた そうです。日本の防人と同じ気持ちでは なかったのでしょうか。

海外遠征、冬山、岩登りと色々なジャンルの山を やってきました。インドネシアのリンジャーニ、チベット の山々、氷河がある雲南の玉龍雪山、一人で歩いた 新疆のゴビ砂漠、たくさんの自然に出会いましたが、や はり落ち着くのは深い緑と素敵な谷のある風景です。 二の谷から山小屋の赤い屋根が見えた時にほっとす る気持ち、あれと同じです。卒業後も毎年のようにテン トを担いで行った京大の演習林、由良川の源流、今で も一番好きな自然です。ここに戻るのは北山で山歩き を覚えた山屋の原点かな、と感じています。



25年前の山小舎内部。後で立っているのが筆者

### 新歓コンパの思い出

ワンゲルに入って初めて小舎に入った日。それは新人歓迎コンパだった。上級生の優しい扱いが、やがて意図あるものに変わってゆく。心細げな新入生が、山小舎とともにたくましいワンダラーに変身していく、懐かしいあの頃が読者にもそこはかとなく伝わってくる。

サークルの新入生勧誘の看板が立並ぶ広小路 キャンパス存心館前。

どのサークルに入ろうかと迷っていた私に声を かけてくださったのは、法学部4回生の中田さん であった。

- ・「いい日、出発(でっぱつ)」と書かれたベタ な立看板。
- ・体育会でも同好会でもなく、校舎の屋上踊場が ボックスという学内での位置づけ。

- ・OG故高野悦子さんの存在。(「二十歳の原点」が文庫版化され、学生運動の残り香が微かに漂うキャンパスにおいて高野悦子さんは伝説のヒロインであった)
- ・そして何よりも、あの貴船の北方、雲取山に山

小舎があること。

そのような説明を受けた瞬間、私の心はワンゲルへと傾いたのであった。

さて、ゴールデンウィークを丸々潰した新人合宿の翌週末、山小舎新歓コンパが催されることになり、待ちに待った初入舎が実現することとなった。

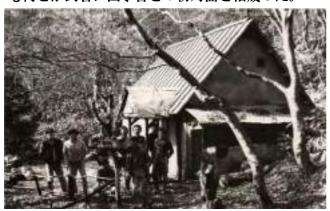
昼過ぎに出町集合。

今はなき「出町厚生会」ですき焼の具材を購入。伏見の銘酒「明けごころ2級」を寝袋で大切に包み、勇んで叡電に乗り込んだ。

貴船口下車。

私の所属する庶務渉外Bの先輩、荻野さんが駅で買ってくださった「橡餅」を頬張り、山小舎までの3ピッチがはじまる。

ベンツが行き交う涼しげな貴船の料亭街を通過する時点では、皆はじめて訪れる山小舎に思いを馳せてバンバン歩いていたが、2ピッチ目の芹生峠に向かう途中のお地蔵さんあたりから息が上がりはじめ、二の谷を遡上する頃は無言となり、最後は、意地悪な先輩達から当時山小舎の手前にあったプレハブ小屋を山小舎だと騙され、キレながらも何とか到着、山小舎との初対面と相成った。



入口の庇、増設された薪置き場。改修前の姿がよく わかる山小舎

しかしながら、杉木立の中、ひっそりと佇む山 小舎は、何とも言えない伝統の香りを醸し出して おり、ひどく印象的であった。

2回生がつくってくださった(新歓ということ で待遇がいい?)すき焼を力いっぱい!お腹に入 れると、いよいよ新歓コンパのはじまりである。

ここで「腹いっぱいのすき焼と大切な明けごころ」の意味を理解することになるのであるが、最初に生協食器が用意され、そこに日本酒が並々と注がれて乾杯が行われるのである。

続いて、新人が一人ずつ自己紹介を行い、2杯目を飲み干す。3杯目は新人対抗早飲み競争。そして勝者は祝杯、敗者は罰としての4杯目へと突入していく。

当時の生協食器をご存知であれば「並々4杯の 酒量」について想像に難くないと思うが、腹いっ ぱいのすき焼が緩衝となったのか、事故に繋がる ことはなかった。

その間、30~40分程度で、新人達は酩酊状態となり、北山の自然にすき焼とアルコールと稀にアンモニアの混ざった肥料を撒き散らしたり、意味不明の言葉を発しながら暴走したりで、しばらく喧騒の時間が続くこととなる。

新人の介抱は2回生の重要な仕事であるが、新 人がようやく寝静まり2回生が何とか着席できる 状態になれば、第二部のはじまりとなる。

この後は、2回生以降の記憶にもとづくことになるが、当時はブロックの対抗意識が強く、なかでも装備ブロックと庶務渉外ブロックはクラブ内の立同関係。

片方が「エリート装備」とのたまうと、すかさず「クラブの柱は庶務渉外」と切り返す、ブロックソング対決(装備は鉄腕アトム、庶務渉外はエイトマンの替歌)はコンパ恒例となっていた。

続いて、富山さん直伝の「日立節」、塚越さんの「大好き様」、吉村さんの「ステップ t o ザ装備」などが演技とともに披露され、時折天井板間から降り注ぐゲロのシャワーを避けながら、春歌や山の歌、アニメソングに艶歌を交え、延々と宴が続くのであった。

そして宴もたけなわ、寝ているものをたたき起こし、校歌、応援歌、寮歌、エールでクライマックスを迎えることとなる。

今でも、立命スポーツのエール交歓などに望む と心が熱くなるのは、ワンゲル時代、合宿で、コ ンパで、京都駅で、熱唱した思い出が染着いてい るからであろう。

それにしても、よく食べ、飲み、大声で歌い、 語り合ったものだと思う。

新歓コンパの後、夏・秋のワーク、PW、回生合宿・コンパ、合ワンなどで度々山小舎を訪れることになるが、奈良女子大学との合同ワンデリングでは、いくつかのカップルが誕生し、渡辺君と奈良女の岡野さんのお二人におかれては、我ら同期の結婚第1号となるなど山小舎は仲人役としても大きな役割を果たしていた。

数年前、会員がゼロとなり、ワンゲルの存続が 危ぶまれた時は、故郷がなくなる思いで心を痛め たものであるが、「ワンダーフォーゲル同好会」 として復活し、後輩達が元気に活動している今こ そ、我々〇Bは一肌も二肌も脱がなければならな いと考えている。

多くの人々の想い出を刻んできた「伝統の香り」を後世に引き継ぐためにも!

(文中の「山小舎」は、筆者の希望によりその まま表記した)

# 取って置きの山小屋への道

# 山小屋はただ、貴船、花背から入るだけのものではない。こんなルートで入ることもできるのだ。ちょっ

周山街道から芹生へ

いかにも年月を経てきたと思わせる桜の 古木・常照皇寺庭園の「九重の桜」

と行ってみたくなる春先のドライブ。

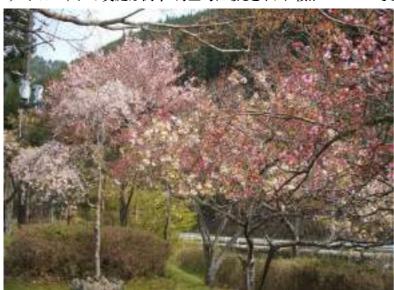
1996年4月20日の土曜日。早朝友人二人とドライブに 出かけた。桜見物をしながらの贅沢な山小屋へのルート だ。

京都の西、嵯峨野嵐山の保津川は、上流の亀岡より先を大堰川と呼んでいる。大堰川は愛宕山の西側を大きく迂回するが、東に流れる支流の清滝川は、京都の洛西、紅葉で名高い高雄、槙の尾、栂の尾などがある。

まず手前の高雄で下車、神護寺の山門をくぐった。奥の 金堂まで登ってみたが、ボタン桜はまだ二分咲き、山門 すぐ右手前の枝垂桜は五分咲きだった。

神護寺を出て下っている時左側奥、北東の槙の尾の西側の壁一面に野生の躑躅が咲いていた。うっすらとピンクの霞がかかったようで、見事だった。4、5人のカメラマンが道路から谷越えにアングルをとりファインダーをのぞいていた。槙の尾の西明寺の山門の両脇には沈丁花が咲き匂ってわれわれを迎えてくれた。この西明寺を下って清滝川の橋を渡ると、目の前に料理旅館が現れ、そこの枝垂れ桜は見事に咲いていた。栂の尾の高山寺では、鳥羽僧正の鳥獣戯画を見学し、そこから下る途中北山時雨に出会った。

さらに車で北上すると北山資料館に着く。ここの北山グ リーンガーデンの奥庭は例年5月上旬になるとボタン桜が



北山グリーンガーデン奥のボタン桜 (2006年4月30日)

### 鈴木 正博 昭和39年卒



2006年4月30日の葛木(手前が筆者)

満開になる。この日は前裁の築山に植えてある白梅は満開だったが、石楠花や20本近くあるボタン桜は蕾さえも目にすることはできなかった。そこで川端康成の小説「古都」の舞台となった北山杉の里にちなんで、二人姉妹のブロンズ像の前で記念写真を撮り、資料館では北山杉の歴史などを勉強した。

そこから周山街道に出て、栗尾峠を下ると京北町、府 道477号線と分かれて常照皇寺の参道を登る。境 内の九重の桜は少し桃色がのぞきかけた程度、当 然ボタン桜や石楠花は蕾もふくらんでいない。

井戸から下黒田はもう苗代の準備を始めており、 のどかな田園風景の一本道だ。これをさらに東進す ると、道路脇に黒田の百年桜が現れる。やや濃い 目のピンクで、大阪造幣局の通り抜けにも3本提供 したほどの優れものである。一見の価値あり。

上黒田からは灰屋川沿いに南下するが、この山道は狭く、車のすれ違いができないところもある。雪の重みで電線が道路に垂れ下がっている。貴船方面に折れ曲がった林道を詰めると、芹生の里の手前に突然桜の木が10本ほど、庭に植えた民家が川向こうに出現する。ここが葛木である。例年ゴールデンウイーク頃に桜が満開になるが、この日はまったく咲いている気配がない。芹生分教場跡を抜けて三の谷へ車で向かったが、勢龍神社の先、別荘風民家の前で女性が道路の雪をかいていた。この

雪を乗り越えて先 に進むが、次は 杉の倒木が道を ふさいでいた。こ れを取り除き、さ らに進むがまたま た杉の倒木、これ はバッサリ折れて 道をふさいでい る。その先も、崖 崩れで土石と残 雪が行く手を阻 扩。

歩で山小屋に向 ズ像がある かった。花をめぐ



仕方がないの 川端康成の「古都」の舞台となっ で車を置いて徒 た北山杉の里。二人姉妹のブロン

りながらの山小屋行ではあったが、昔のボッカ道は矢張り 徒歩を強いられた。

二の谷の出合いから霰が本格的に降り出した。 炭焼釜 跡地、昔のテント場を通り過ぎたところで、突然オスの雉 がバタバタと飛び立った。樹林には残雪がべったり残って おり、径に落ちた杉の枝が歩行を妨げた。しかし杉の木 の根元は周囲に根あけ現象が見られたので、春の気配 は感じられた。山小屋は床板、梯子などが新しい板木に 代わっていた。

帰路は貴船神社、二軒茶屋、京産大を過ぎ、ゴルフ場 の満開の桜を車中観光して上賀茂神社に到着、流鏑馬 をする芝生に座り、いまや盛りの紅白の枝垂れ桜の下で 喉を潤した。芝生の上には花弁がほとんど見られない旬 の開花期に居合わせた幸せ。神前結婚の二組を眺めな がら、山小屋にも寄れたし、最高のお花見ドライブを楽し むことができた。このルートを大事に、何時までも続けら れることを願っている。

# 登山家になった日

な北山のなかで、



初めて山小屋へ行った日、40年ばかり前のこと、筆 者は登山家になった。激しい雨、増水する沢の徒渉、 厳しい自然に遭遇して、人は大きくなっていくのだ。 そのころへのノスタルジーが文中にあふれている。

#### 泰山 下博 昭和44年卒

2007年3月30日午前5時(年をとると早起きにな ります)、急に雨が降り出し風が吹き雷も鳴り出 しました。まだ夜明け前ですが大音響とともに 光った瞬間、自分の影が部屋の隅に大写しになっ て恐ろしいです。トイレのドアがカタカタ鳴りま

出町柳発の京都バス。デザ インは今も変わらない

す。窓に額をくっつ けて外を覗くと街灯 に照らされた水が波 を打って走っていま

40年前初めて山小 屋を訪問した時もこ んな突然の嵐に歓迎

されました。今出川の小さなスーパーで粉末 ジュースとコッペパンとラーメンを買って、出町 柳10:00発広河原行きのバスに乗りますが乗客は ほとんど全員がハイカーで満員です。現在も10: 00発広河原行きは健在ですが、いつも2、3人の乗 客です。

鞍馬を越えると人家はありません。バスは花背 峠をあえぎながら上ります。上りきったところで 小休止(エンジンを休めるため)、僕たちのメン バーは4人だったと思いますが、大阪出身の僕、 京都、東北、九州出身のメンバーで、このときに は立命館は全国区だなあと誇らしく思いました。 言葉は僕だけが標準語で、あとは変な京都弁と、 地方なまりの強い仲間でした。

僕はハイキング用のキャラバンシューズに毛糸 の靴下、バッジのいっぱいくっついたチロリアン ハット。九州の友達は学生服に白のズック靴(今 風に言えばスニーカー)、学生服のボタンは出身 校の校章が入っています。立命館の金ボタンは高 いのでそのうちに付け替えるといってましたが、 3回生までそのままでした。東北の友人は長髪で ビートルズのようにカッコいい青年でした。花背 農協前まで立ったままです。

学校の前から花背スキー場跡(40年前すでに雪 不足で閉鎖していました)を左に見て杉木立の間 をどんどん上ると30分ほどで寺山峠、水飲み用の 金属のコップが下っています。雨模様で湿気が多いのか、のどの渇きは無いのですがせっかくだから一口飲むととてもおいしい、本当の水の味がし



写真上は峠への入口にあった中学校、現在は小中一貫校 に、同下、夜中酒を買いに走った農協は郵便局に

ました。この当時の大阪の水はひどいもので薬の においがしていました。

峠から少し下って、一の谷に出合った瞬間、一陣の風が吹いて杉木立の足元に広がる羊歯の葉が真っ白な裏を見せたとたん、雷鳴とともに大粒の雨。合羽も傘も役に立たない横からの雨です。濡れるに任せて一生懸命歩きます。先輩たちの労作でしょうか、ぬかるみのところには倒木を二、三本並べてありますが、今は役に立ちません。ただひたすら足元を見つめて歩きました。ようやく谷との出合い、一「三の谷」です。いつの間にか「二の谷」は通り過ぎていました。二の谷は意識的に橋もかけない、道標も立てないそうでした。

二の谷への進入路は水かさが増し岩伝いに渡れません。やけくそにジャブジャブ腰下まで浸って 渉りました。よく流されなかったものです。

濡れついでに雨風の中を泳ぐように歩きました。もうこれ以上濡れることは無い、やけくそです。どれが沢か道かわかりません。左に朽ち果てた炭焼小屋を見つけもう少しだと安心しました。コケに足をとられながらも右に左に跳ねながら一時間あまりもかかったでしょうか、視線を足元から前方に移したとき赤い屋根を見つけました。

小屋の中は真っ暗で何も見えません。土間に薪

ストーブらしきものと黒ずんだやかんが見えます。とりあえず「着替え」といっても何も持っていません、全部脱いで、もちろんパンツもびしょびしょです。雑巾のように絞るとたっぷり水が滴り落ちました。絞ったタオルで体を拭いて、もう一度濡れた衣服に手を通すのですが、あまり気持ちのいいものではありません。先輩から聞いた通り体温で乾かします。

もうベテランの登山家気分です。じたばた騒がずにそっとタバコに火をつける。ふっと吐き出す煙に大人の香りがします……。残念ながら四人ともタバコはたしなみません。でも気付け薬にとサントリーレッドを一口、のどが焼け付くようです。嵐で外の竈は使えないのでストーブに火を入れることにしました。

古新聞を突っ込み薪を突っ込んでマッチをするのですが新聞とマッチだけが燃えてなかなか着火しません。ようやく目がなれてきた小屋の中は煙で充満、外で空気を吸って息を詰めてうちわであおぐ、の繰り返し。一時間あまり悪戦苦闘、何とかお湯を沸かしてチキンラーメンの夕食。チキンラーメン一個35円。屋台のラーメンが50円でしたので結構高価でした。

二階の屋根裏部屋は暗くて恐ろしいので、一階の隅にアメ中のシュラフ (アメリカ軍の中古で死体を入れて運んだと聞かされました) に包まって寝ます。でこぼこでじけっとして気持ちよくはありませんが朝までぐっすり! 今は快適な枕と快適な布団に包まって寝ますが、それでもよく寝付けません (年はとりたくないですね)。朝シュラフから抜け出すと体中に鳥の羽 (羽毛ではありません) がくっついていました。

雨はすっかり上がっています。小屋の左から便 所の横を40分ほど登れば雲取山(911メートル) です。三等三角点がありますが灌木に覆われ見通 しはあまりよくありません。一晩で大きく成長し た登山家四人は元の元気な声を出して三の谷から 芹生に向います。

芹生の村は今は2、3軒の料亭があるばかりです。こんな山奥の不便な、しかも高そうなお店、どんな人が利用するのでしょうか? 誰かのおごりで一度行って見たいものです。学生時分は貴船の料亭の前を通るごとに、そのうちにこんなところで同窓会をしようなと話し合ったものです。話がそれました。三の谷から芹生谷に出てまず目に入る古ぼけた鳥居と小さな広場、「菅原伝授手習鑑」のモデル『寺子屋』跡です。藤原氏と菅原道真の葛藤、死んでなお怨み続ける、怨霊となってたる。歌舞伎、浄瑠璃、日本文化の根本のような遺跡があったにもかかわらずただ弁当広場として利用しただけです。

しばし40年前の懐かしの山小屋行きにタイムス リップしてみました。 君が野田君、右に奥村君、左に向来野田君宅の前で打ち合わせ、中央



# 若き日の野田君を想う

「ボン」と呼ばれ、だれからも愛された野田氏は、人一倍自分に厳しい行動をとってきた。PWでは単独行の鬼であり、ボッカではだれよりも担いだ。いま、遺された者は、毎年彼を偲んで、山小屋詣でをしている。この15年間、1度も欠かしたことが無いのも、両者の間に作られた太い絆によるものだ。

### 鈴木 正博 昭和39年卒

#### RUWVでの活躍状況

同級生の野田明夫君は府立山城高校から現役 で入学してきた。西陣の糸屋のぼんぼんと言う ことから「ボン」と呼ばれるようになった。純 なところがあり、浪人して入学してきた同級生 や1年先輩とPW(パーワン)に同行するうち に、人間性において「同級生、先輩の人物がで きている! のに比べて、自分がいかに未熟であ るかと自分を追い詰め、過酷なことを買って出 たり、PWの頻度を増した。また、1年先輩が 色々教えてくれるが、自分が後輩を指導する時 にそれらができるのかと自問し、単独行も計画 して、体力・技能を高めるため、WVべったり の学生生活を送っていた。そのようなRUWV 内での位置付けにあって、山小屋建設がスター トし、3回生の中心メンバーとして、かつ、自 宅が西陣であることから、山小屋建設作業に加 わる回数が飛びぬけて多かった。

あるときセメントの追加購入や食糧品・雑品の購入で、芹生の前田さんのトラックを出してもらい、京都市内に出かけた奥村、向来君と私は、当時連絡場所となっていた西陣の野田君の家に立ち寄り、立ち話で打ち合わせしている写真がある。

また何でも快く引き受けてくれる彼には大変 世話になった。完成式の前日、昭和37年12月8 日は不戦の集いが行われていたが、本校の校門 左横、藤棚の下でブリキ製の簡易ストーブと煙 突を、最後のボッカ隊リーダーとして山小屋へ 担ぎ上げてもらった。この後私は、末川総長の 自宅で奥さんから揮毫を受け取り、オオトリの ボッカ隊として、鞍馬駅から夜のバス道を担ぎ 上げた。

### 90年7月、悲報に接して

1990年平成2年7月30日(月)9時12分、西陣の同級生、国定宏司さんから私の職場に同日付の京都新聞1枚がFax送信されてきた。新聞には、29日午後4時半頃 撚糸業野田明夫さんが

由良海水浴場で遊泳中におぼれているのを近く にいた友人が助けて、人工呼吸したが間もなく 死亡したという内容であった。葬儀の日取りは 後日お知らせしますと通知してきてくれ、即刻 同級生10人余に連絡した。この国定君について は、児玉君と一緒に、第一次同級生名簿の整理 作業を手伝ってくれた。それは前年の秋、つま り、平成元年10月15日付で発送した名簿であ る。国定君は奥村君の1年下で、野田君の1年上 であった。現役中のワンゲル活動には余り参加 しなかったが、西陣にもう一人同級生がいるこ とが判り、野田君が彼と連絡をとることになっ た。平成2年8月19日一緒に山小屋に行く約束を していた間柄である。国定君は山小屋建設の始 めの頃のボッカには参加していたが、山小屋が 完成したことまでは知らなかったと言っている 旨を、ボンが平成元年10月26日投函の手紙で私 に報告してきてくれている。一方の、国定君も 平成元年11月3日付の手紙でボンから「もしや 貴方は39年卒のRUWVの人ではないか?」で 始まり、4、5通の手紙の交換をしていると 言ってきてくれた。結果的に、この二人の山小 屋行きの約束は実現しないままになっている。

### お墓参りと山小屋詣で

その後今日まで、このボンの平成2年の通 夜・葬儀に参列した39年卒業および前後の回生 の有志10人余は、みんな卒業して25、6年目を 迎えており、50歳前後の企業における中堅どこ ろの戦士であって、日々忙しくしていたが、人 生を振り返る年齢と言うのか、毎年お墓参りを 続けるようになった。

そしてそれは、一種パターン化して、9月の第一土曜日の午後3時、京阪電車の五条駅の改札口に集合して、清水坂の大谷廟にお参りし、その後清水寺に登り、境内に入った直ぐの茶店で串焼きだんごにビールを飲み、下って祇園湯、ここが閉店してからは団栗温泉で汗を流し、祇園乙部の「金なべ」で偲ぶ会をし、二次会は河原町蛸薬師東入るの「邯鄲」でカラオ

ケ、校歌、応援歌、寮歌をがなり、団結を確認 して「金なべ」に戻って仮眠。日曜日早朝、祇 園甲部の喫茶店でモーニングを食べ、出町柳の



野田君の命日に大谷廟にお参りして、そのあと祇園 「金なべ」で、有志が彼を偲ぶのが毎年のことだ

地下通路で弁当、ビールを購入して、7時50分 発の広河原行き京都バスに飛び乗り、寺山峠、

二の谷コースで山小屋入りし、帰路は芹生峠か ら貴船にくだり、山小屋建設時代は羨ましそう に素通りしていた貴船神社横の「喜らく」で風 呂に入り、川床で再度私たちの絆を確認して乾 杯し、帰宅の途につくのがつねである。

ボンが亡くなって16年が経過し、15回のお墓 参りを続けてきたことになる。数人居た同級生 の京都人もみんな出払い、京都市内での会合よ りも、39年卒の有志10人前後は現在大阪市内難 波の近くで年2、3回の会合をもっている。リタ イヤして第二、第三の人生を始めていること、 山小屋完成から45年が経過した今日、年齢や時 代にあった山小屋PWを企画しても良いのでは ないかと話し合っている。「ボン」が西陣で生 きていたら、もっと変わった山小屋入りがあっ たのかもしれない。

川山

床帰

彼の冥福を祈る。



ス木丸 タ山 立小 や屋 日 貴へ か 船友 北 のを 川訪 時 床ね 水し

亡 山 き に 来 友 7 想 貴

人水 1= 1) 0 大 貴 舞友 思 妓 船 雨 ひ 侍 0 で 床 語 中 せし る 床 賑 でや な川 船 船杉落武多深章船弘か陽飲か芳嬉床 博道雫っ男し雨弘川ーな三むさ文しや

客足

八の

屋野句 〜田の 行氏よう た墓な

# 山小屋を介したOBの絆

同期の絆は強いが、縦の関係が深まらないと言われている。しかし、RUWVには50年の歴史があり、蓄積がある。ここは各人で知恵だししたいところだ。例えば、筆者は山本達郎君と25、6年の差があるが、昨年の記念集会前後からHPで意見交換するようになった。同様に、今を去る50年前の創部者・鎌田克則氏とも先輩OBと言うだけでえにしを深めることができた。要は、besitateすることなく、一歩が踏み出せるか否かではなかろうか。

### 鈴木 正博 昭和39年卒

畑中健君のHP漂雲RUWVの掲示板 2005.07.09付 [113] [114] で平成3年卒山本達 郎君が彼らの仲間内の立命ワンゲル50th委員リストを告示しています。その前後を含めて彼等はR UWV創部50周年の集いを成功させた「翼を荷っ



山小屋で遭遇した現役、山小屋ワークの人たち。前 列中央が筆者、山本君は前列右端

てくれました。文中で「最近、本HPの投稿が少ない! OB各位、観るだけでなくhesitateせず投稿を!」と呼びかけています。これを見た私は、2005.08.13付〔119〕で「114山本君に賛同します。」と言う標題で、私たちの仲間の現況報告をしました。すると、山本君が〔133〕で「小生、現役時代に貴殿とは4回ほどお会いしたことがあるのですが、時間と空間を越え、このようなコンタクトすることが可能な文明の力に改めて感謝しています……」と言ってきてくれました。

確かに、昭和63年9月17日、私は急に山小屋に 行ってみたくなり、出町柳発の京都バスに飛び 乗ったところ、私の大阪の山仲間が車両の前方に 10人程乗っており、一の谷の京都工機の山小屋に 宿泊する予定、同じく、バスの後方にはRUWV 現役が10人強乗っていたのを発見。頼もしく思っ た次第である。彼らは、山小屋ワークで入山する 予定であり、掃除したり、ペンキを塗ってくれた りしていました。このように補修し、維持管理してくれている現場に遭遇できて、嬉しく思ったものです。

また別の日、平成元年のGWに、鞍馬から静原 に出て、関西電力の鉄塔下の石楠花紡道から大原 へ抜けるコースをまた一人で行った時、石楠花は すでに八分ほど散っていて残念に思いつつ古知谷 のバス停に下ったところ、ブルーのおそろいのユ ニフォームを着たRUWV現役30人ほどが、グ ロッキーになってへばっているのを目撃しまし た。聞くと、連体を利用して新人合宿をし、その 帰路だと言うのです。ところがバスの便が悪く、 大原までの4キロを歩こうと誘ったのですが、彼 等は動こうとはせず、結局、彼等の乗ったバス は、私を追い越さずじまいでした。

OB諸氏も山小屋へ行かれた折などに、現役や若いOBの方々とドッキングされることがあったことと思います。学年が離れている場合など、なかなか打ち解けて話することはないでしょうが、同じRUWVに所属していたということで25、6年の差を越えて、このえにしを大切に、山の中は当然として、下界でも積極的に働きかけることによって、より強い絆が形成されるのではなかろうか。例えば、この山本君から平成元年9月3日付で送られてきた手紙を、ご本人の了解を得て披露したいと想います。

拝啓 空の青さもなんとなく秋の気配が感じられます。六月の〇B総会ではお世話になりました。 私は合宿を終え、今は今月の下旬に行う山小舎ワークの準備で多忙の毎日を過ごしております。

さて、昨年山小舎で写しました写真が出来上が りましたので送らせて頂きます。 O B 総会の時に このことをご指摘されまして、大変恥ずかしく想 い、翌日直ぐにフイルムを持っている先輩に連絡 をとり、お願いしたのですがなかなかやってもら えず、結局こんなに遅れてしまった次第です。申 し訳ございません。併せて、昨年の末にお送りい ただいた山小舎の資料のお礼も言わせて頂きます。あのコピーは大変役に立ちますので、大切に保管していきたいと思っています。〇B総会の時に「漂雲」作成のためのカンパをしていただきましたが、このことを他の会員に報告すると、みんな大喜びしました。ああいう場に出席したことは、自分にとっても勉強になりましたし、我が会のためにもなったと思います。なかなか〇B会と結び付きの弱い我が会でありますが、また機会があればお声をかけていただければ幸いです。

RUWVは、問題が多く残され、苦しい現状でありますが、弱音をはかず、会員・同力をあわせて会を、そして山小舎をこれからも守っていくことを誓い、失礼させていただきます。

平成元年9月3日 RUWV第33代CL 山本達郎

さらに、上下のOBを結び付ける事例として私 の現役時代に経験したことを提示してみよう。

その相手は、私たちRUWVの創立者3人の中のお一人、鎌田克則先輩である。時は私の現役4 回生の秋、昭和38年10月4日、就職活動で上京した時、先輩の職場を訪ねていく動機となった手紙を、これまたご本人の了解を得て、披露することにしたい。

前略 山小屋建設に当り御活躍の報を聞き、大い に喜んでいます。ワンゲルも発足して6年余り、 小さいながらも山小舎まで建てるまでに成長した かと思うと全く感無量です。この気持ちは、発足 当時の連中には皆共通していることでしょう。実 社会に出て毎日あくせく暮らしている僕等には、

"山小舎建設"の報は、全く夢のような明るい ニュースです。いつか訪れる機会があるかと思い ますが、それまで僕のイメージに合った小屋を、 オアシスの様な小舎を、ひっそり建てておいて下 さい。僕は四月より東京本店勤務となり、東京に 移りました。東京へお越しの折は、八重洲口より 五分、訪ねてください。それから蛇足ですが、二 の谷は蛇の多い谷だったと記憶しております。

PLE

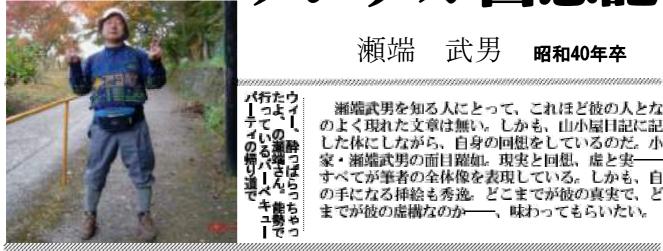
この手紙の書かれた日付は定かではないが、昭和38年の春から初夏頃に頂いたものと想われる。 なお、この日先輩は仕事が終わった17時半からビルの地階でRUWVの現況を聞かれ、いまだ事故がないのを不思議がるとともに、会員数が増えたことである程度の組織化も止むを得ないと言ってもらい、山小屋が完成したことには大変な嬉しがりようを示された。そして同日21時には、35,38年卒大野照夫、37年卒三島邦夫、同木村明生、38年卒山田正、牧野幹男、大原清さんの7人が集合して、神田の中華料理店"おけい"で歓待していただいた。23時に三島、牧野さんと大原さんの国分寺の下宿に行って、翌日1時40分頃4人で雑魚寝したことがある。

これらの共通項は全て「RUWVOB・現役で ある」ただそれだけである。hesitateすることな く、はじめの一歩を踏み出してみてはいかがだろ う。



イラスト=森村 征男 (昭和37年卒)

# ワンゲル回想記



昭和40年卒

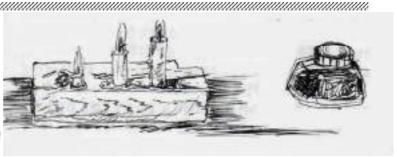
瀬端武男を知る人にとって、これほど彼の人となり のよく現れた文章は無い。しかも、山小屋日記に記述 した体にしながら、自身の回想をしているのだ。小説 家・漸端武男の面目躍如。現実と回想、虚と実─ すべてが筆者の全体像を表現している。しかも、自身 の手になる挿絵も秀逸。どこまでが彼の真実で、どこ までが彼の虚構なのか――、味わってもらいたい。

昭和40年元旦、辻田と山小屋で合流。彼の 持ってきたボータブルラジオから流れるロイ ヤルフィルハーモニーの「君よ知るや南の 国」を聞きながら、ローソクの灯を頼りにこ れを書き始めた。辻田は早くも明日の花背ス キー場での初滑りを頭に描いてシュラフに 入ってぼんやりしている。僕はその機で、粉 雪の降りしきる音をかすかに聞きながら筆を

とった。4年間のRUWVの思い出が走馬灯のよ うに心の中を駆け巡っている。その日々を追憶 し、山小屋日誌風に書き残すこととした。こんな 気持ちになったのも、ワンゲル4年間を楽しく やってこられたからだと思う。

僕がワンゲルに入ろうとした動機は二つある。 つは大学生活において有意義な時を過したいと 思ったこと。二つ目は、やはり自然が好きだっ た。そして友達も欲しかった。そんなわけで昭和 36年の春、1回生の時ワンゲルに入会した。確か 3番目の受付にいたコワイおじさんの前で入会金 を払った記憶がある。皆と同じように最初は本当 に戸惑いの連続で、ボックスに行っても誰にも相 手にされず、寂しい日々を過していた。新人歓迎 が湖南アルプスであり、初めて会活動に参加し た。そう思い出すと、その当時の3回生の吉原さ ん、薩摩さん、2回生の高木さん、野田さんなど の顔を見ただけで何かこわい人たちだなあなどと 思ったものだ。

そうこうするうちに5月のGW期間中に比良山 の新人合宿で米田さんのパーティに入れられた。 強い雨の降る日に比良山の正面谷をヒイヒイ言い



ながら登った。途中、後もう少しというところ で、足にエレキを起こし、山田正さんに足をもん でもらった。そのときの感激、本当にうれしかっ た。望武小屋では70人余が一堂に会し、ミィー ティング。先輩たちの野次や黄色い声の中で、僕 は「もしかある日」を歌う。村上が「黄金虫は虫 だ。」と歌ったのが懐かしい。あのときのミィー ティングが一番思い出深いものになった。薩摩さ んの八宝菜、山であんなにおいしいものを食べら れるとは想像もしなかった。そんな新人合宿も、 今は僕の胸の奥深くになってしまった。

6月は秦リーダーの下、20数人で雨の中、比良 山清掃に行った。その時の取材記事が朝日新聞に 載った。7月に入るや、待ちに待った夏山合宿 が、北アルブス黒部乗越周辺で行われた。僕は岡 田さんがリーダーの上高地―絵ヶ岳―双六―三俣 蓮華一黒部乗越のコースに入った。何しろ、七貫 ほどの荷物を初めて担ぐので、果して行けるのだ ろうかと案じたものだ。案の定、上高地を出発し て30分も経たないうちに冷たい汗が滲み出し、頭 がぼんやりしてくる。穂高の素晴しい眺めもうす れて見えた。梓川沿いの素晴しい道、草のにお



い、未知の世界 の与えるあの妙 に楽しい雰囲気 が、いくらか肩 の荷の重さをや わらげてくれ た。45分で5分体

みのピッチ、どうやら第1日 目の石室へ息も絶え絶えに 到着。佐藤と二人で脱走の 計画を立てたが、逃げる決 心も山の魅力には勝てな かった。初めて見る槍ヶ岳。 が遠くのほうに突っ立てい る。苦しい登りがつづく。 数生小屋を過ぎて少し行っ たところで今度は両足にエ レキ。肩まで200メートルの 地点だ。口惜しかった。田 村が駆けつけて肩の小屋ま で運んでくれた。槍の肩に たどり着いた時のうれし さ。何と言って表現したら



よいかわからないが、スカッとした気分になっ た。こんなに近い青空は見たことが無かった。感 激をはがきに書いて小屋のおやじに托した。双六 小屋のおやじ、黒部乗越の大ファイア。そして雨 の3日間、沈殿で都第と大橋がけんかする始末。3 時間かかって雨の中でやっと飯ごう一発の飯を炊 いた。四分の三に塩をぶっ掛けて食った。新谷の 飯の食うことの早いこと早いこと。帰りは湯俣に 下り、野天鳳呂で山の良さをしみじみ味わった。 **星がなんときれいだったことか。蝉の鳴き声、川** の音、吹き出る汗、こんなすばらしいものとは思 わなかった。長い長い軌道を1日たっぷりかかっ て患いた。途中木陰でパンを食べ、はるかかなた の山々を眺め、七倉までの素晴しい「日だった。 雲ノ平にはいけなかったが、素晴し山の醍醐味。 夏山が好きになったのもこんなところにあるのだ ろうか?

10月には回生別合宿・赤目四十八滝の奥にある 曽爾高原であった。四方がリーダーだった。 生ばかりが集まったこの合宿、やはり団結心が 育った。大草のアメ中の服が懐かしい。試験の心 配もどうやら去り、冬休みの掃除株式会社のアル バイトで得た金を使ってスキーの道具を買い入 れ、スキー合宿へと心が弾んだ。南小谷の清さん の家が合宿所、あんなにたくさんの雪を見たのは 初めてだった。スキーにも大分慣れて、あのくら いなら使もとほかりにリフトに乗ったのが運の尽 き。何しろ直カリしか知らないときに、ただ、下 へ向かって ・直線。あの ・本松のある池の田ス キー場だったのが悪かった。滑っていく真正面 に、でんと控えた松、勝手にしろとばかりに構へ と方向を変えようと思ったが、新雪の中に突っこ んだ。気が付いたら見事に片方のスキーがボキ り、泣けたね!!

部屋は2階のスケベエ部屋、あちらの方面に襲 味を持っている人達ばかりの部屋。その時の4回 は高塚氏、三嶋氏、2回は野田、増田、1回は四 方、信田と今から考えてもぞっとするような 面々、思うにその時の体験が現在の僕を形成して いるのか? その当時はつゆ知らずスキー場から 帰ると、皆でエロ本を奪い合う始末。野田さんな どは他の部屋からパクッてきたエロ本を、寝床に 山と積んで丹念に研究していたっけ!! この時あ たりから四方と仲良くなる。2人で風呂に入りな がら、その頃流行っていた「五万節」の替え歌を 作り、酒宴の席にて発表、女の子が逃げて行って しまった。参考までにここでご披露しよう。

中学出てから14年 今じゃ立命のワンダラー 山の帰りのつれづれに 破いた処女膜五万枚

中学出てから14年 今じゃ立命のワンダラー 学校帰りのつれづれに かいたへんずり五万回 と、どうもあまり露骨過ぎていけない。しかしこ の歌は僕にとっては懐かしい思い出になってし まった。

さて、いよいよ僕も2回生になった。昭和37年3月の旧人合宿は、北山のこの山小屋の建設作業開始であった。僕も3月28日頃から入り、××(作業)をずっとつづけてきた。飯場の生活は本当に最初は面白くなかった。しかし、4月に入り皆とも話をしだすようになり、面白さも増してきた。

・日の作業の終わる頃、皆は鼻をくんくん鳴らし ながら晩飯のできるまで火のまわりを囲んで、夕 バコなどふかしながら、夏山のこと、メッチェン のこと、ワンゲルのことなどを話し合った。今か ら思えば、じつに貴重な時間だった。晩飯が終わ ると、それぞれのテントの中では、デザートをほ おばりながら、またもやメッチェンの話など、 ローソクが尽きるまで話し合った。そして朝にな ると、ふたたびボッカ。そうこうしているうち に、とうとう4月13日まで留まってしまった。山 を下りてボックスに行くと、長く伸びた饗と、風 呂に入っていない体とが皆の注目を集めた。クラ ブ唯一のメッチェンだった森本さんからは、「ど この■■■が来たのかと思った」と、はなはだし い侮辱を受けた。それは、学校を忘れさせるほど の魅力があったのだ。2回生になって感じたの は、やはり新人が入ってくるのだからしっかりし なきゃと思ったことだ。山から下りてきて四方の 下宿のそばのバー(バーと言っても、昼間はパン 屋のおかみさんが、夜のアルバイトとしてやって いたもの。〕に行って、長い山での生活のアカを 落とした。この年の新人歓迎会は広沢の池だった かな、やけに新人のでかいのが目についた。今か ら思ったら、木原を一番よく覚えている。あいつ め、あの頃から売込みがうまかった。「天草はバ テレン出身の木原純・鄧です。」などと盛んに売 り込んでいた。

時刻は昭和40年1月2日、午前 0 時15分。そろそ ろ眠たくなってきたから、今日はここまでにして また明日の晩書くことにする。(あゝ、ねむ た。) 雪を見ようと窓をあけて見る、なに? 15センチばかり着っているではないか。ボータブ ルラジオからは乙女の祈りが流れてくる。—— ちょっといいでしょう?

スペイン狂詩曲、彼女とダンスをしている想 い。ものすごくいい音楽を流しているので暫く聞 くことにする。

グリーク:ソルベーグ、ヴァイオリンのきれい な旋律

カリンカ:最後の曲になりぬ。

さあーて、寝るか!

午前1時。ボーン、新生アワー。話し手、フ レッド・ピー博士。

今日は信仰の話。信仰は心のうちの太陽であ る、決断である。不信仰は氷である。......

い、いかん。もう寝よう、こんなことやってたら寝られやしない。

1月3日、ただいま時間は午後6時25分。小屋に いるのは僕・人だ。別に寂しさは無い。昨日の晩 から今日の朝6時まで、辻田と徹夜で語り明かし てしまった。お互いの心の中まで立ち入って話し た。有意義な夜だった。誰か2人くらいで山小屋 に来て話し込んでみると、忘れられない夜にな る。1月3日の午前6時頃からウトウトしだす。起 きたのは11時頃。辻田は花背のスキー場へ出かけ て留守。また、また、チキンラーメン。午後1時 半頃、辻田が村田と友達を連れてスキー場から山 小屋へ帰ってきた。4人で餅を食べ、日光浴など するとスイスのホテルにいるような気分になる。 3人はその日に帰るというので、誰か来る事を願 いつつ、先回りして花背のバス停まで行ってみ る。バスは来たが、一人も降りず、残念なり。す ごすご引き返す。寺山の下りで辻田等とすれ違 う。小屋に帰ってみると、高取が友達を連れて来 ていた。一升ビンをさげてくるあたりなかなか気 が利いている。でも彼らが帰ると、小屋も急に静 かになってしまった。夜はまたまた、ラーメン (排出物がラーメンみたいになっていないか心 配)。たらこを焼いて飯を食い、ハイライトをふ かす。ウマイ。辻田の置いていってくれたボータ ブルラジオをかけながら、また、回想記を書き始 abtz.

昭和37年のGW、僕が2回生の新人歓迎合宿の 時の印象は、気恥ずかしい気もちがあった。今ま で僕達が最下級生だったのに、その下に新入生が 入ってきたので、なんだかおかしな気持ちだっ た。新人合宿は花背スキー場で行われた。その頃 は、やはり新人にエエカッコをしようと思い、派 手に振舞ったように記憶している。雨に祟られ、 スキー場にある小屋を借りてミーティング。秦さ ん、奥村さんのデュエットが今でも懐かしく思い 出される。

山小屋建設の方は着々と進んでいた。僕も事情の許す限り、あの頃は毎週土日には××を志願していた。山に入ると、ほとんど酒を飲んだ。僕らの周辺の連中が酒好きなのもこの辺から来ていると思う。あの頃はいわゆる7回年、大先輩のクマさんがまだ現役と同じ様にバリバリ張り切っていたのが日についた。夜テントの中で酒を酌み交わすとき、クマさんの酒の看はいつもキャベツを手でむしりとって塩を付けて食べるやつだった。酒が切れると、誰かが農協まで走らされた。

山小屋建設中はあまりパーワンにはいけなかった。初めてリーダーとして1回生を対象にしたのが六甲パーワンだった。総勢18人、大月地獄谷の滝の手前でテントを張る。初めてのリーダーだったので、夜は目がさえて眠れなかった。そのうち雨が降り出し、土砂降りとなったので、やむなく引き返したことを思い出す。この時、ボリの女たらしを知った。女の子をひっかけること十何人……。その一人ひとりの思い出を話したので、新人たちの人生観がコロリと変わってしまった。僕も同じだった。

6月には四方をリーダーとして大江山に出かけた。その時のヒッチハイクは懐かしい。お宮で泊まり酒を飲む。岡垣、田村が泣き上戸で手がつけようが無かった。翌朝、雨が降り出し、ガスまでかかってきたので、頂上アタックを断念。それから、前夜の酒の席で、ふもとで買ってきた生きたままのニワトリに、首に紐をつけて歩かせ、その後高校時代の生物部部長を自負する四方が料理をして、へんてこな料理を食わせられた。

時間は午後7時過ぎ。ちょっとこの辺で休憩する。今、久美悦子の裏町小唄をやっているから……。「わたし・人を置き去りに、死んでしまったお母さん。雨の降る日は、辛い日は、おそばへ行って暮らしたい。!!」

さあーて、そんなこんなで過しているうちに早くも夏山合宿の季節が来て、クラブも活気付いてきた。昭和37年、僕が2回生の年の夏合宿は、東北の飯豊朝日連山と決定した。早くも心は飯豊朝日の山々へ飛んでいる。その後のパーワンも楽しみの一つであった。さっそくボックスに東北・周のパーワン用紙のでかいヤツを貼ってみなの注意





を促した。確か20日間ぐらいでまわるやつだった と思う。費用がかかるというので、結局それは中 止になり、橋本のパーティと一緒に行くことに決 定する。

いよいよ合宿である。僕は飯豊山の東赤谷コースになり、リーダーは2回生だった西田(晃)で、僕はサブをつとめることになった。総勢10人、一回生には西田、木原がいた。

大阪発、朝7時の鈍行で新潟の新発田というと ころまで行く。汽車の中では女の子を口説き落と すのに ・苦労、奈良女のメッチェン4人、北海道 へ行くとのこと。

夜になるとへんてこりんなばあさんたちが、お 経みたいなのをちんちんやりだした。そのばあさ んに安曇節を教わる。新発田到着で、もちろんお 別れ、彼女たち・人ひとりと握手。「気をつけて ね。」「荷物重いでしょう。」などと優しい言葉 が今でも忘れられない。

その日1日、ジャリトラの通る道を十時間の ロード。その日のテントは半湯温泉。最初から野 天風呂とはついていると次の日の行動も考えず に、どっぷりつかってまった。翌日のしんどかっ たことこの上なし。何しろ、様子状の急坂の連続 で、しかも暑さも暑し、水筒の水も昼前にはすべ て空になる始末。昼過ぎにやっと、真っ黒い雪渓 を発見して、感極まった。食器に雪渓の雪を入れ て、上からソーダラップをぶっ掛けて、思わず3 杯も食ってしまった。その後も雪渓を食い荒ら し、とうとう午後4時頃には僕は猛烈な下痢を起 こしてしまった。

次の日も快晴で北股岳直下のものすごい見晴ら しのよい場所にテントを張る。利倉のビーマンの 油料理が僕の下痢を治した? その夜は、満天の 星を見ながら、夕暮れの一時間ばかりを歌で過し た。遠く下の方には飯豊温泉の光がきらきらし始 める頃、いつの間にかしっとりとあたりを夜露が 濡らしはじめた。

「星が降るあのコルを グリセードで あの人は 来るかしら……」の歌がピッタリだった。いまだ にこの歌が好きだ。翌日パーティは飯豊本山の方 ヘパーワン。僕がテントキーパーとして残り、 山々の呼ぶ声を一人で聞いた。奥村パーティ、増 田パーティ、相次いで到着。みんな真っ黒であ る。しかしその顔に若さがあぶれていた。翌日は 5時間の下り、膝が笑って仕方がなかった。飯豊 温泉にはもう誰かが入っていた。ここは野天の混 浴であった。東北には混浴が多いと本では知って いたものの、こう早くお目にかかろうとは……、 うれしかった。よく見るとおばあさんが2人、前 も隠さず、すたこら歩いているではないか。 ·選 間の禁欲生活に僕は、恥ずかしくも興奮してし まった。

日に焼けて、顔の皮さえ剥けるぐらいに焼いた 足を、なかなか湯につかれず、全身をつけるのに 30分もかかってしまった。まったく色気も何もな かった。しかしこの時こそ、合宿の意義がわかっ たような気がした。「今、皆も同じようにあの辛 い思いをしみじみかみしめているんだなあ。」と 思うとジーンとするものを感じた。一週間の汚れ 物を洗濯などしているうちに、奥村、増田パー ティが降りてきて、同じように焼けた足をつける のにキーキー言いながらはいっている。じつに楽 しい風景であった。

夜になると、それぞれ今までの辛かったことを話し合って、ビールを飲みながら願いでいる。翌日、下界の蒸し風呂の中を半日テクる。蝉の声が懐かしい。ムーッとする草いきれ。夏山なればこそのものである。小国小学校には、はや朝日の連中が来ているではないか。そのうち総勢80人あまりが元気で、飛び込んできた。裏の川では一週間の汗を流している。小学校の講常の板の上にごろりと機になると何か家が恋しくなった。こうして使にとって、飯豊朝日の合宿は今までの山行の中でベスト3に入るものになった。

その後のパーワンは疲れていたのでやめにして、・人で松島あたりまで行くことにした。その前に、どこかで骨体めしたくて、タンクローと2人で滑川温泉に向かった。小国駅で3回生連中を引き連れて温泉へ。山奥にあるいわゆる湯治用の温泉だった。建物は2階建てで、がっちりとした木の造りでなかなかいい温泉だった。ここでもビールを・人頭2本づつ飲んで、早くも3回生はぐでんぐでん。面倒を見るのはタンクローと僕。・人ひとり隣の部屋に寝かせた。ご苦労さんでした。さぞかし、苦しかったんでしょうなあ!! ビールを飲みながらの反省会でも、自分の言いたい放題のことを言い合っているのを見て、僕はうらやましかった。本当に告仲がいいのだ。

さて、いよいよ僕はこれからタンクローと2人 で出かけることにする。

→続く、別のノートに。

※大変残念なことだが別のノートが見つからない。従って、僕の回想記もこれで終りです。

# 二の谷の伝説



二の谷の出合いてあった貧弱なもみじ、そして雲取山の鬼の 話。それらはたんなる作り話に過ぎないけれど、山小屋は現実 にそこにある。45年の歳月を経た今も、後輩たちの手から手へ 受け継がれている。それらを今懐かしく思い出す。二の谷のもみ じにまつわる話と山小屋、虚と実が、渾然と仕合わせな形で作 者の中に存在している。

## 松久 昌司 昭和41年卒

1

二の谷の出合いに ・本のもみじの木があった。 幹が 細く、葉が色づくころになっても鮮やかな朱にはならな かった。

いつのころか分からない。あるとき、高貴な女人と侍 女、そして小者が二人、花背から寺山峠を越えてき た。芹生の風へ行くものと思えた。

姫君は、足許に難儀しながら、それでも動から単む とえ)の小袖をかぶり顔を隠していた。行き交う人とて ない山中である。たおやかに風になぶられている布 を、白い指がしつかりとつかんでいた。

寺山峠から、尾根伝いに行くと雲取山、峠を下ると、 順に ・の谷、二の谷、三の谷と出合う。雲取山から合 流したそれらの谷は、さらに、芹生の里で灰屋川となっ た

二の谷の出合いが近づいてくると、先ほどからの時雨 は細い雨にかわった。

「このあたりで休みたい」

螈は、暮れめ間に芹牛にたどり着きたいと案じている 従者を尻目に、もみじに自分の小袖をかけていた。休 息しながら、螺は二の谷の方をじっと見ている。

雲取山には鬼が棲んでいる、といら噂があった。もち ろん、花背の里人は寺山峠の上り口にも近寄らなかっ た。鬼は夜毎に都へ出て、貴族の館を襲ったり、食べ 物を食い散らしたり、女人をかどわかしたりした。

しばらくすると、姫君は思いつめた様子で、こう言い 放った。

「しばらくここで待て。わらわは雲取山に用がある」 「姫様、なりませめ」うすうす様子を知っているらしい侍 女は、泣きそうになって制止した。しかし、きかめ気の 蝦は侍女をふり払って、「戻らめときは、芹牛に下り、ど こかで泊めてもらうように」と言いのこして、行ってしまっ た。空の明るさが西に移っていくと従者たちは、じっと姫 を待っているわけにもいかなくなった。残された三人は 無言で立ちあがった。芹生のほうへ歩きながら、後ろ髪 ひかれる思いで侍女が振り返った。もみじに慰けた小 袖に上空から光が落ちてくるようだった。周囲をあかる く染めて、もみじの木が輝いていた。

消えてしまった姫君がだれで、雲取山でどうなった か、だれも知らない。姫君は、都で鬼の呪(まじな)いに かかったのだ、そして、誘われるように家を抜け、鬼の もとへ走ったのだと、花背、芹生の里人は囁きあった。

二の谷の出合いのもみじは、以来美しい朱の葉をつけるようになった。何年か過ぎて、このもみじを「衣懸けのもみじ」と里人は言い合った。小袖をしっかりとつかんでいた姫君の美しい白い指も、雲取山の鬼の話もすっかり間かなくなった。

都では新しい帝がお立ちになり、それからの年月長く 静謐が保たれたという。——

二の谷の出合いにあったあのもみじは今でもまだある だろうか? 半世紀近く前のもみじ、僕らがボッカした り、小屋へ通ったその折々に僕らを見ていた、あのもみ じだ。

長い歳月が流れたあとも、僕はこの話を思い出す。二 度ばかり、誰かに話したような気がするのだが、誰だっ たろうか。もう思い出せない。きっとどこかの女の子に軽 口のつもりで話したのにちがいない。

「それ以来、このもみじのことを『衣懸けのもみじ』と土地 の人は言い伝えているのさ」

口から出任せの話だから、彼女たちは、醒めた反応 でうなずくだけだった。

 $^{2}$ 

大学に入ったばかりの頃、僕は周辺の地名の美しい 字面に惹かれていた。花背、芹生――京都だなぁ、鄒 びた場所なのに雅やかな呼称が残っている。もともと楼 は地名の由来を探ったり、土地土地の民俗について聞 いたり、読んだりするのが好きだった。

最近、京都在住の澤潔氏が著した「京都北山を歩く」 という本と出会った。それは、北山を愛した著者が豊富 な史学と民俗学の知識を駆使して書いたものである。 後書きには ・九九 ・年夏に「八十路のよわいを重ね る」とあるので、健在かどうか分からない。同氏は、旧制



京都二中から京都府師範学校・立命館大学史学科を 卒業されて、その後市内の小・中・高校などで教鞭をと られる傍ら、北山を歩いてこられた。そして著したのが 「京都北山を歩く」である。

それによると花背の「花」は、端を意味する。「大堰川 上流の端をなす別所谷や山桝谷に位置するところに由 来する」、また、花背の「背」は、「セ」(狭)で、谷の迫っ た狭隘地のことだという。

澤氏は、さらにつづけて、花背の本来の住民は藤井姓(海人族)で、そこへ物部姓の・族が入ってきた。今でも物部姓が十数軒あるという。

RUWV五十周年の集いの際、会場入口付近に展示 された白黒写真の中に、現地副香をした場面の写真の キャプションに「物部」氏の文字を見つけて、僕は思わ ず「あっ」と思ったことであった。

物部氏は朝鮮からの渡来系で、製鉄、産鉄とのかか わりが深い。さらに言うと、雲取山周辺には山砂鉄、川 砂鉄を産して、大平谷には製鉄所があった。それは藤 井一族から受け継いだ物部氏の製鉄所だといわれて いる。大平谷は「ダイタタラ谷」の転訛した「タイタイラ 谷」であって、花背別所を吹き上げ吹きおろす谷風や 山風を利用した野ダタラの設置場所として絶好の地理 的条件下にある、——というのだ。

さらに、余談だが、澤氏の著書の中に興味深い記述 を見つけた。西行法師がかつて花背か芹生に住んで いたというのである。 「山家集」巻上(冬)に「世を遥れて鞍馬の奥に侍りける に」という詞書から、 侍期鞍馬の奥の花背別所か、芹 生の別所に住んでいたと推定されるという。西行は「筧 こほりて水まで来ざりける」と書いている。花背や芹生 の冬ならば、さもありなんと思わないか? 僕らが何気 なく歩いて過ぎた花背や芹生に西行が ・時期穂んで いたかと思うと、それだけで、僕は胸がわくわくするの だ。

――、それはともかくとして、澤氏の著書を読んでいて、そうすると、雲取山に鬼が棲むという僕の赤う話も 漢更でもないなぁ、と思うのである。

(注=末尾書照)

3

大学を卒業して、十年以上も山小屋へ行く機会がなかった、いや、もっとだな、二十年も経つだろうか? どういら経緯かはもう定かではないが、高松に住んでいた水野(41年卒=故人)と、お盆に山小屋で会おうということになった。そのとき、彼には二十歳前の子供が二人いたから、僕らは四十過ぎだったんだ。三の谷の出合いに車をとめてバッキングをしていると、水野も到着。彼は軽装で、小屋泊まりの僕らとちがって、素軽く登っていった。僕らは、カミさんとまだ小学生の男の子二人で、ゆっくりと出発した。そして、小屋に到着すると、水野たちが紅茶を淹れて待っていた。小屋で飲む紅茶っ

て、何年ぶりだろう。うまい! と思いながら、互いの近 況など話し合った。

しばらくして、水野たちは下っていった。別れ際の水 野の捨て台詞。

「学生時代から変わらない、俺とお前の差はな、松久、 分かるか?」

水野はつつけた。

「同じ京都に来ても、俺はホテル泊まりだということさ」 彼は、颯爽と小屋を後にした。

相変わらずの水野の憎まれ口を聞きながら、何年ぶりかで会えた懐かしさが先に立っていた。その水野は すでに幽界の人である。

4

小屋での経験は子供たちにとっては大冒険の連続だった。夕飯も無事に終わって、腹も膨れた。外の食卓に暗いローソクの灯を点して、話していると、この木にカプトムシは来るかなあ? ここ登っていくとどこへ行くの? などと彼らの好奇心がふくらんでいくのが分かった。ずっと話していたいけれど、そういうわけにもいかないので――、

「さあ、おそいからもう寝ようか」

と皆を促して小屋へ入り、寝る仕度をした。さすがに 疲れて、子供たちはすぐに寝るものと思っていたが、ど うやら寝付かれないらしい。しばらくすると――。

「お父さん、ボクの手の上を何かが匍ったヨ」」「ボク も……」「ふとんの周りに、何かがいるヨ」

ローソクに火をつけて、周りを見た。



「ゴキブリ!」 次男が叫んだ。

「いや、ゴキブリではない、竈 馬(かまどうま=写真)だ」こ れは長男の声。なるほど、丸 い体に六本か八本の足が出 ていて、うようよ匍っている。

竈馬は俳句の季語である。歳時記には「いとど」などと出ていて、中村草田男が「小飛びにいといは闇へ湿りけり」と詠んでいる。これだと、まだ秋の夜の風情を感じさせてくれる。 匹だけ迷い出てきて、人の気配に闇にまた帰って行ったのだろう。

ところが、こうたくさん居ると秋の風情どころではない。 「いとど」などと言っている間はいいが、こいつの別名は 「便所継縁」とも言うのだ。しかもうようよと出てくると、実に気味の悪いやつらだ。とはいえ、いつまでも便所継縁 ごときと睨み合っているわけにもいかない。子供たちを 寝かせなければならない。

「手足を布団の中に入れて、目をつむっていれば寝ら れるから」

手足をふとんの中に入れても、今度は顔の上を伺い まわる。堪らず、タオルを顔にかぶせてみた。死体が四 つ転がっているような、妙な景色になった。みんな竈馬 のことを忘れて、必至に眠ろうとしていた。それからも子 供たちは寝付かれないのか、寝返りばかり打っていた。 それは像も同じだった。 長男がのちに述懐したところによると、あの晩彼は本 当のゲームの世界にいたのだ。取るに足りない小さな モンスターが、あとからあとから彼のパーティを取り囲 み襲ってきた。モンスターは斬っても斬っても際限がな かった。まるで「ドラクエ(=ドラゴンクエスト)」の世界を 彷徨っているようだったと言う。——

子供の朝は早い。

気持ちのよい、朝のまどろみの中で、僕は子供たちの 声を聞いていた。遠くから、甲高い声の応酬が届く。 難した声だ。何かあったのか、飛び起きて外へ出た。

次男の素っ頓狂な顔、どこで見つけたのか魚取りの 網を持っている。その網は、中にはいったものの重みに 耐え切れず、網の部分がダラッと垂れている。青い色 の網から透けて見えるのは、茶色の、ぐにゃぐにゃした ものだ。

またしても好くない子感! どうしたんだ、と子供に近 づいてみると、次男は別段変わった様子もなく、ただ重 くてたまらんとばかりに、僕の前に網ごと投げ出した。 グ チャッと音がして、網から不恰好に匍い出してきたもの の正体は――、子供の顔の二倍はあろうかという蝦蟇 であった。このあたりに蝦蟇がいるなんて、聞いたこと がない。

「どこで見つけたの?」

**上の方!**」

「怖くなかった? あんなの見たこともないだろう?」 「うん、でも怖くなかったよ、重たかっただけ!」

朝飯の用意ができ、食事が終わった頃はもうお昼前 だった。

「そろそろ帰る準備をしようか」

と小屋へ入ってパッキングにかかる。さあ、小屋ともお 別れ、と末川総長揮毫の額を何気なく見上げたとき、 僕は一瞬息をのんでしまった。額は右から左へ「青山 迎人新」と書かれているが、「青」と「山」の字の間に、だ らりと垂れ下がったものがある。

あっし

と思った瞬間、子供が叫んだ。

「蛇が脛皮したんや」

昨夜のあの悪夢のような暗闇の中で、蛇は脱皮をして、悠々と退散したのである。青大将だろうか? それともヤマカガシだろうか? 今、進行中のほうがまだよかった。皆で騒ぎながら、遠巻きにしていればいいのだ。あの、竈馬騒ぎで、みんなが寝付かれない夜を過している最中に、蛇のやつは悠々と脱皮したのだ。僕らとは二メートルと離れていない場所で、僕らを見おろしながら――、おお気味の悪い!

5

こうして、僕たち家族の山小屋宿泊は、どこに行って も味わえないスリリングな体験となった。子供たちにとっ ては、冒険心を十分満たすものであった。しかも、その 山小屋はただの山小屋ではない。お父さんが学生時 代に、自分たちで作り上げた小屋なのだ。 子供たちの心の中にきちっとしまってもらえただろうか? そう思いながら、不思議な満足感にひたりながら、帰路についた。

僕たち家族の山小屋宿泊は、また後日識がある。

夏が過ぎて、秋のはじめごろ、カミさんがしきりと机に 向かって何か書いている。聞いてみると、山小屋のこと を書いているのだと言う。

「小学館と日本児童教育振興材団が、童話を募集して いるの、広募してみようかと思って」

と言う。

数日がたって、「出来上がったから、見てくれる?」 と、原稿用紙四枚ほかりを僕に差し出した。タイトルは 「お父さんの作った山小屋」。読んでみると、夏に山小 屋へ行ったことを、作文にまとめたものであった。 「これは童話じゃないなあ、ただの作文だよ」

傷はそう言って、素っ気無く返した。しかし、彼女は応 募したのだ。

それからまた、四、五か月が過ぎた。山小屋のことも

童話のことも みんな忘れ てしまったこ ろ、・通の 封書が舞い 込んだ。

封を開けた カミさんが、 突然 奇声を 発した。声が 上ずってい



る。どうしたと尋ねると、応募した童話が佳作に入選し たのだという。わが家の唯一の金字塔は、今も書斎の 本棚に鎮座している(=写真)。

「ヘーえ、何がよかったんだろうね。単に、山小屋に家 族で行ったというだけだよ」

と、カミさんの快挙に、まだ懐疑的である。興奮して、 応募要領など持ち出して見ているカミさんからそれを取 り上げて読んでみた。テーマは「わが子におくる創作童 話」。

お父さんの作った山小屋――、ん? なるほど、素材 がよかったのかな? 何となく浮世離れしていて、選者 に童話らしいファンタジックな雰囲気を与えたのだ。お 父さんの造った山小屋へ、家族で泊まりに行く。だいた いこういう発想が、童話としてのファンタジーなのかもし れない。 ・体全体、どこの世界にお父さんの作った山 小屋があるだろうか? たしかに現実世界では起こら ないことかもしれなかった。

そして、行ってみると、非日常的なことが次々とまきおこる。「お結びころりん」とか「不思議の国のアリス」みたいではないか。ウーン、偶然とはいえ、すごいファンタジーである。それをすべて彼女は見越していたのであろうか。

あの時の山小屋宿泊が、僕の家族にいろんな思いを 残しているのだ。それが、ただ、山小屋に泊まったとい うことだけではない、特別な山小屋での、特別な思い 出、それが心の底に静かに堆積しているのだ。

6

四十五年前、年端もいかない青年たちの・念が、作りあげた山小屋。それが完成してから、どれくらいの人が訪ねてくれたろうか。OBはもちろんのこと、OB以外の仲間もたくさん来ただろう。僕のように家族連れもやってきた。犬も来たかもしれない。

機はこのエッセイを書くにあたって、インターネットでR LIWVの山小屋がどんな風に記述されているか、検索 してみた。そんなに多くヒットしたわけではないが、雲取 山へのハイキングで、二の谷を下り、山小屋の前を通り かかると、そこにいた人たちが紅茶をすすめてくれた、 と言うような記述があった。OBの中に、きっと思い当た る人がいるのではないだろか。さらに、雲取山が人で いっぱいで二の谷を下ったハイカーがだれもいない僕ら の山小屋の食卓を拝借して、昼食をとったという話も あった。山小屋周辺はこざっぱりとして、よく整頓されて いたのであろう。それは、後輩たちの努力の賜物でも ある。

僕らの山小屋が、ただ僕らだけのものでなくなっている。 立命ワンゲル〇Bの友達として小屋へ来た人たち、 通りすがりに小屋を眺めて過ぎた人たち、それらの人 たちが、僕らの山小屋を心に留めてくれている、という 勝手な想像は、僕だけの思い込みかも知れない。 でも 信じていたい、僕らの山小屋を通り過ぎていった人たち が、心の中にしまいこんで、何かの拍子に思い出してく れていることを——。

二の谷の出合いにあるあのもみじ、姫君が小袖をかけて消えたもみじだ。美しく鮮やかに色づいた紅葉は、 僕もまだ見たことがない。

もみじの話は出任せの、伝説でもなんでもないホラ話 だけれど、二の谷の僕らの山小屋は、存在している。

そして、口から口へ伝えられ、これから十年後、二十 年後も存在しつづけて、やがて一つの伝説になるかも 知れない。

「眉若き児等」の情熱が生んだ小屋だ。 完成から四十 五年が経過し、「眉若き児」の、その眉にも白いものが 見られる、すでに逝った者もいる。 建設に当たった者た ちが、年とともに・人、二人といなくなっても、小屋だけ は北山の緑の中に在って、「人を迎える」だろうか?

しかも、周囲の山小屋が廃屋となっていく中で、建設 した者も、遺産として残された後輩たちも、きっと信じて いる。この山小屋がやがて つの伝説となって、僕らの 心の中で光を放つことを。

山小屋そのものが「伝説」に昇華してゆく日を僕らは 心に描いている――。 (了)

この・文を、青春の・ページをともに適し、そして、早 く逝ってしまった辻田君、水野君、菊内君、西田君たち に捧げる。

注・参考文献=ナカニシヤ出版刊。澤潔美『(地名語源・歴史伝承と民俗をたずねて)京都・北山を歩く3』



山小屋が完成して45周年を迎える。それを契機にして、「漂雲」山小屋特集号を出版しようという機災 高まっている。建設当時は血気盛んな若者だったOB諸氏も、ほとんどの方が、65歳から70歳前というま になろうとしている。RUWVの創立50周年記念の集いが、からすま京都ホテルで2006年10月に開催され 記念特集号への期待が高まった。そして、鈴木正博氏(昭和39年卒)を中心に編集がスタートすること なった。

記念特集号の内容については、簡単な台割りを作成して、それに沿って原稿の依頼を行ったが、何し「顔突き合わせて」打ち合わせができるわけではないので、編集委員は互いに隔靴操痒の感をていした場 否めない。集まった原稿も、どうしても建設にまつわるエピソードが多く、山小屋完成後の維持管理の目 さ、訪問したO目やその他の方の利用の際の感想などは全く集まらなかった。

建設当時の話だけでは、「漂雲」45周年記念特集号は、片手落ちの誇りを免れないだろう。建設当時の難な話は、十分語られている。ここでほしいのは、完成後の維持管理の困難さである。現在〇日の諸君主役の時があった。そして、入学したときから、すでに山小屋があった。好むと、好まざるとにかかわらる先輩からの遺産としての山小屋は管理していかなければならない。しかも、ワンゲルとか、山へ行くとしことが、世の風潮から大きく逸れてきている。半世紀前は、娯楽の少なかった時代である。自然の中にプていって、数日間を過ごすことがこの上ない楽しみの一つであった。大阪駅の中央コンコースには、信り面への列車に乗る人のザックの列ができた。ワンゲルへの入会希望者も100人以上が集まった。そんなりと比べると、現在は楽しみがたくさんある。クラブへの入会希望者も、減少の一途をたどっている。これどうこう言うことはできない。世の中の流れで、仕方がない。

そんな中で、現役諸君が山小屋の維持管理に心を砕いて頂いているのは、本当に頭の下がる思いである 人数が少ないだけに、山小屋委員会(現在はブロック?)の人たちがどれだけ苦悩しているかは、山小園 記を読まなくても、察するに余りある。われわれOBも、この点に留意し、心を致さねばならない。 しかし、そうした努力の甲斐あって、卒業後訪れるOBたちの言葉には、現役諸君への感謝の気持ちか

しかし、そうした努力の甲斐あって、卒業後訪れるOBたちの言葉には、現役諸君への感謝の気持ちた ふれている。懐かしさと、感謝でいっぱいである。さらには、RUWVの関係者ではない人が、たまたま ち寄られたり、宿泊されたりもしている。建設に従事した者にとってはこの上ない喜びである。

そのような理由で、「漂霧」45周年記念特集号において、過去のパックナンバーに転載された山小屋E をダイジェストすることになった。そうすることによって、建設後の山小屋が、どのように使われたか、 持管理はどうであったか、OBやRUWV以外の方がどのように利用されたか、それらを浮き彫りにでき のではないだろうか。

すべてを掲載するというわけにはいかないが、ダイジェストすることによって、その後の利用のされた維持管理などのご苦労の100万分の1でも伝われば……、と思う。

なお、バックナンバーについては、鈴木、増田のOB諸氏、それでも集まらなかった分については、その小林勇介君を煩わせて、クラブ所有のバックナンバーを拝借した。ここにあらためてお礼を申し上にす。

また文中の記述については、この記念特集号では、「山小舎」はすべて「山小屋」に、「入舎」は山」もしくは「入った、来た」に改めて掲載している。また、OBの方の卒業年については、年度で記載れているものもあったが、すべて卒業年で記載した。したがって、間違っているものもあるかもしれたが、大きな心でご寛容顯いたい。また、利用したバックナンバーは、1964年のNo.5 (1962年12月の山小園成の翌々年発行の「漂雲」5号から山小屋日記は始まっている)から、No.7、9、10、13、14、15、16、1 18 (合併号)、19、20、21、22、23、27までで、すべてを網羅することはできなかったが、これによってほぼ当初の目的を達したものと思っている。

山小屋日記に登場する方も、そうでない方も、二の谷を登り詰めて、木の間隠れに見える山小屋の「す 屋根」を発見したときの喜びを想像しながら、読んでいただきたいと思う。

#### **斯斯克里**

#### 2月21日 大草、瀬雄

小屋に着いたのは今日。2時30分頃 だが。京都を出発したのは20日。三条 京阪七時。峠下8時30分—別所農協11 時。(その日は)スキー小屋前のたき ぎ筐場にてビバークを決め。2時間く

秋の風情の花背スキー場と小屋



らいスキーを楽しむ。2時半頃から雪 のブロックを切って積み重ねて、雪洞 を作る。このねぐら作りに2時間30分 ぐらいかかって大量のエネルギーを使 う。(中略) おかずを瀬端に作らし ていたら、塩と砂糖を間違えて大量の 塩を入れて、食べられたものではな かった。そこで最初から味を付け直し だ。また内蔵のラジュース(ラジウ ス〕が調子を悪くして、おかずは生ぬ るいまま食って。すぐ寝袋に入る。 (中略) 1時ごろ突然目が醒め。猛 烈な寂しさに襲われて。いてもだって もいられなくなり。それが顧を越した ころ、今度は寒気がして、本能的に俺 は「DEAD」を越知。すぐ瀬鞴と民 家に不り、そこで結局一夜を通した が、民家の親父さんと、いろいろ話し た。親父さんが言うことには「動物に 乗り移られた」との事。今から考える と全く不思議でならぬ。

組局、翌日あらためて、小屋に向け、スキー小屋付近を出発。ワンゲル山小屋に着いたのが2時30分。ここを組局3時間30分。まず順調だったが、それは、われわれの前を行った向来さんのパーティが、いくらかラッセルしていたためだが、それでも辛かった。途中若干、寒気を越じる。スキーはスキー小屋に預けてきたが、それでも荷は、七、八貫位で肩に食い込んだ。

#### 3月3日 柴田勝利

11時40分。青山荘に着く。だれもいない。我ただ一人。小屋に入った途境 されいに整頓されているのに驚き。うれしくなる。天井の一部が真っ黒になっている。ランブの使い方を考えるべし。

電車も一人。バスも一人。旧花背崎

も一人。スキー場も一人だ。田鶴に会 う。一人で小屋へ、小屋はだれもいな い。ただ一人、一人ぼっち。一本のタ バコ、ひとすじの婦。ただ一人。

文句一つ。村木が減っているが。多 分寒さに耐えられず。煙と化したのだ ろう。12時30分頃より雨が降り出す。

#### 3月9日 坂口、内藤、徳岡氏

載記事にあたり。冬山の情景および感じなど実感するために来られた。12時 現在の気温3度。裏の屋根に雪がたまり。坂口が雪を下ろす。食料。ココア の残りと砂鎖。サケカンを残す。きれいだから炊いて食べられたし。

#### 3月16日 藝内

小屋へ1時30分に着いた。きれいなかわいい小屋が見えたとき。RUWVの小屋とは思わなかったけど。事実そうで、びっくりした。先日内藤さんから様子を聞いていたが。12日来の大雪で、様子は全く変わっていた。寺山崎から先はとくに雪が深くて、ワッパがあればいいが、もし無かったらもぐってしまう。雪山になってから初めての小屋だが、これほど変わるかと核心している。

#### 3月17日 松井、福井、佐々木

寺山崎から、積雪もグッと増えて。 三人ともフラフラしながら二の谷の出 合いに到着。出合いから小屋までの参 き難いこと。しみじみワッパが欲しく なった。山小屋に着いたときには、稜 までずぶ濡れ。靴の中で泥水が。ぐ ちゃぐちゃ鳴っていた。小屋へ入る枕 を飲みヨーカンを食った。

#### 3月18日 福村・OB、ほか四名

アマゴを釣らんとて。まかり出でた り。天気良好。電予想以上に多く「収 カク」計七匹のみ。これは予想以下。

久方ぶりに春雪の山を行く。「マン サク」の花もほころび。「ふきのと う」もわずかに顔をのぞかす。げに春 の気配満し。

小屋の管理。その他について。

1〕ストーブは非常に結構

- 2) マキの補給が不十分
- 3) 柳を早急に作る必要有り
- 4) できれば。第二期の作業として炊事場を作ると多人数のときなど便利
- 5) 材本を燃料に使用した人があるようだが。言語道断である。自分で石油なり何なりと持物すべきであり、小屋内になかったからと言うのは。理由にならない。

小屋建設のエネルギーに整算する!!

#### 3月30日 福井、永井

食糧を5日分買い込む。花費の農協 で酒一升を買う。エンコラエンコラと 小屋まで担ぎ上げる。夕食にサツマ汁 を炊いたが。その名のとおりサツマイ モばかり食わせられた。夜中に小屋の 外を人が歩いているような足音に。慌 てて 錠 を お る した(ブル ブル で あ る)。

#### 4月2日 早川洋史

会宿中止で当面することなし、再び バイトもする気にならず。そこで小屋 へ行く気になり、山女魚でも釣って。 のらりくらりと過すことにする。残霊 の道をフラフラ歩き4時45分着。タヌ 公が小屋の前に座っているので、尻革 と思ったとき、僕の顔を見て逃げてい きやがった。

#### 4月10日 松井、河原

久しぶりに小屋で一晩を過ごすことになった。雪もすっかり溶けて沢が増末していた。 雪もずっかり溶けて沢が増末していた。 月齢15.6の満月の青白い光の中。心は小屋にある。出町の間い込みの際。 我トトカルチョで楽勝。食当松井に決定。いつものように手が動いていた(ハヤシライス変じて八宝薬がしていた(ハヤシライス変じて八宝薬がりたけず)。ここでも洒をちびりち軽いさしてす)。ここでも洒をちびりち軽いさしていた。10時単に入ることに見た。

#### 4月12日 松井、河源、辻田、安田、 様本

午前9時に起床。今日小屋へ入って くる者のため。予定を変更し沈瀬。豚 汁と昨夜の残骸をあさる。

昼まで、小屋の前に寝転んで、キジ 場、ダスター、げた箱、概などの設 計、材料の計算をする。昼から前の屋 根(尾根か?)でヤブコギをする。1 時半ごろ、炊飯場の作業中、橋本、安 田着く。

#### 4月13日 松井、河原、橋本

(前略) 3時ごろから。顕理台兼 食卓を作る。ウン。まったくよい出 来。よくやった。よくやった。顕子に 乗りすぎて。飯の支度は真っ暗がりの 中。いつものことながら。石油ストー ブには、全く泣かされる。ニンニクを 2個人れたハヤシライス。

#### 4月27日 村上昌弘

貴船口より来る美青年(若干問題)。地蔵小屋が待ち遠しくて。つい に地蔵小屋で昼飯。愛しの我が妻 (?)が作ってくれた飯をぼくつく。

美青年の一人旅にはいつも邪魔が入る。地蔵を少し登ったところで三人の(いや、三匹の)美少女。いや違った。メス犬に囲い込まれる。でもそこはベテラン。十分後には囲みを脱した。(中略) ついに山小屋到着。オオナツカシキ山小屋日。またもやメッチェン。彼女は安らかに食卓で眠っていらっしゃる。眠れる森の美女。アア美青年。女難の記。

(彼は、チートばかし頭がおかしいの じゃないのかな!)

#### 4月30日 奈良女WV・HF

あまり居心地がいいので、奈良女の 六人組。根が生えてしまい二日間この 小屋のお世話になりました。(中略) 30日は食べて、寝て、ダベッテいい加 関目の調子がおかしくなりました。翌日、二組に分かれて雪取山と貴組 日、二組に分かれて雪取山と貴組 をある。 上々。5月1日も朝から雨がジャカある とな。5月1日も朝から雨がジャカある。 上々に降りることに、 の4人は食糧尽きるまで、この小屋に 被ることに、よっぽど気に入った機 様。本当にこの小屋にはお世話になっ た。ありがとうございました。

#### 5月31日 ドシャコサン

久しぶりに女子三人で来る。少し来 なかった間に。ずいぶんいろんな備品 がそろって、おまけにザックが三つ筐 いてあるのには驚いてしまった。この 小屋も建つまでには、いろんな閉着が あったなあーと思うと。そして小屋の 表札をみると、なんだかホッとする思 い。緑の木の間から「赤い屋根」が見 えた時は、なんとも言えない難しさ。 食当でサラダを作ったが、その中に鼻 水が少々入っていたのも。今では懐か しい。この山小屋も、日一日と美しく 着飾って、みんなに愛されるに違いな い。自分の気持ちとしては、鑢しく て、鱗しくて、彼と一緒に話している 時よりも。楽しい気持ちがする。

(それでは、彼というのも、大したことないね!)

#### 6月15日 堤塘和

とりとめのないことを筆の滑るまま に書いてみた。

一回生の時は山で日記を書くなんで 思いもよらず。二回生の時は、とても そのような余裕はなく。三回生で初め て山で日記を書く裏びを知った。山仲 間とともに一夜を過ごすことは、なん と素晴らしいことだ。(中略) 大事なことはワンダーフォーゲルという運動が登山というものを禁とせず。いな。何事も禁とせず。その運動の一環だということを認めることだ。人皆それぞれに個性がある。サボリもおれば、働き蜂もおる。それらを一個の大人として認めることだ。

#### 6月16日 瀬塘

昨日は、皆よく飲み、11時半ごろま でいるいろ話をする。うつらうつら寝 ていると、河合が歌を歌いだして眼が 覚めてしまった。「このガキめ」。翌 朝バイキングが早く目を覚まし、湿っ た薪に火をつけている。筋の支度がほ 鎌盤ったころ。ガリが余計な事をし て、鱗がひっくり返りみそけがほぼ全 部こぼれてしまった。ガリは、平身低 頭して謝っていた。その結果。飯のお かずは、キュウリのなま、たくあん。 白菜の瀟物。ありん干し、めざし、コ ブのつくだ煮。大変うまい。それから みなキジ打ちに出かけ。小屋でぶらぶ らしている。松井の顔が目に浮かんで くるので、作業をやらざるを得ない。 いざ。■■作業隊員。出発するとする か。ああしんど。

#### 7月11日 「安さん」こと安田洋夫

昨日松井氏と一緒に行くことになっ ていたのだが、レポートの書き方に失 致。それで出町様に来られなかった。 僕もやめた(ドトロイ)。

13日からの合宿の装備が不足してい るので山小屋のものを持って降りなく てはならない。そして今日の山行きで ある。20分のバスに乗って別所中ノ町 に着く。雨は若干小降りになった。ホ イサホイサと足取りも軽く二の谷へ。 出合いで足を滑らして川の中へ下ボ **シ。不半身ずぶぬれ。面白くない。** やっと小屋へ到着。扇が勝手にスーッ と関く。ギクッ! 中には怪しい男 (助兵工面) が座っている。その男が 「安さん」と声をかける。闇を透かし て見ると松井氏その人ではないか。 てっきり来ていないと思っていたが。 昨晩から来ていたのだ。松井氏の喜び ようったらありゃしない。僕も安心。 これで複が淋しくないだろう。

### 8月17日 旧尚徳中学同級生 L·宮本

RUWVの皆さんへ

立派な労作の山小屋を利用(宿泊) させて頂いて心からお礼を申し上げま す。中学を今春卒業した18名の者に とって一泊でしたが、雨の中をズブぬ れでこの山小屋に到着。ストーブの火 で着衣を乾かし、一夜の夢を結んだこ とは、きっと良い山の経験の一頁にな ると思います。到着したとき、村田さ んぽか2名の方に穀切にしてもらった こと、全量が核態しています。

#### 9月1日 SS 38年率

野田、小田切。中林はバスで花沓より寺山峡を越え、小屋へ。鈴木。薩摩はバスにおくれ。鞍馬一峰下一旧花沓峰一芹生を綴て到着。老体に離打って、卒業後初めてこの色気のない小屋に来ました。若き時代が懐かしい。小屋ではみんなハッスルしてエロ本を読んでいる姿は実に楽しそう。サラリーマンの身分ですので、野田、小田切と一緒に日曜りしますが、学生さんがうらやましいですね……。

#### 98148 MIZUNO

初秋の一人歩き 日くれて天に月なく 崎を登りて秋風そよぎ ほおに落ち葉や 杉の梢に態煙をくゆらし 憂き心を小屋に馳せん

#### 研整

孤愁迫る秋の夜に 虫鳴く声もだだ恋し 堪えがたかりきわが想い 想いの人はいと遠く 心を馳せん秋風に

よき友のよき夜に 一人ピール飲み君思う 君に幸あれ乾杯す ランブの下 今夜君を思いて我思う 故に我あり 秋宵の小屋 秋冷肌に感じて げに楽し

#### 11月23日 タンクロー

昨日花沓峰で雪に迎えられて入った 山小屋は、もう葉も散って、枯葉の上 をただ一人。毛布で作った重いフトン を背負ってきた。雨でなく、雪でよ かった。

食糧まったく持って上がらず。そこで一緒に迫まった人たちのオコボレを もらってがんばった。一般の人たちも 一緒に薪割りを手伝ってくれたので助 かった。これから入った人達も自分が 使ったマキくらいちゃんと割っておい て欲しいね。

#### 11月28日 林

寒くて目があいたら8時。ええい。 10時まで寝てやれ! 次に起きたら煙 がモーモー。辺見が一人で態を炊いてくれた。こんな嫁さんがいいと思う が……。とにかく朝食と昼食を同時に終えてキジも一気に打つ。もうすぐしたら騒がしいのがぞろぞろ来るだろう。小屋の中もさっぱりさせて薪も集めにゃならん。ほちぼちやるか。

#### 12月24日 山内

バイトも昨日でやっと終わり。クリ

スマスとやらいうヤツを小屋で迎えようとの考えより。内蔵と4時半のオンボロバスで来る。2時のバスで、大阪の目玉屋離人福井が入り。さぞや今とは自査の念に駆られているだろうと。同情心と、思うように事が運じめ、運動な心境で歩を運ぶ。9時頃を必ずなり、以後は一つの議題を選びの議論を展開。今日は思うように筆が選まめ。なぜだろう。後三月足らずで考うといるというなりというない。もうヤメタ!

#### 

#### 1月1日 辻田

22 新年。暖かい元旦だ。雪などどこにもない。昨夜3時から6時半ごろまで雨。雪に変わるだろうと思っていたが。駄目。(中略) このまま寝といたいのに。腹のヤツがおれの意志と前側飯炊きと忙しい。10時。ささやかお銭数を食う。ああ、ウマカッタ! 11時半。瀬鎌氏一升題ぶら下げご登場。チピリチピリやりながら長い冬の元日の夜を銀世界が楽しみ。

#### 3月18日 利食

昨夜は4時過ぎまでとりとめのないことを話していて、起きたのは10時。 昨日サブを肩に食糧買い込みのため花 背へ下った。寺山峡を行かず、手前の 道のない沢を登る。笹や木の枝をかかんで登っていると、突然3メートした。 ない前の数からウサギが飛び出した。 太ったヤツだった。向こう側の山に雲 が乗なこめ、静かになったスキー場に ボツンと立っていると、ついート月前 まで何百人がギャアギャア騒いでいた のがウソのようだ。「強者共の夢の 跡」。

ビール、食糧、煙草をしこたま仕入れ。再び寺山崎へ、そして一の谷谷は明るい所があるほどがあるいまといる。 では、カンドは思いもよらぬほどの作品による。 とがまでもぐって、丸州旅行の経済を がある。 は話をしていて、丸州旅行の経済を がある。 はいる。 はいる。

#### 3月28日 福井邦彦(〇日一か月)

日ごろの習慣ってやつは恐ろしい。 たまの日曜日なのでゆっくり寝てやろ うと思っていたが。6時に目が覚め る。そこで一日中家にいても仕方がないから山小屋へやってきた。小屋に着いたらなんと1時なり(ママ=計算が合わない)。出町を12時に出て貴紹から参いてきたのだから。まあこんな時間になるのは当然なり。小屋には田村氏とその妻。それに後藤(ゴッチン)夫婦にその友人夫婦。見れば皆カッブル。コンチクショウ。イヤイヤ皆様仲饒まじく末永く幸福なれ。

係という男も。人間に丸味が出てき たようだ。人の幸福を見て、裏びかつ 祝福してやれるようになったのだから な! 「孤独の男」=福井邦彦は、小 屋を後に帰路につきます。トンテント ン。

#### 4月11日 場・0日

#### 5月22日 西浦

毎度のことながら出間2時のバス。 バスの中で同女の山岳部なるメッチェ ンに会う。林がワンゲル論なるものを 話し出す。しかしメッチェンの色っぽ いこと。マニキュアにアイシャドー。 いやまいったまいった。明日はダス ター掘りにペンキ塗り。全員ハッスル すべし。

#### 6月6日 村山

下界の雑踏から抜け出して、また山小屋に来てしまった。今日で2日目。 10人ほど帰り、今は4人。しんみりしたムードだ。やはり少人数が年取るに従って良く感じる。イツモのごとくつである。ラジオが野球をやっている。下界はさぞかしうるさいことであろう。夕飯は缶詰の炊き込み。食えんようで食えるのが飯だ。よく食ったものだ。4人で鯛一つ。アトはネヨウ、ヤスラカニ。

#### 7月11日 泰良女4名

冬の追い出しワンデリングにこの小 屋をお借りして。(中略) 再びこの 小屋に泊まることができて感謝感激で す。

皆さんと初めてお話ししました。小 屋のスパラシサと皆さんのスパラシサ に興奮しちゃって。少々寝不足気味。 去り難い! 去り難けれどこれでお別れします。まだどこへ行くか。いつ帰るか分からないけれど。我らはまだ若いんだから。無事帰りますからご安心を!

#### 7月12日 茂

10日夜10時半。一人で貴船から入っ た。貴船から入るのは2回目だが夜入 るのは余り気持ちのいいものでない。 川に3回はまりそうになった。それで も川の上をボタルがとんでいるのはな かなか風流だった。昨日奈良女のメチ コが入ってきて。今日朝飯と汁を用意 して8時頃出発した。高取さんは。 「ゆっくりお話ししたい」という言葉 は俺に対してだと言って気をよくし。 エアマットの上でゴロリとしている。 横で南井さんと山下さんが将棋をして いる。今雨が降っている。これで小屋 へ入ったのは5回目だけど全部雨に 会っている。でも小屋に来る座親しく なる旧人の数が増える。小屋はいいと ころだ。立命の山小屋バンザイ!

#### 8月13日 寺下

一人寝の夜も明け、9時頃お目覚め と相成った。(中略) 1時頃紫野高 特W∀が通りここで食事をしていく。 その後電雨があったので彼ら一行雨宿 り。ワンゲルについて話し合う。(中 略】 - 8時頃ジュラフに入ってうつら うつらしていると。かすかに男の声で 「ヤンレー」のコールサインがあった ような、しかし気のせいであろうと 思っていると、今度ははっきり女の声 で「ヤンレー」と聞こえる。俺は裏ん だね。バッと外へ飛び出して待ってい ると、木原氏と山田(豊)、笹の3 名。あまりの鱗しさに彼女の写真をし まうのを忘れて見られてはならじとあ わててまた中へとびこむ。その晩。図 らずも木原氏から得体の知れないおか ずを作ってもらい。4人で晩飯となり に付り。そして4人で月見とジャレコ む。いい月ダナー。オヤスミイトシ 类…… ヨ。

#### 9月8日 辺見幅宏

時すでに秋。(中略) こうして君 にペンをとるのは初めてですが。どう かお許しを願います。ボクがなぜ君に 手紙を書くのか不思議に思われるかも しれませんが。それはこの手紙を読む とお解りでしょう。

ボクは今山小屋にいます。先刻まではワークキャンプで大勢いたのですが、皆帰って、今は赤沢さんと二人だけです。(中略) 何もすることなく、ボサーッと思いにふけっていますと、自分の肉体の存在すら忘れてしまいそうです。こうしていますと、去年の秋のことが想い出されてきます。こ

の山小屋で舞と会ったあの時が……。 君は何とも思っていないと思います が。ボクには生まれて初めての耐えが たい風奮と強い印象として残ってし まったのです。そうです! あの時の 思い出が、いな、君が初密だったので す。今の君が結婚しようとどうしよう と、ボクには関係ありません。あの時 の君がいてくれるからです。ボクが山 小屋に来る座にあの時の君が優しく迎 えてくれ。ささやいてくれるのです。 あの時からこの山小屋では何回会った でしょうか。その度にお互いの愛は進 展しているのです。そしていつかはこ の山小屋で二人だけの幸せな生活をい つまでもいつまでも続けていくでしょ

このように書いたら君は怒ると思います。この手紙。破って捨ててもよい し、焼いても結構です。とにかくこれ で気が晴れ晴れしました。最後に君の ご多幸をお祈りいたします。

#### 電和松年 電和41年

#### 5月2日 楠村·昭和41年卒

今年初めて複給をとって。山小屋で 一夜を明かす。作った当事者でありな がら、今まで一度鬼小屋で泊まったこ とがないのが不思議なくらいだ。山小 屋を作るときは毎週来ていたが。でき てからは2。3度しか来ていない。生来 物を作ることが好きな性分である。今 日は朝から雨が降っている。返屈だ! 他に3人の同宿者がいるが。在京のあ るうづの人であるそうな。小生。生 まれながらにして人に話しかけない。 嫌いであるから、別に話しかけない。

現役の諸君に一言。特に新人会員 に。わが会は会員の個人個人の行動に より成り立っている。会には命令権は 無い。即ち。会員に対する強制力を指 しないのである。会は会員の発意にぞ 自分がどこどこかへ行きたい時は自て 自身が提案して。同行の士を集めてて けばよい。誰かが提案するのを待って しては会の発展はありえない。会を くするのも、悪くするのも、諸君の行 動力一つである。

#### 6月22日 川口多梗子

3回生の新入部員です。初めてのワンゲルからの山行き。雨が惜しみなく降り注ぎ新緑が生きいきと輝いている。北山にこんな素晴しいところがあったのかと初めて知る裏び。だが、しごかれて、来る時はつウラウ、小屋の中での弁舌に話が進むのも、立命の難談から。(中略) 山は逃避ではなく、厳しい自然の中で試練に立ちる力い。矛盾多い現代社会に強く生きる力

をつけることを目的としたい。(中 略) もっともっと話し合ってワンゲ ルという組織に、人間がいるのでな く。一人ひとりの中にワンゲルが生き ているようになりたい。

#### 11月7日 松田・〇日

今日は会社の者10名で。この山小屋 にやってきました。別所からの道。 すっかり紅葉して。とても素晴らしい でした。同行の者も立命の山小屋が。 こんな美しい所にあるのをうらやまし がっています。小生の得意顔を想像し てください。卒業してからテント生活 も山小屋生活(営業の小屋は別)もし ていない小生や同行者。今夜は十分に 楽しんでおります。

#### 12月11日 村山秀二郎

里にあれば山恋し、山におれば里恋し、人間すべて反逆なり。雪がちらちら降ってくる。童話にでもなりそうなをの山小屋。(中略) 常に人を否定し、また求める。社会、学校、自分が嫌になる。時には逃避を考える。しかし、逃避はできない。そこに社会があり、自分があるからだ。あり、わが人生すべて矛盾ばかりなり。

#### **可**說 [2] 年

#### 2月10日 内藤樹

山小屋の夜は素晴らしい。屋が宝石 よりも美しく疑いて冷たい雪が暖かく 感じられ、小屋の赤い屋根が目に焼き つく。本当に山小屋に郷愁を感じる。 ことに、田舎を持たない僕にとって は、自分の故郷のような気がする。 (以下略)

#### 5月3日 赤沢・昭和41年卒

朝7時目が覚め、ドアの外へ出た。 まだ学生気分が抜けない。昔のままの 山小屋でのんびりモーニングコーヒー を飲む。

改めて小屋を見ると。土間の食器。 ナベ。石油カンは、昔のままである。 もう少し改良できないのか。それとも う一つ。オノ。ナタ類の道具は使用で きる状態にあるのか。修理をしてはど うだろう。29。30日と。50人ばかり 入ったらしいが、誰も気がつかないの か。昼前にクリチャンが来た。久し振 りである。高取と3人でダスターの穴



握りを始める。仕事の環場から離れた 京都で■■をやろうとは……。2年前 に握った穴が満タンになりつつあるの を見ると。前の穴握りの時を思い出 す。大きい岩が相も変わらず出てく る。それでも50センチほど深くなった ので。あとは諸君にバトンタッチす る。

#### 10月10日 坂本国実

7日よりずっとゴロゴロ。申し遅れました。今。便所の中。7日は奈と 女、光華。四回生、大原。児玉など会と一緒。夜中、増田、赤井両女子(三選子を中、増田、赤井両女子を見る。東られる。東うまし、8日屋が、自信もついた。夜、キャンブファムを良女も一緒。(中略) 9日のんびが起きて水屋づくり。未完成はら3人連れて入山。夜仏坂ご夫妻んのはら3人連れて入山。夜仏坂ご夫妻んのはまかった。毎日の兄貴さんと一緒に過ごせてよかった。

#### 图 和 打 等

#### 1月2日 施

おれが初めて小屋に来たのは一回の 夏合宿の予備合宿の時。(中略) の後、4回しか入らなかった。それで も小屋の魅力は十分感じていて。12月 の役員募集の時は迷わず。山小屋委員 に立候補した。二回になって山小屋委 員の仕事やそれ以外でも毎日曜ごとに 入るようになった。(中略) 俺のこ の3年間は、福端にいえば、山小屋に おいて喜怒衰棄があった。そして21歳 になった。こう考えると、小屋に対し て。何か敬服したくなるような気持ち もする。同じ道を通ってこの小屋に 入ってくること約20数回。これほど落 ち着ける場所はない。先輩OB諸氏。 よくぞ建ててくださった。(以下略)

#### 2月11日 山口万里子

Aパーティ予備合宿で、今年初めての小屋入り。雪がどっちゃり積もっていて、いつもの小屋と違うみたい。我々エエパーティーは18時からお勉強の時間で、隠岐の研究に余念がない。ご一緒のエロパーティーさんと突が前を突った。9人全員が顔を突さわせて、コースを決定するなんらかので!! 明日は花貨でちょっくキット良いお天気になりますように。

#### 4月13日 藤岡

約2か月ぶりの山小屋である。新人 合宿の準備のため広河原まで出向き。 備りに立ち寄った。下界は春爛漫。し かし、北山は雪もちらほら残ってい る。昨年の今頃も村山さん。寺下さんが入っていたなと思うと懐かしい。村山さんは東京。寺下さんは学校に残っておられる。儀達も、もう三回生である。やらねばならぬことがうんとこさある。ああ。もう、イライラ。

#### 4月27日 - 杏名孝宣

久しぶりの山小屋 屋根のベンキ落としはいつもシンド イ

今夜のおかずは肉抜きのキジ 何と住しいことか しかし一級四合あり コヨイ酒を酌み交わし 青春の一夜を過ごさん

#### 5月19日 河合洋・昭和40年卒

会社の守衛室でニッカーにはき替え て苦労しました。去年までは大きな顔 をしてドタ靴をはいて会社へ行ったが、最近はどうも行きづらい。会社の 友人と3人で小屋へ行こうというので。タクシーで花背別所まで乗り込む。(中略) 乗車時間 5分。料金 1150円。何はともあれ。一発コキジを 打ち、ドボトボと歩きだす。この谷が らようやく小屋に着く。小屋には現役 2人がいた。これならわざれった。 ローにかぎを借りなくてもよかった。

エサより多く持ってきた酒を飲む。 山小屋で飲む酒はまた格別な味わいが する。山小屋の枯木の色も貫緩を示 し。我らが現役時代のことが思い出さ れる。8か月ぶりの山小屋であった。

#### 6月1日 河合

(前略) 今日は、山小屋委員が開発 したという新道を経川と二人で来た が、エグイブッシュである。昼だから いいけど、夜は怖い、まだ整備する必 要がある。でも毎度同じ道を通るより は時にはこの新道もいいと思う。

#### 6月21日 ハギ

前日に入った人よ。(中略) 満足 に掃除していない。ランプのホヤは割 る。ダスターの周りはゴミだらは。免 選入った××はかぎを持たずに窓から 入った××はかぎを持たずに窓から 入る。山小屋を一体何と心得ているか のか。お前らの仕打ちがどんなに儀違山小屋 優委員会は小屋の陰に隠れていてもで い。テメーラが小屋の仕事を手伝って くれないっかけるようなことはしてくれ るなよ。(以下略)

#### 7月7日 坂本国実

6日5時。貴能からトレーニング。ス イカ。カボチャ、重い枕。それにブ ロック。かなりしごかれた。地蔵まで が長いこと。三の谷の手前の飯場への 道が悪く。足が埋もれて動かない。また、沢沿いには行かれず山を少し巻か ねばならなかった。山小屋までかなり 苦労した。小屋では3パーティほどが 予備合宿。飯やデザート。ミーティン グにも加えてもらってうれしかった。 一人で来るのもいいものだ。永末の21 歳の闘生日。又イカをブレゼント。お めでとう。と言いたいがあのつらでま だ21かよ。信じられん。

#### 7月29日 マンガ

免ほど目が覚めた。外はすごい雨。 (中略) 昨夜は昔の小学校時代のことから。未来の日本に至るまで。ポソ ボソとダベリング。でも一人でこの小屋に泊まるのは怖い。大きな風音。時 折するミシッという2階の音。午前3時 慣れてきたのか。あまり怖くなくなって眠る。

泰山君。まだしつこく寝ている。わざわざサロンパス持物でベタベタ。そんな年でもなさそうだけど。外の雨。相変わらずスゴイ。ただし、雨の音を聞きながら寝るのは気持ちいいもの。しばらくテントで寝てない。このスゴイ雨からしっかりと守ってくれる屋根から離れて。テントで寝たいと思った。(以下略)

#### 10月12日 社

後期から土曜日に物理実験が始まり パーワンに行けない。欲求不済。夢さと 山小屋に来たけど、現在4回生2人。2 回生1人と。我々3人。チョットがムター り。私にとって4回生はどうもケッター れたとって4回生はどうそから。 まるで、4回生の意見会みたい。言うえない。 では恐ろしくって何も言えない。 のはは恐ろしくっても言えない。 のはは恐ろしくっても言えない。 のはこれからは、少し勇気を出して。 発言しようでもいい。 がこれたいな。 のにはどこでもいい。 のになったいなる。

#### 12月19日 呉だぬきこと篠原茂

満水と仁料があわてて幅って行き。 ついに小屋には俺一人になってしまっ た。明日呉に幅るつもりなので。山小屋とも来年までお別れである。今日は 今まで以上にされいにして。次に入っ てくる奴がびっくりするくらいにして 小屋を去ろうと思っている。もし。京 都に住んでいたら。クリスマスも正月 もこの山小屋で過ごせるのになあ。 まったく残念。

1月5日か6日頃。山小屋に入るつも り。誰か来て話をしませんか?

#### **明知以李**

#### 1月15日 四方宗和·昭和40年卒

卒業して4年。久し振りに山小屋に

来た。誰か後輩でもいてくれたらと 思っていたら。ちょうど松尾君がいて 助かった。

立命のワンゲルと言っても。もう今は知った顔はいないので。 同期生の消息でも書こうと思う。1月4日の夜から5日にかけて、食橋、内藤、山内、西坂、村上、津熊、田鶴、そして小生四方の8人で過ごした。ここで、39年度卒(40年卒)の人間の近況でも書いておく。

- ・食橋(タンクロー): 今年2月21日 にめでたく挙式の予定で。新婚旅行は ガム島を予定している。お見合いで決 めたそうだが。結婚式には出る予定な ので。また詳しいことは追って報告し たい。
- 内藤:今年5月に挙式予定。見合い 結婚とのこと。学生時代には真面目一 本であったが。今は酒。マージャン。 ダンス。ボーリング。何でもひと通り やれるようになっているのには驚い た
- ・山内(ボケット): 相変わらず口の 達者な男で、身長の低いのを口でカ バーしている。東京からの「ひかり」 の中で女性と違り合わせたそうで。彼 女とは東京へ帰ってからデイトをする そうだ。その後の報告は入っていな
- ・西堰(ポリ):昨年12月3日に結婚 し。旅行にはガム島へ行ったとのこ と
- ・村上(タワシ): 学生時代と変わらないが。一児のパパであるだけに。やはりいちばん大人という感じがした。 人のいい男なので、高級辺に行くことがあれば客るといい。サービス満点だよ!
- 連能。田鶴:いずれも変わらず。
   以上。7人と共に新春を行動した。4

以上。7人と共に勧告を行動した。4 日に倉橋宅集合。夜中に西坂宅へ移動、5日の昼には内藤宅、夕方には村 上宅と、3府県をまたにかけた、愉快 な新年会でした。

#### 1月14日 東里子

今年の年賀状に「今年こそは北山へ」と書いた。それが見事念願かなって、今夜こうして雪の北山にいる。こんなに早く実現できたなんで新年早々、今年は何かいいことある感じ。それにしてもこんなに雪があるない。 思わなかった。いくら体重の軽いれて、思わなかった。いくら体重の軽いくたくた、肩はこる、足の紐はほどけそう。コタッに入り、あったかいシチューを食べ、それに魅力ン。シアワセ。(以下略)

#### 5月20日 古沢敏昭・昭和48年卒

またまた来てしまった。現役時代は さして来たいと思わなかった小屋だ が、労働者となった現在。小屋へ来る ことが一番うれしい。それは誰かいる やろか? と思って入る時。いてもい なくても。あたかも初恋の人に会える ような気持ちになるからである。(以 下略)

#### 7月2日 Furu 京玄大WV

急に思い立って、ザックを背負って 衣笠のボックスまで鍵を借りにのWVの 最終で真っ暗な山道を一級下のWVの G二人と歩いてきた。クラブを引退め、 にもうせ気の抜けたような気持ち現る。 世界でせせこましくながある。ワウル とはいい。クラブとは考えたあるが とはなければ一、山小屋に来てそう をとればしたのです。

#### 8月25日 荒木令子

小雨が降った方がいいなあ。なんて 思っているんだけど、降りそうで降ら



ない。医王谷では霧の中を歩きたい。 桟敷から、薬師師から大雨に降られて 見ようか。ともかく中途半端はいけま せん。

#### 10月7日 松田

おれば二の谷に住むイワナ。最近こ の谷もだんだん汚れてきた。実に迷惑 な話である。されいな棲寒が汚物に よって、人間の世界の学生の下宿のよ うに汚れてしまった。でも儀はエサを 探す必要がなくなった。棲寒から出れ ば。米粒などが落ちているからだ。先 日、俺は新人のワンダラーによって揺 らえられた。あんな馬鹿な人間に揺ま るなんておれも修行が足らん。しか し、やつらはバカだ。俺はスキを見て 逃げてやった。(中略) おれもそろ そろこの谷を下りよう。そして、天間 の来ない。もっと静かなところで暮ら そう。我、寂しき流れ着……。我、二 の谷のワンダラーなり。

#### 11月4日 岩切・昭和48年卒

卒業以来。初めての入山。日記を読 んでいるとうらやましく思う。一人東 京に住んでいると山の話をする相手も なく、奥多摩。丹沢などに出かけて 行っても、思うのは北山のこと。ここは北山のどこかに似ている。あそこみたいだと思うなど。他の山を歩いていても気持ちは北山なのです。(以下略)

#### 11月13日 須永

朝早く起きて、今日もワークに精を 出す。昼に酔っ払いども4人は解り。 静かな山小屋に戻った。この3日間の 三宅氏。清川氏の働きぶりには頭が下 がります。二人は当たり前のことを やっただけなのでしょうか。いや。彼 らは行動によって他の会員に呼びかけ ているのです。我々が失いかけてい る、大切な何かを。

> 職和好年 職和44年 職和44年 職和44年 職和44年

#### 5月26日 高倉・昭和48年卒

昨日友人3人と。2回生がたくさんい て久しぶりにWV時代に帰ったようで 感激。今日は朝食後へビ岩へ。20分ほ ど休んで霊取山へ。昨日は出合橋から 鷹杉山。抑谷を終て魚谷出合いへ。の んびりと北山を満喫したので。今日は 山小屋でゆっくり遊んで貴船に抜ける つもり。(以下略)

#### 6月23日 三木康之

昨日、高校時代のワンゲル仲間と夜 8時頃入山。普段通りのように落ち着 けない感じである。夕飯をごちそうに なり、涙を流しながら食った。3回生 になってクラブの運営面。事務的な面 のみに迫われて何も考える余裕もない ほど忙しく。時間のみが終って行く。 夏合宿が目の前に迫り、ムードだけは 盛り上がりを見せています。

#### 7月12日 松村 昭和49年卒

本日5時のバスにて入山。出町1時のバスに乗るつもりが。チョンボのため乗り遅れ。で、暗闇の中を沢の音を開きながらの入山は、久しぶりに何か新鮮さを感じかえってよかったと今屋が立て、嬉しかったです。バカみたいに敬遠しなしまいました。ボクチャン(いゆ、わたくし)は今女友達と食事を分え、食後のワインを飲み。いい友達は変え、食がっています。まじめな私は困っています。

#### 7月21日 **嬬野・昭和49**年卒

(卒業して)3か月。山へ入る回数 もめっきり減ってしまった。5月の連 休に6日間アルブスへ行き。6月7日に 六甲へ一度行っただけ。山に入っても 学生のころの豪快さはなくなってしまいましたが。山への情熱と感激だけは 決して忘れていません。ワンゲルの仲間ほど土臭く。人間味豊かなものはないのではないでしょうか。今。その同期の友を懐かしんでいます。(以下略)

#### 10月27日 長島誠一郎

クラブ入会4年目でこの日記を書く のが2回目。まったくズボラをこいて しまった。山小屋は先々選に入って。 またなんとなく来てしまった。落業を 踏みしめる。あのサクサクとした音は いつ聞いてもいいものである。北山 は、春の新緑と秋の紅葉が一番である。(以下略)

#### 11月15日 石沢

山小屋へ来る度にその良さを痛感するのだが、今年はなかなか入山できなかなか入山できなかった。小屋へ入る気力がなくううだのだろうか? 去年の今頃、クラブの所属問題で、大きく揺れていあのだめ、一体、半年かかった方のだろう。今年のお話し合った成ともはとことをある。それとものだろうか? 今年の3回生はでいる。そして、その総括の行方はいかに?

#### 12月5日 山田

午後7時入山、友達と2人。ウイス キーを飲み。ラーメンを食べる。まっ たく静寂そのもの。つらつらと毎日の 生活を省みると。自分のやっている行 動がむなしくなってくる。あまりに早 く年月が去っていく。来年は4回生 だ。

雪がちらちらしている――。

#### 12月8日 京女大WV

初めて山小屋に入りました。山のあたたかさと人の心のあたたかさが素直に私の心の中に入り込んできて、人が ドヤドヤと去った後の静けさの中に 浸っております。

またお邪魔しますからね。どうもあ りがとう。

#### 12月24日 富田機明

約1年ぶりにやってきました。1年前 と同じです。変ったのは私の心だけで しょうか。少し前に石橋氏と水煮きを 作って食べました。今日は比良へ出 けるつもりでしたが。朝日を覚ますと 天気が悪いので、小屋へ来ました。そ れゆえ二人とも大キスです。久し振味で した。今日はクリスマスイブです。 ケーキもあります。でも、我々二人別 に街にいても仕方ないので小屋へ来たのは正解みたいです。これから静かで さびしい素晴らしい夜を楽しもうと 思っています。

#### 

#### 2月1日 植上微雄

三条京阪12時30分のバスで来たので すが、途中スキー場で遊んでいたため 日暮れての入山となりました。先客は 居ず、山川、杉山、そして僕の三人き りの静かな一夜となりそうです。性分 なのか。夜入山するのが好きで、まし て静かなのは心さびしい気はしますが 有り難いものです。本当に欲する者の みの山小屋。これが最高です。また。 こうした中での巡り合いも同様最高で す。この一年よくザックを背負ってう ろうろしてみましたが。この山小屋に 行きたい。という気持ちが自然発生的 に日常の生活の中に湧き上がり足が向 く。しかしまた。そういう気持ちと裏 腹な気持ちがあるのも事実です。例え ば山小屋への道が荒れてしまってい る。僕自身の感じ方なのですが……。 なにかもっと足が地についた活動をや らねば……と。痛趣。

#### 5月15日 (署名なじ)

何物にもとらわれない時間と空間が 欲しくて。山小屋に逃げてきました。 いつもと変わらない二の谷の水の間に が私も三回生。なのに一人で小屋に入 のは今日が初めて。こんなって一屋が うづのリーダー会の一人となってとしているなんで考えるだけでジャとして うづいるなんで考えるだけでジャとして とをしたか。そうづばに何か煮まりで なのを必要しるのは私のわがままり された酒たちが私を見つめています。

#### 5月18日 久保田論・昭和50年辛

拝啓 皆様お元気ですか。

私達。早いもので社会人となっても うーか月半級ちます。学生時代に比 べ。日々の過ぎていく速さを痛切に感 じます。五月の晴天。実に心地よいば かり。都会の難踏の中にいると山に入 ること自体が何かかけがえのないもの のように感じられます。

#### 5月18日 寺本・昭和45年辛

懐かしさあられる山小屋よ。もう別れて5年。相も変わらぬ涼やかな小川のせせらぎとむせるような草の香にしばし浸る。ここに座っていると。昔の顔が、声が、ひそかに伝わってくる。わが青春のひと時がこみ上げてくる。しかし、誰もいなかった。だがこの懐かしさのこもるカビ臭い山小屋の空気

が、俺をよみがえらせてくれるようだ。あの「二十(歳?」の原点」の原点」の野悦子もあの「かまど」の姿で頻をほてらせて、壁を錚かせ、人生を、青春を語ったのだ。そしてRUWVを変火に巻き込んだ大学紛争の魔も静かに思い返される。(中略) 緑が鮮やかに際にしみて達る。さようなら、また来ます。

#### 12月24日 松本辰三

#### 學和 7年

#### 2月22日 建辺愉美・山のゴキブリ姫

昨日、サジキへ行った帰り、医王沢 のところでリスを見ました。山で動物 を見るのは、鈴鹿で見た猿についでニ 度目です。山に行くと動物だちの気配 を強く感じることがありますが。それ は妙に生々しいものです。樹木の間か ら小さな動物が養い目をしてジッとこ ちらを睨んでいるような。そんなゾッ とするような感じ。それは自然の中に 踏み込んでしまった私の存在への不安 と、自然に根付いている生物の神秘さ への情念が複雑に絡み合った不思議な 感情でした。ところが雪の上に小さな 足跡を見ることが多くなった時。以前 のように感じるよりも。雪の中にうず くまったり丸まったりしている動物が 目の前に浮かびあがり。懐かしいよう な、鱗しいような変な感じ方をするよ うになりました。雪の山小屋は妙にと りとめのないことを書かせるようで す。

#### 4月17日 茶中 46年卒

ほぼ2年ぶりの山小屋。鍵の調子が 少々悪かったが。戸が開いて小屋の中 に入ると。ついこの間来たような気が する。近頃山らしい山も登っておらず。机に山の写真や書物などを置い て。代用にしている。貴鉛口からエン の4人で午後3時ごろ入山。相変わらず RUWVの伝統が生かされて整理整理 がなされ感激! 現役諸君の顔が拝見 できると、ボトル1本。メッチェン同 伴で来たのに残念。明日は桟敷岳に登 り雪ヶ畑に降りる予定。

#### 5月2日 龍五郎

寒い。せっかくのゴールデンウイー クも悪天候続き。今日は雨が降らない だけましか。それでも夕べ見た星空は 実にきれいだった。大阪に住み。めっ たに山に行く機会もないと星空にも感 激する。

野郎三人連れで何となく時間つぶ し、ちょっと一の谷から雲取へでもと 思ったが、曇り空で肌寒くその気にな らず。手オノとナタ各一本修理(柄を つける)。銭にならんことに熱中する のも面白い。さて、明日は何して遊ぼ うか。

#### 7月24日 石橋 昭和50年卒

先週の土曜日に熊谷さんのマッキン レー遠径の牡行会がありました。5時 に梅田富国生命ビル屋上のビアガーデ ンに集合したのですが、まだ夏の日は 高く、熊谷さんの大阪着は7時とのこ とで、しびれを切らした感が強かった です。広島から西村氏、富山から田辺 氏と久しぶりの顔が増えてくるに従い 楽しいものとなっていきました。

二次会は梅田東通り商店街「すし 半」で、皆さん日ごろのうっ情晴らし か大分はめをはずしていました。(中 略) いずれにしても難谷さんの牡行 会ももちろんですが、白日会の越も強 く楽しい一夜でありました。

#### 9月8日 年老いたウワバミ・MY

今日は十五夜さん。でも、生憎の雨で私の目には見えなかった。一昨年。 試験の合間に入った時も十五夜さん。 その時は、きれいな月を見たんだけど な。今回は、ワークで入って2日目。 酒を飲んで酔った一回生はすでに二 階。ほろ酔い加減の旧人が思い思いの 話に花を咲かせて愉快。

私はといえば、とても苦しい姿勢で 日誌に向かっている。山のことを考 え、ワンゲルのことを考え、それは何 のために……。と言えば自分のためで あり、でもそれがいったい何だったの かっていうと……。やっぱりどうでも いい。「どうでもいい」と言うとそれ はよくないことだけど、日誌に書く ど確信をもった意見などないし、三年 目の秋を迎えて、もう一つ力出ず。

#### 10月10日 松本・昭和51年辛

杉山先輩が遠路はるばる静岡より見えられるというので。無理を押してここまでやってきた。一人ではとても心配なので。石沢君に同行を願ったが。松田君の下宿で飲んだウイスキーで。足は千鳥足。川にはまること二度。三度。深夜2時半。やっとの思いで入山。話では、OBが14、5人入るとのことだったが。杉山先輩のほかは現役

諸君が4人いるだけ。しかし。現役諸 君の話を聞いていると。なかなか楽し いワンゲル活動が続いている様子だ。

#### 12月23日 中山

北山ドツボの野宿PWを終えて入山 した。21日に薬師様。22日狼様の下。 そして今日は特次谷の出合いの予定で あったが。昨日夕方から降り始めた雨 のためテント(実はボンチョ)はドツ ボに陥り。シュラフはビチャビチャに なりました。よってミーティングの結 里。今朝雪交じりの雨の中。山小屋に 養行することになりました。(軟 弱……)

#### W 10 17 18

#### 2月24日 Ken-H

小春日和。といった爽やかな日だった。2月6日に来ようとしたが、雪が多く。また出発が遅すぎたため。芹生娘であきらめて引き返した。今日はうまく入れたけれど。しんどかった。昨夜は、一晩中まんじりともせずに物思いに耽ってのだが、急に山小屋へものはまったがのんびりと。途中神社のとも長かったがのない顧黙けをやった。結局4時間使かしかった。

#### 6月5日 中川陽子

昨日一回生の女の子2人と。途中規 中健さんと清水さんと会って入山。こ の頃なんだかずっと疲れていたけど。 寺山峰を過ぎるとそんなものは吹っ飛 んだみだい。個人的に入山するのはこ れが初めてです。でも夕べは〇日ご夫 婦を始めその友達の方々。京女の方が 2人。それに夜遅く府大のWVがやっ てきて。辞まった夜もにぎやかさが一 一。やっぱり北山はいいなあ。

#### 8月28日 植本

昨夜来で今日帰る。小屋が荒れている。ワークをしっかりしないと――。 なぜか。夏が過ぎていくと頭の中が すーっとして空っぽになってゆく。気 持ちのいいほどに。人間が創造された のは春から夏。物思いにふけってき のは水心が起こったのが夏から秋。そ 総識を出して寂しい顔をする(と。像 は思っているのだけれど。……今のと ころ……」のが秋から冬。そして死ぬ 時が冬の終わり。これは孤独である。 たった一人で死んでいくのです。これ だけは確実なこと。

#### 9月27日 瀬薫志士(別名デルス)

起床したら9時前。もう隠はすっか りと上っていたが、朝のすがしさは あった。1時まで読書と勉強。その 後、薪割り、掃除、3時雲取山へ行ってきた。このところ山小屋へはいるとかならずといっていいくらい雲取山へ上っている。あまりに空が澄み切っているので裏び重んで登って行った。杉の木へ上って京都の街を見ようとしたけれど見えず。その代わり、西の丹波の山並みが遠くまで見渡せた。(以下略)

#### 10月21日 翌田智明

外はきれいに晴れあがっていて。紅 葉も今が盛りである。

今日は本当に恋しい思いで山小屋まで来た。たぶん現役会員で今の山小屋 に入るのは僕が最後だろう。10月16日 12時40分上越PWで滑落事故が発生したのだ。同日16時20分死亡を確認。そして、学生課よりワンダーフォゲル会の活動の無期停止という強分が通達された。(中略) リーダー会。3回生によるミーティングで、会活動は停止、山小屋の使用も現役は使用せず、ということになった。

しかし、OBの方々にとっては山小屋は自分のワンゲル活動の思い出の場として来られると思いますので、その点ご理解いただければありがたいと思います。しかし、一会員の死を教訓にして、早期に山小屋だけは自由に使用できる状態にしたいと思っています。

#### 12月4日 市川悦久

山小屋摺除のため入山。 植本以下11 人。久しぶりにわが家へ帰る。 布団も ほした。 掃除も済んだし。 ダスターへ の橋もつけかえた。 二の谷の出合いの 揺 腕もつけたし……空は 快晴……ム ム……ムム……そになった。 太陽の光 を浴びた。

無期停止から二か月もたってしまった。会は今混満としている。例会では 激しい討論が行われている。信葉のぶ つかり合いがある。感情の激突があ る。そして情熱がある。由村の死を無 数にしない決意がある。こうしたもの を胸に、北山の小屋へ来た。寺山崎は 白かった。夜の底は暗かった。

#### **明和75年**

#### 2月5日 玉三郎こと梅田

ついに帰ってきた。雪の山小屋へ。 貴船口からとぼとぼ一人で。少々の ラッセル覚悟でワカンも持ってきたの に、遂にはきれいなトレースのあとが



ついていて、ワカンの出番なし。小屋 の屋根は赤いはずが、雪で真っ白。当 然のことながら、変な感じ。

今。山小屋にいるのは僕一人。あと 一人誰かさんのザックが置いてあるの ですが、外出されたのでしょうか。 きっと誰かさんは花背まで酒を買いに 行ってるのでしょう。僕の方は、今晩 ひとりで酒でも飲もうと思っていたの ですが、下宿の前の酒屋は日曜日である でも、誰かが酒くらい持ってきる だろう。それをいただこうと。あば にな~い。のです。誰かさん。早く花 背から蝿ってこ一い。

## **阿尔**罗季

#### 5月4日 松本辰三・昭和51年卒

2日夕方に入山。久し振りの貴鉛からのロードであったが。何とか小屋までたどり着くことができた。楽しみにしていた最近の山小屋日記がなかったのでその日は早々に寝た。

3日は非常に暇であったので、小屋の中の空き題をアタックに詰め込み。 メートを買い求めに農協まで行った。 帰る途中、瞬くRUWVの大キスを背 負ったパーティに出会ったが、多分新 人合宿だと思う。後輩が頑張って切りる と思うとうれしかった。小屋へ帰りる とと、山小屋ブロックの一酸がやった。 きた。その新人教育を見ると、自った。 昨夜は遅くまでスタンツの練習をやっていた。

4日。今日は一日中小屋の中でゴロ 寝していた。何もせずに食っては寝の 生活も気楽だが。だんだんと返屈して きた。明日はまた。名古屋へ帰ること になるが。今度はいつ来れるだろう か。その時は会社の連中でも連れて来 ようかな。

#### 6月15日 鈴木·昭和52年卒

満水氏を願って久々の入山。三の谷まで満水の愛車で、そこから老体に鞭打って歩き始めたのだが、小生のエレキ、電気がつかず暗闇の中、記憶に頼ってやっと到着。その間、二度ばかり水に足を突っ込んでしまった。山小屋はいつもと変わりなく私たちを迎えてくれる。今日一日、ゆっくりこの自然の中に身を浸していこうと思う。

#### 6月29日 (広小路の幹部)

山小屋ワーク終了。床と小屋の前の テーブルを修理。利用されるOBの 方々。お気づきの点がありましたら。 ノートか現役会員にお知らせくださ い。早速に新人と2回生を酷使して キッチリやります。昨晩は、新人いじ めが足りなかったようだ。

#### 6月29日 法学同志会幹部会幹事

ブタンガス使用のランタンが紛失した。というより盗まれた。昨年は末川 博名登総長直筆の額。山小屋ノートも なくなり。今年はランタンである。い ずれも貴重なものだ。山小屋はローソ クでも十分ではあるが。 ロBからも らったものを簡単にリーチするとは泥 棒そのものだ。盗った人間は二度と山 小屋に来るな。

#### 7月23日 熊五郎・昭和44年卒

昨夜より会社の国際と二人で入山。 久しいのはいか。間違って雪ヶ川の 方に行きかけた。卒業して12年。いろ んなことがあったはずなのに、ここに 来ると、タイムマシンに乗ったよう に、学生時代のことが思い出されても に、学生時代のことが思い出さる。 日記を読ませてもらうと学生気質は はななで持ちまられるととはは があるだけが、小屋の がよるになったは があるとなけい で持ち聞が出るようなはい環境ない。 一部の人間が出るようとは して いうある。 次のことだけは必ず早急に してほしい。

- ・屋根のベンキ塗り(もし屋根がサビ出してトタン張り替えとなれば大変)。
- ・雨戸の作り直し――雨戸とガラス戸が壊れているため。その額(窓枠)まで風雨で腐る恐れがある。

以上の件だけはよろしくお願いします。 す。

#### 8月12日 山田皓·昭和52年卒

火を起こすのに手間取り。朝飯が終わったのがなんと10時40分。その後かまど周辺を整理し、草引きも少々。なんだか昔(2~7年前)と比べると山小屋の整備と管理がずさんのようだが……。小生もあまり生意気なことは言えないけれど、小屋がきれいな時は、活動も活発だと思うのだが、どうだろう。〇日諸氏の指摘の点、小生もワークで修理してほしいと思う。

#### 8月24日 鈴木正博・昭和39年卒

小屋の造りはじめは、近代工事は送 造りから……と、橋をかけ、送を開い てボッカを始めました。小屋が完成し たら、自分たちの造った橋は落として 少しでも世俗化させないようにと気を 配ったりしたものです。それがふた昔 前のこと。いまや三の谷まで車で来れ るのは、かえって裏ぶべきこととなり ました。

男4人。大阪 税関の 人間は。「大 雨。がけ崩れ」情報の出ていることか ら。今夜は自分たちだけと思っていた のに。子供5。6人を含むパーティがど しゃ降りの寺山峡を登ってきたのを知 り、ただただ暗然。それに加え、またまた大雨の中を子供連れのパーティが入ってきました。この土日は、夏休みということもあってにぎにじ思いて、始しいことですが、こんなに利用して頂地されたら、現役の保守管理も大変だとなりまれたら、現役を保守管理も大変だとなります。妻、子供、フィアンセなどを連れてきたりするでしょうが、ヒマのある現在、何とか維持管理してください。

#### 9月21日 川原

朝食にラーメンを食べ。そろそろ後 責付け。昨夜はちょっぴり酒を飲み西 村と語り合った。しかし。そのちょっぴりの酒に西村は酔っぱらってしまい。 延れならんやつだ。ブツブツ。 とは初めての山小屋だけど。初め回生は、あまり山小屋を使って砂むいとの だけど。もっと入ってきて欲しいとの だけど。もっと入っていないのだが、二の 谷出合いと三の谷の出合いの間の公は ののは ののとこの谷の出合いの間のいたのだが、二の 谷出合いと三の谷の出合いの間のいけ ど。

#### 10月18日 島田恭仁 昭和55年率

毎年1、2度山内氏と来ています。冬 に来た時が一番よかった。小屋がすっ ぼりと雪に覆われて。杉の木に雪がつ いて数え切れないほどのクリスマスツ リーができていました。今回は秋です ので。紅葉を見るのが楽しみだったの ですが。少々時期が早すぎたのか全然 期待外れでした。

山内氏も学生時代と変わらず、飲めば必ず何かやってくれます。昨夜は窓に向ってゲロはいて、誠ね返ったのが辺り一面に飛び散ったのです。そばにあった僕のザックの中に水たまりができていました。コレ本当! ……オソロシイ……。人それぞれ、違った世界に進み、違ったことを考えながら生きてゆくんだろうけど。人の性格というのは変わらないものだな。と思いました。

#### **亚和沙**年

#### 6月20日 林萬太郎 昭和48年2個卒

高校生11名を連れてきました。花費 からの夜間登山。久し振りで現役時代 を思い出した。

日記を読んでいて。この一年間小屋の整備に随分と努力されているのがよくわかった。私は2部ワンゲルの出身で、いわば部外者であるのに、あつかましくも生徒(私は高校の教師でずっとワンゲルの顧問をしている)まで連れてきているのに現役の責任者に連絡をしてなかった。反省している次第です。後日何とか連絡をしてみたいと思います。今回は、新一年生の新人合宿

(遅れていますが)のようなもので。 明日は雪取山を越えて大阪に備る予 定。また。ゆっくり泊りに来たいもの です。

#### 7月19日 アノ河合孝明・昭和56年卒

昨日2年ぶりにやってきました。就 職してから初めての小屋です。懐かし い名前があるので、嬉しく思いまし た。今回は私の学校(藤森中学)の先 生方10人で、力いっぱいの食糧をもっ て、カー杯飲んで、ウーム、たまらん

#### 同日 吉村岩男

昨夜は河合さんの画像の人たちとえ らい騒いだ。よく覚えていないくらい 飲んだ。正確にいうと、記憶にないの だ。たぶんとんだ失態をさらしたこと でしょう。その代わりといってはなん ですが、今日は朝の6時から働きまし た。久しぶりにかまどで火を起こす と、なかなか景気よく燃え上がらず。 河合さん持参の白ガソをかけてともに 苦労しました。

1時過ぎ、川原君と中原さん。それ に彼女の妹さんが来ました。これで。 晩飯の心配はない。

#### 9月7日 河原畑慶彦

大ワークの免発隊として先日入りま した。2回生3人、3回生が4人。新人は 何をしとるんや、怒るデー。

昨日はキジ場の補格作業と雨戸作りの2階に分かれてワークをしたが。私は前者で、体にキジのにおいが染みついてしまった。昨夜は花火を気なにやった。誰か以前に来た人が置いていったものである。火をつけると1メートルばかり火花を散らす代物だ。何回もやっているとむなしくなって気に動かが「あれをやった時と同じ騒がしくなってきた。みんな起きてきたようだ。今日も働くぞー!

#### 11月7日 吉村岩男

貴能口から歩いてきた。久し振りだ。就職も決まり。卒業だけに力を入れればよい私にとって。北山の紅葉は魅力あるものなのだ。やっぱりきれいだと思う。夏はバイクで涼風を切って(とはいうものの私のは50ccで。トロトロと登っていくのですが……)。秋は紅葉の中を歩く。いいものです。

職和57年 職和59年 職和59年 職和59年 職和40年 職和41年

#### 5月3日 早川雅宏・昭和54年卒

今年3月結婚し、嫁さん連れての入

山、名古屋を朝5時に出発。車で花費まで、そして9時40分には、山小屋に 着きました。現役時代と変わらない景 色にホッとします。

今度は子供連れで来られたらと思い ます。両期のみんなは今どうしている んでしょうね。

#### 6月1日 方体一郎·昭和55年卒

昨晩は現役諸君が新・数で入山。先 頭で入ってきた佐藤君が54年卒の桑村 氏にそっくりだったため一蹶恐れおの のいてしまった。

現役の総数が16人とのことで少々驚いてしまった。まあ。時代の流れですなア。しかし小屋はきれいでしっかり維持されており、核謝核謝。(以下略)

#### 6月1日 橋本英一・昭和58年辛

会社の同僚3人と入山。約一年ぶり の山小屋ですが、中がきれいに片付い ていたので驚きました。

夜は焼肉パーティ。朝はサラダにパン&フルーツ。プレンドコーヒー。酒は生ビールにワイン。天気もいいし。 大変リッチな気分です。初めての新歓であけごころをたらふく飲まされ。寛 騰不明となったのが全く夢のようです。

#### 8月12日 松久昌司 昭和41年卒

1年ぶりに山小屋に帰ってきた。子 供2人連れて。年に一度8月の中旬にこ うして山小屋に帰ってくるのが我が家 の習慣になってしまった。

3年前。およそ20年ぶりに行こうと 思い立ち。来はじめたわけだが初めは 道を覚えているかな。飯はうまく炊け るかなと不安半分であった。しかし。



三つ子の琥百まで。すべて無難にこな し、父親の権威も維持した。

こうして、食卓に座り山小屋ノート に向かう。時間が一気に20年前の若く て、生き生きした時代に戻っていく。 この山小屋を我々の手で建てた懐かし い日々へと。一気に……。すべてを飛 び越えて……。(以下略)

#### 8月18日 西村るみ子

今回でこの山小屋は3回目。来る度 に心が豊かになり。自然の良さを感じ ます。高校時代のワンゲルの友人と2 家族で来られたなんて。うれしい!! この次は子供連れで来たいね。

#### 11月2日 渡辺りか

貴船から芹生を綴て歩いてきました。この前来たのは5月の初め。新緑 がきれいでしたが。前夜の雨で夜かな り寒かったのを覚えています。今回は ちょうど紅葉の季節で天気も良く。新 鮮な山の空気を満喫できました。

#### 12月13日 中川 (旧姓・辻) ・昭和48 年卒

小学4年生11人を中心に総勢21人で お邪魔しました。雨女3人がそろっ て、天候はやはり雨、小屋で子供たち は大暴れ、楽しい一夜を過ごさせてい ただきました。

#### **联教协**

#### 1月10日 木村・昭和39年卒

昨年夏以来の入山。久し振りの電見 酒を楽しんだ。電の中で雲取ドラム缶 温泉につかり養沢な余暇を過ごさせて いただきました。後輩諸君の入念な手 入れに越熱いたしております。

#### 5月3日 塩源・昭和50年率

塩原教授こと恋しきピエロこと。50 年卒塩原が51年10月新婚旅行時に二人 で来て以来。ついに大阪転勤に伴い。 62年に登場! 山小屋は静かにこの家 族を迎えてくれた。

#### 8月21日 三村末広・昭和46年卒

3年ぶりでやっと来ました。妻と子供2人。日帰りですが。大変楽しかった。風呂もできているのに驚きました。次回は一泊して帰りたいと子供も思っています。

#### 

#### 2月14日 上野

思ったよりも雪が深く。スパッツは 役に立たず。スニーカーとジーパンで 来たことが無謀に思えてきた。でも。 歩き出すと新雪に足跡を残すのが楽し くなったきた。 (芹生までの) 林道を 一人で歩くのは恐ろしくて。時に引き 返そうかとも思うが、山道に入ると。 なんだか退かく迎えられているような 気になる。

#### 4月17日 桐村昌人·奏子

立命の山小屋。私たちの出会いの場所です。あの時のことを思い出しながら歩いてきました。もう5年も前のことなんです。NDWVは山小屋なんてとても持てなかったので。こんな素晴らしい山小屋をもっている立命の人たちが、とてもうらやましい――寿子

久しぶりに山小屋に来ました。今ま でと違うところは、尾根(屋根?)の 赤光がひときわ目立っているところで しょうか。山小屋の中も整理がしてあ り、今の現役諸君が頑張っていること がとてもうれしい。——昌人

(以下略)

#### 5月4日 辻田敬助・昭和41年卒

久しぶりに山へ行こうということに なり。私は花背のスキー場で、犬を走 らせて遊ぼうと思っていましたが。家 族が山小屋へ行きだいということで、 こうしてやってきました。小さな時か ら。何回か連れてきていますと。ワン ゲルにいなくてもその気になるものの ようです。

山小屋日記を見ていて。タンクローさんの名前や。同期の松チャン。清水 君の名前を見て懐かしく思いました。 いつの日か。OB会もいいけれど。 ファミリー会を催したいものです。

#### 7月23日 山口拓

9月の山小屋ワークに先駆けて下見 にやってきた。今年こそドイレを…。 と思っているのだが、思った以上に重 症で。短期間で治せるものではないこ とが分かった。応急処置をしようにも 基礎から東れ始めているから手の施し ようがない。

あのトイレも山小屋を作った世代の 人たちの手によるものであろうが。現 役少数の今ではトイレーつ直すのも随 分と骨の折れる仕事である。新しく建 て直そうかとも思うが……。(中略) ため泉が出てくる。(以下略)

#### 學成元年

#### 4月30日 倉橋昭一·昭和40年卒

連体。家にくすぶっているのが癪に 障るので久しぶりにやってきた。(中 ここで残念な事をお知らせす る。今年(1985年)3月。河合洋君 (昭和40年卒・通称=ガリ) が心筋標 塞のため、急逝した。我が家に幾度と なく泊まりこみ。酒を酌み交わしたこ とが懐かしい。こうして書いていても 小屋の中から「おい。タングロー」と 今にも声がかかるように思われる。1 年かかってこの山小屋を建設したあの 苦しかったころ。夜は二級酒を飲み青 春を語り、昼はボッカ作業、ブロッ **ク。セメントの運搬にと明け暮れたあ** のころを思い出す。どうか、彼の冥福 を振ってやってくれ。

#### 9月18日 山本連郎

今年もワークにやってきた。今年は 新人が大勢入会してくれたので、仕事 もスムーズに進んでいる。今回はペン キ塗りの雑修とかまどの屋根の土台の 木に防窩剤を塗ることを行った。しか し、かまどの修理、便所の修復、薪筐 場の屋根、床の張り替え、やらなけれ ばならないことはたくさんあるのに、 手をつけることさえできない。自分の 無力さに、歯がゆさを感じる。(以下 略)

#### 11月18日 村上隆康・昭和61年卒

久しぶりの山小屋。私はいまだに山をやっています。社会人の山岳会はワンゲルとは大きく違いますが。仕事をしながら、また嫁ハンと良子のひます。今日は堂雪山岳会のメンバー村上、秋田。宮尾、八田、田中、木馬の6人の大田、田本田できました。今年間の世界を突っていた。今年は登尾根に行きました。今年は会人になっても出ばいけます。4回の方安心してください。社会人になっても遊べるデーツ。(以下略)

平成2年 平成3年 平成5年 平成5年 平成18年 平成8年

#### 4月28日 平野友童 昭和45年高

花費9時10分―二の谷出合い10時5分 -山小屋10時20分。まずまずのベース だ。ワンゲルの1回生として、3回生の 尾古さん(当時。ワンゲル3美人の一 人……あのころ美人はみな山女になっ た」に連れて来られ初めて参いたコー スがこのコースだった。今日もスキー 場跡でミソサザイが盛んに鳴いていた が。あの時も同じようにミソサザイに 心を奪われた。春の北山の美声だ。ワ ンゲル時代は。花にも鳥にも目がいか なかったが、歩いてみるとオオルリの さえずり、バサバサと飛び立つヤマド り。恥ずかしそうに咲くエンレイソ ウ。杉の美林の中にもいろいろな美し さがある。そして、OBにとって最も 美しいのは山小屋の赤い屋根だ。今日 赤い屋根を遠望したときには、胸に迫 るものがあった。2月10日に同じコー スで入ったが、雪に阻まれ出合からこ こまで来れなかった。気にかかってい た山小屋の赤い屋根が健在であったこ とが何よりも鱗しい。そしてこのメー トを見て。ワンゲルが健在であること が、さらに鎖しい。出町棚でRHWV の制服を見て声をかけようかと思った が、体質の変化が気になり、黙ってき た。久し振りに山小屋のノートを見て 安心した。今日午後3時30分に大原 で、昭和45年卒のOB会をもちます が、皆にいい報告ができます。現役の 皆趨。本当にありがとう。山小屋の件 で。困ったことがありましたら「山小」 歴メートを見た」と言って連絡くださ

60.

名古屋大学法学部勤務・日本山岳会 会員 岐阜県美濃市××--× 電話× ××--××× 平野友重

#### 4月28日 坂本国書 昭和45年卒

20年ぶりの山小屋。2時30分ごろ。 久しぶりに山小屋の近くで、赤い屋根を見つけ「ヤンレー!」と叫ぶ。友重 は返事せず。相変わらず冷たい奴だ。 RUWVが立派に残っていて一安心。 小屋も美しくなっていて、我々ののOB 会も山小屋ですべしとアピールしつづけたが、軟弱な奴らに大原の民海案を 押し切られた。今から歩いて、天を揺って大原の東の自分もいまだに山が好きです。

#### 4月30日 山本蓬飾・平成2年卒

会社の順像5人で1年ぶりに来ました。18時ごろ着くと、現役5人が新人 合宿で来ていてダブルブッキング。2 階で寝てもらえるということで、整謝 して来たのですが、本当にきれいになって来たのですが、本当にた。現役諸 君本当に復苦労さま。以前の古い頑張もよかったが、山小屋も30年以上頑張ってきたのだから、ここらでリフレッシュして、さらに10年20年とこの北山に残ってほしいと念じています。(以下略)

#### 5月6日 打磨啓祐・〇日

世の中よ 寝るより楽はあればこそ 世間の馬鹿はおきて働く 打越 夏

二の谷中流の二本杉橋は打越橋であ る。

儀達は栄光ある立命ワンゲルの仲 間。

現役諸氏。この小屋を守り来し。労 苦を謝す。

山小屋建設委員に代わりて代筆す。

#### 5月21日 辻井龍介

床が新しくなった小屋を見たくて来 てしまいました。かまどに火を起こし て夕食を作りました。一人でやるのは 少し大変です。暗くなった山小屋で村 上さんの持ってきてくれた「玉乃光」 を飲んでいます。なかなか時間が取れ ず。ゴールデンウイークに庭島線へと いう計画も断念し、来年へと望みをつ なげます。酔ってきたのでそろそろ寝 ることにします。

#### 7月14日 方伸一郎・昭和54年卒

10年ぶりの山小屋訪問。床、ハシゴ が新しくなっていて、現役の皆さんに 感謝します。現在、京都・八幡市の実 家で単身赴任の身につき、朝5時半起 きでやってきました。人も少なく本当 に落ち着きます。われわれは同期の交 流がわりと遅んで今年の6月9日にも北 野白梅町「くし八」で同期会を行いま した。

#### 9月1日 古河享正·昭和59年李

久しぶりの山小屋へ職場の仲間とヨ メさんでやってきました。赤い屋根が 見えたときのホッとした気分。昔のこ とが様々と心の中をよぎりました。現 役諸君の山小屋のメンテナンスに核 類!

#### 10月27日 佐藤・昭和63年卒

5年ぶりに山小屋へ来ました。床が 新しくなっていたり。ドイレがきれい になっていて感動しました。現役諸君 に越謝。越謝。ありがとうございまし た。また来ます。

#### 10月27日 山口拓 平成元年卒

佐藤さんの呼びかけで卒業してから 始めて山小屋へ来ました。約7年ぶり です。その間。就職し、結婚し、子供 が生まれ、自分の生活は大きく変化しましたが、この北山のたたずまいや山 小屋の雰囲気は現役のころと変過い ず。昔と同じように楽しい一夜を過ず さどきました。昨夜もメンバーの 佐藤さん。山本、西村、井川らととましていたのですが、10年、20年たっころメンバーで集まれば、現役時代と同じまして、また。そうありたいと思います

次回は子供をつれ。この小屋を自慢 してやろと思っています。最後になり ましたが、トイレ、床を修繕していた だいた現役のみなさん。ありがとうご ざいます。これからも活躍を期待して います。



# 土地使用契約

鈴木 正博

大阪市北区梅田新道の喫茶「アポロ」でリーダー会 が開催されたが人数がそろわず流会となった。

山小屋の土地契約は奥村、野田、湯浅君が担当と なっていた。使用貸借なり、賃貸借なり契約関係が生 じてくるので、法律相談部にも所属していたことから、 昭和37年3月10日からわたしも加わることになった。そ して3月13日に成安女子大学WV創部1周年記念 パーティーが宇多野YHで開催さた。RUWV20名余 が参加、その後で、リーダー会が開催さた。そこで山 小屋の土地借用契約の一員だった私が第3次山小屋 建設委員長に就任することになった。その晩、秦君と 一緒に奥村君の自宅に泊まり、翌日3月14日9時4分 出町柳発京都バスで木村、湯浅、高木、秦、奥村と 私で、二の谷の所有者花費在の物部新三郎さんの家 と建設予定地を見に行った。物部さんの自宅には奥さ んだけがいて、春先は植林で忙しくなるから、近くの 山に作業で出かけているので、そこへ行って直接本 人と話をしてほしいとのこと。湯浅君が以前訪問した ときは、お爺さんの亥助さんの許しだけだったが、この 日は当主の新三郎さんの了解を得ることができたの で、山小屋建設へ大きく一歩を踏み出すこととなっ

ところが、いざ契約書を作成するとなると、新三郎さんが渋る。しかし、学校がどうしても書類を必要とする と説得した。そこで、新三郎さんには、鉄筋のブロック 建築で造ることを話して、簡単に私達130人ほどの人 数を抱えるクラブ員が、北山開発の基点としてこの二 の谷に山小屋が必要であると考えていることを話し た。

物部新三郎さんと別かれて、私たち六人は建設予 定地に入り、熊笹と雪に覆われた斜面の四隅に立っ てもらい、私が木に登って上から全体を見渡し、実際 に建設する場所について簡便な手前にする案と、奥 の斜面に建設する案等を議論し、結果として、斜面を 削り、土石を前に展開して現在のベランダを確保する 案で合意することになった。

その後、私は4月3日に旧人合宿の3班に合流して、 4月4日早朝にテント地から、湯浅君と二人で、再度物部さんの自宅に行った。私の腹づもりとしては、契約書を取りかわし、その足で周山の地方事務所に行って「保安林内山小屋建設作業許可申請書」を提出しようと考えていたが、新三郎さんと話し合っている間に「その種の作業許可申請書は土地所有者が願い出るものだ」と言うことになり、借地人は必要でないと判断した。

このことがあって、私は土地の賃借関係は微細に取り決めたほうが良いと考えた。一方、物部さんも5項目の条件を賃条書きにして出してこられた。そこで、私の方はそれをたたき台にして、

(1) 建物は10年間の契約期間だったが、木浩建築で

はなく、鉄筋ブロック建築であり、堅牢な建物と言う とから、30年契約に期間を延長してもらうこと。

- (2) 年間使用料は1,500円の先方が提示したそのまを採用。
- (3) 土地の返還の場合は現在のこと。これは多分 更地の現状復帰の意味だと思うが、そのまま採用。
- (4) 借地料は毎年3月25日、借主は貸主のところ 支払いすること。これも当然のことであって、そのま 記載。
- (5) 借地料の支払いなき節は立ち入らざること。こ も当然のことでありそのまま記載。
- (6)「建物の幅4メートル、縦7メートルのブロック」 築」、これは、当該物件が如何なるもので、いかなる イズかと言うことで、記載しておく必要を感じたので、加。

以上を、日付は、昭和37年3月25日と記載して、 方で押印した。

私たちの方はクラブの代表者ということで、その時 CLである、湯浅修太郎君の名前で契約を締結し、 方が一通書類を保有することにした。

この契約書作成の時に、私達が朝飯を食べてこ かったのを知り、ぜんざいと朝飯をご馳走になった。 の後新三郎さんは耕耘機の運転講習試験を受け 出かけたので、8時半の開店時間まで待機して、農 の売店で缶詰、味噌と海苔を買ってテント場に帰 た。

後で考えると、契約書は実際にカーボンを敷いて通作成したのであるが、書類上「二通作成して、各一通を保有する」といった文言を入れなかったこと、よび「現在のままとする」と言うべきところを「現在のと」と訳のわからないことを書いてしまったことが悔まれた。しかし、一発勝負であったことから、これらことは後の祭りである。

下って、4月15日、この日は私鉄ストで、私は友人 アパートに前日泊まり、9時に出町柳で高木、湯浅 と合流して、上質茂まで行き、その後ヒッチと歩き 物部新三郎さんの家を訪れ、借地料1,500円と贈り を持参した。その後テント地へ行き、野田君をはじ、 皆でテントをたたみ、合宿最終日の仲間と建設予 地を見に行き、点検後必要な物資を芹生の前田さ の納屋に引き上げて合宿を撤収した。帰路は当然 船コースである。



# 山小屋建設当時を再現

全日本WV連盟機関紙、漂雲などからの復刻版---鈴木正博

RUWV・HP掲示板より転載

ワンデルン掲載の「RUWV山小屋」の紹介

昭和38年6月発行「全日本学生ワンダーフォーゲル連盟」の"ワンデルン"創刊号・特集 第三「我らの縄張り——各校の山小屋とフランチャイズ——」から

「二の谷 ・・・・・立命館大学」

我々のクラブでは、創立このかた連綿として「自分達の山小屋」を持ちたい、という夢が育まれてきました。

この夢を現実のものへと成し遂げた直接の機運は、1961年3月の大峰山の旧人合宿及び同5月の新人合宿であり、ここにおいて合 宿後団体食料が残ったのを幸いに、山小屋に居残った下級生の間で、「自分達がアルバイトしてでも得るお金を資金として、こじんまり とした僕らの山小屋が欲しい。学校その他運動具店等一切の援助を受けない。」という方針を打ち立てました。

当時、資金と言っても、その目途のないままに、この一見何気ない話から、早速理工学部を主軸に、青写真が修正に修正を加えられていきました。しかし、他校同様、常識的過程として、土地探し先決論が興りましたが、血気にはやった我々は、この先決論を退けました。成る程、これは常軌を逸しているかも知れません。しかし、結果は却ってくすぶっていた浮動組を、青写真を次から次へ発表していてとて、建設の機運を盛り上げました。

建設地としては、気軽に行けるところを基準にして、京都北山周辺に6候補地がありましたが、結局、近くって、スキーが出来、水の便がよく、しかも比較的ハイカーに荒らされていないと言うことから、京都府北桑田郡京北町芹生二の谷の現在地に決めました。ところが、同地は森林法の中の水源涵養を目的とした保安林内なので、何かと手続きに手間取りました。

工事着工は、1962年3月25日、翌日雪に見舞われたが、「近代工事は道造りから」ということで、ボッカコースの整備にかかりました。 初めは安易に考えていたドカチンも、最深部では7メートル余も山肌を掘り崩さなければならず、工事は容易にはかどりません。そこでドカチンと平行して1時間余の山道に、ボッカ隊が繰り出されました。初めの内は30~40キロの砂利や砂でしたが、回を増すにつれて防水ブロック4個(60キロ)又はセメント1袋(50キロ)へと進み、日曜日などは沢のあちこちで飯ごう炊飯しているハイカーを横目に、ヒイヒイ、ハアハアと言って担ぎ上げました。鉄骨を組み、仮枠を組んで基礎コンワリート打ちを慎重に行ったが、何しろ施行監督はなれぬ手つきの土木科の学士の即ですから、出来上がりは今流行のワイド版よろしく、両端が反り返ってしまいました。ママよ上に乗せるブロックで調節すればよいということで、ブロック積みにかかりましたが、誰も経験が無く、小耳に挟んだ知識を元に、見よう見まねでモルタルを詰めていきます。ところが、目地ゴテが思うように使えず、手を器用に使い、面の皮が厚いにもかかわらず、手の皮が剥けたと涙混じりに訴える電が現れた次第です。

かくして土台は出来ましたが、屋根となると、さしもの学士さま団体も、建築科生を持たぬ我々には、お手上げとなり、大工の手を借らざるを得ませんでした。

延べ人員1200人、使ったブロック417個、セメント44袋、砂利石・砂ともトラック3台づつ、鉄骨500キロ、材木2トン等難産の末落成式の12月9日は、既に雪の日を3回迎えており、まだらに積雪を見る二の谷に、ベンガラ色の屋根を戴いた、立命館大学ワンダーフォーゲル部山小屋が誕生しました。

階下が八畳の板の間と六畳の土間、2階は6畳の板の間が全てですが、先輩格の京大ワンゲル小屋を、一回り大きくした規模です。地元の人の話によると、毎年2メートル前後の積雪があると言うことから、屋根のこう配を50度にとりました。それで屋根の雪が滑り落ちて、今では辺り一面が白銀の雪山、一点、ベンガラ色がひときわ映えます。

小屋の位置は花背スキー場の近くですが、最近の大雪のため、夏場では30~40分で行けるコースが、4時間も要し、手軽にスキーの 出来るところではなくなってしまい、加えて、スキーに最適な期間が試験期と重なり、スキーは専ら北アルブス山麓へ出て行くことになりま した。

兎に角、ブロックがどんなに歪んで並んでいようとも、学生の身である我々が、土・日曜日と各休暇を利用して、「資金から建設過程 の全てを通じて各会員の自主的参加のみで完成させ得た」というこの事実から、現在各会員は暫しその疲れを癒し、あふれ出る喜び をしみじみと味わい、深い感慨に浸っています。

落成早々で、年間計画は今だ出来ていませんが、遅ればせながら梅の香りを漂わす、3月から4月初旬にかけて、雪の間を縫って訪れる悦び、5月に入れば新人さんが柔も真新しい天井をながめて、シュラフの中で夢を結ぶだろうことと、これからの夢は尽きません。また、夏前には、ドラム缶を運び上げて、風呂を作らなければならないだろうし、電気料の学生は、水の落差を利用して、100ワット位の電気は起こせるかもしれないなどとうそぶいています。

我々は又、町の少年達を招待して、山小屋の味を知ってもらおうとも計画しています。

#### 建設当時の「山小屋の賃借権」ほかについて

S35年卒初代CL・鎌田克則先輩が、RUWV山小屋に関して、地主との関係で「小屋より下流の入会権まで賃借権 賃借契約 条項に盛り込まれている」と聞かれてその周到ぶりに整心したと言っておられますが、誰から聞かれたことか知りませんが、契約当初には そのようなことはありませんでした。

当時は、森林法の保安林、特に「水源涵養」を目的とした指定地内であり、極端な考えの方(特に上級生の多く)は、山小屋の建設が終了してから事後届をしたら良いとか、無視して建設工事を強行せよどの議論が戦わされました。しかし、法学徒である私は、別途、法律相談部にも所属していたこともあり、顧問の乾昭三助教授に相談に行って、兎に角、届出を出して工事着工すべきと指導を受け、同級生の奥村尚久君の協力を得て、京都府の京北町にある地方事務所に天皇誕生日からメーデーの日にかけて手続きを完了しました。これはあくまでも建設工事を認めてもらうことであり、その後の保存登記等とは一切関係がありません。更には、地主の物部新三郎さんとは、山小屋の設計図における投影面積だけの賃貸借で、当時、木造建築は15年で、鉄筋ブロック建てと言うことから30年の土地の賃貸借契約をしたにすぎません。

現に、私達の山小屋が建設されて1、2年後だったと思うが、二の谷の私達の山小屋の200~300メートル下流の炭焼き小屋跡地に ブレハブの山小屋が出来たが、1、2年後には積雪の重み等で廃屋になったのを見ています。

この建設期以降の追加の契約や、契約変更、契約期間の更新等に関係していないので、その後のことは知りませんが、40年強経 適していることから、参考までに当時の漂雲第4号に掲載した「山小屋借地関係の件について」を以下に転載しておきます。(鈴木)

\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*

#### 「山小屋借地関係の件について」

#### 鈴木正博

我々が今山小屋の立っている土地を建設予定地とした当初、保安林の有する意味がわからなかった。と言うより、その予定地が、森林法により、様々な制約を受けているということ自体知らなかった。

そのため、工事着工間もなく、ある時は「万事休す」とまで考えるに至り、また、ある時は「無法者のそしりをも甘受する。」と言ったことがあった。しかし、ひるがえって建設過程をたどってみる時、余分な手間を掛け、工期を遅らせた一因ともなったのだが、今になって合法的にわれわれの山小屋が誕生し得たということを、クラブ員一同と共に喜びとするところである。

山小屋の所在地——京都府北桑田郡京北町字芹生川上2番地——は、現在、花背町の物部新三郎氏より賃借しており、現在一帯は芹生及び黒田部落等の飲料水の源泉に当たる所故、森林法中の保安林の指定を受けている。指定目的が、水源酒養であるために所有者は農林省の管理管轄を受けている。反面、免税の特典が与えられている。

以上のことから、現在の段階では、森林法第37条による山小屋所在地一帯の保安林指定の解除は容易ではない。そこで、山小屋建設に当たっては、指定地の地形に変更を加えるものであるから、同法第34条に従って、作業開始の際、「保安林内山小屋建設作業許可書」をとって、許可書に付された数項にわたる制約下で遂行せねばならなかった。

今ここに落成したことによって、許可書の制約も一応解除されたのであるが、何分にも山小屋が建っているのは、水源涵養を目的と する保安林内である点、その指定目的を損なうような事態が、我々の山小屋と因果関係を持つということになれば、穏便に収まる性 質のものではない。

ここに土地所有者との間に取り交わした契約書の内容を記します。

\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*

#### 借地契約書

京都市左京区花費別所町弐参六番地 土地所有者 物部新三郎 京都市上京区広小路寺町東 立命館大学ワンダーフォーゲル会 代表者 湯浅修太郎

#### 土地の所在地

京都府北桑田郡京北町字芹生川上弐番地 山林五町六敏八歩 右当事者間に於いて左記の条件により山小屋を建設する 契約を取り決めました

- 土地使用期間は自昭和37年3月25日 至昭和67年3月25日迄とする
- 2. 壱ヵ年の土地使用料は金壱千五百円也
- 3. 土地返還の場合は現在のこと(ママー現状回復のこと)
- 4. 借地料は毎年3月25日借主が貸主の所に

支払いすること

- 5. 借地料の支払いなき節は立ち入らざること
- 6. 建築物は幅4メートル、縦7メートルのブロック建築 右の通96件契約しました 昭和37年3月25日 物部新三郎 湯浅修太郎

「RUWV漂雲第4号復刻版「山小屋建設経過報告」 昭和38年4月発行「漂雲 第4号」から

#### 「山小屋建設経過報告」 39年法卒 鈴木 正博

- (1) はじめに
- (2) 山小屋建設の機運
- (3) 山小屋委員会結成
- (4) 工事着工前
- (5) 工事着工
  - 1 基礎工事
  - ii 基礎コン
- iii ブロック積み
- iv 臥梁設定
- v 上棟
- (6) 完成の日

#### (1) はじめに

この報告書は、山小屋委員長として公開するのではない。役目上、公文書を発表するのが当然であろうが、私にはその能力が無い。ただ、建設に従事してきた一会員の断片的記録を基に、落成式を終えるにあたって、まとめた次第である。私は、この役目を仰せつかったはじめ、これは大変なことだ、一方ならでは為し得ないであろうと思った。そこで、兎にも角にも、段階的に一つ一つ積み重ねて行こう、このような方針である限り、落成までの計画表など作れるものではない。また、私の性格からして、一つ一つ記録をまとめていくことは、何か自分の方針を確立するにあたって、反作用を及ぼす。その為、必要な限りも踏み越えて(ママ)、記録保存を怠った。それが今になって反省させられる。

#### さて、RUWV山小屋が完成する!!

この事業が価値を有するのは、全てがRUWV会員の手で行い得たことである。

ほんの小さな意見から流れを発して、それらが合流することにより大河となり、各人の持てる力が「山小屋」というものに結晶した。このことは、我々立命ワンゲルの力量の程を提示するのに十分であろう。しかしながら、作業が長期化することにより、会員相互間に暗黙の対立を引き起こし、それが「時間のロス」という表現様式を用いて色分けを行うに至った。そしてこのことについては、山小屋完成を前後して自然にときほぐされるであろうとの予測は転倒させられた。それと言うのも、「産めよ増やせよ」の近視眼的政策がかかる事態を引き起こしたと言えば、飛躍しすぎるだろうか。即ち、各人の個性を取り入れるには、会員の増加ということは、余りにも負担を大きくしていないであろうか。成る程、我々のクラブはエリート団体であってはならず、入って来る者は全部受け入れなかればならないことは知っているが……。けれどもこんなことは言うまい。ただ、このたびの山小屋建設に於いては、不断に燃え続けた影の人の努力が、如何に大なることか!!

それらの人達に、クラブの山小屋建設に関して、代表して感謝の意を捧げたい。省みれば、昭和37年3月26日の雪で始まり、雪の点 在する同年12月9日に終わった。この作業期間の内外には、幾多の人の援助を受けたことだろうか。それらの人達にこれと言うお返しは 出来ない。ただ「RUWVの山小屋は建った」。我々は今このときを、喜ぶと共に、限りない感慨に浸っていることをお伝えしたい。

これを閉じるにあたって、土地を快く提供してくださった物部さん一家、多事にわたってお世話をおかけした前田さん一家、予定地を見に来てまでして青写真を作成してくださった木村君のお姉さん、屋根及び内部に関して我々の行っていることを理解して協力くださった島田工務店、鉄骨・ベンキ・看板等ご無理をおかけした米田さんの家、ややもするとひるんでしまう我々を、常に暖かい眼差しで見守ってくださったOB諸氏、それにこの一大事業の推進に参加した174名の会員、及び関係者にこの紙面を借りて感謝する次第です。

#### (2) 山小屋建設の機運

ワンゲル創立このかた、クラブで山小屋を持ちたいと言う声が連綿として受け継がれてきた。そこへ1961年3月の旧人合宿中、深仙の宿で一回生の常連が食料もたっぷり残っていたので、一泊沙殿した。そのとき、この山小屋が自分達のものであったら・・・・・という声が興った。続いて、同年5月の比良山望武小屋での新人合宿後、二回生10人余が残留、食べて寝て、また食べることを繰り返し、そこでも「自分達の山小屋」が話題になった。この産声が遂に5月下旬の理工学部における総会の議題となり、「①現在の装備では収容能力が少ないこと、②一箇所に留まることではなく、各地を渡り歩くのがワンゲルの本旨だ」という理由で反対する一部早期論者を廃して、即時建設が大勢を占めた。

#### (3) 山小屋委員会結成

そこで大野照夫さんを長とする第一次山小屋委員会が誕生した。この七人会は意気高揚に功を奏した。この時点の会員の意見は、資金面に関しては「各会員500円負担で、たとえ不足分が生じても、スポーツ店、学校等の援助を仰がず」が、絶対的であったし、結果も初志を貫徹し得た。それを端的に示すものとして、比良の清掃ワンデリング案がある。これは比良山に散在する缶詰の空き缶を一掃し、これをプレスしてくず屋に売り、清掃と金儲けの一石二鳥案である。最も、現実には後のほうが出来ず、八雲ケ原の空き缶を土中に埋めただけに終わった。

続く7月14日から17日、妙高高原にPRワンデリングを行い、資金面で一応の目算が立てられるようになった。この熱情は夏休みで衰えるどころか、却って盛んこちり、9月某日の総会に於いて委員会になる青写真第一号が発表された。これに対し、時期尚早論者より、「土地決定が先決ではないか」と質問された。しかし、この見解もなんのその、以後4回にわたって青写真が修正発表された。

10月某日の総会にて、RUWVの役員改選、それにともない山小屋委員長を木村君とする第二次山小屋委員会が再編された。 主に、建設用地を探すことに重点をおき、趣味登等に聞きに行った。そうこうする内に二の谷、八丁平、芹生銀座、岩屋不動、愛宕 山の裏、芦火谷以上6候補地が話題に登り、また総会で審議された。そして、①近くて簡単に入れる②スキーが出来る③ハイカーに 比較的荒らされていない④水の便が良い、以上の理由から、二の谷の現在地に決定した。そこで12月に至り、芹生方面の有力者前 田専太郎さんを紹介してもらい、加えて、二の谷の土地台帳の照会に周山へ向かった。その時初めて物部新三郎さんと判り、下旬に 物部宅第一回目訪問となった。父玄助さん、実さん、おばあさんから土地借用の承諾を得た。ところが、早や花背には雪の便りが聞か れ、土地の問題は春まで持ち越しという形になった。そこで、当然のことながら、資金面が当面の問題として再燃した。そして、それが第 三回PRスキーと言う形で結実した。その過程に於いては、PR論議に始まり、立命ワンゲルが実施するPRスキーとは・・・・・にまで発展 した。しかし、我々の力量は、困難を乗り越え、2月14日より18日にかけて見事160名の一般学生を白馬山麓蕨平スキー場へ引率し 得たことである。そして今また、第4回PRスキー実施を着々進行中であるという点に示されている。

#### (4) 工事着工前

3月10日、大阪梅新のアポロでリーダー会を持った。その時、予定地が保安林内であることが発表された。続く3月13日、京都西陣のマリヤでリーダー会、そしてその場で鈴木を長とする第三次山小屋委員会が設定され、翌14日、鈴木以下6名にて物部新三郎さんに面会、「こちらの線に沿って土地を貸して貰えることになった。二の谷ならどこでも好きな場所との由」。しかしながら、「植林期なので契約は4月まで待ってくれ、けれども工事は着工しても良い」との言葉をもらった。そのため、物部宅を引き上げ、残雪の点在する二の谷予定地へ調査に行った。そこは南東にゆるく傾斜した所で、真南に空間があるのみ、奥深い山の中に居るような感じを受けた。しかし、積雪40センチ余もあり、3月25日からの第一期工事が出来るかどうか心配である。兎に角ベランダを出来るだけ広く採りたいので、雑木二本を切り倒して笹の中に建てる案が通った。

#### (5) 工事着工

#### | 基礎工事

3月25日から4月15日まで、例年の旧人合宿を振り替え、5班に分けて第一次建設作業を実施した。

第1班 木村以下31名の中には打越、田辺、三島先輩も参加された。同じこの日早朝、大阪よりオート三輪車にて鉄骨を運んだの だが、芹生峠の下でダンブカーが川に後輪をとられていて前進を阻まれた。その為テント地に着いたのが遅く、今後の方針を協議するの みに終わった。

26日、前夜來雪に見舞われ、3センチ、「近代工事は道造りから」と言うわけで橋造りを主に、芹生までのコースと、予定地までのコースに二分して作業を開始した。昼前また降雪、その為作業を一時中止する。

27日地鎮祭抜きでドカチン開始、最深部は7メートル余であるが全員血気盛ん。モッコの調子が悪く、バケツ隊に縄成替えした。ところが、笹の根は勿論、雑木の根が縦横に張っていて、思うように掘り進まない。

第2日目、岩盤の一角が現れる。調子の出たSが根気良く割にかかる。しかし、矢張りなれない仕事なので、3日目ごろには足腰が痛く、休む回数が増す。

29日夕方、第2班増田以下16名が到着、バトンタッチが行われる。この日、前田のトラックを借りて、セメント30袋、続いてバラス、砂 5合づつ運び上げる。次第次第に土石がうず高く積まれ、広いベランダが確保されることとなった。また、この班により、切り倒さねばならないと思っていた雑木2本がベランダの端に移植され、根がつくようにせっせと水をかけてやった。

3月31日、乾昭三助教授の研究室へ、森林法第34条に関して意見を求めに行った。先生は矢張り学校内のことであるから「良かれ悪しかれ、とにかく事務所へ届け出るべきだ」とのこと。

そこで、4月2日、京都府林務課へ問い合わせに行った。そこでは、「保安林の中でも水源涵養林に関しては、最終的には府庁へ 回ってくるが、許可については地方事務所長の権限だから京北事務所へ、『保安林内作業許可申請書』を提出せよ」とのこと。クラブ 内の意見と対立、いずれを採るべきか迷う。同じ2日、第3班奥村以下20名が到着、1班から継続して作業に従事する者も居る。この 班に至り、既にバラス、砂が芹生に着いているので、ドカチンとボッカを並行して行う。はじめは要領が悪く、静脈が膨れ、手が紫色に変 色する事態まで興った。

5日快晴、朝飯前にボッカ2回を樹立する者が出た。

6日物部新三郎氏と借地契約書を取り交わした。夕刻、第4班秦以下27名が到着。基礎コンクリート用のみぞ堀とボッカを併用する。ボッカも数日続けると、スコップ7杯がスタンダード、10~12杯がスペシャル、15杯はスーパーと言う規定が生れた。予定では4班をもって一応終了するのだが、休暇もまだ残っており、仕事も山積されていることから、10日より15日まで10名の者により、溝堀り、ボッカが続けられた。

そして15日は、作業打ち切りと第1回借地料として年1500円を支払いにいく予定であった。ところが私鉄24時間ストにあい、上賀茂より鈴木、湯浅、高木の3名はヒッチと徒歩で花背へ向かった。未だ溝に凸凹があるが、次はコンクリート打ちの段階までこぎつけた。これで第1期作業、延べ人員400名を終了し、以後は土、日曜日を利用して入山する方式に転換した。

#### Ⅱ 基礎コン打ち

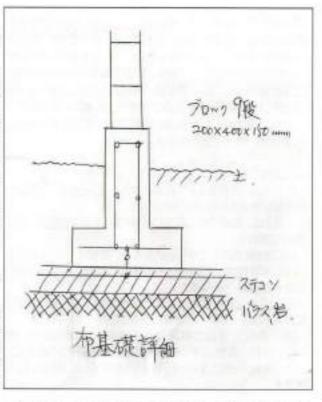
4月24日のリーダー会で「保安林内作業許可申請書」提出は小屋完成の時まで待ち、落成後事後処理として行うとの意向が打ち出された。

28、29日鈴木以下18名が測量用材木をボッカ、そしてワイ打ち完了、 及び基礎コンの高さにタコ糸を張りめぐらす。その際、現場にて安田、永 辻先輩の助言を得て、31日奥村、鈴木で周山に向かう。明くるメーデー の朝、京北事務所保安林係りの吉田技官に実情を話す。そこに及んで 申請書提出に踏み切り、書式を写して1時からの本校で開かれた総会 に報告した。そこで早速提出書類の作成にかかり、新たに物部さんより 土地使用承諾書をもらい、5月4日に新人合宿中、奥村に周山へ飛ん でもらった。

新人合宿後5日より6日にかけて、32名の参加を得て鉄骨、ブロックのボッカをする。この日1日で500キロの鉄骨は無くなった。また、雨だれ岩を穿つの倒えのごとく450個のブロックが、残り227個になった。5月12、13日木村以下5名の土木部隊により、基礎コン打ちの為、鉄骨組みを行う。

5月14日周山より「書類の表題を訂正して提出せよ」との通知が来たの で早速送り返した。

5月18日から20日の間、大学創立記念日を利用して湯浅以下47名が、木枠造りとコンクリート打ちを行う。コンクリートは立ち上がりを除く基礎部分を打ち終える。なにしろはじめてコンクリートを流すというので、立ち上がりの鉄骨から、凹地内の仮枠の位置まで、ひいては1袋50キロのボッカから、配合比まで慎重を期した。それでも鉄骨が立ち並んだ光景は、えもいわれぬ気分であった。



5月25日から27日まで、向来以下24名が立ち上がり残部のコンケリート打ちにかかる。27日は両天。しかしながら、予定より大分遅れているので、南を突いての作業となる。ある者はパンツーつとなり、ある者は藁背負子を背中に、腰には犬の尻皮を反対に当てたスタイル、また、他の者はステテコ姿という具合である。はじめ作業をしていると身体も温まるのだが、昼過ぎに南がパンツまで通り、動いていても寒いという悪戦苦闘の場面を展開した。おかげでコンケリートは水を沢山含んだから、上部は綺麗にならされた。しかしながら、翌る月曜日は3名が風邪を引いて学校を休む結果となった。

6月4日、5月31日付京都府指令第499号をもって「保安林内山小屋建設作業申請書」の許可を受け取った。

かくして作業は公権力で保証されたのだが、既に梅雨期に入っており、4週間土、日曜日が雨に叩かれ、先の27日を含めて、5週間連続作業中止を食らった。

#### ||| ブロック積み

6月23、24日野田以下10名、木枠はずしおよびモルタルで基礎コンの上部を水平にする。

7月3日、本校での総会に於いて、夏山合宿前に入山が可決された。

7日より16日まで高木以下延べ118名の参加でブロック9段を積み終える。

8日の朝、前夜運んできておいたセメントを使い、南西のコーナーに礎石設定、39センチ幅のブロックに1センチ幅のモルタルをアンコに する計算である。上のほうはタコ糸を張っているので、一応何とかなった。しかし、横に17個のブロックとなると、最後の北西コーナーが3センチ程不足する(モルタル幅が1センチ超えとなったことによる)。そこではじめの4個を残して、一度積んだブロックをつぶしてやり直す。それでも1センチ程基礎コンの立ち上がりコンクリートと比べると窮屈なようだったが、基礎コンのぎりぎりまで使ってOKとする。果てさて、ことの興りがここにあったとはつゆ知らず、2段目で修正するから良い、と言うことになり、果ては最後の9段目で上手くやれば良い、と言う輩まで出るに及んだ。

最も、それのみの責任にあるのではない。難をいえば、基礎コン自体シネマスコープタイプをしており、玄人たりともこの場合のプロック積みは苦しいであろうと思う。それにまた、鉄骨の立ち上がりがブロックの幅と合わず、石割り屋が試作品を沢山製造するに及んだ。準備不十分という点では、9段目のブロック積みが、足場が無いので、軽業師をさせられたことであろう。しかしながら、兎にも角にも9段のブロックが積み終わったのである。

#### iv 臥粱殼定

施工過程中最大の難関がこれである。

ボッカが依然残っているとは言え、作業は遅々として進まず。それと言うのも、基礎コン打ちの仮枠から推察して、ブロック上に仮枠を 設定するのはヤンレーな問題であるとの点である。先ず、足場設置が困難で、次に、ブロック上に載るコンクリートの重量を支える土台 を要し等々、素人考えでは全てが難問題である。そこへ私の中学時代の友人で日大の建築料の3人ずれが実習に関西へ来ているの を幸い、1日山へ招待して、彼らの意見を聞いた。

9月中旬、屋根の部分の見積もりを、2工務店へ問い質した。色々な面を比較の末、京都の島田工務店に落札し、臥梁の木材、 仮枠組み、足場を含めた屋根の上棟の合計額26万余円で請負契約を交わすこととなった。

10月6、7日、木村以下58名でバラス、砂各トラック3杯目をボッカ、本所、安田先輩がやって来られた。

10月11日見積書点検の末、工務店へ行き、品目一つひとつの説明を聞き、後10万円の手付金を納め、契約書を作成する。

10月12~14日、内藤以下14名、ここに至りまた難問題出現。と言うのは、貴船、芽生間の道路を改築しており、トラックは通行止

め、その為、材木は花背から寺山峠越えとなった。しかし、以後の材木ポッカに表面切って文句をいう者がいなかったので助かった。

13日早朝、花背スキー場に下って大工及び仮枠用材木を現場に運び上げた。午後4時前、不満やるかたなし。と言うのは、仮枠の難しいコーナー4箇所を残して大工が帰ってしまった。未週にはコンクリートを打ちたいのだが・・・・・。

14日は貴船——芹生間の道路工事施工者に、地蔵さん前のバラスを使われているとの情報が入ったので、早速太田建設と掛け合い、弁償額を受け取り、残りのバラスを前田の小型車を借りて芹生の荷物置き場へ運んだ。

これと前後して、臥梁用に都合17袋及びラスのモルタル用に4袋のセメントを購入した。

10月16日、総会が定足数に満たず、集会に。その場でハガキによる参加勧誘を行う。これに対しリーダー会内部に動揺が見られた。 10月20日、大工3人入山、臥梁完成、四方以下42名、21日臥梁のコンクリート打ち完了、ボルトの位置について若干食い違いが出来たがたいしたことではない。

#### v 上棟

続く27、28日野田以下38名、本所、永辻先輩が参加された。前日、野田、柴田に花背で材木番をしてもらい、日曜日1日で建具 類を除いた全材木を運び終えた。

11月2日、薩摩さん、野田にトラックの相乗りを頼み、大工5人入山、見る見るうちに棟上を成し、東側の屋根板まで打ち終えた。祝 儀出し遅れる。

3日、昨夜来の雨にテントが浸水し、炭焼き小屋に逃げる。一日中間じ込められたためSが雨を突いて酒を買いに行く。

4日、8時起床、テントサイトへ移動、本所、高塚先輩が来られた。窓枠のところへコンクリートを埋め込む作業を行った。昼前、前田 の息子が様子をみに来た。

5日より大工3人が続けて入り屋根の残り、床及び建具を取り付けにかかった。この日霙に見舞われたと言って、大工が文句を並べる。

6日、島田工務店の事務所へ午後6時少し前に行き、祝儀をわたす。そして棟梁に細部の注文をした。

11、12日、湯浅以下7名、1階の床板が基礎コンの上にくるように、大工の修理具合を監視してもらう。

17、18日野田以下18名。セメント4袋ポッカ、屋根にはベンガラ色のベンキを米田さんに塗ってもらい、南面のモルタル塗り1回目を完了する。

22~25日、鈴木以下18名、ローソクを灯して小屋で夕食をする。北面モルタル塗り、芹生のセメント6袋ボッカ、土間にグリ石を敷く。 南面2回目モルタル塗りを行い、それに屋根の残りと窓や屋根の白木に米田さんと金さんにベンキを塗ってもらう。

11月29日、ストーブの件で永辻先輩宅に10名が押しかける。OBの寄贈を受けるのだが、いずれにするにしても特別注文せねばならず、とりあえず既製の薄手を購入する手はずをとる。

30日学校ストでリーダー会開かれず。方針不明。

12月1日、2日、2回生が山小屋でコンパを催した。その前に倉橋に北面に2回目のモルタルを塗り、2日の昼までに足場に使った丸太を花背まで運んでくれるよう「ダメ」を押した。そのようにして無理やり日曜日に自動車を出させ、ドア、梯子等を運び上げた。

#### vi 完成の日

12月3日、ストーブ店に行くと、別注の件は今年中に出来かねるとのこと。これで完全に応急用を必要とするに至った。

12月9日、山小屋落成式、前日よりランプとストーブが入り、20名余が明日に備える用意をした。

9日、昼前にやってきた者を加え、それに、多事にわたってお世話くださった前田専太郎さんを迎え、OBでは本所さんが来られ、総勢 33名により、ささやかなお祝いを挙行した。何かの事由でこの日参加出来なかった会員も、小屋の晴れ姿を想い浮かべて、それぞれが 感慨を抱いたであろうと思う。

この日の最大の喜びは、「ここに自分達の山小屋が出来た」と言うことであろう。それに加えて末川博総長より「青山迎人新」の漢詩を贈ってもらったことが挙げられよう。

12月12日、「保安林内山小屋建設作業完了届出書」を京北事務所へ送達した。

#### 源雲第4号復刻版「山小屋完成」

昭和38年4月発行「漂雲」第4号から

#### 「山小屋完成」

#### 昭和39年卒業 CL 湯浅 修太郎

昨年11月下旬、芹生川二の谷上流に立命館大学ワンダーフォーゲル小屋なるものが出現した。まだキジ場のない不便はあるが、早くもそこで新しい年を迎えたり、初滑りを楽しむ者もでている。

作業に取り掛かったのは昨年3月下旬、本来、3月下旬から4月にかけては大峰で旧人合宿をするのが慣例となっていたが、資金の 目途がついたので、大峰山脈を縦走するよりも面白いと言うことや、また、一日も早く山小屋を建てたいと言うことから、旧人合宿を返 上と言うよりもそれを山小屋建設に変更した。以来、約9か月というものは、ただただ人海戦術によりブロック、砂、セメントとの戦いに明 け暮れ、7坪半の我らの時(ねぐら)が出来た。

それは渡り鳥としてのほんの一夜を過ごすためにしかならぬにしても、新鮮な山の雰囲気で自由に駄弁れる。そんな夢が1年間の汗の結晶として実現したと言えよう。

では、どう言う風の吹き回しで山小屋を建てようとなんてことになったのか、思い出すままに書いてみよう。

「山小屋」、それはクラブ創立以来、ただ、欲しいと言うだけの素朴な願いをずっと持ち続けていたにもかかわらず、高嶺の花としてしか映らなかった。しかし、現実性を帯びてきたのは会員数が200名、数万円の繰越金とテント等の装備が一応そろった一昨年の4月であっ

た。それにクラブ専属の部室と言うものが無く、地理的特殊事情としての理工学部と本枝との共通の場の必要性の増大、及び京大が 比良に山小屋を建てたのに刺激されたのが、一層山小屋建設に拍車をかけたことは否めない。くすぶっていた木が一挙に燃えはじめる ように計画、実行が着々と進められた。資金の方は、夏にPR登山を信州笹ヶ峰で、年が明けて白馬山麓南小谷でPRスキーを催し た。クラブ員には500円の山小屋資金を徴収すること、及び繰越資金に組み入れることが決議され、また、OBから1口1000円の奇付 が集まるに至って、目標額に達した。しかし、材料費及び運送費の値上がりにより不足が生じ、最後まで苦労した。

土地の方面は、北山、南小谷、その他2、3の候補地が挙がったが、利用価値の点で北山が圧倒的多数で決議され、調査が始め られた。OBと緊密な連絡をとり、また、共に日曜日に手分けして北山の資料を集めたが、なにしろ広範囲にわたるのでなかなか条件に かなう場所が無かった。已む無く、京都趣味登山会を尋ね事情を説明して、適当な場所数箇所を相談に乗っていただき、その候補地 を調査した結果、二の谷が最も有望なことが判り、クラブ員によって次々と確認され決定した。

しかし、実際これからが大変なのだ。所有者を捜し、交渉すると言う難題が残されていた。「兎も角、山小屋が完成したのだ」。

ここで1つの意義を見出そうとするなら、この一大事業、正に、大事業なのであるが、これを組織力を使わずしてやりとげたことだ。即ち、やりたいものだけでやろうと言うことで始めた山小屋も工事にかかると大部分のクラブ員が参加し、その体制が最後まで続いたという事実だ。元末、我が会にはまとまりなんていうものが無く、実に個人主義の集団である。強制されたから情熱が湧くものではない。却って失われるのだ。組織を前に押し出すようになると、大多数がクラブから出て行くか、山小屋建設を中止することになるだろう。山小屋はあくまでも自然に親しむ1つの手段に過ぎぬから。この点に関して山小屋は情熱の結晶と言えよう。

#### 源雲第4号復刻版「事の進み」…設計図のできるまで…

昭和38年4月発行「漂雲」第4号から

#### 「事の進み」・・・設計図のできるまで・・・

#### 第二次山小屋委員会委員長 木村恒夫

基礎工事を始め出してから苦労の連続であったが、幾多の難関をも乗り越えて12月9日念願であった山小屋が遂に完成しました。 本当に嬉しいことです。

これで今までBOXがなかったことやら、理工と本校の交流が少なかったことやら、200名近くの会員がバラバラに活動していたことやら で、この山小屋は相当重要な役割を今後発揮することでしょう。今後有意義に利用されんことを望んで、設計図の出来上がるまでを 簡単に書かして貰います。

山小屋を建てたいと言う声は創立当時からあったらいが、本格的に持ち上がったのは36年春の旧人合宿で、大峰の山々を小屋泊まりで縦走し、山小屋の良さとか、便利さを十二分に味わった後でした。その年の新人合宿では比良の望武小屋を利用、会員全体の声となり、それから事がとんとん拍子に運ばれ、6月の総会では山小屋の必要性とか、利用価値とか、場所とか、費用とかが議論とされたのでした。6月の終わりには会員多数の賛意により、山小屋建設が本決まりとなり、直ぐに山小屋建設委員会が開かれました。

当時は誰もが山小屋に関する知識も持ち合わせていなかったので、事の進みは亀の如くのろのろでした。しかし、兎も角山小屋の概略だけでもと事を急ぎ、京大ワンゲル比良の山小屋やら、近辺の山小屋を参考にしたりして、我が会の山小屋の輪郭を作り上げたのです。この時に第一回目の簡単な設計図が出来たのです。早々に大阪の建築会社で見積もってもらったところ、材料費のみで約13万円でした。これで一応の費用が割り出されたのです。

それから何回かの総会で、小屋の大きさとか形等について討議を重ね、費用の面も考慮して、細かく記入された第二回目の設計図が出来たのが9月の初旬でした。この設計図はまだ山小屋建設の場所が決定していない時でしたので、まだ本式のものではなく、ただ費用の割り出しのための参考でした。そこで、大きさや形の希望を記入したものとして見積もってもらったところ、約42万円でした。この金額には大変驚かされました。しかしその純然たる材料費は18万円位だったので、これなら都合がつくだろうと言うことになったのです。

この設計図や費用見積もりに平行して、建設場所の選定も相当難競しました。我が会の山小屋の重要性やら利用度を考えて 色々沢山の条件がありましたが、最も根本的なのは交通の便がよく、その費用が片道100円くらいの所という条件と、京都から約2時間位で行ける所という条件でした。これを満たす場所を見つけ出すのは容易でなく、会員の調査のみでは埒(らち)があかず、北山を広く歩き回っている京都のある登山団体に相談に行き、それによって候補地を挟めて行ったのです。そして11月下旬に、南面に谷が開き明るい事や、北山の感じが十分出ている事やら、水や燃料の心配もないということで、二の谷の現在の位置が決定したのです。

その後地主捜しにも一苦労するが、万事良好に運ばれて、年間1,500円の賃貸借と言う契約で借りることが出来たのです。12月 早々土木科の諸氏によってはじめて測量が行われ、以後3月中頃まで何回か調査が行われました。そして、地盤が弱いことやら湿雪が1メートル以上も積もる事やら、敷地の方角やら、また、1、2月の降雪期に我々は試験中で雪かきができないことや、室内を明るくしたい等を問題点として設計図造りに再々検討を加えて、現在の山小屋の設計図が完成したのでした。

#### 源雲第4号復刻版「山小屋誕生まで」…その存在意義…

昭和38年4月発行「漂雲」第4号から

#### 「山小屋誕生まで」…その存在の意義…

昭和40年卒CL 堤 靖和

3月上旬のある天気の良いウイークデェーに久方ぶりに山小屋に行くべく、朝早く起き、出町棚9時発の京都バスに乗り込んだ。車内

は積雪1メートルの花背へ滑りに行くスキーヤーで満員、バスは峠下まで、旧花背峠を経て農協、寺山峠と、心配したほど時間はかからず、夏時間どおりに歩けた。でも、もし去年これだけの雪が積もっていたらと考え出すと、苦しかったが且つ思い出のあったこの一年間が頭に浮かんできた。

僕の覚えている限りでは36年度新人合宿が比良山の望武小屋で行われている時、3日間連日土砂降りで小屋に泊まった者と、テントに泊まった者との間に貧富の差がはなはだしく有りました。また、丁度その年京大ワンダーフォーゲル部が比良山打見谷へブロック建ての山小屋を建設した。この二点が刺激となって、36年の秋頃より建設場所の調査がはじまり、第一歩を記しました。が山小屋建設という助議が36年の春頃出されてから37年の3月の工事開始までの1年間を振り返って見ますと、我が会の山小屋について考え方と言うようなものが判るのではないかと思います。建設賛成者は我が会が合宿中心主義ではなく、バーワン主義であるから、テント収容能力が会員数だけ必要ではなく、会費で山小屋建設を図るべし、建設場所は会員が良く行けるように比良山あるいは北山にすべし。費用を出来る限り切り詰めるため、また、会員の自主性を高めるため、山小屋は自分らで造るべし等で、結局のところ山小屋を造るという一つの過程そのものが個人にとっては一生にあるかないかの大事業であるので、各人にとってはブラスとなるであろう、と言うのであって、それに対して反対者は、前述の意見を違う次元で眺めたもので、我が会は大学ワンダーフォーゲル運動の中では歴史も古いが、「金よりも自由を!」というモットーであったため、装備もまだまだ満足すべきものではない。また、建設資金も会費、客付等で全額おぎなえるわけではなく、矢張り個人負担にかかってくる。建設工事中、会の主旨たるパート・ワンデリングがゆがめられるのではないか。と言うような点でしたが、山小屋建設案は可決された。

次は建設場所ですが、これは北アルブス等の遠距離は費用が高く、会員の利用度とで否決され、比良山か北山となり、比良山は 山小屋が多くあり、電鉄会社の手で開発が進んでいるので、いずれは六甲山のように俗化するだろう。それに比べて北山は標高こそ低 いが、京都岳人の故郷であり、また、渋さがあり、今のところ俗化する気配は見当らないとの理由で北山と決定しました。 現在の場所は、11月頃K氏等の努力により決定され、全会員の寄附及び有志の寄附により37年3月の旧人合宿より小屋建設が始まりました。がここに重大な問題が生じてきた。

京大の山小屋が建設された時のように、ブロック何個以上という風にノルマを決めると工事が早く済み、見通しが立ちやすく、会行事の妨げにならず、結局会員個人個人が気持ちよく働けると言うのが賛成意見で、反対者はノルマを決めると確かに利点は多いが、それらはいずれも近視眼的な考え方で、我が会の根本精神たる自主性と言うものを全く無視し、違い未来に汚点を残す。この際苦しいが失張りノルマを決定せず、会員個人の自主性を重んじよう、という意見でノルマ案は否決されました。がこのノルマ問題は、山小屋が出来上がる瞬間までよく問題になりました。

会員に自主性が失われたのですか? このように小屋建設が青写真の段階であったころより、我が会の山小屋は普通の営業用の山小屋、つまり北アルブス等に見受けられる登山基地、あるいはワンデリングの中継地点と言うような性格は少なく、むしろある会員が山小屋の名前に「〇〇道場」とか言うイメージが浮かんでくるようなものと考えていた様に、我が会の特殊面である精神的なものを理解する一つの場所として、あるいは本校、理工と地理的に離れている面からくるハンディキャップを克服するために、とか言う風なものが山小屋の利用の仕方の一つだと思われている人が多かったのではないか。と思いますが、矢張り山小屋として利用し、北山のことなら立命に! と言われるくらい歩きたい。また、春には新緑を、秋には月を見て洒を、と言う様に会員はそれぞれ考え方も違いましょうが、大事なことは積極的に、且つ、意識して山小屋を利用して下さい。

#### 漂雲第4号復刻版「ポッカ」

昭和38年4月発行「漂雲」第4号から

#### 「ボッカ」

#### 昭和40年理工卒 河原祥晁

今日も太陽が何の会駅もなく頭を焦がしてくる。額の汗腺からは噴水のように出る。ただひたすら足を進めるだけでそれを拭おうともせず、無言で下を向きながら夢遊病者の進軍である。歩きながら思うに、皆は何を考えて歩いているのだろうかと。自分の庭のようにどこに木の根があり、どのあたりで曲がり、坂があり、道標があるのか。下を向いて歩くせいか自然に覚え込んでしまった。

芹生から二の谷山小屋建設地までの距離は知れている。途中に部落民の避難小屋としては少し貧弱であるが体態所としてはうって つけの場所がある。杉の皮で出来た唯一の場である。ここまでくればあと半分、もう一息と思うようになった。肩に食い込んだキスリングを 「ドスン」と、カエルが仰向けにされた如く大の字にひっくり返っている光景が見受けられる。暫時、タオルで汗を拭う者、タバコに火をつける者、メガネを拭く者等様々である。5分もたたないうち何時もの殺し文句が誰かの口から出るのだった。また、ボッカ隊は無言で選軍開始。山小屋建設が着手されたのは今から2年前、昭和36年、雪がほんのりと綿帽子を被っていた12月頃から始まった。最初に予定地と決まった時約10人が入山した。冬は見る見る到来、春の雪解けまで冬眠をやむなくされた。例年通り旧人合宿が山小屋建設に振り替えられた。3月下旬と言えば木々は新緑の芽生えで頭を持ち上げている。が北山はすべてのものがまだ凍りついていた。時々雪も降ってくる頃である。

二の谷の入り口より少し入った所にテントサイトが設けられた。労働者の溜まり場である。昨夜から外に置いていた食器の中には氷の鏡が出来ている。管の吐く息が白く見えるのもここから始まるのである。朝食を済ませばいよいよ待望の整地作業がなされるのだった。 暫く予定地を見ぬうちに辺りは一変していた。昨年暮れに入った時は完全に傾斜を保っていた山腹が今では踏段のワンステップのように斜面がごっそり抉り取られていた。某君が氷山の一角をツルハシで根気よくくずしたらしく、眼前には岩盤が大きな口を開けて待っていた。全てが入力に限られていた。

これに並行してポッカ隊の誕生である。朝飯前に1回行われ、これからポッカ、残酷物語の始まりである。各人のザックの中のものを全部吐き出し、肩にちょしとかけて、半ば目を閉じて意気揚揚?デッパツ。行きはヨイヨイ・・・・・、芹生で目に飛び込んでくるのは砂利、砂

が広く山積みされていた。これぐらいなら簡単に運べるだろうと思った。早く到着した者から順にスコップ1杯、2杯、3杯…無慈悲に入れられた。しかしいっこうに滅る様子はない。これほど哀れに思ったことはない。1粒の石が、1粒の砂が負われていくのかと考えるとおろそかに出来ない。暫く雑談を続けながら各々ザックの口をしっかり閉じてあお向けになり、両腕を肩あてに通す。自分で立つ者、しかし大部分のものが他人から両手を引っ張ってもらって立つのである。始めての僕は、肩にずっしりと感じた。1、2歩進むと腰が左右にふらつくのだった。これでは到底向うにたどり着きがたいと思ったのもつかの間であった。

嫌な木馬道が出てきた。初めてのボッカは真剣だ。1歩1歩無事渡り終えた。(この木馬道で直ぐ前を歩いているM君は木が折れ転倒、「君は重いからな」、半ば嘲笑した瞬間「ボキン」僕も股裂きの利にかかった。そのときの苦しみは想像に任せます。ここでは数名がその後も木馬が折れて転倒したものが続発したそうです)ひとまず安堵の胸をなでおろした。

植林の杉の苗木の間をくぐり河原にでた。横に渓流の囁きを聞きながら、しっかりと岩に靴底をつけて歩むのだった。汗が額にうっすらと 出てきた。黙々と一歩、又一歩と歩み続けるだけである。額の汗が激しくでてメガネをかけているものは一度となく泣かされる。水中メガネになり、目の前に霞みがかかった。これを拭うのもドトロク外して歩けば二重に見えて不愉快、仕方なく足を進めるだけである。やっとの 想いで休憩場所に着いた。ファイターはここで休まない、一路サイトに向かう者もいる。僕はいつもどおり盛り土の上に「ドスン」と置くのだ。このときの快感に陶酔してしまった。

その後二の谷に到着、ここからテントサイト迄直ぐで、何時ものように若干なりともデザートが出る。これが唯一の楽しみである。誰もが一息入れるところである。働き蜂が蜜を運んできてはこのデザートで釣られる。又これより予定地までひと頑張り、右手に天狗岩を眺めながら進む。これからが大変、心臓破りが待っている。最後のあがき場所でワンステップごと力なげに急坂を登ると、長い長い行程にピリオドが打たれる。

また「ドスン」。この瞬間言語に絶する快感に陥いる。まるで雲海の中で一人忽然と仮睡しているようで、今までの苦しみはすっかり洗い流されるのだった。

いつしか日もたちこの二の谷の入り口に桜が満開となっていた。学校も今日が入学式で新入生がここに来てボッカをするのもそう遠くで なかろう。幾度となく惰性でボッカを繰り返しているうちに自分というものが余りにもちっぱけな者であった。理エボックスでは「山小屋に 入ってくれ」という何時もの声が聞こえてくる。一度に十数名が入れば事足りることである。

しばしば討論された「強制すべきか?」

しかし、ここまでよくも強制もなく山小屋が現存していることを誇りとしても恥じないと思う。一つの砂、一つの石、一つのブロック、一袋のセメント、皆が思い思い、愛着が湧くのも当然である。ボッカと言うものがドレほどつらく苦しいことであるかは、今となってはすっかり楽しい思い出の一ページとして心に稼めておきたいものです。異口同音ボッカが好きという人はいないだろう。僕自身もただ惰性でやっていたことは事実です。自分達の山小屋が、クラブ全員で汗水を流して作り、ここに至って12月9日完成式を挙げてここに大事業に終止符をつけた。この喜びをこれから新しく入られる人達にも共に分かち合いたいものです。

偶然にも現役中に創られたのも幸せだった。赤い屋根、簡易建築、立命館大学ワンダーフォーゲル山小屋が何時の時代までも完成 当時の純粋さで保たれることを望んでいるのみである。しかし、実際山小屋建設のエジキになった一回生の方々はパートワンデリングも 出されなかったのは、大変寂しいことでした。そういう人はこれから二回生、三回生もあることである。大きな目的に全員が一致協力して なし終えた時、そこに、「人間形成に美しさがあった。」と言える。

#### 源雲第4号復刻版「ブロック積み」

昭和38年4月発行「漂雲」第4号から

#### 「ブロック積み」

#### 昭和40年理工卒 松井和雄

#### 7月11日

やっと夏休みに入る。ほとんど毎週のように入ってきた二の谷も、進みの遅い建設にうんざりして半分惰性で峠を越えて、のこのこと二の谷テントサイトまでやって来た。テントサイトとは体裁の良い飯場のことである。

居るわ居るわ、食費と交通費を払って、わざわざ働きに来る涙ぐましい土工どもが。この飯場の炊事夫の樂さんに、焼きそばらしきもの を食わしてもらって、建設現場に上る。そこでは、やっとブロックの二段目が積み上がりそうだ。もう積み始めてから4日間も過ぎてしまって いると言うのに、あと7日間で9段全部積むことが出来るのかしら。

#### 7月12日 晴れ

6時起床、セメントボッカに芹生まで行く。セメント1袋、鈴木さんに代わってイチョウの木より担ぐ。2ヶ月前に担いだよりも数倍の重さがあるように思う。20メートルも行かない内に、息が切れ、腹ががくがくして、首だけが前の方に出て、さながらスッポンの如し。遂に二の谷出合いでグロッキー。朝飯を食って作業場に上る。ブロック式石造りとでも言おうか。やけに凸凹してセメントだらけのブロックが積み上げられていた。砂をフルイにかけて、空菱で一杯一杯計量し、カセーソーダーのぬるぬるした防水液を入れ、大の大人が14、5人泥遊びをしている。土工カイナ!

素人の悲しさ、鏝など使うことは言うに及ばず、指でモルタルをつかんで、ブロックの上にチョコチョコと載せて隙間に指でモルタルを押し込む。この能率の悪さ石器以前に戻った感じがする。この原始の人達の間にも、突然異変たる者が生れた。つまり小生が、鏝皿の上にモルタルを載せて、皿を隙間に合てがって、目地鏝で掻き入れる最新建築技術を発明したのである。この技術のかいあってか、その日は4段まで積み上げることが出来た。しかし、半パンのむき出しの足に、ブトの奴が、7、8匹も猛烈なキスをして行った。

昼前に雨が降り出す。慌てて下の納屋にセメントを大きなフルイに載せて下る。元々このフルイは1メートル平方と言う大きな図体にも かかわらず、目が組すぎてセメント運搬用担架にしか役に立たず、おまけに目の直径の大きさを大野さんと賭けをして、80円のランチを 着らされた代物である。雨が本式に降りだして、皆は下の飯場に下りてきた。テントの中から外の樂さんにしきりに昼飯の催促をする。ま だ11時だと言うのに、昼飯の炊き上がった頃雨がやむ。暑い日ざしがカリカリと照りつける。

ブトがせっせと足を刺し、人夫はバシバシとブトを打つ。そこへ、ゴソゴソと声原、三好両氏がはるばる京の都からおいで下さった。早速 芦原氏がブロックを積み始めるが、余り上手くゆかない。「鏝があったらなー、チョイチョイと積み上げるのに……」としきりにおっしゃる。生 憎いつも転がっている鏝がない。鏝があれば一人前のブロックエなのにと残念がる。大分自信がありそうだ。

そろそろ4時過ぎなので、小生一人食事当番のため下に降りていったら、途中の納屋に鏝を見つけた。芦原氏の誇大妄想が嵩じれば精神障害にもなりかねないだろうと、もう一度作業場に鏝を持って上る。結果は、鏝より素手の方がいかに進歩した工具であろうかを彼に発見させることに相成った。飯炊きを始めると大草がやって来た。「京都は暑うて寝られへん。ここなら涼しかろうから寝に来たで……」とか。

今日、三好氏に買ってきてもらった豚肉が、半分腐っている。「かまへん、かまへん、入れてしまいな!」高木さんがしきりに上手い上手 いと食べる。

#### 7月14日 晴れ

誰も腹こわさず。

朝、ボッカの後に、花背に食糧を買い込みに行く。農協の例の無愛想なおたやんが、うさんくさそうにおれの半パンツ姿をチラッと見て、 「マアー、汚い!」と言わんばかりに「何ですか」とおっしゃった。

そもそもこ奴は三日前、利倉が鉄筋の結束用の針金がなくなったので買いに行ったら、ロクに探しもしないで追っ払われて、二度目に 違う店員に聞いたら、ちゃんとあったのだが、おかげで彼は二度山道を往復させられた憎々しい小娘だ。帰りしなに小学校の上から農協 を振り返ったら、こちらを見ていたらしく、ブイと横を向いてすまして事務を取り出した。小生にいささか気があるらしい。馬鹿にすんな!

テントサイトに帰ったら、食橋と福井が来ていた。一週間ほど前、某女子大のメッチェンと山に行くのだと張り切っておられたのだが、今はその見るおもかげもなく、北山にボッカにおこし下されたのである。残念でしたね。

タ方、星飯が少なかったので、米を圧力鍋に入れ過ぎたらガンタ飯と相成った。それで少しでも美味しくなるかと土の上にうつ伏せにして置いたが、ひどい泥んこ飯になるとは、神ならぬ身の知るよしもなかったのである。つまり、カレーを作っている最中、猛烈な雨が降り出して、地面から跳ね返りの飛沫が見る見る内に転がっていた鍋や食器に泥水を貯め、テントの中は外よりひどい洪水となった。飯など放り出して福井と二人で中藤でテントの中から外の光景を感心しながら眺めていたら、高木氏がブルブル震えてテントに飛び込んできた。しきりに倉橋が雨を降らせたのだと怒っている。「タンクローの雨男め!」

一時間もすると雨もやんでカレーを炊き上げ、いざ飯を食わんと圧力鍋を取った途端、焦げて真ん中だけ黄色く、周りは泥のしみこん だねずみ色の飯が顔を出した。皆はぼやくことぼやくこと。砂ならぬ泥をかむような飯を食って食欲は満足したのか、思い思いに腰掛け て、多分ありもしない彼女のことなど考えて、ぼんやりとタバコをふかしていた。なんとわびしき夏の夕暮れか。

#### 7月14日 晴れ時々時雨る

朝、一回生の井上が嬉しそうにキジ打ちから帰ってきた。彼が言うには出会いにメッチェンが王六Lテントを張って寝ているとのこと。「ほんまかいな」。2、3人パラバラと走り出合いに向かう。我もと、かのゆかしき女性と言うもの見むとて、キジ紙片手に出合いへと出てくる。 周るわ居るわ、赤や黄色のまばゆいばかりの彼女等が、感激の余り、足を滑らせて川の中にザンブコと飛び込む。「あー、寒む」

#### 7月15日 晴れ

今日でブロック積みも終わる予定。総勢6人、倉橋が帰ったので雨も降らず、午後4時過ぎ最終段である9段目を積み始める。余分のブロックを足場にするため、顔を真っ赤にしてよろよろと持ち上げる高木氏の姿が痛ましい。正に赤ミイラそのものだ。一週間ぶっつけでブロックを削っている西田猛もすっかり黙りこくって働いている。高木さんの間の抜けた一人漫才にへらへら笑う声が、じめじめした二の谷に吸い込まれていった。

5時15分全段積み終わる。

夕食はありったけの材料を炊き込んだドライカレーと、公然とヘゾクッタ食費から、高木さんと堤が星の降る夜道を、芹生まで買いに 行ったビールが8本。この夏には完成するはずの山小屋もやっと半分、いいかげん皆のお荷物になってきたこの仕事、これでいいのかし ら。もっと楽しいものであったはずだったのに、自分の意志が弱いのかしら。仕事を終わっても何かしら空虚な感じが、自分を沈ませる。

#### (あとがき)

最後の文章は、いささかトンチンカンです。しかし、当時も、小屋完成の時も、現在も、説明しがたい自分の気持ちです。誰かが判ってくれるかも知れません。何十年かして、また、クラブで山小屋を建てる時に。

#### 無額

昭和38年4月発行「漂雲」第4号から

#### 「旧人合宿こぼれ話」

昭和40年卒 四方宗和·瀬端武男共著

今年[1962年]の旧人合宿は、皆さんもご存知のように山小屋建設のため北山、二の谷にて行われました。倭達二回生にとっての

最後の合宿にあたり1年間の締めくくりとして、管一生懸命やっていたようです。そこでこの旧人合宿中の色々な裏話など、余り人に知られざる話など書き留めてみました。まあ、兎に角読んでください。

#### 一、ワンゲル優等生と学問

スキー合宿で二日目に右足を折られたM(5回生)さんは、不自由な足を引きずって旧人合宿に二度も顔を出され、食当を頑張って くださったのには、はなはだ感謝にたえません。今頃は日出度く卒業し、新入社員としてシボラレているはずの彼が、嫌に落ち着いている のでよく身元を洗ったら、教授の推薦によりあと一年問勉強するとか。全くワンゲルには「学問の追求」を趣味とする人間がたくさん居る のでオドロキました?(四方)

#### 二、キジ射ちの話

(1)上記のMさんが、山を降りる日に、変なことを言いよった。彼いわく、「ちょいとお花摘みに行って来るから」。彼の右手にはスコップが持たれている。何のことだかさっぱりわからない僕は、T(2回生)君に尋ねると、女子ワンダラーのよく使う言葉で「キジ射ち」のことらしい。諸君も女子ワンダラーと同行する時、彼女が「私、お花摘みに行って来るワ」と言った時、勘違いして、「そんなら俺も一緒に行って摘むワ」と言わんように気をつけて下さい。そしてMさんはゆうに2時間もかかってお花摘みを終えハナ唄を歌いながら帰って来ました。しかし、少々足が痛かったとか?!

(2)キジ射ちは、山仲間でよく理解されているが、初めて耳にする者には、はなはだ難しいと言うよりは、「鳥撃ち」と間違えてしまう。 特に女子に多いことで、昨年の夏のPRワンデリングの時、高谷の池でM(理3回生)君が「キジ射ちに行く」と言うと、成安の人が「何も 持って行かはらへんの?」といい、また、M君が、帰ってくると「やっぱり何も獲れへんなんだやろ」と言ったとか。(四方)

#### 三、風呂屋の番台の話

4月3日は雨であった。雨で一日中沈殿ともなれば、テントの中では馬鹿な話に花が咲くのも当たり前。S(理、一回生、あだ名はゴリチン)君が第5テント(別荘)へ来て、相変わらずの調子で話し出した。何分彼の親戚は風呂屋とか。休みともなれば、よく手伝いに行き番台に立つそうな。そして彼も今ではやっと一人前になれたとか。その苦心談を我々に話したわけです。僕も姉を風呂屋にでも嫁がせて、アルバイトにでも行こうかなと思い、この話を合宿紅一点のM(三回生)さんに話してたいそうしかられました。トホホ・・・。(四方)

#### 四、アルコール

合宿以降テントキーパーとして残った連中は、アルコールには不自由しなかった。12日の夜、理工のOさんの送別会を兼ね、昼間のうちに一升瓶一本を買ってきて、夜になるのを待てず、夕方頃からちびちび飲んでいた。一本を6人であけた頃、もう皆はよい気分になっていたが、Oさんはまだ不足と見え、いきなり「もう一本買ってきな」と言い出した。往復一時間半もかかる花青まで、K君、A君、N君の三人がエレキを頼りに出かけたが、K君が峠の上でダウンし、漸く三人戻ってきた時、彼らはその場に倒れてしまった。しかし、一升瓶のためにこんな苦労をするのか……

また、14日の日には、一度山を降りたS法君が、ウイスキー丸瓶を持参したまでは良かったが、バスを降りた途端、S経君、N君が「ヤ ンレー持ってきたか」と言い、悦んだS法君がキスを置いた途端、タッシュの中のウイスキーを割ったのは、今なお残念なことです。(瀬端)

#### 五、ヒッチ

15日は、私鉄、私バスはストとあって、京都バスも京福電車も動かず、テント撤収に当った10人は、全く散々なる目にあった。中でも気の毒であったのは、三回生のT、S、Yの三君で、来る時も上加茂から歩いたそうだ。仕方なしに10人の者は歩きに歩き、とうとう責船の手前までたどり着くことが出来ました。有難いことにそこに一台の乗用車があるではないか。喜んで中をのぞくと、なんと中ではアベックが熱烈なる「ラブシーン」を演じていました。10人の者は、へんな顔つきをし、その場を素通りし、やっと貴船駅に着き、そこで車を片っ端から止めることにした。そうこうする内に、遥かかなたから見覚えのある車が来るではないか。近くに居たS君が止め、S、Nの両君が乗ることになったが、なんとその車は例の車であったとか。全く申し訳ありませんネ。(四方)

#### 六、合宿帰りのその果てに

これはごく内々の話である。合宿帰りで変れ果てたS君、一度下宿へ帰りまた、友達を迎えに行った帰り道のことだった。市電の停留 所で行き違った友のことをしばし考えていると、その前に一人のメッチェンが意味ありげな調子で通り過ぎたのである。ついふらふらとその メッチェンを見つめることしばし、突然そのメッチェンが振り向いてこちらへ来るではないか。その男が何かを期待したのは当然であった。し かしそのメッチェンは、彼に道を尋ねたかったのだ。よくよく話を聞くと、今年京都に来て下宿しているのだが、タクシーに乗ってついふらふら と四条辺りに出てきて、帰り道が判らないとのこと。よしそれならばと言うわけで、その男、電車に乗るのは面倒と、さすが立命ワンダラーら しく、そのメッチェンの下宿を求めて歩き出した。

その男の後からいわく、そのメッチェンが大層美人であったそうだ。その男、下駄履き姿で女を尻目にすたすた歩いていった。丁度百万 ベンの交叉点の真ん中まで来た時、後からそのメッチェンがその男に「まさかあんた悪い人じゃないでしょうね」と言われた途端、彼は頭に 血が上り、その場で学生証を見せ「疑うのだったら立命館大学に行って尋ねな」と言ったところ、彼女は平謝りに謝り、やっと彼を信用し たと言うことだった。それまで彼は信用されていなかったのだろうか。否、それどころかあまりにナイトぶりを発揮しすぎたゆえだろうか。(類 端)

#### 七、ある恋の物語

今度2回生になったT君は、一見したところどこかの大学教授タイプで文学青年たることは、自他共に認めるところであります。彼は今 合宿に参加する前にワンゲルの友人の所に遊びに行き、彼の妹に根っから惚れてしまい、二泊の予定を三泊にまで引き伸ばし盛んに モーションをかけたと聞いています。合宿に来てからも彼女が忘れられず、シュラフの中で夢にまで見たそうだ。それがパレ、彼は皆から大いに見直されたとか・・・・・(四方)

#### 「立命WV創立小空」の孫コピーの被塞

「漂雲」創刊号の復刻版から

#### 「立命WV創立小史」

#### 昭和35年卒 鎌田 克則

今度、機関総発行に当たって、私は当会の創立事情を書き留めておこうと思う。

今後当会は益々発展し、より輝かしい歴史を積み重ねて行くであろうが、その出発点をまだ創立者達が在学している間に記録にとどめておくことは、何をさておいても重要だと考える。それに当会の今までの発展過程を見るとき、あらゆる面に創立当初の気風が残っており、また、他方、当会の行き方、ワンゲル本来の姿を探究しようとして、その困難さの故に、改めて我々の会は一体どんな考え方で出発したのか、という間に立ち戻ることも多い。そこで創立当時我々が意図したものを明確にしつつ、当時の模様をつたない文ではあるが、知る者の義務として記してみようと思う。

当会の創立日は1956年4月27日と記憶する。その日の朝、ワンゲル会員募集のどうが4000枚ばら撒かれ、ポスター10数枚が校内に張られ、正午から研心館北側のベンチで受付が始まったのである。続々と申込者があり、3日目には100名足らずとなった。まさに大成功である。しかもその企画・準備一切をしたのは、当時本学法学部に入学して2週間目と言うホヤホヤの新入生、大野照夫、福島俊平雨君、それに私の3人だったのである。このことだけは誇ってよいだろう。3人とも高校が同窓であり、私と福島君は山岳部で、大野君は生物研究部で各々活躍し、よく知り合った仲であった。そして私がワンゲル創立の構想を入学と同時に両君に持ち掛け協力を得た結果、今見るワンゲル創立の第一参が踏み出されたのである。

さて、次に私がワンゲルの構想を持つに至った動機について記さねばならないが、それは全く個人的な事情に端を発している。先に述べたように私は中学時代より山岳部に在部して、かなりの活動をしてきた。しかし、私は常に「雪よ岩よ我等が宿り」の形ではなく、今から思えば多分にワンゲル的山行が多かった。大学に入って当然山岳部に入るか否か迷った。以前の経験から大学の山岳部について一応の知識は持っていたが、それだけに私は素直に飛び込んで行けなかった。その理由として先ず相当の体力が必要なこと、時にはアルビニズムの常として危険な登はんを行わなければならぬこと、団体を構成している以上個人の自由活動が抑制される場合の多いこと、大学の勉学と両立させることの困難なこと、相当に費用がかかること等であった。勿論、山岳部としては当然のことであったが、これまで6年間の部生活にかなり飽きがきており、全然変わったことがしてみたかった。それで思いついたのがワンゲルなのである。

ワンゲルについては、見聞と事典から読み取っただけの知識しかなかった。それで私は今述べた山岳部の行き方と全く正反対的な解 釈を施してみた。即ち、体力は要らない。誰でも参加でき、野山を歩いて一切危険なことはしない。団体による規制はなく好きなことが できる好きなものの集まりであり、勉学ともかち合わず、金も掛からないと言った同好者の会であった。正直に言ってこれが私がワンゲル に寄せた最初のイメージであった。

この構想を立てたり崩したりしている中でだんだんまとまりが出来、その考えに両君の協力を得てブリントし、入学して2週間目の朝、3 人は校門前ではにかみながらどうを撒いたのである。一言で言えば、それだけのことであるが、それまでの準備にはかなりの苦労があり、 申込者が殺到した時には感激一入(ひとしお)であった。

さて、その宣伝文句であるが、また、当ワンゲル会にとって歴史的文書とでも言えるものであるので、ここに全文を掲げて見たいと思う。 二年前のものであり、以後色々考え歩んできただけに、全く幼稚で恥ずかしいものであるが、そういう意味で記してみたい。

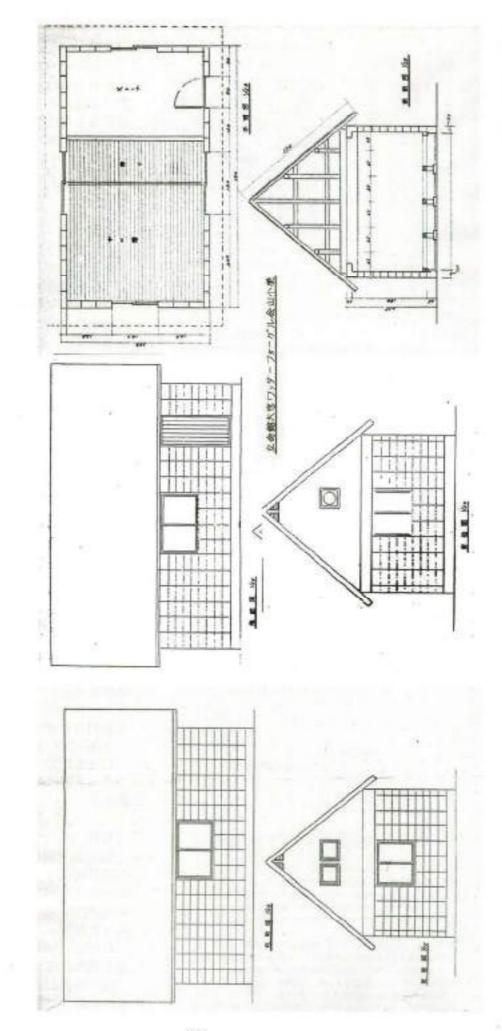
「皆さん! 今度一回生の者が数人集まってワンダーフォーゲルと言う新しいクラブを結成しました。ワンダーフォーゲルと言うのは、渡り鳥の意で、青年男女が簡素な支度で野山を渡り鳥のように渡り歩き、健康と生命力に溢れた人生の一刻を満喫する運動で、ドイツに始まり、今や世界的な運動です。

私達はこの素晴らしいクラブを立命にも作り、色々の楽しいブランを行って、皆さんと共に、この大学生活をより有意義に、より楽しくしたいと考えています。また、このクラブはその性質からも判るとおり、試合などを目標としたものではなく、レクリエーション、趣味を主体とし、自由な、民主的なクラブにする方針です。

皆さん!このすばらしいクラブに入って日本国中を、いや世界中をかけめぐろうではありませんか!」

以上の呼びかけに応じた学生は先に述べたように100名近くであった。さっそく次の日曜日奥比叡登山計画を皮切りに、5月の連休は 保津峡、ボンボン山、夏には妙高高原キャンピングと順調な足取りで発展し、夏頃には会の常連と称する20名ほどの中堅会員が出来、基礎も全く出来上がったのであった。当時の常連は現在三回生である永辻、本所、西野君等々の面々であることは言うまでもない。

さて、以上が創立当時の模様であり、当時の嘘隠しのない幼稚な考え方である。これらのことは矢張り正しい記録として輝かしい伝統の殿下層に止まるであろう。今後益々発展せんことを心より祈って筆を置く。



山小部四十周年記念イベントのお知らせ

立動権大学ワンダーフォーゲル採用者

時下生すますご清栄のこととお客び申し上 げます。さて、立命ワンゲルが京都北山に 所有している山小県が今年で建立四十四 年を迎えます。そこで、四十回年を記念し てイベントを企画しています。時はまたる十 □ 月八日の日曜日の正午から、場所は立 衛ワンゲルの山小屋です。尚、昼食・飲み 物などは各自で用意してきてください。な 特別などは毎日で用意してきてくたが、な したかとお忙しい身だとは扱いますが、及し ぶりに向小類に足を運び思い言語に花を 緩かせてみるのはいかがでしょうか。の日間 氏お縛い合わせの上ご参加してください。 h

道記・交通手段について:現在、京阪出町 柳駅前からの花育高原〜バスがでていま す。発車時気は7:50、10:00、13:00 で、「花背高原義」で下車してください。

お問い合わせは ao0560068ss.ritsumei.ac.jp

までお願いします

資料 1

資料 2

2110

0年の管盤におかれましては、いかがお高ごしでしょうか、この度、おお会が にいた方式するから他の改善を参加しています。中級で収集には一般を設ける ある会性によしたが、今日は一日改、屋の交換をジー内の公司をも同場しています。現在のの本書の依頼でする、改立フスは一部等は、本質の表材上を行化 が移かなて付けを書くなっています。 また二般なには無い振を使っているため う後の限制に本をがありませ

この投稿にかから理解を集者に見締むってもらったところ、お賞でホトレガ D. むした。この粉は枝枝生だけでは飲みるちのではありません。そこで新た田 際ではありますが、OEのガルにご組入をお願いしたく自催をさせて前さました。 の計画が指導を作りは間径をもって行います。同期の**後を込み用**解に一口上で円 で一切などのご客所も三月末日までにお願いいたします。存録につきまして 表示でご連載ください。なお、自然変更や古様への能入園れのためこの性彩描 有型水平产业被专办1000次米州北京的AIE、お駅北下巴口店は各国地口です。

2615

被探查

京都市上交流仁和市物資銀幣店人名下植町802 きたのペイフェロコ 大程·塞 000-4760 game

平满十五年之并五五百

「山小場會療の件」

お願の願る季節となりましたが、お変わりございをせんか。 さて、4月27日(他) に帰様が「ミサウホーム」の工事担当者の方 2条と、現後の下補店、大町さんとで、住理用額の打ち合わせをされる ことを聞きましたので、私もを非社、利食者を誘って白小屋へ行って ## L#.

「結論として、OBの方々からの責任会が問題に集まるましたので、 工事は5月19日から3週間かけて行います。そして、御理完成後に 現役から、前付をして問いた方々に、工事の明確と後期の収支援責せ、 お送りいたします。」と、聞いてきましたので、ご報告いたします。 6月の物物には、美しい45小龍が見られそうです。

[資料 1]

三井アーバンホテルにおけるOB会開催 を知らせるはがき。「今回の催しの主旨は 旧交を温めると同時に豪雪のために被害を 受けました山小舎修理のための資金カンパ のお願い」が大きな眼目。

開催は1984 (昭和59) 年8月3日、場所は 大阪・三井アーバンホテル、会費は7000円 でした。

[資料 2]

山小屋四十周年記念イベント。

「立命ワンゲルが京都北山に所有している 山小屋が今年で四十周年を迎えます。そこ で、四十周年を記念してイベントを企画し ています。時は十二月八日の日曜日の正午 からです。 (中略) 何かとお忙しいとは 思いますが、久しぶりに山小屋に足をはこ び思い出話に花を咲かせてみるのはいかが でしょうか」

差出人は「立命館大学ワンダーフォーゲ ル同好会」となっている。日時は2002(平 成14) 年12月8日。

[資料 3]

山小舎改修を知らせる現役の大概憲君か らの封書である。

「現在の山小舎の状態ですが、窓ガラスは 一部割れ、木製の窓枠は老朽化が進みたて つけが悪くなっています。また二階床には 薄い板を使っているため、今後の使用に不 安があります。

この改修にかかる費用を業者に見積もっ てもらったところ、実費で六十七万円でし た。この額は現役生だけで賄えるものでは ありません。そこで誠に恐縮ではあります が、OBの方々にご協力をお願いいたした くお便りさせて頂きました」

とあって、振込用紙が同封されていた。 一口五千円で、一口以上の寄付を請うもの であった。2003 (平成15) 年2月28日付で ある。

[資料 4]

福井氏(昭和40年卒)からのはがき。4 月27日にミサワホームに勤める葉さん(昭 和39年卒)が、修理明細の打合せをすると いうので、松井、利倉両氏と共に小屋に 入った報告。

日付は、2003 (平成15) 年5月1日。寄付 金も順調に集まったとのこと。

(注=資料2および資料4が平成の大改修へ とつながってゆく。P49参照)

3

#### あとがき

1962 (昭和37) 年に山小屋が完成して45年の節目、2006 (平成18) 年10月21日の創部50周年記念集会で「建設に従事したOBが、生きている間に山小屋特集号を電子出版しよう」と提案し、さらに同年暮れに原稿募集を呼びかけ、立命ワンゲルのHPにも掲載しました。対象は記念集会に出席した210人と欠席の返事があった200人ほかでした。寄せられた原稿を見ていると、OB・OGの中にも「山小屋へのなつかし度合い」の差があるのか若い人の原稿が少なかった。ほとんど記憶がないという人が多くおられたが、例えば、日記やメモ類、写真の裏書等に記録があって、それを手がかりに原稿を起していただいた結果、貴重な体験に基づくRUWV山小屋の一断面を知ることが出来ます。

これで山小屋のすべてが判るわけではありませんが、かなりのことが判り、より親しみが湧いてく るのではないかと自負しています。

この度の出版にこぎつけるまでには多くの方々のご支援、ご協力いただきました。とくに、このように立派なものに仕上がったのは、昭和41年卒の松久君の努力に負うところが大です。また、先行した電子出版にあたっては、昭和53年卒の畑中君の多大な支援を受けました。現在も彼のHPに掲載していただいています。ここに彼のHPアドレスを掲載しておきます。

http://www.aikis.or.jp/~sanpo/ruwv/ruwvmene.htm

お世話になった関係者の皆様へ、感謝の意を表し、御礼申し上げます。

2007 (平成19) 年8月1日 鈴木 正博 (昭和39年卒)

#### 漂雲 45周年記念山小屋特集号

2007 (平成19) 年8月1日 発行

|編集・発行人 鎌田 克則

編集責任者 鈴木 正博

羅集委員 松久 昌司 中山 拓実

吉村 岩男 北野 仁志

山本 達郎 木下 正樹

発行所 立命館大学ワンダーフォーゲルOB会

「漂雲」発行事務局 鈴木方

奈良県香芝市旭ヶ丘4-10-16 〒639-0226

電話 0745-77-1445

印刷所 交友印刷株式会社

**种**戸市中央区港島南町5-4-5 〒650-0047

電話 078-303-0088



イラスト:森村 征男(昭和37年卒)

立命館大学ワンダーフォーゲルOB会・山小屋完成45周年記念特集号